

OSJ Annual Meeting 2025 Sapporo

日本鳥学会

2025年度大会

講演要旨集

2025年9月12日～15日

北海学園大学 豊平キャンパス

北海道大学 札幌キャンパス



目次

大会案内	Information	2
日程表	Schedule	2
メイン会場案内	Main venue: Toyohira campus, Hokkai-Gakuen Univ.	6
諸案内	Attention	11
大会企画	Special program	14
ダイバーシティランチンセミナー	Diversity luncheon	14
企画集会	Plannning meeting	14
高校生・小中学生向け企画	Youths event	14
鳥の学校	School for birders	(事前申込者向け。申込は締切りました) 15
エクスカーシオン	Excursions	(事前申込者向け。申込は締切りました) 15
		15
屋外特別展示販売・商品展示販売	Advertisements & sales	16
発表プログラム	Program	17
口頭発表プログラム	Oral presentations	17
ポスター発表プログラム	Poster presentations	25
高校生・小中学生ポスター発表プログラム	Youth poster presentations	36
自由集会プログラム	Workshops	38
公開シンポジウム	Public symposium	39
公開シンポジウム会場案内	Symposium venue: Sky Hall, Hokkaido Univ.	40
公開シンポジウム 要旨	Summary of each speaker's presentation	41
黒田賞受賞記念講演	Winner of the 2025 Kuroda Award presentation	43
発表要旨	Abstracts	45
口頭発表要旨	Oral presentations	45
ポスター発表要旨	Poster presentations	73
高校生・小中学生ポスター発表要旨	Youth poster presentations	128
自由集会要旨	Workshops	136
ダイバーシティランチンセミナー	Diversity luncheon	143
企画集会	PA	144
企画集会	PB	147
参加者名簿	Attendees	150

大会案内 Information

日程表 Schedule

9月12日、13日 AM

	キャンパス・建物		部屋	時刻				
				8	9	10	11	12
9月12日 金	北海学園大学	7号館	1F	D102				
			2F	D20				
			3F	D30				
				D31				
			4F	D40				
				D41				
				D42				
				D401-403				
			5F	D501, D502, D503, D506, D507				

					8	9	10	11	12
9月13日 土	北海学園大学	7号館	1F	D101				受付	
				D102				本部	
			2F	D20	クローク			口頭発表 A会場	
				D30				口頭発表 B会場	
			3F	D31	受付				
			4F	D40				高校生企画	
				D41					
				D42					
				D401-403					
			5F	D50				休憩室	
				D505				商品展示販売	
				D501, D502, D503, D506, D507				休憩室	
								休憩室(マットスペース有)	
		1号館	1F	屋外校舎前				商品展示販売	
								商品展示販売	
		2号館	1F	14				休憩室	
				15-16				ポスター掲示	
			2F	21-22				ポスター掲示	
								託児室	
								託児室	

9月12日、13日 PM

キャンパス・建物		部屋										
				13	14	15	16	17	18	19	20	
9月12日 金	北海学園大学	7号館	1F	D102	クローク					拡大代議員懇談会		
			2F	D20	自由集会 W01			自由集会 W02				
			3F	D30								
				D31	受付							
			本部									
			4F	D40	目録編集委員会		自由集会 W03					
				D41	自由集会 W04							
				D42	自由集会 W05							
				D401-403	商品展示販売							
			5F	D501, D502, D503, D506, D507	商品展示販売							
					託児室							

				13	14	15	16	17	18	19	20			
9月13日 土	北海学園大学	7号館	1F	D101	受付									
				本部										
				D102	クローク									
			2F	D20		口頭発表 A会場				自由集会 W06				
			3F	D30		口頭発表 B会場				自由集会 W07				
				D31	ダイバーシティ									
			4F	D40							自由集会 W08			
				D41		高校生企画					自由集会 W09			
				D42		休憩室				自由集会 W10				
				D401-403	商品展示販売									
			5F	D50	休憩室									
				D505	休憩室(マツスペース有)									
				D501, D502, D503, D506, D507	商品展示販売									
		1号館		1F	屋外校舎前	商品展示販売								
		2号館	1F	14	休憩室									
				15-16	ポスター掲示			ポスター発表 コア		ポスター掲示				
			2F	21-22	ポスター掲示			ポスター発表 コア		ポスター掲示				
					託児室									

9月14日、15日AM

キャンパス・建物				部屋	8	9	10	11	12		
9月14日 日	北海道大学	7号館	1F	D101		受付					
				D102		本部					
			2F	D20		クローク					
			3F	D30		口頭発表 A				口頭発表A	口頭発表B
				D42							
			4F	D401-403		休憩室					
				D50		商品展示販売					
				D505		休憩室					
			5F	D501, D502, D503, D506, D507		休憩室(マツスペース有)					
				商品展示販売							
		商品展示販売									
		1号館	1F	屋外校舎前	商品展示販売						
		2号館	1F	14	休憩室						
				15-16	ポスター発表コア		ポスター掲示				
		2号館	2F	21-22	ポスター発表コア		ポスター掲示				
3号館	4F		41	託児室							
パークホテル											

					8	9	10	11	12
9月15日 月・祝	北海道大学	高等教育推進機構	1F	Sky HALL前		クローク			
				Sky HALL		受付	公開シンポジウム		
				N1					
				N2					
				託児室					
		植物園		高校生エクスカーション					
			植物園博物館						

9月14日、15日PM

キャンパス・建物				部屋	13	14	15	16	17	18	19	20					
9月14日	北海学園大学	7号館	1F	D101	受付												
					本部												
				D102	クローク												
			2F	D20	口頭発表 A												
			3F	D30	口頭発表 B												
			4F	D42	休憩室												
				D401-403	商品展示販売												
			5F	D50	休憩室												
				D505	休憩室(マットスペース有)												
				D501, D502, D503, D506, D507	商品展示販売												
		1号館	1F	屋外校舎前	商品展示販売												
		2号館	1F	14	休憩室												
				15-16													
		3号館	2F	21-22													
				4F	41	受賞講演		表彰・会員総会									
					託児室												
パークホテル								懇親会									

					13	14	15	16	17	18	19	20					
9月15日 月・祝	北海道大学	高等教育推進機構	1F	Sky HALL 前	クローク												
				Sky HALL													
				N1										企画集会A			
				N2										企画集会B			
														託児室			
		植物園	植物園博物館	高校生 エクス カーシ ョン		エクスカ ーシ ョン		エクスカ ーシ ョン									

メイン会場案内 Main venue: Toyohira campus, Hokkai-Gakuen Univ.

北海学園大学 豊平キャンパス(札幌市豊平区旭町 4-1-40)



【Google Map】



札幌中心部から

- 地下鉄東豊線「さっぽろ」駅または「大通」駅で福住行きに乗車し、「学園前」駅下車。3番出口直結。

〔乗車時間「さっぽろ」駅から6分、「大通」駅から5分〕

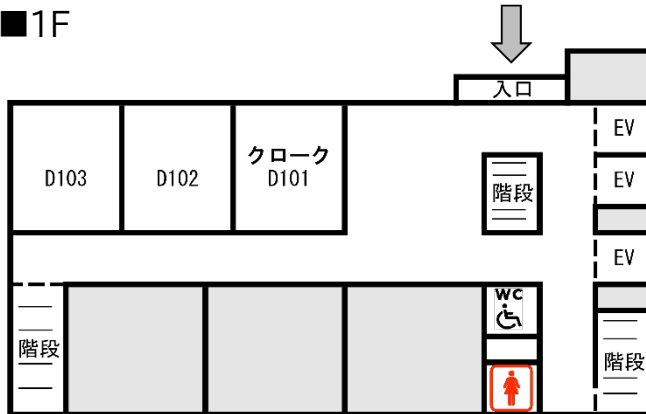
地下鉄南北線「中の島」駅・「平岸」駅から

- 各駅から徒歩で約15分。
- じょうてつバス平岸線〔環56〕(各駅前先回り)に乗車し、「学園前駅」下車。
〔乗車時間「中の島駅前」から約8分、「平岸駅前」から約5分〕

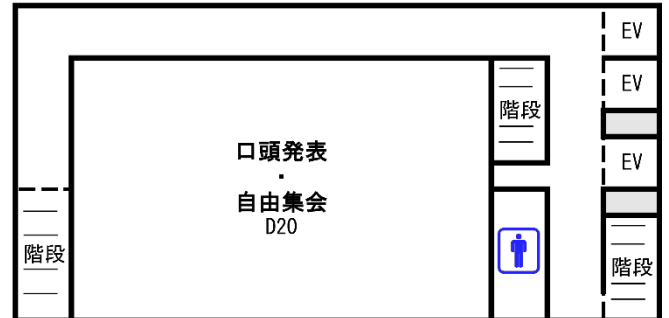
会場詳細マップ Map for each room

【北海学園大学 豊平キャンパス・7 号館】

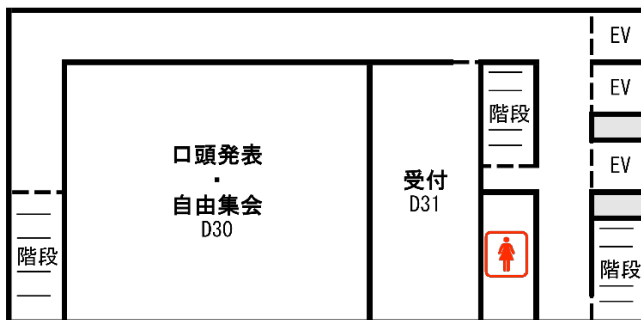
■1F



■2F



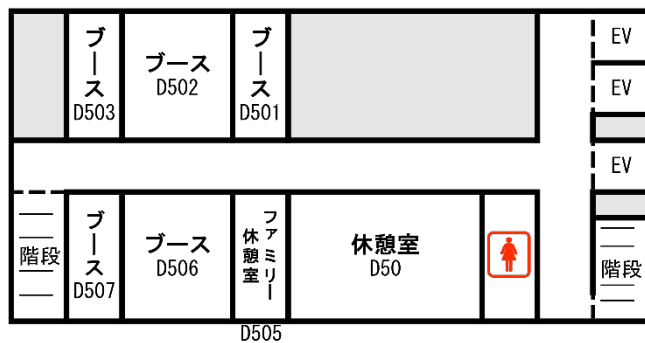
■3F



■4F

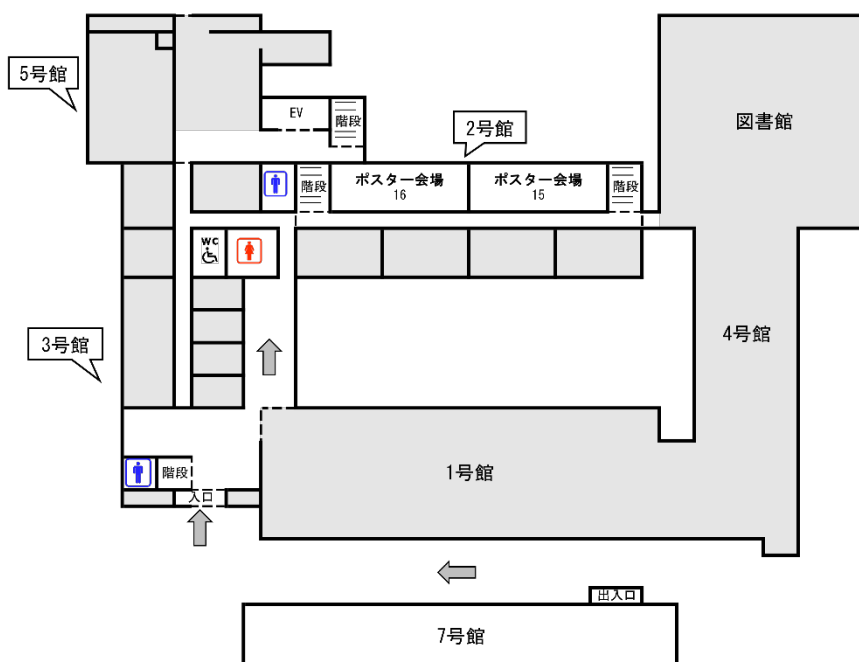


■5F

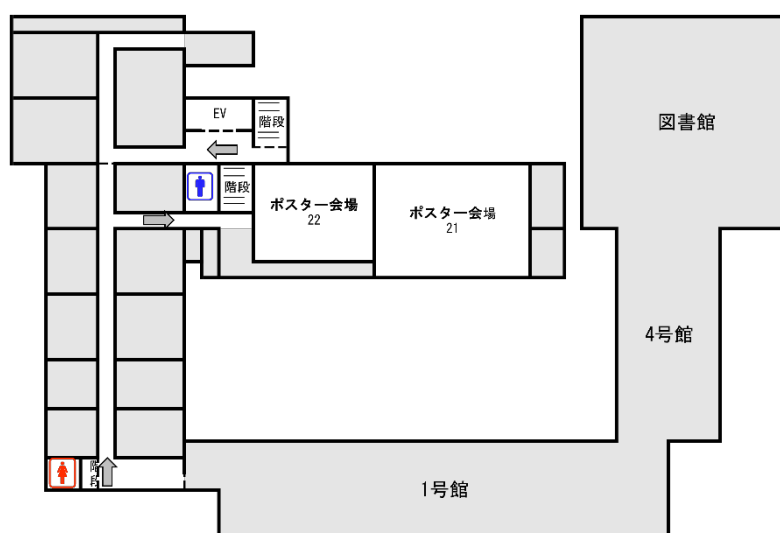


【北海学園大学 豊平キャンパス・2号館/3号館/5号館】

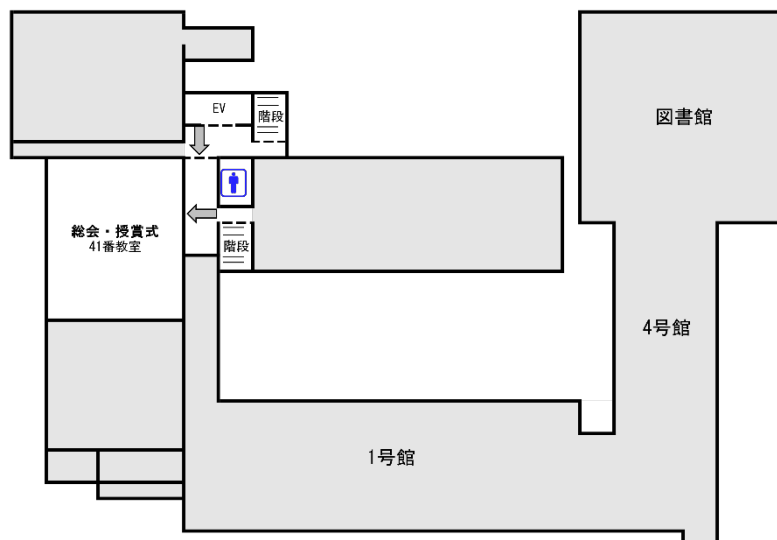
■1F



■2F



■4F



【ポスター会場】

■2号館1F 15号室

028									
029									
030	<u>019</u>	<u>020</u>	<u>021</u>	<u>022</u>	<u>023</u>	<u>024</u>	<u>025</u>	<u>026</u>	<u>027</u>
031	<u>018</u>	<u>017</u>	<u>016</u>	<u>015</u>	<u>014</u>	<u>013</u>	<u>012</u>	<u>011</u>	<u>010</u>
032	<u>001</u>	<u>002</u>	<u>003</u>	<u>004</u>	<u>005</u>	<u>006</u>	<u>007</u>	<u>008</u>	<u>009</u>

黒板

■2号館1F 16号室

060									
061									
062	<u>059</u>	<u>058</u>	<u>057</u>	<u>056</u>	<u>055</u>	<u>054</u>	<u>053</u>	<u>052</u>	<u>051</u>
063	<u>042</u>	<u>043</u>	<u>044</u>	<u>045</u>	<u>046</u>	<u>047</u>	<u>048</u>	<u>049</u>	<u>050</u>
064	<u>041</u>	<u>040</u>	<u>039</u>	<u>038</u>	<u>037</u>	<u>036</u>	<u>035</u>	<u>034</u>	<u>033</u>

黒板

【ポスター会場(つづき)】

■2号館 2F 21号室

黒板	073	074 091	092 109	110
	072	075 090	093 108	111
	071	076 089	094 107	112
				113
	070	077 088	095 106	114
	069	078 087	096 105	
	068	079 086	097 104	115
				116
	067	080 085	098 103	117
	066	081 084	099 102	118
	065	082 083	100 101	119

■2号館 2F 22号室

Y01				
Y02	Y17 Y18	140 127	126	
Y03	Y16 Y19	139 128	125	
Y04	Y15 Y20	138 129	124	
Y05	Y14 Y21	137 130	123	
Y06	Y13	136 131	122	
Y07	Y12	135 132	121	
Y08	Y11 141	134 133	120	
Y09				
Y10				

黒板

諸案内 Attention

受付 Reception

北海学園大学豊平キャンパス・7号館です。13日11:30までは3階D31教室、それ以降は1階D101教室です。名札と領収書、大会プログラムをお渡しします。会場では名札を必ず着用ください。

15日(月祝)の公開シンポジウム会場(北海道大学)では、大会の受付はありません。

クローク Cloakroom

12日～14日に7号館1階D102教室に設けます。貴重品はお預かりできません。各日の終了時刻(12日:18:30、13日:18:30、14日:17:30。P1～4 参照)までに必ずお引き取りください。

終了時刻以後は引き取りができなくなります。

15日(月祝)の公開シンポジウム会場では、Sky HALL 近くのホールに設けます。終了時刻の17:00までに必ずお引き取りください。

飲食・休憩スペース Break

(1)休憩室のほか、会場でも飲食可能です。ただし、発表会場での発表中の飲食はお控えください。休憩室にはサントリーホールディングス株式会社よりご提供いただいた飲み物等をご用意しております。

(2)会場外から持ち込んだゴミ類については持ち帰りにご協力ください。

昼食 Lunch

12日(金)の11:00～14:00は北海学園大学豊平キャンパスの生協食堂が使えます。また、13日(土)と14日(日)は7号館前にキッチンカーを2台配置予定です。詳細は大会ウェブサイトをご確認ください。そのほか、大学外の飲食店、コンビニを利用ください。

15日(月祝)は北海道大学札幌キャンパスの生協食堂は休業のため利用できません。大学外の飲食店、コンビニを利用ください。

口頭発表 Oral presentations

【時間と機材】

発表時間12分以内、質疑を含めて15分以内を厳守してください。使用できる機器は大会事務局が用意したコンピューターです。OSはWindows 10、使用できるアプリケーションはMS PowerPoint 2019(他のバージョンでファイルを作成した場合、プレゼンテーション機能の一部を利用できない恐れがあります)、またはAdobe Acrobat Reader、使用可能なファイル形式はppt、pptx、pdfです。個人のコンピューターは基本的に使えません。推奨画面サイズは4:3です。

【発表用のファイル】

発表の前日17時までに、受付に提出ください。ファイルはUSBメモリーでの提出とし、ファイルサイズ20MB以内とします。なお、12日(金)17時までは、ファイルアップロードによる提出も受け付けます。詳しいファイルのアップロード方法は、口頭発表者あてメールでご連絡します。ファイル名は「発表番号(例:A01)」としてください。発表番号はP17-22でご確認ください。

大会案内 Information

ださい。お預かりしたファイルは、発表終了後に大会事務局が責任を持って消去します。

【座長】

本大会でも、各口頭発表者に直後の発表の座長(司会進行)を担当していただきます。皆様のご協力をお願いします。

ポスター発表 Poster presentations

	一般・学生	高校生・小中学生 (Y)
サイズ	A0 サイズ(横 850mm×縦 1,150mm)以内になるようご用意ください。掲示用具は大会事務局で用意します。	
掲示開始	13日(土)9:00 から可能です。 ポスター賞応募者は、13 日(土)10 時までに掲示してください。	13日(土)13時までに掲示してください。
撤去	14日(日)13 時までに撤去ください。掲示と撤去は各発表者の責任でお願いします。撤収時間後も掲示されているポスターは大会事務局が撤去します。	
コアタイム	13 日(土)16:40~18:40 14 日(日)10:00~12:00	Y 奇数:13日(土)16:40~18:40 Y 偶数:14日(土)10:00~12:00
	コアタイム中はポスター前で発表してください。各ポスターのコアタイムは P20-28 でご確認ください。ポスターの掲示位置は P10-11 ポスター配置図を参照ください。	
ポスター賞 審査	キャリア初期の研究者の独創的な研究を奨励する目的で「日本鳥学会ポスター賞」を選出します。審査方法等の詳細は「2025 年度日本鳥学会ポスター賞募集要項」(大会ウェブサイトに掲載)を参照ください。審査は、日本鳥学会企画委員会が選定した審査員が行います。	審査は、大会実行委員会が選定した審査員が行います。審査の方法や基準の詳細は公表しませんが、「2025 年度日本鳥学会ポスター賞募集要項」(大会ウェブサイトに掲載)に沿った形で、公正かつ厳格に実施します。
ポスター賞 表彰	14日(日)15:30 から、3 号館 41 号教室で行います。	
記念品	株式会社モンベルより、ポスター賞の記念品をご提供いただいております。	株式会社モンベルより、発表者への参加記念品をご提供いただいております。

自由集会 Workshops

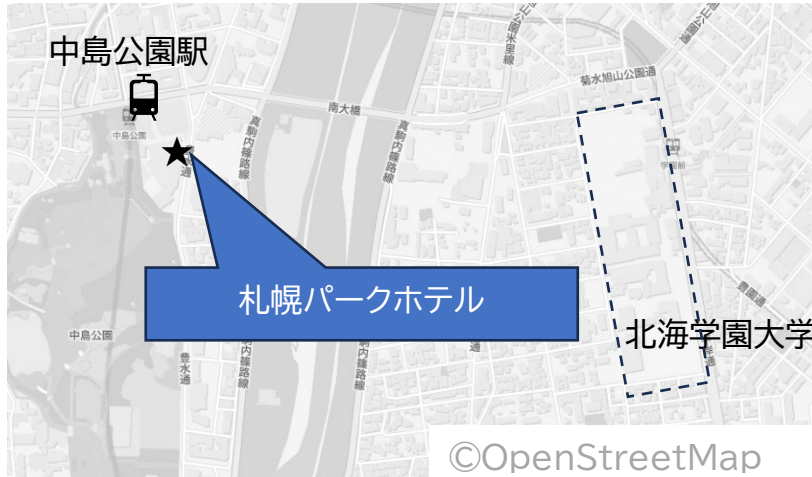
自由集会は、大会参加者を対象とした「特定のテーマをもった鳥学の研究会」で、日本鳥学会会員が参加者のために企画する集会です。自由集会にのみ参加される方も必ず大会参加費をお支払いください。また、主催者が非会員を講演者として招待したい場合は、参加費の免除を申込み時に大会事務局へご相談ください。自由集会会場には液晶プロジェクター及びモニターケーブル(ミニ D-sub15pin 及び HDMI)が備え付けられています。パソコンは自由集会の主催者をご用意ください。会場の運営・後片付けは、主催者の責任で行ってください。

会員総会 Business meeting

14日(日)15:30 から、3号館41号室で行います。学会について大事な報告がなされます。学会員の方は極力ご参加ください。

懇親会 Banquet

14日(日)18:00 から札幌パークホテルで開催します。



北海学園大学豊平キャンパス
から徒歩 15～20 分



地下鉄南北線「中島公園」駅
(1 番出口より徒歩 1 分／3
番出口より徒歩すぐ)

北海学園大学豊平キャンパスから徒歩 15～20 分かかります。途中の豊平川、および札幌パークホテルが位置する中島公園はバードウォッチングサイトです。鳥見をしながら、食前の軽い散歩をお楽しみいただければ幸いです。会場は 20:15 には完全に撤収する必要があります。20:00 を過ぎたら速やかな退出にご協力ください。

託児サービス Day nursery

大会期間中、小学生までを対象とする託児サービスを設けます。場所は利用者へご案内します。万が一の事故などの場合は、保育委託先と利用者の契約により、保険の適用範囲で保障されます。大会実行委員会は一切の責任を負わないことをご了承ください。

会場内での撮影・録音、オンライン配信の録画の禁止 No video, no photos, no recording

参加者の肖像権、発表における著作権への配慮のため、参加者が他者や他者の発表の録音、録画、撮影等を行うことは禁止します。なお、大会事務局において、大会の記録のため写真撮影等を行うことがありますのでご了承ください。

その他、案内と注意 Miscellaneous

- (1) 日本鳥学会では、ダイバーシティに配慮した大会運営を推進しています。本大会では「障害者差別解消法」に基づく配慮を行います。大会参加に際して配慮を必要とされる方は、大会スタッフへお声かけください。
- (2) 参加者向けのフリーWiFiはありません。
- (3) 会場内は禁煙です。喫煙所はありません。ご協力ください。

COVID-19 への対応(体調が悪くなった場合) In case you are in bad shape (covid-19)

【発表予定の方】大会期間前または大会期間中に、風邪症状や体調不良、新型コロナウイルス感染者となり発表できなくなった場合、「口頭/ポスター、演題」などの情報を、大会の発表問合せ窓口 happyo@ornithology.jp まで速やかにお知らせください。

・口頭発表:動画あるいは代読等での発表に変更いただきます。

・ポスター発表:大会事務局がポスターの掲示と撤去を代行します。

【懇親会参加予定の方】参加をご遠慮ください。

大会企画 Special program

ダイバーシティランcheonセミナー Diversity luncheon

企画:日本鳥学会企画委員会ダイバーシティ推進ワーキンググループ

13 日(土) 12:05~13:05

B 会場(D30 号室) 飲食可(先着 60 名にお弁当無料配布)

【挨拶】綿貫豊(日本鳥学会会長)

【講演1】日本鳥学会ダイバーシティ推進宣言の発出を目指して

堀江明香(日本鳥学会ダイバーシティ推進ワーキンググループ長)

【講演2】学会におけるダイバーシティ推進に関する取り組みの紹介

今井桂子氏(中央大学理工学部情報工学科教授)

企画集会 Plannning meeting

PA: 古くさい研究なんかじゃない!? インフラとして発展した鳥類標識調査の可能性を探る

企画代表者:澤 祐介(山階鳥類研究所)

15 日(月)13:45~16:45

北海道大学札幌キャンパス 高等教育推進機構 N1

PB: 移動データを使った海鳥研究の新展開と応用

企画者:依田憲(名古屋大学)、渡辺伸一(リトルレオナルド・麻布大学)、

佐藤克文(東京大学)、綿貫豊(北海道大学)

15 日(月)13:45~16:45

北海道大学札幌キャンパス 高等教育推進機構 N2

高校生・小中学生向け企画 Youths event

ランcheonセミナー「札幌のカラス」のお話~札幌のカラスは面白い~

13 日(土)12:10~12:50

7 号館 D41 飲食可

「札幌のカラス」(北海道新聞社)シリーズの著者、中村 眞樹子さん(NPO 法人札幌カラス研究会)によるカラスなトークイベントを行います! 昼食持参でご参加ください。

鳥の学校 School for birders (事前申込者向け。申込は締切りました)

第 16 回テーマ別講習会：鳥類研究のための空飛ぶドローン講座2 画像解析編

12 日(金)10:30-15:30(受付:10:00～、終了:16:00)

会場：酪農学園大学(北海道江別市文京台緑町 582 番地)

エクスカーション Excursions (事前申込者向け。申込は締切りました)

15 日(月・祝)14:00～、15:30～の計2回、実施 定員：各回 15 名(締切り済)

実施場所：札幌市中央区北 3 条西 8 丁目

北海道最古の博物館であり、ブラキストン標本を含む日本有数の鳥類標本を所蔵する博物館において、ブラキストンが作らせた標本ケースが保管されている旧収蔵庫(重文)内部と現在標本群が保管されている新収蔵庫を管理担当者(加藤克)の解説付きで案内します。

屋外特別展示販売・商品展示販売 Advertisements & sales

屋外特別展示販売 Outdoor special demo booth

13 日～14 日／大会会場正面(7 号館)むかひに、機材を実際に触れて試せる屋外展示会場を開設

【提供】カールツァイス株式会社、株式会社サイトロンジャパン

商品展示販売 Exhibition & sales

12 日(金)16:00～18:00、13 日(土)9:00～19:00、14 日(日)9:00～15:00

ブース	場所	出展者
1	屋外特別・ 荒天時のみ 4 階 D403	カールツァイス株式会社
2	屋外特別 & 4 階 D401	株式会社サイトロンジャパン
3		Druid Technology Co., Ltd.
4	4 階 D402	Hunan Global Messenger Technology Co., Ltd.
5		株式会社生物技研
6	5 階 D501	名古屋大学大学院生命農学研究科附属鳥類バイオサイエンス研究センター
7		エコ・ネットワーク
8		包み屋
9	5 階 D502	Hure-shuma Reiko & シマフクロウ基金
10		谷口高司鳥絵工房
11		Lotek Wireless
12	5 階 D503	株式会社キュービック・アイ
13		北大骨ボランティア
14		野鳥生活
15	5 階 D506	とりしり！
16		Raptor Research Group of Taiwan
17		ハクバ写真産業株式会社
18	5 階 D507	株式会社ティンバーテック

大会からの販売:大会公式 T シャツ OSJ2025 Official T-shirt



北海道ならではの鳥を背面に大きくデザイン。軽い着心地のドライ素材で、吸湿速乾にすぐれ、汗ばむ夏に心地よくご着用いただけます。

【色】紺・カーキ

【販売価格】2,000 円(税込)

【サイズ】各色 M・L サイズ(男女兼用)

大会当日のみ(12～14 日)の数量限定販売、早い者勝ちです！受付近くにてお求めください。現金支払のみ。

発表プログラム Program

口頭発表プログラム Oral presentations

A 会場:D20 号室、B 会場:D30 号室

A 会場 9 月 13 日 AM

開始	番号	演題	発表者
9:00	A1	インドネシアの越冬地におけるハチクマの環境選択と気候変動の影響	Syartinilia Wijaya・Aryo Adhi Condro (ボゴール農科大)、○樋口広芳 (慶應大)
9:15	A2	サシバは同じ繁殖地と越冬地を利用するのか?	○鳥飼久裕 (奄美野鳥の会)・東淳樹 (岩手大)・井上剛彦 (ARRCN)・遠藤孝一 (WBSJ)・出島誠一 (NACS-J)・内藤アンネグレート素 (ARRCN)・葉山政治 (WBSJ)・藤井幹 (WSPB)・松永聡美 (WSPB)・山崎敦子 (ARRCN)・山崎匠 (ARRCN)・与名正三 (奄美の自然を考える会)・和田のどか (ARRCN)・山崎亨 (ARRCN)
9:30	A3	北海道で繁殖するヨタカの渡りルート	○山浦悠一 (森林総研)・雲野明 (道総研林試)・河村和洋 (森林総研)・先崎理之 (北大)・佐藤重穂 (森林総研)・大谷達也 (森林総研)・Greg Conway (BTO)
9:45	A4	ケリの親子・兄弟、およびペアの GPS 追跡から見えてきたこと	○脇坂英弥 (関西ケリ研究会)・脇坂啓子 (関西ケリ研究会)
10:00	A5	続・「2 羽どまり」の謎:九州で越冬なわばりを共有するノスリ複数組の遠隔追跡	○中原亨 (北九博)・伊関文隆 (希少生物研)・吉岡俊朗 (おおせっからんど)・長井和哉 (岩手大)・雀ヶ野孝 (長崎大)・大槻恒介 (長崎大)・中山文仁 (自然研)・山口典之 (長崎大)
10:15	A6	GPS 発信機によるイヌワシの追跡結果	○中島拓也 (ラプタージャパン) 阿部學 (ラプタージャパン) 橋本哉子 (ラプタージャパン)
休憩			
10:35	A7	スワンププロジェクトー鳥類の渡り追跡公開と市民科学	○嶋田哲郎 (伊豆沼財団)・小西敢 (クツチャロ湖水鳥観察館)・李国政・史国? (ドルイドテクノロジー)・樋口広芳 (慶應大)
10:50	A8	クロツラヘラサギの行動調査で見た小型ドローンの有効性と注意点	小久保守晃 (葛西のクロツラ)、北村亘 (葛西のクロツラ、東京都市大)、○木村成美 (NPO birth)、上原文弥 (葛西のクロツラ)
11:05	A9	Ubilink Satellite System for Biotracking	LI GUOZHENG (Druid Technology Co., Ltd.)

開始	番号	演題	発表者
11:20	A10	気候条件の異なる移住先におけるメジロの繁殖生理学的応答	○堀江明香(大阪自然史博)・平井仁智(岡山理大・理)・山内悦子(沖縄こどもの国)・金城輝雄(沖縄こどもの国、現：RWRCC)・吉見裕子(沖縄こどもの国)・築場未来(沖縄こどもの国)・中村智映(沖縄こどもの国)・金尾由恵(沖縄こどもの国)・林花奈子(池田動物園)・花島里奈(池田動物園)・西村慶太(天王寺動物園)・尾曾芳之(天王寺動物園)・小川由華(天王寺動物園)・高見一利(天王寺動物園、現：豊橋総合動植物公園)・武山智博(岡山理大・生物地球)・清水慶子(岡山理大・理)
11:35	A11	換羽、生活史、生態、発色メカニズムから、ルリビタキの発色を考える	○森本元(山階鳥研)
11:50	A12	トカラ列島における鳥類群集構造	安藤温子(国環研)、飯島大智(筑波大)、井上遠(IBRG)、佐藤望(IBRG)

A会場 9月13日 PM

開始	番号	演題	発表者
13:05	A13	アカモズ人工育雛における日齢別栄養要求の推定と給餌プロトコルの検討	○行本帆花 ¹ ・間宮ふうか ¹ ・林康太郎 ¹ ・長崎汐音 ¹ ・東山咲季 ¹ ・青木楓太 ¹ ・山口達大 ¹ ・石尾雪乃 ² ・井上康子 ² ・瀧本嵐丸 ² ・八代梓 ² ・高御堂裕紀 ² ・木谷良平 ² ・高見一利 ² ・岡久雄二 ¹ (¹ 人間環境大、 ² 豊橋総合動植物公園)
13:20	A14	アカモズの放棄卵の救助と人工孵卵技術の確立に向けた試み	行本帆花(人環大)・○神谷頼杜(人環大)・間宮ふうか(人環大)・赤松あかり(長野アカモズ保全研)・原星一(長野アカモズ保全研)・藤田知弥(信大)・松山陽子(長野アカモズ保全研)・米山富和(長野アカモズ保全研)・松宮裕秋(長野アカモズ保全研)・高御堂裕紀(豊橋総合動植物公園)・八代梓(豊橋総合動植物公園)・瀧本嵐丸(豊橋総合動植物公園)・木谷良平(豊橋総合動植物公園)・高見一利(豊橋総合動植物公園)・岡久雄二(人環大)
13:35	A15	アカモズ野生個体群の補強に向けた生餌給餌訓練：採餌能力向上の試み	○間宮ふうか ¹ ・小野優苗 ¹ ・木谷良平 ² ・高御堂裕紀 ² ・八代梓 ² ・中島克之 ² ・石尾雪乃 ² ・井上康子 ² ・瀧本嵐丸 ² ・後藤巧真

開始	番号	演題	発表者
			² ・高見一利 ² ・岡久雄二 ¹ (¹ 人間環境大学、 ² 豊橋総合動植物公園)
13:50	A16	再導入コウノトリのなわばり防衛行動の性差	○白井あやか(兵庫県大)・出口智広(兵庫県大・コウノトリ郷公園)
14:05	A17	再導入コウノトリ、配偶相手の決め手は何？	○出口智広(兵庫県大・兵庫県立コウノトリの郷公園)・内藤和明(兵庫県大・兵庫県立コウノトリの郷公園)・大迫義人(兵庫県大・兵庫県立コウノトリの郷公園)
14:20	A18	再導入トキのコロニー崩壊のメカニズムについて	永田尚志(新潟大)
14:35	A19	トキ飼育下個体群の遺伝的多様性の近年における推移の評価	○角野歩夏 ¹ ・南澤夏奈香 ² ・石井森昭 ¹ ・山田宜永 ¹ ・杉山稔恵 ¹ ・谷口幸雄 ³ ・金子良則 ⁴ ・祝前博明 ⁵ (¹ 新潟大院自然科学、 ² 新潟大農、 ³ 京大院農、 ⁴ 佐渡トキプラザ、 ⁵ 新潟大佐渡自然セ)
休憩			
14:55	A20	サンジャクの捕獲事例と外来種管理	○天野一葉(琵琶博)
15:10	A21	福井県におけるソウシチョウの侵入・定着プロセス	○出口翔大(福井市自然史博)、三原学(鳥類標識協会)、吉田一郎(鳥類標識協会)、佐藤文男(山階鳥研)、澤祐介(山階鳥研)
15:25	A22	東アジアに再導入されたシジュウカラガンの千島列島における繁殖確認と夏季の行動圏	○澤祐介(山階)・池内俊雄(雁里親の会)・田村智恵子(雁里親の会)・仲村昇(山階)・Hansoo Lee(KoEco)・近藤正(秋田県大)・佐場野裕(雁保護する会)・呉地正行(雁保護する会)
15:40	A23	ヤンバルクイナの野生復帰試験の評価	○尾崎清明・森本元(山階鳥研)、渡久地豊(工房リュウキュウロビン)、中谷裕美子・玉那覇彰子・向真一郎・金城道男・長嶺隆(どうぶつたちの病院沖縄)
15:55	A24	沖縄県北部におけるヤンバルクイナの分布規定要因の特定	○原英里子(帯広畜産大)・赤坂卓美(帯広畜産大)
16:10	A25	ヤンバルクイナの交通事故要因分析とロードキルリスクマップの作成	○杉本嵩臣(いであ(株))・佐藤泰夫(いであ(株))
16:25	A26	沖縄島固有種ノグチゲラ個体群の現状と保全の展望:マンガース対策の重要性について	○小高信彦(森林総研)・渡久地豊(工房リュウキュウロビン)・長井隆(沖縄環境科学セ)、中田勝士(南西環境研)・新里和野(島嶼生物研)・宮平良成・伊藤麻衣(沖縄県)・有働竜也・庄嶋菜月(環境省)

A会場 9月14日 AM

開始	番号	演題	発表者
9:00	A27	24/25 年シーズンの出水平野における高病原性鳥インフルエンザウイルス流行状況の解明	○江寄真南(鹿大)・奥谷公亮(鹿大)・所崎香織(鹿児島県ツル保護会)・原口優子(鹿児島県ツル保護会)・堀昌伸(鹿児島県ツル保護会)・小澤真(鹿大)
9:15	A28	卵黄中抗体を用いた非侵襲的な鶏伝染性気管支炎ウイルス抗体モニタリング	○土井貴文(PPQC,大阪公大)・加藤宏光(PPQC,Triace,大阪公大、フィリピン大)・真瀬昌司(動衛研、大阪公大)・松林誠(大阪公大)
9:30	A29	北海道西部における森林棲鳥類の住血原虫感染状況の解明	○原山法大・松井晋(東海大・院・生物)・佐藤雪太(岩手大)
9:45	A30	国内の鳥類寄生性シラミバエにおける季節消長、吸血生態および原虫保有状況	○菅澤颯人(岩大、千葉中央博市民研究員)・尾崎煙雄(千葉中央博)・木村悟朗(イカリ消毒(株)、千葉中央博市民研究員)・関まどか(岩大)・佐藤雪太(岩大)

A会場 9月14日 PM

開始	番号	演題	発表者
12:45	A31	逃避行動の進化的トラップ:なぜ鳥は接近する車の前へ飛び出すのか?	○佐藤裕太(長大)・Takao Sasaki(Univ. of Rochester)・Travis L. DeVault(Univ. of Georgia)・河端雄毅(長大)
13:00	A32	鳥類の河川橋梁の利用状況の把握に向けた現地調査	○金森泰都(早大)・佐藤靖彦(早大)
13:15	A33	大阪湾・阪南 2 区人工干潟で確認された鳥類・21 年の変遷	○風間美穂(さしわだ自然資料館)・中村進(さしわだ自然資料館)
13:30	A34	鳴き声のプレイバックによるカラスの集団のねぐら入り時の行動変化の誘発の試み	○安藤隆寛(中部電力)、北村喜文(東北大)、塚原直樹(宇大)、青山真人(宇大)
13:45	A35	札幌圏の 20 年間に及ぶカラス類のねぐら状況と人との関わりについて	○中村眞樹子・竹中万紀子(NPO 法人札幌カラス研究会)・坂元直人・渋谷裕和・滝沢太浩・笹森健太(株式会社エコテック)
14:00	A36	海鳥によるマダニおよびボレリア菌の広域拡散	石田千穂(山大)、○高野愛(山大)、水谷晃(Island Ecosystem Research)、川上和人(森林総研)、森英章(自然環境研究センター)、川端寛樹(感染研)

B 会場 9 月 13 日 AM

開始	番号	演題	発表者
9:00	B1	高時間分解能行動記録計を用いた海鳥の羽ばたきの種間比較	○原田和輝(東大)・上坂怜生(東大)・後藤佑介(名大)・成岡優(JAXA)・依田憲(名大)・綿貫豊(北大)・Francis Daunt(UKCEH)・Henri Weimerskirch(CNRS)・佐藤克文(東大)・坂本健太郎(東大)
9:15	B2	母島・海鳥・洞窟探検、科博で化石を再発見	○川上和人(森林総研)・石川弘樹(飴ミュージアム)・青塚圭一(東大総合博)
9:30	B3	知床半島における海鳥の繁殖期の生息状況 (1997 年から 2025 年)	○福田佳弘(知床海鳥研究会・バードリサーチ)
9:45	B4	北海道北部におけるウミネコの度重なる繁殖崩壊	○風間健太郎(早大)・小高歩(早大)・杉浦恭子(早大)・大槻正遼(早大)・稲本俊太(早大)・中込大河(日本気象協会、早大)・風間麻未(利尻自然史研)
10:00	B5	青森県蕪島におけるウミネコのプラスチック摂取	○新妻靖章, 芝佑果, 林千尋(名城大農環境動物)
10:15	B6	営巣位置がウミネコの採餌行動と生理応答に与える影響	○水谷友一(同志社)・後藤佑介(名古屋)・庄子晶子(名古屋)・依田憲(名古屋)
休憩			
10:35	B7	オーストンウミツバメの繁殖期前後における尾腺分泌物のメタボローム変化	○寺嶋太輝(東京農工大)・山本裕(日本野鳥の会)・永岡謙太郎(東京農工大)
10:50	B8	天売島におけるウミガラス保護の現状および繁殖失敗要因	○岩原真利・市川惇史(北海道地方環境事務所)・佐藤信彦(水産研究教育機構)
11:05	B9	オオミズナギドリ瀬戸内海繁殖集団の採餌海域および繁殖率の比較	渡辺伸一(希少鳥類研究所／麻布大)
11:20	B10	日本周辺海域を利用するセンカクアホウドリ	○富田直樹(山階鳥研)・細谷淳(鳥類標識協会)・江田真毅(北大)・泉洋江(北大)・佐藤文男(山階鳥研)
11:35	B11	アデリーペンギン幼鳥の巣立ち後の移動経路と海洋環境との関係	○北川達朗(総研大)・國分互彦(極地研)・今木俊貴(総研大)・高橋晃周(極地研)
11:50	B12	飼育下ペンギン類における同性ペアについて：つがいの意味を考える	酒井嘉子(立教大)・○上田恵介(立教大)

B会場 9月13日 PM

開始	番号	演題	発表者
13:05	B13	羽の安定同位体分析による同一地域における 60 年前と現在のスズメの食性比較	○岩見恭子(山階鳥研)・富田直樹(山階鳥研)・兵藤不二夫(岡大)・武山智博(岡山理科大)
13:20	B14	羽標本の安定同位体分析から探る沖縄島の鳥類の食性	○武山智博(岡山理大)・岩見恭子・富田直樹(山階鳥研)・兵藤不二夫(岡山大院)・水田拓(山階鳥研)・関伸一(森林総研・関西)・小高信彦(森林総研・九州)
13:35	B15	明治・大正期に東京麹町の山階宮邸で採集された鳥類標本の情報復元	小林さやか(山階鳥研)
13:50	B16	骨の計測値による日本産ウ科 4 種の同定の試み : 入江貝塚出土資料を対象とした事例研究	○江田真毅(北大)
14:05	B17	日本で繁殖するシロチドリの遺伝的多様性・遺伝的構造の把握	○末石萌乃(信州大院・総合理工学)・峯光一(徳島県庁)・澤祐介(山階鳥研)・守屋年史(バードリサーチ)・佐藤達夫(行徳自然ほごくらぶ)・北村亘(東京都市大)・山下洋平(葛西海浜公園パートナーズ)・吉田祐一(生態教育センター)・西海功(科博)・笠原里恵(信州大)
14:20	B18	2010 年代に都心緑地で繁殖を始めた小鳥類2種の遺伝的特徴	○西海 功(国立科博)・黒田清子(山階鳥研)・樋口亜紀(国立科博)・望月みずき(我孫子市鳥博)・小林さやか(山階鳥研)・齋藤武馬(山階鳥研)
14:35	B19	オオソリハシギの亜種の渡来状況把握のための予備的検討	○平岡考(山階鳥研)
休憩			
14:55	B20	北海道のノビタキは本州を通過する	○今西貞夫・田中正彦(北海道バンダー連絡会、日本野鳥の会道南松山)・安西英明(日本野鳥の会)・久下直哉(日本鳥類標識協会)・森 茂晃(ホシザキ野生生物研究所)・高橋雅雄(岩手県立博物館)・松村万知子(交野野鳥の会)
15:10	B21	長野県諏訪湖の小面積ヨシ群落におけるオオヨシキリの繁殖成績	○笠原里恵(信大)・藤原彩夏(WDB エウレカ社)
15:25	B22	ニューナイスズメの繁殖生態: 一巢の価値に着目して	○佐々木 未悠(総研大)・高橋 雅雄(岩手県博)・蛸名 純一(おおせっか)・東 信行(弘大)・沓掛展之(総研大)

開始	番号	演題	発表者
15:40	B23	岩手県南部におけるクマゲラ繁殖の可能性について	藤井忠志・○籠島恵介・阿部恵彦・金沢聡・佐藤和義・原勝雄・原由美(本州産クマゲラ研究会)
15:55	B24	鳥は種子を何個ずつばら撒く?—鳥散布における種子配置パターン—	○大河原恭祐(金沢大)・木村一也(石川県森林組合)・佐藤文男(山階鳥研)
16:10	B25	富士山の火山荒原におけるヨタカの分布に関する環境要因	○水村春香(富士山研)・上田恵介(立教大)・安田泰輔(富士山研)
16:25	B26	登山者向けアプリを利用した広域的なライチョウの目撃情報収集	小林篤(環保研)・松本 英高(株ヤマッブ)・福田真(環境省)

B会場 9月14日 AM

開始	番号	演題	発表者
9:00	B27	文化は異所的種分化を加速する	○山崎剛史(山階鳥研・高知工科大)・小林豊(高知工科大)・荻原直道(東大)
9:15	B28	伊豆諸島のカラ類2種の分布は島の大きさで説明できる	○藤田薫(東邦大, バードリサーチ)・藤田剛(東大)
9:30	B29	離島に生息するウチャマセンニュウの生息条件について	○武田恵世(日本野鳥の会三重)
9:45	B30	大都市東京のオオタカ幼鳥の分散	○阿部 學(ラプタージャパン), 樋口亜紀(科博), 中島拓也(ラプタージャパン), 橋本哉子(ラプタージャパン)

B会場 9月14日 PM

開始	番号	演題	発表者
12:45	B31	タンチョウの Reverse mounting (逆マウント)について	正富宏之(タンチョウ研究所)
13:00	B32	侵略的外来種ウシガエルのない水田景観でのため池と陸棲鳥類の関係を調べる	藤田剛(東大)
13:15	B33	近畿地方中部における土地利用形態と猛禽類の関係	○中津弘(温帯文化景観調査研究所)
13:30	B34	個体識別により判明したクマタカの換羽情報	○一瀬弘道 ^{1,2} ・山崎亨 ¹ (¹ クマタカ生態研究グループ、 ² いであ株式会社)
13:45	B35	渡り鳥調査におけるサーマルスコープの有効性について	○紀國聡(建設技術研究所)、岸野聡(建設技術研究所)、先崎啓究(道央鳥類調査グループ)、先崎愛子(道央鳥類調査グループ)、渡辺義昭、猪狩敦史、森田佑介

発表プログラム Program

開始	番号	演題	発表者
14:00	B36	ガンカモー斉調査を活用した水上太陽電池発電所設置によるカモ類渡来羽数変化の検討4	○尾原正敬(千代田 C)

ポスター発表プログラム Poster presentations

コアタイム

【※欄に*あり】13 日(土)16:40~18:40

【※欄が無印】14 日(日)10:00~12:00

*ありは ポスター賞応募の発表

第 1 会場(2 号館 1F 15 号室)

番号	※	演題	発表者(所属)
P001	*	形態観察と糞中 DNA から明らかになったオバシギとコオバシギの交雑事例	○田谷昌仁 1・黒田理生・安部琴音・新條正志 2・小田谷嘉弥 3・細谷 淳 4・石井康人 1・千葉 聡 1 (1 東北大; 2 都立江北高校; 3 千葉中央博; 4 鳥類標識協会)
P002		トキ飼育下個体群における孵化時および1歳時の生存性間の関連性の推定	小野寺尚美 ¹ ・石井森昭 ¹ ・山田宜永 ¹ ・杉山稔恵 ¹ ・谷口幸雄 ² ・金子良則 ³ ・○祝前博明 ⁴ (1 新潟大院自然科学, 2 京大院農, 3 佐渡トキプラザ, 4 新潟大佐渡自然セ)
P003	*	天は二物を与えるか?—ホオジロの番い形成成功に与える要因—	○松浦志穂(金沢大)・大河原恭祐(金沢大)
P004	*	沖縄島のリュウキュウコノハズク個体群の羽色・模様に影響を与える要因について	○榛沢日菜子(北大・院理)・武居風香(北大・院理)・池上隆之(北大・院理)・細江隼平(北大・農学院)・江指万里(北大・院理)・高木昌興(北大・院理)
P005		カワラヒワが持つ腸内細菌叢の殺鼠剤に対する反応	○小笠原浩平(北大)・小出将士(北大)・中尾亮(北大)・池中良徳(北大)・中山翔太(北大)・石塚真由美(北大)
P006		釧路湿原に生息するシマクイナから得られた寄生虫と胃内容物について	○吉野智生(釧路市動物園)・貞国利夫(釧路市立博物館)・本藤泰明(温根内ビジターセンター)・藤原伸也(温根内ビジターセンター)
P007	*	ミャンマーの複雑な地理・環境がもたらすヒヨドリ科鳥類の種分化	○檜橋真理環(九大)・吉川夏彦(国立科博)・長太伸章(国立科博)・蛭田眞平(昭和医大)・Win Win Nwe(FRI, Myanmar)・Salai Myo Myint Oo(FRI, Myanmar)・Mu Mu Aung(FRI, Myanmar)・西海功(国立科博)
P008		ヒヨドリの上腕骨・大腿骨に観察された特徴的な形質	○清水伸彦・姉崎智子(群馬自然史博)
P009	*	オオコノハズクの分子系統および集団遺伝解析と形態的多様性	○江指万里(北大)・外山雅大(根室市歴史と自然の資料館)・宮城国太郎(沖縄野鳥の会)・周戸大季(琉大)・富沢直浩(石川県)・Jasmine Elizabeth Black(新大)・高木昌興(北大)
P010	*	ウトウ雛の鳴音モニタリング	小笹瑛一朗(京大)・○川森日向(北大)・Jean Baptiste Thiebot(北大)

番号	※	演題	発表者(所属)
P011		フクロウ雄成長の繁殖期における鳴き声の継続調査結果	○北尾祐介(Albireo,生態計画研究所)・鹿島彩花(Albireo)
P012	*	Text-to-Audio AI を用いて生成する鳥類音声に基づく性選択モデル	○鈴木麗璽(名大)・Hao Zhao(名大)・有田隆也(名大)
P013	*	川崎市周辺におけるガビチョウのさえずりの多様性	○長谷川れい・北村亘(東京都市大)
P014		擬声語付き鳥鳴音声データセットの試作と RAG による検索精度検証	浅野 由衣(Swallow)、寺本 優香(同志社)
P015	*	3音響管モデルに基づくハシブトガラスの声道モデルの検討	○木原優太(工学院大), 高橋義典(工学院大)
P016		翼は砂浴び(dust toss)の道具になりうるのか? ~粉体物理から見る羽毛の効果~	○越智友都(阪大)・明田卓巳(名大)・藤原慎一(名大博物館)・桂木洋光(阪大)
P017		モズが尾を回転させるのはいつ?	安田耕治(テクノ中部)
P018	*	沖縄島に生息するリュウキュウコノハズクにおける広告声となわばり防衛の関係	○武居風香(北大)、榛沢日菜子(北大)、池上隆之(北大)、高木昌興(北大)
P019	*	速く鳴く個体ほど適応的か? ~鳴き声の速さが表す情報の検討~	○堀内晴 1・澤田明 2・金杉尚紀 1・中村晴歌 3・坂井充 1・中田知伸 1・池上隆之 1・高木昌興 1 1 北大・2 早大・3 いであ(株)
P020		巣箱で営巣したフクロウの餌内容について	松永聡美(日本鳥類保護連盟)○・藤井幹(日本鳥類保護連盟)・秋山幸也(相模原市立博物館)
P021		環境調査におけるシマフクロウ録音調査法の適用について	竹中健(シマフクロウ環境研)
P022	*	カラス口腔内における味を感知する構造の解析	○高橋このか(宇都宮大院・地域創成)・青山真人(宇都宮大・農)
P023		鳥類の飛翔にかかわる筋肉と飛翔速度の関係の解明	栗原望(宇都宮大学)・○小田中楽斗(宇都宮大学)
P024	*	鳥類における尾端骨形態の多様性に関する予備報告	○佐藤初海(東洋大院・生命)・郡司芽久(東洋大・生命)
P025	*	ウトウにおける飛行と遊泳の旋回姿勢は上下反転するか?	○関日向(東京農大院)・菊地デイル万次郎(東京農大)
P026		ヒバリのディスプレイ飛翔高度ーある1個体とその周辺個体の高度の季節変化	○三上かつら(バードリサーチ)・三上修(北教大)
P027	*	ダイトウコノハズクだって風に乗るのか? ~気象条件と移動距離、利用植生の関係~	○金杉尚紀(北大・院理)、江指万里(北大・院理)、熊谷隼(北大・院理)、澤田明(早大・人科)、高木昌興(北大・院理)

番号	※	演題	発表者(所属)
P028	*	レーザー測距計 VECTOR を用いた鳥類飛翔軌跡の形状による分類の試み	○中込大河(日本気象協会)・島田泰夫(日本気象協会)・藤井直紀(日本気象協会)・板谷浩男(日本気象協会)・工藤嘉晃(日本気象協会)・鎌田和歌(日本気象協会)・桃谷辰也(日本気象協会)
P029		カラスの生活のありさま～愛知県農業総合試験場のカラスの生態～	○西村光由(愛知農総試)・伊藤真(愛知農総試)・林高弘(愛知農総試)
P030	*	ハシブトガラスとハシボソガラスにおける歩容の比較	○岡村早紀(宇都宮大院・地域創生)・菊地デイル万次郎(東農大・農)・青山真人(宇都宮大・農)
P031		ホンセイインコの住居事情	○阿部仁美(千葉科学大)
P032	*	ハシブトガラス剥製ロボットに対するハシブトガラスの反応	○相野谷叶乃(宇都宮大・院・地域創生)・青山真人(宇都宮大・農)・塚原直樹(株式会社CrowLab)・安藤隆寛(中部電力株式会社)

第2会場(2号館1F16号室)

番号	※	演題	発表者(所属)
P033	*	谷津干潟でみられるハシボソガラスによる貝落とし行動の季節性と個体差	○中辻百合子(東邦大)・秦陸歩・井上英治(東邦大)
P034		太陽光発電所におけるタカによるカラス追払いの効果検証	○小原愛美(株オオヨドコーポレーション)
P035	*	動物園におけるハシブトガラスとハシボソガラスの採食行動の種間差	○窪田智文(東邦大)・水田拓(山階鳥研)
P036	*	クロツラヘラサギ(<i>Platalea minor</i>)の排泄行動の解明	○長田昇磨(都市大)
P037		餌量の季節変化と農法がアカモズの繁殖成功に与える影響	○寺田透真(人環大)・岡久雄二(人環大)・神谷頼杜(人環大)・近藤七海(人環大)・三宅悠太(人環大)・原星一(アカモズ保全 WG)・藤田知弥(信大)・赤松あかり(アカモズ保全 WG)・米山富和(アカモズ保全 WG)・松宮裕秋(アカモズ保全 WG)
P038	*	クマタカの満1歳および満2歳における換羽の地域差異	○猪狩敦史(クマ観)・伊関文隆(希少研)・先崎愛子(クマ観)・先崎啓究(クマ観)
P039	*	スズメ目鳥類における渡りの日周期性:その進化的起源と夜間への移行	○田中涼太郎(弘前大学)・原星一(日本渡り鳥保全・研究グループ)・曾我部篤(弘大)・ムラノ千恵(弘大)・東信行(弘大)
P040		葛西のクロツラヘラサギの休息行動のサンプリング分析	○濱川歩(葛西のクロツラ、都立大)・小久保守晃(葛西のクロツラ)・上原文弥(葛西のクロツラ)・北村亘(葛西のクロツラ、東京都市大)

番号	※	演題	発表者(所属)
P041	*	鳥類が主食になったハヤブサが都市適応をする？	○井上茉優(海城中高,日本野鳥の会東京)、北村亘(東京都市大学)
P042	*	ウミネコが選好する水田環境の特性とその利用パターン	○清稜太(新大院)・永田尚志(新大)・本間航介(新大)
P043		都市近郊のアオサギ繁殖地における他のサギ類の加入・定着とその要因:複数地点の比較から	白井剛(都留文科大／和光大)
P044	*	飼育下モズにおける単独育雛とグループ育雛の成長過程に伴う行動変化の比較	○渡邊竣介(生息域外保)
P045	*	ウミネコの繁殖期と非繁殖期における採餌行動の変化	○山本弥景・但野一成・小澤光莉・仁部駿介・伊藤元裕(東洋大)
P046		伊豆諸島祇苗島におけるオーストンウミツバメの人工巣利用	○山本裕(日本野鳥の会)・寺嶋太輝(東京農工大院・獣医)・手嶋洋子・田尻浩伸(日本野鳥の会)
P047	*	カンムリウミスズメの生態的重要海域の特定	○廣木美帆(帝科大院)・森貴久(帝科大)・田尻浩伸(野鳥の会)・手嶋洋子(野鳥の会)・山本誉士(麻布大)
P048	*	オンラインフォームを用いたイソヒヨドリの分布調査—神奈川県相模原市の事例	○増田侑太郎(都立大)・立木佑弥(都立大)
P049		クロサギの越冬期における羽色と採餌行動及び利用環境の比較	植村慎吾(バードリサーチ)
P050		長野県北部におけるチョウゲンボウの営巣場所周辺における越冬	○本村健(中野市教育委員会)・中山茉奈美(十三崖チョウゲンボウ応援団)・久野真純(広島大・先進理工)
P051	*	日本のライチョウ雄における秋季の行動圏とねぐら行動:GPS 追跡による知見	○堀田昌伸(長野県長野市)・尾関雅章・黒江美紗子(長野県環境保全研究所)
P052		始原生殖細胞の凍結保存によるニワトリ遺伝資源の保全	○奥寄雄也(名大)・西島謙一(名大)
P053	*	繁殖は寿命を短縮するか—歌鳥飼育個体群を用いた検討	○谷村メイチンフィオナ(北大・生命院)・相馬雅代(北大・院理)
P054	*	ハシブトガラスにおけるミトコンドリア DNA の遺伝的多様性について	上野陽彩・青山真人・福井えみ子(宇都宮大院・地域創生)
P055		鳥類における抗がん剤治療の検討:ウズラでの分子標的薬トセラニブの薬物動態	○石井千尋(農工大)・長嵩優子(農工大)・渡部健太郎(農工大)・Ting-Wei Yu(農工大)・山本晴(農工大)・臼井達哉(農工大)・佐々木一昭(農工大)
P056	*	鹿児島県甌島列島におけるリュウキュウキビタキの繁殖集団の発見	○加藤銀次(長大院・総合生産)、江寄真南(鹿大院・獣医)、山口典之(長大院・総合生産)

番号	※	演題	発表者(所属)
P057	*	大阪府南部に生息するフクロウの繁殖期における鳴声の分類と発声頻度の時間変化	○池上隆之(大阪府大・生命、現所属:北大・院理)・村濱史郎(日本バードレスキュー協会)・梅崎澄人(大阪公大・院農)・平井規央(大阪公大・院農)・上田昇平(大阪公大・院農)
P058		センサーカメラを用いた北海道十勝平野におけるハイタカの繁殖生態	○平井克玄(十勝ハイタカ, 北クマ)・嘉藤慎譲(十勝ハイタカ, 北クマ, ちいかん)・太田こるり(十勝ハイタカ)・道川富美子(十勝ハイタカ, 北クマ)
P059	*	伊豆諸島における渡り性陸鳥の季節的な移動パターンを音響モニタリングで探る	○船橋美月(筑波大)・谷口司(筑波大)・飯島大智(筑波大)・上條隆志(筑波大)
P060	*	神奈川県葉山町のウミウ滞りにおける出滞方向とタイミングの月別の変化	○田中雅宏(日大生物博)・笠谷幹朗(日大院)
P061		ハクセキレイの集団ねぐらにおける就滞個体数の推移と夜間採食の記録	○本多里奈(埼玉県自然博)
P062	*	ハシブトガラスの飼育オス集団における優位個体の除去が社会的交渉に与える影響	○阿部響(慶大・早大)
P063		センサーカメラを用いた宮城県仙台湾(蒲生～岩沼間)におけるミサゴの繁殖生態	○嘉藤慎譲 1・太田吉厚 2・西谷理恵 3・田部田勉 4・齊藤賢治 (1(株)地域環境計画・2 宮城県森林インストラクター・3(株)宮城環境保全研究所・4(株)建設技術研究所)
P064	*	なぜ GPS 装着サシバにメスが多い? 性比偏りに関する仮説立案と検証の試み	○内藤アンネグレート素(京都市動物園, ARRCN)・東淳樹(岩手大)・伊藤圭子(奄美いんまや動物病院)・井上剛彦(ARRCN)・遠藤孝一(オオタカ保護基金)・出島誠一(日本自然保護協会)・鳥飼久裕(奄美野鳥の会)・葉山政治(日本野鳥の会)・藤井幹(日本鳥類保護連盟)・松永聡美(日本鳥類保護連盟)・山崎敦子(ARRCN)・山崎匠(ARRCN)・和田のどか(ARRCN)・山崎亨(ARRCN)

第3会場(2号館2F 21号室)

番号	※	演題	発表者(所属)
P065	*	樹洞や巣箱は冷凍庫・オオコノハズクの貯食行動	外山雅大(根室市資料館)
P066		兵庫県朝来市和田山町における2025年積雪期のコウノトリの採食生態	栗山(武田)広子(コウノトリ市民レンジャー/コウノトリ市民研/兵庫県立大)
P067		札幌市中央区中島公園においてマガモが樹洞に営巣—オシドリのみね?	○新田啓子(日本オシドリの会)中村眞樹子(NPO 法人札幌カラス研究会)

番号	※	演題	発表者(所属)
P068	*	ハシブトガラスによるキンギンボク有毒果実の採食記録	島田将吾(新潟大)・直江将司(森林総研)・柴田嶺(新潟大)
P069		スズメ目鳥類二種の卵殻表面構造	○松井晋(東海大)・佐藤敦(東海大)
P070	*	CJS モデルを用いたアカモズの生存率推定とその決定要因	○松崎秀哉(北大)・市川伸(日本渡り鳥保全・研究グループ)・古巻翔平(厚岸水鳥観察館)・熊谷隼(EnVision)・高木昌興(北大)
P071	*	石狩川河口地域で同所的に繁殖するセンニュウ類 2 種の帰還状況の解明	○岩崎美穂、白岩颯、安田直矢、高木昌興(北大)
P072		小笠原諸島沖の海鳥相-バードウォッチャーによる 5 年間の記録 -	○田野井博之(Seabirding Japan)・田野井翔子(Seabirding Japan)
P073	*	北海道トド島におけるウトウの餌種および採餌域選択と雛の成長	○小島達樹(東洋大)・大門純平(名古屋大)・風間健太郎(早稲田大)・綿貫豊(北大)・仁部駿介・伊藤元裕(東洋大)
P074	*	非繁殖期のクロアシアホウドリの利用海域の多様性と忠実性	○林はるか・西沢文吾(水研機構・水産資源研)・富田直樹(山階鳥研)・塩出大輔(東京海洋大)・越智大介(水研機構・水産資源研)
P075		北海道および東北地方におけるチゴハヤブサの営巣環境	○立石淑恵(オホーツクミュージアムえさし)・高橋雅雄(岩手県博)・東信行(弘大)
P076	*	渡るアオバズクの一年:長期間移動追跡の事例から分かること	○竹田山原楽 1, 2、田谷昌仁 1, 2、塩見こずえ 1、細谷淳 2 (1 東北大、2 鳥類標識協会)
P077	*	鳥取県大山におけるジョウビタキの繁殖生態 ~分子遺伝学および行動生態学の観点から~	楠ゆずは(広大)
P078		北海道北部におけるサンカノゴイの音声調査:生息実態と繁殖行動の予備的解析	○松林志保(関学大)、浦達也(野鳥の会)、中臺一博(東工大)、長谷部真(サロエコ)、鈴木麗璽(名大)
P079	*	ヒドリガモ・オナガガモの性比とペア形成率の季節変動	○浅井美紅(東邦大)・児島庸介(東邦大)・森本元(山階鳥類研究所・東邦大)
P080	*	都会派スズメの子育て戦略~市街地における気温・緑地が営巣地の選好性に与える影響~	○岡村悠太郎(名城大)・橋本啓史(名城大)
P081		ドバトの空間行動と趾欠損の関係性	○海瀬慧・西田澄子・北村亘(東京都市大)
P082	*	内陸都市部におけるイソヒヨドリの環境適応	○大久保亘・北村亘(東京都市大)
P083	*	都市緑地における鳥類-植物相互作用ネットワークのコア鳥類種の同定	湯天禹(東大)・○平尾聡秀(東大)
P084		コシアカツバメは本当はそれほど繁殖はしていない?	福井 亘(栃木・黒磯高校)

番号	※	演題	発表者(所属)
P085	*	佐賀平野におけるカササギの営巣分布に影響を与える環境要因とカラスとの関係	○土屋佳央(佐大)・永渕拓歩(佐大)・佛坂安恵・池上真木彦(国環研)・徳田誠(佐大・鹿大)
P086	*	営巣場所の密度の違いは樹洞営巣性鳥類の生息や繁殖にどう影響するか？	○深水彩(東大)
P087		熊本県菊池溪谷における森林性鳥類相の変遷	○佐藤重穂(森林総研)
P088	*	インターネット上に発信された目撃情報を活用した日本の野生ウズラの分布調査	○宮地李果(麻布大)・戸張靖子(麻布大)
P089	*	ウミネコ巣立ち雛はどこへ向かうのか？：巣立ちから越冬までの移動と活動量の記録	○杉山響己(名大)・水谷友一(同志社大)・後藤佑介(名大)・依田憲(名大)
P090		オガサワラノスリ ファクトシート	千葉夕佳
P091	*	オガサワラカワラヒワの飼育下での繁殖行動について～初の繁殖成功事例より～	○鈴木創・堀越宙・飴田洋祐・神門英夫(IBO)
P092	*	全ゲノム解析で評価するタンチョウの遺伝的多様性と近親交配	○中村陽月(京大)・佐藤悠(京大)・大沼学(国環研)・村山美穂(京大)
P093		感染初期のマガモにおける高病原性鳥インフルエンザウイルスの体内動態と宿主免疫応答	○佐久間咲希(農研機構)・西浦颯(農研機構)・峯淳貴(農研機構)・熊谷飛鳥(農研機構)・内田裕子(農研機構)・宮澤光太郎(農研機構)
P094	*	円山公園に生息するオシドリ of 食性把握に向けた糞中 DNA 解析の試み	○木下佳也(北海学園大)・早矢仕有子(北海学園大)・新沼協(北海学園大)
P095	*	東京湾沿岸部におけるマイクロプラスチックの保有状況の 30 年後の変化	○植田晴貴(日獣大・獣医)・徳長ゆり香(北大・獣医)・清水智帆(日獣大・獣医)・橘敏雄(応用生物)・西川和夫(応用生物)・加藤卓也(日獣大・獣医)・羽山伸一(日獣大・獣医)
P096		国内で商業輸送される廃鶏の環境調査	○諸木裕子(日女)・深町昌司(日女)
P097	*	ニュージーランドのミズナギドリ寄生性ハジラミの記録と iNaturalist の活用	前朝琉
P098	*	鳥類の夜間の渡り行動に及ぼす人工光の影響	○和賀大樹(北大)・長田幸子(いであ)・佐藤友徳(北大)・先崎理之(北大)
P099		クロツラヘラサギの日の出日の入りスイッチについて	○小久保守晃(葛西のクロツラ)・北村亘(葛西のクロツラ、東京都市大)・木村成美(NPO birth)上原文弥(葛西のクロツラ)

番号	※	演題	発表者(所属)
P100	*	夜間人工光による海鳥の行動変化	○永井彩実(北大)・富田直樹(山階鳥研)・西沢文吾(水研機構 水産資源研)・綿貫豊・Thiebot Jean-Baptiste(北大)
P101	*	GPSトラッキングによるタマシギの周年行動と環境利用の季節・昼夜変化	喜多村珠妃(人環大・環境)・根本宗一郎(西三河野鳥の会)・上田(人環大・人環)・岡久(人環大・環境)
P102		北海道オホーツク海沿岸に生息するカワウの GPS ロガーを用いた広域移動調査	○羽根田貴行(WMO)・富田大陸(WMO)・加藤洋(WMO)
P103	*	クロアシアホウドリは船舶の存在に対してどのように反応するのか?	○金潤秀(北大水産)・富田直樹(山階鳥研)・越智大介(水研機構)・Jean-Baptiste Thiebot(北大水産)
P104		デジタルメソッドで描く、北海道のオジロワシをめぐる環境運動の社会関係と争点形成	韓智仁(阪大)
P105	*	国内におけるケリの非繁殖期の GPS 発信機追跡結果	○小丸奏(興栄 C、岐阜大)・藤崎雄大(岐阜大)・田中智・伊藤健吾(岐阜大)
P106		ケリ幼鳥の出生から 1 年間の追跡～GPS および足環装着個体の移動、帰還、越冬、繁殖～	○脇坂啓子(関西ケリ研究会)脇坂英弥(関西ケリ研究会)
P107	*	換羽サイクルに基づく鳥類の年齢記録システムー日本における導入の意義	○細谷淳(鳥類標識協会)
P108		大和川下流部の水鳥の 30 年	和田 岳(大阪市立自然史博物館)
P109	*	市民科学と画像認識 AI をもちいた絶滅危惧種の識別	○福井智樹(東京都市大)・吉田祐一・工藤萌華(生態教育センター、葛西鳥類保全委員会)・菊地伸夫・堀直子・渡辺欣正(東京都公園協会、葛西鳥類保全委員会)・北村亘(東京都市大、葛西鳥類保全委員会)
P110	*	都市公園における鳥類の空間利用:植栽樹木との関係に着目して	○酒井結(農工大院・農)・諸澤崇裕(農工大・野生動物センター)
P111		日の出後の経過時間がスポットセンサスの記録率に与える影響:季節・環境による比較	○久野真純(広島大)・大坂英樹(トリルラボ)・大橋正明(日本野鳥の会)・村上公輝(日本野鳥の会)・本村健(中野市教育委員会)・Xike Xiao(広島大)・出口翔大(福井市自然史博)
P112	*	都市鳥からみたエコロジカル・ネットワーク形成に必要な条件の解明	○西亮憲(名城大院)・橋本啓史(名城大)
P113		環境が異なる FSC 認証林における鳥類の比較と評価	○高木憲太郎(バードリサーチ)・天野陽介(WWF ジャパン)
P114	*	カメラ撮影を活用したカラスのねぐら調査法の試行	○加納彩海(岐阜大院・自然研)・酒井泰和(日本野鳥の会岐阜)・森部絢嗣(岐阜大院・自然研)

番号	※	演題	発表者(所属)
P115	*	日比谷公園における野鳥の鳴き声自動識別と位置検出	○吉田聖弥(東京都市大)・宮崎滉平(ハイラブル)・柳楽浩平(ハイラブル)・水本武志(ハイラブル)・北村亘(東京都市大)
P116		市民参加による渡り鳥の夜間フライトコール(NFC)録音調査の運用と課題	○大坂英樹(トリルラボ)・田米希久代(加賀市鴨池観察館)・櫻井佳明(加賀市鴨池観察館)
P117	*	鳥類相の季節変化からみた人工干潟の再生状況の評価	○東直希(広島工大)・岡浩平(広島工大)
P118		東北地方に生息するコムクドリの気候変動による分布変化の予測	○大泉龍太郎(北大・院理)・池田小春(岩大・院)・高木昌興(北大・院理)・山内貴義(岩大・農)
P119	*	水田景観の捕食者サシバの主要生息地における餌生物カエル3種の分布決定機構を探る	○尾上愛実(東大)・藤田剛(東大)・宮下直(東大)

第4会場(2号館2F22号室)

番号	※	演題	発表者(所属)
P120	*	山中湖のコブハクチョウ個体識別管理の取組み	○葉山久世(かながわ野生動物 SNW) 加藤ゆき(神奈川県博) 篠田授樹(地域自然財産研究所) 菊池博(横浜市金沢動物園)
P121		モニ1000 陸生鳥類調査(一般サイト)からわかった北海道の鳥類の増減	○奴賀俊光・葉山政治((公財)日本野鳥の会)
P122	*	渡り性水鳥の生息地選好から導く普通種保全の希少種への波及効果	○清水孟彦(北大)・堀隼輔(ドーコン)・末田晃太(日本気象株式会社)・市原農太郎(ウエスコ)・和賀大樹(北大)・広部康太(北大)・先崎理之(北大)
P123	*	北関東の平野部における草原性鳥類の分布特性と農地の利用実態の把握	○並木大斗・上條隆志・飯島大智(筑波大)
P124		西日本におけるツル類の越冬期域について	重永明生・○加藤ゆき(神奈川県博)
P125		オホーツク地方でタンチョウの越冬個体群は成立するか?	○正富欣之(JTRI)
P126		北海道北部日本海側に生息するチュウヒの繁殖経過に伴う営巣位置の変化	○東谷和徳((株)セ・プラン)・土門優介((株)ドーコン)・先崎啓究・先崎愛子(道央鳥類調査グループ)・森田佑介・森田静
P127	*	絶滅危惧種に対する地域住民の意識調査ーコアジサシの保全に向けてー	○大塚育(千葉科学大)・阿部仁美(千葉科学大)

番号	※	演題	発表者(所属)
P128		気候変動対策としての秋耕と鳥類の食物量のトレードオフを軽減するには	○田尻浩伸(日本野鳥の会, 片野鴨池自然研)・田米希久代(加賀市鴨池観察館, 片野鴨池自然研)・林 俊夫(太田川土地改良区)・東英治(大聖寺下福田町生産組合内 あぢの郷米部会)・谷 和幸(大聖寺下福田町生産組合)・横山明男
P129	*	捕食者除け構造を有する巣箱での外来種アライグマによるヤマガラ繁殖巣の攪乱	○小川華奈・松井晋(東海大・生物)
P130		新潟県における傷病鳥の収容データから見たネコ被害の実態	○佐藤悠子(愛鳥センター)
P131	*	動力源の異なる自動車騒音が鳥類の捕食者検知感度へおよぼす影響	○坂元利駆(近畿大院・農)・石若直人(近畿大院・農)・早坂大亮(近畿大・農)
P132		高速道路 IC 内で確認されたサギ類の多様な営巣様式	○芳賀大(野鳥の会愛知県支部)・西村祐輝(野鳥の会愛知県支部)・橋本啓史(名城大)・東実優(名城大)
P133	*	西表島および石垣島におけるカンムリワシのロードキル発生環境	○森嶋茜(帯広畜産大)・水谷晃(Island Ecosystem Research)・山本誉士(麻布大)・浅利裕伸(帯広畜産大)
P134	*	航空写真×レーザ計測: 洋上の鳥類の三次元モニタリングに向けた試み	○倉部鈴美・板谷浩男・中込大河・工藤嘉晃・藤井直紀・島田泰夫・桃谷辰也(日本気象協会)・若松孝平・玉井翔・高野正範・佐橋優也(中日本航空)
P135		イギリスの自然保護団体による湿地環境創出の事例紹介 国内のチュウヒの保護を目指して	○稲葉一将(日本野鳥の会)・浦達也(日本野鳥の会)・山本裕(日本野鳥の会)・手嶋洋子(日本野鳥の会)・田尻浩伸(日本野鳥の会)
P136		北海道猛禽類研究会の活動紹介-「北海道の猛禽類 2025 年版」の発行-	藤巻裕蔵(帯畜大名誉教授)・○工藤晃央・山田芳樹・山口珠輝・堀隼輔(ドーコン)・天野拓郎(日本工営)・一北民郎(北電総合設計)・大坪二郎(いであ)・紀國聡(建設技術研究所)・栗原絢子(長大)・小林功(パシフィックコンサルタンツ)・先崎啓究(道央鳥類調査グループ)・瀧本育克・徳永尚起(建設環境研究所)・玉田克己(道総研エネルギー・環境・地質研究所)・玉田祐介(道総研林業試験場)・土屋尚(ユリーカ北海道)・木村智紀(北海道技術コンサルタント)・平井克亥(北海道ラプター)・谷津繁芳(森林環境リアライズ)
P137	*	アーカイブ資料参照の可否による標本データの精度検証の有効性	○染矢楓久(北大・農)・加藤克(北大・農/北セ)
P138		漆芸の鞘塗り技法「鶴足革包研出」についての検討: 「鶴足革」はツルか否か	○久井貴世(北大)・酒田堇

番号	※	演題	発表者(所属)
P139	*	江戸時代の東北地方におけるワシの狩猟 ―弘前藩と盛岡藩の記録を中心に―	○池田圭吾(北大文学院)
P140		遺跡出土タカ科の骨形態同定基準の作成:前肢編	○許開軒(北大)
P141		高知県のカワウの生息状況の変遷	○濱田哲暁(四国自然史科学研究センター・日本野鳥の会高知支部)・有田修大(高知野鳥の会・日本野鳥の会高知支部)

高校生・小中学生ポスター発表プログラム Youth poster presentations

会場:2号館2F 22号室

Y 奇数番号 コアタイム:9月13日 16:40~18:40

Y 偶数番号 コアタイム:9月14日 10:00~12:00

番号	タイトル	発表者(学校名)
Y01	武蔵学園における鳥類の窓ガラスへの衝突死の傾向	浅井周(武蔵高等学校)
Y02	あかぼっぼってどんな子育て?あかぼっぼのコミュニケーションの姿を見た~デコイ作戦と親の呼びかけに走り寄るヒナ~	○佐渡志穂里 幸松浩然 鈴木匠(国分寺高校生物部音声班)
Y03	札幌市円山公園の野鳥と生き物たち	長内智幸(札幌市立北陽小学校)
Y04	近江兄弟社中学校におけるコシアカツバメの生存の知恵と工夫	松本百花(近江兄弟社中学校)
Y05	生成 AI を用いた機械学習によるフクロウの個体識別	櫻井奏子(四日市高校)
Y06	滋賀県草津市岡本町におけるツバメの営巣場所の選好に関する研究	シュルンツェ羽奈(滋賀県立膳所高等学校)
Y07	飛行形態と鉤状突起の長さの関連性 ー化石鳥類の飛行推定への応用ー	秋澤海良(日本大学藤沢高等学校)
Y08	奈良県生駒市におけるツバメの給餌行動の観察と給餌内容の解析	荻巣樹(奈良女子大学附属中等教育学校)
Y09	人とカラスのあいだに生まれた関係性 ~一時保護したハシボソガラスの27日間の行動観察より~	高橋徳至(品川区立小山小学校)
Y10	植物由来の蛍光成分を利用したカラス忌避剤の開発	松倉佳奈(宮城県加美農業高等学校)
Y11	コアジサシの鳴き声とコミュニケーション	小野塚廉人(流通経済大学付属柏中学校)
Y12	所沢駅周辺におけるムクドリ就埒行動および就埒環境について	緒方蒼真(桐朋高校生物部)
Y13	宮島沼のマガンの群れの鳴き声と行動の関係	長田佳子(岩見沢市立北村中学校)
Y14	市街地のツミの繁殖行動 -周辺の種による繁殖への影響-	緒方晴(世田谷区立北沢中学校)
Y15	瀬戸内海にオオハム類は何羽?~漂着した羽根の収集による個体数推定~	木原涼帆(愛媛県立今治西高等学校)
Y16	井の頭公園に生息するカイツブリの出入りについて~個体識別からわかったこと~	櫻庭蓮之介(むさしの学園小学校)

番号	タイトル	発表者(学校名)
Y17	私たちの総合的探究活動 天然記念物八戸蕪島ウミネコ繁殖地の観察を通して	○村田晃大・木下恵利・高橋晴夏・保土澤輝望(八戸工業大学第二高等学校)
Y18	40 年前と比較した北海道ウトナイ湖の繁殖期における鳥の変化	川崎慎一郎・川崎志帆・川崎眞之・澤目一輝・澤目光輝・高沢理一・竹田 佳穂・豊田侑生・原田織寧・原田雛寧・ホール彪吾・森岡咲瑛((公財)日本野鳥の会 ウトナイ湖サンクチュアリ・ネイチャーセンターサポーター)
Y19	見えざる飛翔の軌跡:春夏秋冬朝昼晩、カラスバトのルーティーンを暴け!	○大津洸太郎・丸山雅人(都立国分寺高校生物部カラスバト GPS 班)
Y20	ヒヨドリと日没の関係性	沼野遥(早稲田実業学校)
Y21	生物部から考える鳥類研究の可能性—教室の外にある学びと成長	○小西行亮・石川慧文・飯間悠貴・井上智紗子・四軒家瑠哉・室田章良・末吉侑(大手前高松中学・高等学校)

自由集会プログラム Workshops

会場: 7 号館

9月12日(金) 15:30~17:30

番号	部屋	タイトル	主催者
W01	D20	洋上風力発電の環境影響評価における鳥類調査の手法に関する意見交流会	板谷浩男(日本気象協会)
W02	D30	モニタリングサイト 1000 の 20 年の調査結果から見てきた日本の鳥の変化	植村慎吾(バードリサーチ)
W03	D40	鳥類学若手の会 Presents「遺伝学・ゲノム科学で拓く鳥類学のフロンティア」	田谷昌仁(東北大)、飯島大智(筑波大)、犬丸瑞枝(JIHS)、江指万里(北大)、小島達樹(東洋大)、清水孟彦(北大)、姜雅琄(バードリサーチ)、内藤アンネグレート素(京都市動物園)、水村春香(富士山研)、望月みずき(鳥の博物館)、安田和真(農工大)、山崎優佑(バードリサーチ)
W04	D41	カワウと人との共存を考える(その 26) カワウ管理、やってみたら意外と〇〇だった件。	高木憲太郎(バードリサーチ)
W05	D42	第7回標本集会「博物館施設の生き残り戦略ーひいては標本を後世に残すために」	岩見恭子・小林さやか(山階鳥研)・加藤ゆき(神奈川県博)

9月13日(土) 18:40~20:40

番号	部屋	タイトル	主催者
W06	D20	新たな局面を迎えた野生鳥類の高病原性鳥インフルエンザとその対策に向けて	森口紗千子(鳥取大・グローバルヘルス／日獣大・獣医)、外山雅大(根室市歴史と自然の資料館)
W07	D30	バードウォッチングにおける「利用と保全」の循環	菊地直樹(金大)
W08	D40	石狩におけるアカモズの研究と保全活動	熊谷隼・長谷川理(EnVision 環境保全事務所)
W09	D41	オガサワラカワラヒワ絶滅阻止限界点への挑戦	川口大朗(Islands care)、南波興之(日林協)、鈴木創(I-BO)、川上和人(森林総研)
W10	D42	危機対応自由集会(対動物編)	黒沢令子(バードリサーチ)

公開シンポジウム Public symposium

鳥学が牽引する現代生態学—鳥の研究は面白い！

15日(月祝) 9:00~12:30

北海道大学高等教育推進機構 Sky HALL(北海道札幌市北区北17条西8丁目)

参加費無料、事前予約不要

この公開シンポジウムでは、鳥類を研究材料として「生態学」を牽引してこられた4人の方々にご登壇いただきます。濱尾章二さんには琉球列島におけるカラ類の近縁種が在不在の島嶼を利用した自然の実験としての「音響生態学」、日野輝明さんにはカラ類群集における個体レベルの順位制やマダガスカル鳥類群集と大台ヶ原の研究から「群集生態学」、中村雅彦さんには高山で繰り広げられるイワヒバリの婚姻戦略やマダガスカルを舞台にした研究などから「行動生態学」、綿貫豊さんには天売島の長期研究や世界各地の研究が捉えられた「海洋生態学」です。

登壇者の皆さんには、ご自身がされてきた学術的に重要な研究を中心に、鳥を用いた研究の展望や後進へのメッセージなども交えてお話していただきます。参加者の皆さんには、鳥学が生態学にどれほど重要な示唆を与え、発展させてきたかを再確認いただき、今後も鳥学が生態学研究の中心であり続けるであろうことを実感していただきたいと思います。

- | | | |
|-------------|-------------------------------------|----------------------|
| 9:00-9:10 | はじめに | (高木昌興) |
| 9:10-9:45 | 鳥の音声コミュニケーション—さえずりの「方言」から種認知を探る | (濱尾章二/国立科学博物館・名誉研究員) |
| 9:50-10:25 | 何でも屋研究者の個性とつながりの群集生態学 | (日野輝明/名城大学・元教授) |
| 10:25-10:40 | 休憩 | |
| 10:40-11:15 | イワヒバリからマダガスカルへ | (中村雅彦/上越教育大学・名誉教授) |
| 11:20-11:55 | 気候変化への海鳥の応答を長期モニタリングとバイオロギングで明らかにする | (綿貫豊/北海道大学・名誉教授) |
| 11:55-12:05 | 休憩 | |
| 12:05-12:30 | 質疑応答・パネルディスカッション | |

公開シンポジウム会場案内 Symposium venue: Sky Hall, Hokkaido Univ.



【高等教育推進機構 外観】



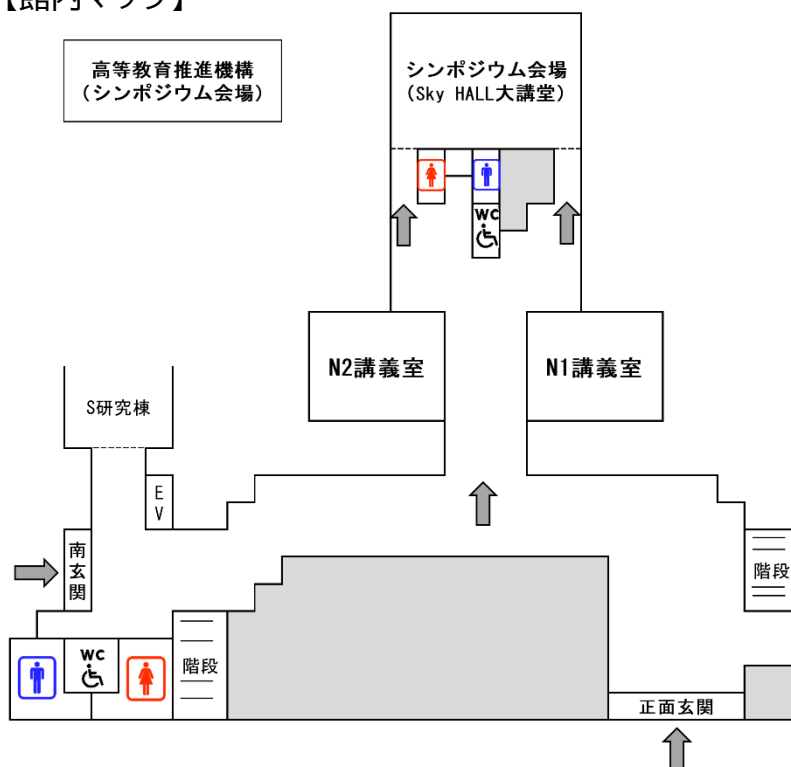
出典（一部改変）：
<https://www.hokudai.ac.jp/bureau/property/aas/access/>

- JR をご利用の場合：JR「札幌駅」下車、徒歩 23 分
- 地下鉄をご利用の場合：市営交通・地下鉄南北線/「北 12 条駅」下車、徒歩 15 分
 市営交通・地下鉄南北線/「北 18 条駅」下車、徒歩 8 分
- ※当施設には駐車場がありません。
- 最寄りの公共交通機関のご利用をお願いいたします。

【Google Map】



【館内マップ】



公開シンポジウム 要旨 Summary of each speaker's presentation

鳥の音声コミュニケーション—さえずりの「方言」から種認知を探る

濱尾章二(国立科学博物館・名誉研究員)

動物は、雌雄がつがいになったり同性のライバルとなわばりを争ったり、種内でさまざまな社会交渉をもつ。その際、似通った種を同種と誤認しないことが重要である。鳥類では音声を用いたコミュニケーションが発達しており、音声による種認知が行われている。しかし、オスのさえずりには地域による違い(方言)のある場合がある。よその方言を聞いた個体は、正しく同種の音声だと認知するのであろうか。そもそも、なぜ地域によってさえずりが異なるのであろうか。このような疑問に答えようと、互いに似たさえずりをもつシジュウカラとヤマガラを対象に南西諸島で研究を行った。その結果、シジュウカラはヤマガラが生息していると、誤認されぬようシジュウカラの特徴が顕著なさえずりをする、また両種とも他方の種が生息していると種認知の基準を厳密なものにしていることが明らかとなった。音声分析と野外実験から見えてきた鳥の音声コミュニケーションの世界を紹介する。

何でも屋研究者の個性とつながりの群集生態学

日野輝明(名城大学・元教授)

群集生態学のテーマを一言で表すと「なぜその場所にはそれほど多くの種が存在するのか」となる。そのテーマを明らかにするためには、群集を構成する生きものの「個性」と生きもの間の「つながり」を明らかにする必要がある。例えば、混群を構成するシジュウカラとコガラのように外見上よく似た種であっても、エサの取り方や攻撃性・協調性がそれぞれの種の個性によって異なり、さらに、その個性の違いは同種個体間で異なる。また、群集の研究では、鳥のように特定の分類群を対象に調べる場合であっても、通常は他の分類群の生物を含めて調べることになる。例えば、エサ生物である虫たちとのつながり、生息場所を形作る植物たちとのつながり、同じ生息場所を共有するシカなどの他の分類群の動物たちとのつながりなどである。さらにまた、それらの個々のつながりは、互いにつながりあうことで間接的な影響をもたらす。このように、群集生態学では、同じ空間でともに生きるものたち間の捉えどころのない世界に挑むことになる。研究者には大きく分けると「専門家」と「何でも屋」の2つのタイプがあるが、群集生態学は後者に向けた学問なのかもしれない。

イワヒバリからマダガスカルの鳥へ

中村雅彦(上越教育大学・名誉教授)

私の鳥の研究の出発は、本州中部の高山帯に生息するイワヒバリという鳥です。最初にこの鳥を観察した時のことは今でも忘れられません。メスが、赤く腫れた自分のお尻を、オスに見せて踊っているのです。しかも、特定のオスだけでなく複数のオスに対して。普通の鳥は一夫一妻なのですが、イワヒバリは多夫多妻といって鳥の中で極めて珍しい繁殖形態をもつ鳥です。イワヒバリの形態や行動を精子競争という専門用語で説明したいと思います。

人生とはおもしろいもので、あるきっかけで世界のなかでマダガスカル島だけにすむオオハシモズ類が研究対象になりました。進化で有名なガラパゴスフィンチはすべての種が一夫一妻です。ところがオオハシモズの仲間は一夫一妻があれば、一妻多夫があり、お手伝いのいる共同繁殖もいます。私の興味はなぜ、わずか一種の鳥がマダガスカルで複数の種に分化したのか、なぜ、多様な繁殖形態を持つようになったかです。

気候変化への海鳥の応答を長期モニタリングとバイオロギングで明らかにする

綿貫豊(北海道大学・名誉教授)

鳥類は生態系変化の指標として役に立つだろう。10 年規模振動(レジームシフト)や地球温暖化さらに最近の海洋熱波など複雑な気候変化が海洋生態系を大きく変えており、海鳥の応答も興味深い。天売島のウトウは 2010 年までの 30 年間、レジームシフトとともに餌をスイッチし、雛生産はマイワシを食べた寒冷レジームでは中程度、カタクチイワシを食べた 20 年間におよぶ温暖レジームでは高かった。カタクチイワシ年には餌荷は重くエネルギー価も高く、近くで採食したため給餌頻度も高かったためである。その後 2025 年までに餌種の急変が 3 回見られ、寒冷性のホッケ 0 歳とイカナゴを食べたそれぞれ 3~4 年の間では雛生産が低かった。こうした短期的な餌種の変化は海洋学的にはまだ十分理解が進んでいない気候レジームの質的变化を示唆している。また連動して繁殖成績が大きく上下するのでウトウ個体群への影響にも留意しなければならないだろう。

黒田賞受賞記念講演 Winner of the 2025 Kuroda Award presentation

2025 年度日本鳥学会黒田賞受賞者：岡久雄二(人間環境大学)

日時：14 日(日)14:30～15:30

会場：3 号館・41 番教室

2025 年度日本鳥学会黒田賞について

黒田賞は、日本の鳥学会の発展に貢献した黒田長禮・長久両博士の功績を記念して、鳥類学で優れた業績を挙げ、これからの鳥類学を担う若手・中堅会員に授与する賞である。受賞者には賞状と副賞(黒田基金及び小口基金から 10 万円)が授与される。

学会賞選考委員会で規定・運営指針に則して研究内容のオリジナリティ、鳥類学における重要性、将来性などについて検討、審査の上、岡久 雄二(人間環境大学環境科学部フィールド生態学科)氏を受賞候補者として理事会に推薦し、理事会の決議により受賞が承認された。

岡久雄二氏は、フィールドでの行動生態学研究から研究キャリアをスタートさせたのち、トキなどの絶滅危惧鳥類の生息域内・生息域外保全に関わり、その中で大きな役割を果たしてきた。絶滅危惧種についてのモニタリング調査を行い、得られたデータにベイズモデリングなどの統計手法を駆使することで研究を発展させている。そうした業績の一つである、放鳥後のトキ個体群についての統合個体群モデルの解析は、再導入されたトキ個体群の生存率や繁殖成功率を定量的に評価し、環境省のレッドリスト評価や報道発表の基盤データとして活用されるなど、保全政策に大きな貢献を果たしてきた。また保全活動の実践についても、さまざまな鳥種に関して組織を主導し、地域社会との協働を行いながら着実な成果をあげている。これまでに鳥学に関する 36 編の査読論文が国内外の学術誌に掲載されており、生息域内保全・生息域外保全の双方の領域で、フィールド調査から保全施策の評価・実践まで分野横断的に関わっている点において、岡久氏は日本において代替不可能な重要な地位を占めている。また一般誌などへの寄稿や一般向けの講演なども積極的に行い、鳥類学の普及にも大きく貢献している。こうした保全生態学の研究と実践の分野における今後の活躍がさらに期待される。

なお、受賞内容は総説として日本鳥学会の学会誌に掲載予定である。

学会賞選考委員会

受賞者プロフィール

岡久雄二(おかひさ ゆうじ)博士(理学)。人間環境大学講師。専門は保全鳥類学。トキやアカモズなどの希少鳥類を対象に、生息域内保全と生息域外保全を統合する実践的研究に取り組む。統合個体群モデルやベイズ統計を用いた解析等により、保全政策に直結する科学的知見を提供し、多くの保全計画を執筆・策定してきた。とくにトキの野生復帰においては、育雛手法の開発や保全施策の効果検証を通じて実務面で大きな成果を挙げた。アカモズ保護増殖プロジェクトでは、地域・行政・動物園・研究機関をつなぎ、保全の推進に尽力している。普及啓発にも力を注ぎ、科学と社会をつなぐ新しい保全のあり方を実践している。

黒田賞受賞記念講演要旨

科学と実務をつなぐ保全鳥類学の実践

14 日(日)14:30~15:30/3 号館・41 番教室
岡久雄二(人間環境大学 環境科学部 フィールド生態学科 講師)

本講演では、私がこれまで取り組んできた鳥類を対象とする保全生物学の研究と、その成果を社会実装に結びつけた実践活動について報告する。主たる対象種は、トキやアカモズをはじめとする国内希少野生動植物種である。私は、これらの種における生息域内保全と生息域外保全の統合的戦略(いわゆるワンプランアプローチ)の構築と、保全策への科学的貢献をテーマとしてきた。

トキに関しては、環境省の野生生物専門員としての在職中から現在に至るまで約 10 年にわたって佐渡島における野生復帰事業に携わり、放鳥個体群の科学的評価に基づいて保全施策を推進してきた。特に、学術面では、育成方法と繁殖行動の関連を分析した研究、統合個体群モデルによる復帰評価手法の開発、さらには野生復帰による地域経済波及効果などを発表してきた。これらの成果は、私自身が保護増殖事業の計画管理やモニタリングの設計、科学的効果検証、地域との合意形成まで、多様な実務に反映してきた。そして、多様な関係者とともに科学的評価に基づく順応的管理を推進することで、トキの野生復帰は成功した。

アカモズについては、2022 年より保護増殖プロジェクトを組織し、長野県を中心とした生息域内外の統合的保全を推進している。この取り組みでは、行政・研究機関・地域住民・動物園など多様なステークホルダーを調整し、保全体制を構築するだけでなく、科学者自らが中心となって保全事業を実行している点に特色がある。個体数が急減するアカモズに対して、繁殖成功率・生存率等を組み込んだ評価を進めるとともに、それらの研究成果をもとに複数の保全計画を執筆し、補助金・交付金等を獲得し、具体的な保全策を開発することで、国や自治体を巻き込んだ保全体制を構築した。とくに 2023 年には、豊橋総合動植物公園との連携により、世界初となるアカモズの人工孵卵・育雛に成功し、将来的には野生復帰を視野に入れている。

このような保全事業を推進するためには、単なる「組織間の連携」ではなく、「関係者が組織の垣根を越えて、一体となって保全を進める協働」が必要である。そこで求められる成果は「優れた論文を書けたか」ではなく、「実際に対象種の個体数を回復させられたのか」、「実社会を変えられたのか」である。また、保全活動を持続可能なものとするためには、学校教育や社会教育を通じて活動の担い手を育成することも重要な使命である。このため、科学者には、科学・社会・教育に関する活動を一体化して保全を推進するための架け橋としての役割が求められる。今後も、保全の現場に立脚した科学的知見を磨き上げ、社会に根ざした実践へとつなげることで、「鳥類学」という学問が未来の自然と人との共生に貢献できることを示していきたい。

発表要旨 Abstracts

口頭発表要旨 Oral presentations

A1

インドネシアの越冬地におけるハチクマの環境選択と気候変動の影響

Syartinilia Wijaya・Aryo Adhi Condro (ボゴール農科大)、○樋口広芳 (慶應大)

越冬地の空間分布を理解することは、インドネシアで越冬するハチクマのような渡り性タカ類を保全する上できわめて重要である。衛星追跡データによって、ハチクマは主にボルネオ島、とくに南カリマンタンで越冬していることが明らかになった。この地域の越冬地は「中核地域」と「辺縁地域」に分類される。上昇気流や特定の地形がかかわる中核地域はボルネオ島の 3.7%を占め、一方、辺縁地域は 20.7%を占めていた。西ジャワでは、ロジスティック回帰分析と GIS モデリングにより、地域の 8.1%が潜在的越冬地として特定されたが、その多くは保護区の外に位置していた。これらの生息地は、傾斜、標高、森林などの土地被覆の種類によって特徴づけられる。生息環境の破壊や変質に加えて、地球規模の気候変動はさらなる脅威となっており、モデル予測によれば、2050 年および 2100 年までにハチクマの越冬地および繁殖地の分布域は大幅に縮小し、渡り距離の延長や生息地の断片化が進行する可能性がある。本研究の結果は、対象地域での生息地再生の緊急性と新たな保全区域の指定の必要性を強調している。

~~~~~

## A2

## サシバは同じ繁殖地と越冬地を利用するのか？

○鳥飼久裕(奄美野鳥の会)・東淳樹(岩手大)・井上剛彦(ARRCN)・遠藤孝一(WBSJ)・出島誠一(NACS-J)・内藤アンネグレート素(ARRCN)・葉山政治(WBSJ)・藤井幹(WSPB)・松永聡美(WSPB)・山崎敦子(ARRCN)・山崎匠(ARRCN)・与名正三(奄美の自然を考える会)・和田のどか(ARRCN)・山崎亨(ARRCN)

2024 年 2～3 月、奄美大島北部で越冬するサシバ 11 羽に DRUID 製の GPS タグを装着して追跡したところ、全個体が本州に渡ってその多くが繁殖を行ったと考えられた。そのうち 9 羽は現在でも追跡ができています。また、2025 年 2～3 月には奄美大島南部で越冬するサシバ 11 羽に GPS タグを装着して追跡した。やはり全個体が本州に渡ったことが確認された。渡り鳥は一般的に繁殖地、越冬地とも同じ場所を利用することが多いとされる。今回 9 羽のサシバについては継続的に追跡できたため、春季の移動ルートと秋季の移動ルートの違い、越冬地選択の厳密性、繁殖地選択の流動性、渡りの開始時期や移動期間の個体差など、多くの情報を得ることができた。今回はそれらの情報を整理し、奄美大島で越冬するサシバの渡りについて、これまでわかってきたことをトピックスとして紹介する。

~~~~~

A3

北海道で繁殖するヨタカの渡りルート

○山浦悠一(森林総研)・雲野明(道総研林試)・河村和洋(森林総研)・先崎理之(北大)・佐藤重穂(森林総研)・大谷達也(森林総研)・Greg Conway(BTO)

ヨタカは草地や伐採跡地、幼齢林で繁殖し、飛翔性の昆虫を主食とする渡り鳥である。日本で本種は 1970 年代～1990 年代にかけて激減したと考えられ、環境省のレッドリストでは準絶滅危惧種に指定されているが、その渡りルートや越冬地は明らかにされていない。

私たちは 2024 年の繁殖期に、道央の幼齢人工林でヨタカのオス 3 個体を捕獲し、衛星発信型の GPS ロガー(Lotek 社製の PinPoint Argos75 日本版)を装着した。装着には leg loop ハーネスを用い、ロガーの総重量は体重の 3.8-4.6%(約 4.0 g)であった。測位は 8 月 1 日から 11 月 30 日は 5 日おきに集中して行なった。

その結果、測位の欠損はあったものの、3 個体は 9 月末～10 月中旬に繁殖地を発ち、南西諸島を経由してボルネオの沿岸低地に散在する越冬地に 11 月末～12 月中旬に到着した。越冬地の行動圏にはプランテーションが一部含まれていた。帰路はインドシナ半島～朝鮮半島を経由し、環状の渡りルートが示された。また、越冬期の行動圏は繁殖期よりも小さかった。

～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ .

A4

ケリの親子・兄弟、およびペアの GPS 追跡から見てきたこと

○協坂英弥(関西ケリ研究会)・協坂啓子(関西ケリ研究会)

ケリの育雛期において、幼鳥の飛翔後、家族群の追跡は難しく行動の詳細は不明である。我々は、繁殖期のケリ家族群の行動を明らかにするため、幼鳥の自立過程における親子・兄弟の行動、および繁殖後期のペアの行動を GPS 追跡にて調査した。2025 年の繁殖期、京都府の巨椋池干拓地の農地にて、本種の親子(親鳥 1 羽・幼鳥 2 羽)2 組、およびペア(成鳥 2 羽) 1 組に GPS を装着した。【親子・兄弟】2 組とも、ふ化後 2 か月以上家族と共に行動。その後、家族 a:親は巣近傍に滞在。幼鳥 1 羽は 82 日齢、もう 1 羽は 84 日齢で出生地を去り、かつ別々に行動。兄弟は巣から 2km 強の同地点に、別日に滞在(7/1 現在)。家族 b:親は巣より 2km 弱の地点へ移動し滞在。幼鳥 1 羽は 76 日齢で出生地から去り、79 日齢まで親の滞在地で過ごした後移動(7/7 現在)。【ペア】抱卵失敗後も 2 羽は共に行動(7/8 現在)。以上より、親子・兄弟が別行動をとるのはリスク分散、ペアが共に行動するのは翌年繁殖に向けた戦略だと考えられた。発表では、親子・兄弟の移動後の滞在場所より、幼鳥自立後の家族関係に言及する。

～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ .

A5

続・「2 羽どまり」の謎:九州で越冬なわばりを共有するノスリ複数組の遠隔追跡

○中原亨(北九博)・伊関文隆(希少生物研)・吉岡俊朗(おおせっからんど)・長井和哉(岩手大)・雀ヶ野孝(長崎大)・大槻恒介(長崎大)・中山文仁(自然研)・山口典之(長崎大)

越冬期の同種個体間の関係は、その後の生活史イベントにおける社会関係にも影響を与えうる。渡り性猛禽類のノスリは、繁殖地ではつがいになわばりを共有し子育てを行うが、九州で越冬する個体は、ふつつ単独でなわばりを形成し、他個体の侵入に対して排他的である。しかし断片的な観察から、越冬する 2 個体が、敵対せずに樹木や電柱に隣り合ってとまる行動(2 羽どまり)を時折示すことが判明した。この詳細を明らかにするために、本研究では冬期の九州で 2 羽どまりをする 4 組 8 個体のノスリを捕獲し、同時遠隔追跡を行った。その結果、これらは全て雌雄の組み合わせで、越冬なわばりを共有することが確認された。また、少なくとも 3 組は複数年にわたって同じ場所で確認された。さらに同時刻位置の解析の結果、日中の同期した移動や、夜間の峙共有も確認された。しかし、渡り開始後の継続追跡により、4 組全てにおいて雌雄の渡り先(繁殖地)が異なることが判明した。これらの結果は、越冬地で 2 羽どまりを行うノスリは複数年にわたり親密な関係にあるものの、社会的つが

いではないことを示唆するものである。

A6

GPS 発信機によるイヌワシの追跡結果

○中島拓也(ラプタージャパン) 阿部學(ラプタージャパン) 橋本哉子(ラプタージャパン)

2018 年9月末に甲信越地方において、イヌワシ(*Aquila chrysaetos japonica*)成鳥 1 個体を捕獲し、GPS 発信機(Microwave Telemetry 社製 80g)をバックパック方式にて装着し、追跡した。データ取得期間は 2018 年 9 月から 2020 年 6 月であるが、欠損期間が長く、2018 年 12 月から 2020 年 3 月となっている。そのため、データ取得数は 150 点と少なく、行動圏や利用環境を解明するには心もとない。よって、今後の参考として、基礎情報を報告する。

行動圏は 2018 年 9 月から 2020 年 6 月までの全期間で 112?、2018 年(9 月~11 月)で 90?、2020 年(4 月~6 月)で 5?であった。

今回位置情報が取得できた地点の標高は最高地点で約 2050m、最低地点で約 560m付近であった。また、所見ではあるが各山々の峰付近に位置情報が確認され、河川など低標高環境ではほとんど確認されなかった。

捕獲は一時中断しているが、再開し、より一層高精度のデータを取得する必要がある。

A7

スワンププロジェクトー鳥類の渡り追跡公開と市民科学

○嶋田哲郎(伊豆沼財団)・小西敢(クツチャロ湖水鳥観察館)・李国政・史国?(ドルイドテクノロジー)・樋口広芳(慶應大)

スワンププロジェクトが 2023 年 12 月にスタートした。これはオオハクチョウとコハクチョウにカメラ付き GPS ロガー「スワンアイズ」を装着し、渡りを追跡するとともに位置情報や画像を公開することで、市民によるハクチョウ見守り体制を構築する国際共同プロジェクトである。これまでハクチョウ類 39 個体にスワンアイズを装着し、すべての個体に愛称を付けた。位置情報と画像が定期的に取得され、1 日に 3 回、それらの情報を取得することができる。タイムラグがあるものの、ほぼリアルタイムにハクチョウのいた場所を知ることができ、ハクチョウが見た景色を目にすることができる。位置情報と画像は多言語(日本語、中国語、英語など)のホームページで公開されており、だれでもアクセスできる。また、スマホのアプリも準備されており、スマホによる道案内でハクチョウのいた場所までたどり着くことができる。観察記録は X(旧ツイッター)に投稿することで、記録が蓄積されていく仕組みになっている。ここでは、このプロジェクトで得られた情報をもとに、ハクチョウ類の 1 年の暮らしを紹介する。

A8

クロツラヘラサギの行動調査で見えた小型ドローンの有効性と注意点

小久保守晃(葛西のクロツラ)、北村亘(葛西のクロツラ、東京都市大)、○木村成美(NPO birth)、上原文弥(葛西のクロツラ)

葛西海浜公園(東京都江戸川区)で越冬するクロツラヘラサギの日の出前の行動調査に小型ドローン

を使用した。調査は 2025 年 2 月から 4 月にかけて合計 5 回行った。葛西海浜公園「東なぎさ」に滞在するクロツラヘラサギに対してドローンを使用した調査は初めての試みのため、使用ドローンの操縦性やカメラ性能の確認に始まり、現場の地形や気象状況、調査時に滞在している野鳥の種類などを事前に調べた。クロツラヘラサギの行動調査ではドローンとの安全な距離を見極めることから始めた。その結果、クロツラヘラサギが日の出前に行動する貴重な空撮映像を得ることができた。その他、ハジロカイツブリの集団採餌や、スズガモ、カンムリカイツブリ、カモメ類の映像も同時に得られた。また、鳥類種によっては小型ドローンをさほど脅威と感じておらず、予想外に近づいてくることがあることも判明した。このことから、ドローン調査を行う上で野鳥との衝突回避が重要であることが示された。本大会では、クロツラヘラサギを始め野鳥調査でのドローン活用の有効性と注意点を、調査で得られた映像を使用し発表する。

A9

Ubilink Satellite System for Biotracking
LI GUOZHENG (Druid Technology Co., Ltd.)

With rapid advances in satellite technology, the Ubilink system offers a promising new solution for wildlife tracking. Featuring more satellites, better coverage, Intelink compatibility, and lower costs, it helps overcome limits of cellular coverage and traditional satellite tags. This talk introduces Ubilink and its integration with Intelink to expand ecological research possibilities.

A10

気候条件の異なる移住先におけるメジロの繁殖生理学的応答

○堀江明香(大阪自然史博)・平井仁智(岡山理大・理)・山内悦子(沖縄こどもの国)・金城輝雄(沖縄こどもの国、現:RWRCC)・吉見裕子(沖縄こどもの国)・築場未来(沖縄こどもの国)・中村智映(沖縄こどもの国)・金尾由恵(沖縄こどもの国)・林花奈子(池田動物園)・花島里奈(池田動物園)・西村慶太(天王寺動物園)・尾曾芳之(天王寺動物園)・小川由華(天王寺動物園)・高見一利(天王寺動物園、現:豊橋総合動植物公園)・武山智博(岡山理大・生物地球)・清水慶子(岡山理大・理)

環境の異なる「新天地」に移住した鳥類のうち、個体群を確立できるものはごく一部であり、その定着成否に係る要因の解明は、餌資源や捕食など、生態学的視点から行われてきた。しかし、異なる気候条件下でそもそも繁殖可能なのか、という繁殖生理学的なメカニズムへの理解は不足している。鳥類は季節?殖動物であり、日長や気温などの外部刺激によって繁殖が制御される。本研究では、日本全国に分布するメジロを、温暖条件(沖縄)と寒冷条件(岡山・大阪)で入替飼育することで気候条件の異なる地域への移住を再現し、雄の糞中テストステロン濃度の上昇時期を指標として繁殖開始時期を比較した。捕獲地でそのまま飼育したコントロール群のテストステロン濃度上昇時期は野外での繁殖時期とよく合致していたが、異なる気候条件に移送して飼育した移住群では、元の生息地ではなく、移住先の繁殖期と類似した時期にテストステロン濃度の上昇がみられた。メジロは気候条件に応じて性ホルモンの分泌時期を可塑的に変化させ、気候の異なる移住先でも適正な時期に繁殖活動を行えると考えられた。

A11

換羽、生活史、生態、発色メカニズムから、ルリビタキの発色を考える

○森本元(山階鳥研)

本発表ではルリビタキがどのような発色発現の鳥種なのか、これまでの研究知見を総合して議論したい。鳥類の発色には、主にカロテノイド色素、メラニン色素、構造色による発色がある。前者二つの色素色と異なり、構造色は色素での光の吸収によらない発色様式である。構造色発色には複数のメカニズムが存在し、ルリビタキはスポンジ層とよばれる羽毛内部位を主な発色起源としている。羽毛内部だけでなく、より大きなスケールでも本種は特筆する特徴をもっている。それは遅延羽色成熟(Delayed Plumage Maturation、略称 DPM)である。これは、成鳥羽といった最終的な外見(決定羽)の発現が、年齢において遅延する現象を指し、ルリビタキはその代表例といえる。本種のオスは、メスにそっくりなオリーブ褐色の背面が、後年、構造色の青色へと劇的に変わる。本発表では、ルリビタキの換羽やその生態も考慮しながら、生活史においてどのような色発現を行っている鳥種なのかを、発色メカニズムの視点を交えて検討する。

A12

トカラ列島における鳥類群集構造

安藤温子(国環研)、飯島大智(筑波大)、井上遠(IBRG)、佐藤望(IBRG)

大陸と一度も陸続きにならなかったことがない海洋島では、その独自の鳥類相や群集構造について島単位での調査が多く行われてきた。その一方で、島内における鳥類各種の分布を調べた研究は乏しい。島内の分布を詳細に調べることは、島嶼生鳥類の分布特性や生息地選択を明らかにし、科学的根拠に基づく保全を行う上で重要な課題である。本研究は、2023 年と 2024 年の4月から6月にかけてトカラ列島の7島(口之島、中之島、諏訪之瀬島、平島、悪石島、小宝島、宝島)に約1キロメートルの調査路を合計 81 箇所設定し、ラインセンサスを実施した。その結果、82 種 5540 個体の鳥類が記録された。島嶼のみで繁殖する種であるアカコッコは中之島、諏訪之瀬島、悪石島で記録され、特に諏訪之瀬島で記録密度が高かった。イイジマムシクイは口之島、中之島、諏訪之瀬島、悪石島で記録され、中之島と諏訪之瀬島で記録密度が高かった。アカヒゲは小宝島と宝島を除く5島において高密度で記録された。本研究は、基礎的な知見が乏しいトカラ列島において、島内における鳥類各種の繁殖分布を解明した。

A13

アカモズ人工育雛における日齢別栄養要求の推定と給餌プロトコルの検討

○行本帆花¹・間宮ふうか¹・林康太朗¹・長崎汐音¹・東山咲季¹・青木楓太¹・山口達大¹・石尾雪乃²・井上康子²・瀧本嵐丸²・八代梓²・高御堂裕紀²・木谷良平²・高見一利²・岡久雄二¹

(1 人間環境大、2 豊橋総合動植物公園)

アカモズ *Lanius cristatus superciliosus* は、国内希少野生動植物種に指定される絶滅危惧鳥類である。野生下での急激な個体数減少を受け、豊橋総合動植物公園を中心に緊急的な生息域外保全を展開しており、その一環として、放棄卵の保護・孵卵および人工育雛を行っている。アカモズの人工育雛は世界初の試みであり、保温管理や餌内容、給餌量など多角的な育成プロトコルの確立が急務となっていた。本研究では、ヒナに与えた餌の栄養分析、給餌に伴う体重変化、さらに野生下におけるヒナの日齢別成長曲線(Takagi 2002)を統合し、日齢ごとの栄養要求を推定した。その結果に基づ

き、飼育下において成長を最適化する給餌プロトコルの確立を試みた。本研究は、実験的取り組みが困難である希少鳥類の飼育において、野生個体の情報を統合するという新たな手法を提案するものであり、野外鳥類学と動物園保全学との連携の重要性を示すものである。

A14

アカモズの放棄卵の救助と人工孵卵技術の確立に向けた試み

行本帆花(人環大)・〇神谷頼杜(人環大)・間宮ふうか(人環大)・赤松あかり(長野アカモズ保全研)・原星一(長野アカモズ保全研)・藤田知弥(信大)・松山陽子(長野アカモズ保全研)・米山富和(長野アカモズ保全研)・松宮裕秋(長野アカモズ保全研)・高御堂裕紀(豊橋総合動植物公園)・八代梓(豊橋総合動植物公園)・瀧本嵐丸(豊橋総合動植物公園)・木谷良平(豊橋総合動植物公園)・高見一利(豊橋総合動植物公園)・岡久雄二(人環大)

アカモズ *Lanius cristatus superciliosus* は国内希少野生動植物種に指定される希少鳥類である。本州個体群は保全措置がなければ 2026 年にも絶滅すると推定されている。アカモズは人間生活のそばで繁殖する鳥類であり、カッコウによる托卵、捕食者による攪乱、農作業等に起因する抱卵放棄が毎年発生する。従来、野生下で放棄された卵は繁殖失敗として扱われ、救助は試みられてこなかったが、本種の急速な個体数減少を踏まえると緊急的な介入主義的保全が必要と判断される。このため、我々は放棄卵を回収し人工孵卵・育成して放鳥するヘッドスタートの技術的検討を進めている。2023 年より長野県内各地で救助された放棄卵を人工孵卵し育成する技術試験を行った。この結果、2023 年と 2024 年には2年連続で計 22 個体のアカモズの人工育成に成功した。本研究は本種初の人工孵卵・育成事例として、とくに卵の救助体制、移送技術、人工孵卵技術について取りまとめ、保全技術の可能性と課題を明らかにするものである。

A15

アカモズ野生個体群の補強に向けた生餌給餌訓練:採餌能力向上の試み

〇間宮ふうか¹・小野優苗¹・木谷良平²・高御堂裕紀²・八代梓²・中島克之²・石尾雪乃²・井上康子²・瀧本嵐丸²・後藤巧真²・高見一利²・岡久雄二¹ (1)人間環境大学、2)豊橋総合動植物公園)

アカモズは国内希少野生動植物種に指定され、多様な関係者により保全が進められている。保全活動の一環として、2023 年より捕食や破卵によって野生下で放棄されたアカモズの卵および、親鳥が死亡したことにより衰弱したヒナを保護・育成し、野生下へ戻す「ヘッドスタート」や飼育下繁殖により誕生した個体を用いた「補強」も計画されている。一般に、人工育雛した個体を放鳥する際には、放鳥前訓練によって鳥類の採餌能力の向上を図ることが必要とされる。本研究では、2023 年から 2025 年に飼育下で誕生した個体に対し、野生個体群の主な餌である飛翔性昆虫や地表徘徊性昆虫を給餌する実験を反復し、採餌成功率やアタック開始から獲物を摂取するまでの処理時間の変化を詳細に測定した。こうした行動観察から、アカモズの放鳥のために必要な採餌訓練の期間および手法を検討するとともに、訓練前後の行動を比較することで飼育下における採食エンリッチメントに関する提言を行った。本研究は鳥類の保全的移植において科学的評価が不足している採餌訓練の効果を詳細に検討した重要な報告である。

A16

再導入コウノトリのなわばり防衛行動の性差

○白井あやか(兵庫県大)・出口智広(兵庫県大・コウノトリ郷公園)

繁殖期に排他的ななわばりを持つ鳥類の一部では、他個体のなわばり侵入に対し、つがいの雌雄が共に防衛行動をとる。雌雄による防衛は概して適応的と判断されるが、一夫一妻制の場合、性別による防衛への寄与の程度は、種ごとの性的対立や協力の程度によって大きく異なり、その理解には多くの事例が求められる。本研究では、繁殖期に同種他個体からなわばりを防衛する再導入コウノトリの、複数の防衛行動(直接的な攻撃、間接的な攻撃(1羽または雌雄で発するクラッタリング音))について、行動間の関係性と、ペア間とペア内で行動や強度に違いをもたらす要因を、多変量解析を用いて評価する。2023年から2024年にかけて、兵庫県豊岡市内で繁殖した14つがいを対象に、なわばりへの侵入個体と、それに対するつがいの防衛行動を記録した。観察中には、複数の営巣地にて、なわばり周辺に定住する雌の独身個体が繰り返し侵入する様子が認められたことから、解析では、雌の独身個体の定住の有無を加味した。本大会では、統計解析結果と、なわばり侵入後の他個体の行動の傾向を報告する。

～

A17

再導入コウノトリ、配偶相手の決め手は何？

○出口智広(兵庫県大・兵庫県立コウノトリの郷公園)・内藤和明(兵庫県大・兵庫県立コウノトリの郷公園)・大迫義人(兵庫県大・兵庫県立コウノトリの郷公園)

長寿で、mate fidelity(配偶相手への執着性)が高い動物の配偶者選択は、古くから注目を集めてきた興味深いテーマで、対象個体群の長期的存続の重要な鍵でもある。日本で 2005 年から再導入が進められてきたコウノトリは、長寿(50%生存期間:約 10 年)で、mate fidelity が高い(配偶継続率:約 90%/年)特徴を持つ。他方、成鳥の約半数は繁殖を行っておらず、彼らの配偶者選択を理解することは、再導入個体群の長期的管理を円滑に進める上で欠かせない。また、本個体群の幼鳥は全国各地に広く分散する一方、繁殖地の大半は出生地もしくは放鳥地の近く(数 10km 範囲内)が選ばれている。そこで本研究では、2023 年までに繁殖を行った計 96 個体の配偶者選択の要因として、mate fidelity の高い種で多く調べられてきた雌雄における年齢差と血縁関係に加え、出生地もしくは放鳥地間の距離について検証を行った。本大会ではこれらの検証結果を報告する。

～

A18

再導入トキのコロニー崩壊のメカニズムについて

永田尚志(新潟大)

佐渡におけるトキの再導入事業においてトキの生息個体数は 2024 年末時点で推定 550 羽を越えるに至った。しかし、密度効果により繁殖成績が 2019 年以降低下してきている。2022 年度大会で報告したように営巣コロニーの崩壊が生じることが密度効果の要因の一つである。2022 年大会で報告したように、種内の個体干渉による繁殖開始の遅れと捕食者の誘因による捕食圧がこの原因と推定されている。これまで、いったん崩壊したコロニーでは繁殖が成功することなくコロニー参加ペアが減少することでコロニーの終焉を迎えていた。しかし、コロニー崩壊した営巣林において環境省による捕食者対策により繁殖成功に導くことでコロニー参加個体数が回復する事例が得られている。種内干渉頻度の再解析と繁殖成功に対するコロニー参加ペアの反応から、トキの繁殖コロニーの成長と

コロニー崩壊という現象についての考察を試みる。

A19

トキ飼育下個体群の遺伝的多様性の近年における推移の評価

○角野歩夏¹・南澤夏奈香²・石井森昭¹・山田宜永¹・杉山稔恵¹・谷口幸雄³・金子良則⁴・祝前博明⁵
(¹新潟大院自然科学, ²新潟大農, ³京大院農, ⁴佐渡トキプラザ, ⁵新潟大佐渡自然セ)

トキの飼育下個体群では、近交回避、遺伝的適応の最小化および遺伝的多様性の維持・増加を図りつつ繁殖を進めることが重要である。演者らは先に、国内飼育下個体群における 2021 年時点での始祖個体の遺伝子の消失確率や消失危険性、遺伝的多様性の評価の結果を報告した。今回は、1999 年から 2023 年までの血統情報を用い、特に 2023 年から遡った直近の数年間について、より詳細な評価を実施した。始祖個体は、中国から譲り受けた 7 羽である。分析は、主にジーン・ドロップング・シミュレーションによった。各始祖個体の 1 年ごとの遺伝的寄与率には変動の大小がみられたが、各年次の時点でのそれぞれの始祖個体の遺伝子の頻度の確率分布は、時間の経過に伴い全般に裾野がより広がる傾向にあった。始祖個体の遺伝子の消失確率および消失危険性には総じて望ましい変化の様相が認められたが、個体差がみられた。当該期間における遺伝的多様性は微増していた。今後とくに、最も新しく 20218 年に導入された始祖個体の遺伝的寄与率のさらなる向上が望まれる。

A20

サンジャクの捕獲事例と外来種管理

○天野一葉(琵琶博)

サンジャクは中国からヒマラヤ、インドシナ半島が原産地のカラス科の鳥類である。日本では 2000 年以降、四国西部の森林や農耕地に侵入・定着している。本種は主に肉食の雑食性で、昆虫などの小動物、果物、鳥の卵やひななどを捕食する。このため在来の小型鳥類や希少種へ影響を与えることが危惧されている。また農業被害の可能性も指摘されている。愛媛県では 2021 年にサンジャクを侵略的外来生物に指定し、高知県でも「高知県で注意すべき外来種」のうち「防除対策外来種」に位置づけている。しかし、サンジャクは警戒心が強く、生態学的な情報の蓄積が少なく、具体的な対策は進んでいない。サンジャクの分布域は現在も広がり続けており、将来的には九州東部や中国地方南部などにも侵入する可能性がある。本研究では、高知県でのサンジャクの混獲事例について聞き取り調査を行い、箱わなを設置した環境、捕獲された季節、使用した餌の種類など、効果的に捕獲するための条件を検討した。これらの結果をもとにサンジャクの管理について考察する。

A21

福井県におけるソウシチョウの侵入・定着プロセス

○出口翔大(福井市自然史博)、三原学(鳥類標識協会)、吉田一朗(鳥類標識協会)、佐藤文男(山階鳥研)、澤祐介(山階鳥研)

特定外来生物に指定されているソウシチョウの侵入・定着プロセスを福井県における観察および標識記録から検証した。

福井県では 2006 年秋季(10 月)に初めて記録され(成鳥の標識)、その後、2013 年秋季(11 月)

の雄幼鳥が標識され、しばらく県内での記録はなかったが、観察では 2016 年から毎年秋季に記録され、2020 年からは秋季の記録に加え繁殖期(5 月～8 月)の記録が増加した。標識では 2017 年から 2021 年までほぼ毎年秋季に記録されたが、繁殖期である 2022 年 5 月と 2024 年 7 月にはそれぞれ一部に抱卵斑の認められる雌雄成鳥と周辺で巣立ったと考えられる幼鳥が記録された。これらのことから、福井県における本種の本格的な侵入と定着は 2017 年頃から起こったと推定される。越冬期における観察・標識記録が最初に得られ、その後、繁殖期にも観察・標識されるようになった。他地域でも同様の傾向を示すことから、越冬期に行動範囲を拡大し、後に繁殖で定着する行動が、本種の分布拡大のプロセスであると考えられる。

A22

東アジアに再導入されたシジュウカラガンの千島列島における繁殖確認と夏季の行動圏
 ○澤祐介(山階)・池内俊雄(雁里親の会)・田村智恵子(雁里親の会)・仲村昇(山階)・Hansoo Lee (KoEco)・近藤正(秋田県大)・佐場野裕(雁保護する会)・呉地正行(雁保護する会)

シジュウカラガンは 20 世紀前半、繁殖地の千島列島でのキツネ養殖事業により、日本に渡る個体群が消滅した。東アジア個体群再導入のため、日本雁を保護する会と関連団体によりシジュウカラガン羽数回復計画が実施され、1995 年～2010 年に千島列島エカルマ島で、人工飼育個体 551 羽が放鳥された。2000 年以降、日本での越冬個体数は増加し、2010 年に 100 羽、2014 年に 1,000 羽を超え、2023 年に 12,550 羽まで回復した。一方、エカルマ島や周辺の島では、繁殖期の現地調査は実施されておらず、繁殖状況や渡り経路は不明であった。特に千島列島の大部分が火山島であるため、種の保存のため繁殖地を分散することは重要であり、夏季のシジュウカラガンの行動や利用場所についての研究が急務である。本研究では日本で越冬するシジュウカラガンを発信器で追跡し、繁殖地とその周辺での行動、渡り経路を明らかにした。その結果、エカルマ島での確実な営巣記録が得られ、繁殖後から秋の渡り開始前まで千島列島北部からカムチャツカ半島南部の地域を利用していることが明らかとなった。

A23

ヤンバルクイナの野生復帰試験の評価

○尾崎清明・森本元(山階鳥研)、渡久地豊(工房リュウキュウロビン)、中谷裕美子・玉那覇彰子・向真一郎・金城道男・長嶺隆(どうぶつたちの病院沖縄)

ヤンバルクイナは、外来種マングースやネコ、イヌなどの影響で個体数と分布域を急速に減らし、絶滅が危惧された。そのため、環境省などはヤンバルクイナの保護増殖事業を策定し、生息状況の把握、生息環境の維持改善、外来種対策などを図っている。また野生個体数の減少に備え、人工飼育下での繁殖技術と野生復帰技術の確立を目指して、2014 年より飼育個体を数ヶ所に試験放鳥してきた。2024 年 12 月までに 97 羽の飼育個体と、同時期に周辺の野生 61 個体に小型電波発信機を装着して放鳥後の経過を追跡、比較した。試験の当初は、試験放鳥個体の初期生存率は野生個体より低かった。その後、放鳥時の年齢を変えたり、放鳥前に餌や自然環境への順化／捕食者(カラス・ハブ)への忌避訓練を実施したところ、生存率が向上した。様々なパラメータを解析したところ、放鳥初期(50 日以内)では順化／忌避訓練の有無が生存率に影響し、放鳥後 300 日の生存率には、放鳥時の年齢が影響することが判明した。これら結果は野生復帰技術の向上に役立つものと思われる。

A24

沖縄県北部におけるヤンバルクイナの分布規定要因の特定

○原英里子(帯広畜産大)・赤坂卓美(帯広畜産大)

外来種の導入や土地利用改変等の人間活動による島の生物多様性の損失は、急激、かつ、深刻であり、全球スケールの生物多様性維持に深刻な影響を与える。これまでに、多くの島で保全対策が実施されてきているが、保全活動には多くの不確実性が存在する。そのため、効率的な保全のためには順応的管理が欠かせない。この際、特に対象種が再分散過程にある状況では、分散と定着といった行動パターンごとに対象種の分布規定要因を評価する必要がある。そこで本研究は、島の生物多様性の保全に資する知見を提供することを目的に、ヤンバルクイナの定着と分散に関係する要因を、フィリマングースの駆除個体数と森林面積の長期データを基に動的分布モデルを用いて明らかにした。本種の定着には、フィリマングースの個体数指標(負)および森林面積(正)と関係性があつたのに対し、本種の分散には、フィリマングースの個体数指標(負)のみと関係性があつた。本研究は、効率的な保全のためには、対象種の分布変化について行動パターンを考慮しながら注意深く検討し直すことの重要性を示唆する。

A25

ヤンバルクイナの交通事故要因分析とロードキルリスクマップの作成

○杉本嵩臣(いであ(株))・佐藤泰夫(いであ(株))

沖縄県北部のやんばる地域では、ヤンバルクイナ等の絶滅危惧種の交通事故死(ロードキル)が多発している。演者らは効果的な交通事故防止策を検討するため、県道の事故多発区間での交通速度や道路状況の調査を行い、交通事故発生要因(交通速度、カーブ角度、道路舗装の有無等)の解析を行った。

その結果、ベタ・ゼブラ式舗装が施された区間では、ヤンバルクイナの交通事故発生割合が低く、これが効果的な事故防止策になる可能性が示唆された。さらに、県道では法定速度を大幅に超過する走行車両が確認されるなど、交通状況の実態も明らかとなった。

また、MaxEnt を用いて、交通事故データ、生息適地モデル、交通速度、カーブ角度をもとにロードキルリスクマップを作成した。このマップにより、交通事故の高リスク区間の特定や、既存の交通事故防止区間の見直しへの活用が期待され、ロードキル対策に役立つ新たな基礎情報を提供できると考えられる。

なお、本内容は沖縄県環境部自然保護課及び環境省九州地方環境事務所 沖縄奄美自然環境事務所からの受託で実施した業務成果である。

A26

沖縄島固有種ノグチゲラ個体群の現状と保全の展望: マングース対策の重要性について

○小高信彦(森林総研)・渡久地豊(工房リュウキュウロビン)・長井隆(沖縄環境科学セ), 中田勝士(南西環境研)・新里和野(島嶼生物研)・宮平良成・伊藤麻衣(沖縄県)・有働竜也・庄嶋菜月(環境省)

ノグチゲラは樹上生活に適応したアカゲラ属のキツツキであるが、オスは地上を主要な採餌場所としている。ノグチゲラの生息地である沖縄島北部には、無飛翔性のヤンバルクイナが生息するように、

従来、地上性の捕食者となる肉食哺乳類が生息しない、安全な採餌環境の下でノグチゲラのオスの地上採餌は進化したと考えられる。島嶼環境で独自の進化を遂げた固有種は外来種の影響で絶滅しやすい。2021年に世界自然遺産に登録された沖縄島北部では、近年、伐採面積の減少による森林の回復やマングース防除事業の進展等により、ノグチゲラの分布域は回復傾向にある。異なるタイプの森林の営巣密度から推定した繁殖個体数では、遺産地域と隣接する名護市内までマングースを根絶した場合、安定して1000羽を超え、本種の絶滅リスクは大幅に低減すると推定されている。2024年の奄美大島でのマングース根絶宣言を受け、沖縄島北部でのマングース根絶を確実にするとともに、ノグチゲラの保全を考える上で、沖縄島全域からのマングース根絶を視野に入れた、今後の課題の抽出、解決に向けた研究を進める時期に来ている。

A27

24/25年シーズンの出水平野における高病原性鳥インフルエンザウイルス流行状況の解明

○江寄真南(鹿大)・奥谷公亮(鹿大)・所崎香織(鹿児島県ツル保護会)・原口優子(鹿児島県ツル保護会)・堀昌伸(鹿児島県ツル保護会)・小澤真(鹿大)

日本最大のツル類の越冬地である鹿児島県出水平野では、高病原性鳥インフルエンザ(HPAI)のサーベイランスが過去10シーズン以上にわたり実施されている。本研究では、環境中および野鳥から分離されたHPAIウイルスの遺伝学的解析により、2024/25年シーズンにおけるHPAI流行状況を解明した。

2024年11月から翌年2月にかけて毎週ツルのねぐらから水サンプルを採取し、鳥インフルエンザウイルスを分離した。さらに鹿児島県内で保護または回収された野鳥からHPAIウイルスを分離し、ねぐら分離株と併せて遺伝子解析および系統樹解析を行なった。

ねぐらの水からのHPAIウイルス検出は2024年11月にピークを迎えた後収束し、2025年1月に再び検出数が増加した。シーズンを通してツル類132羽を含む140羽の野鳥が回収され、過去2番目に多い67羽のHPAI感染が確認された。ねぐらおよび野鳥から分離されたHPAIウイルスは全てH5N1亜型であり、HA遺伝子の解析により2系統のウイルスが同時に流行していたことが明らかとなった。

A28

卵黄中抗体を用いた非侵襲的な鶏伝染性気管支炎ウイルス抗体モニタリング

○土井貴文(PPQC,大阪公大)・加藤宏光(PPQC, Triace,大阪公大、フィリピン大)・真瀬昌司(動衛研、大阪公大)・松林誠(大阪公大)

鶏伝染性気管支炎ウイルス(IBV)に対する卵黄中抗体価の測定は報告されているが、実用化には至っていない。本研究では従来のクロロホルムを用いた卵黄IgY抽出法を再検討した。クロロホルムを用いないPBSのみを用いた簡便な希釈法を供試したところ、従来法と強い相関が得られた。二黄卵を用いた市販のIB-ELISAの精度評価では、15対中9対で差が0.15未満であり、ELISAの信頼性が確認された。異なる週齢の11鶏群から採取した卵と血清のIB-ELISA抗体価の平均値は、各2.24と2.27で近似していた。80週齢鶏12羽を個体別に追跡した結果、卵黄と血清抗体価は類似した経時的変化を示した。以上より、卵黄抗体価は血清抗体価を良好に反映し、市販卵も利用可能であることから、本手法は動物福祉に配慮しつつ、農場への不要な立ち入りを最小限に抑えたものであり、大規模な免疫モニタリング手法としても有用であると考えられた。また、コマーシャル養鶏場の長期飼養鶏における血清中和抗体価とELISA抗体価の比較に関する報告は少ないことから、本

研究ではその比較も実施した。

A29

北海道西部における森林棲鳥類の住血原虫感染状況の解明

○原山法大・松井晋(東海大・院・生物)・佐藤雪太(岩手大)

野生動物にみられる感染症は、生存率や繁殖効率を低下させるなど個体の適応度に影響することが知られている。鳥類に感染する住血原虫には、*Plasmodium* 属（鳥マラリア原虫）、*Haemoproteus* 属、*Leucocytozoon* 属があり、それぞれカ（蚊）、シラミバエ・ヌカカおよびブユが媒介する。これらの住血原虫を媒介する吸血性昆虫（ベクター）は、気温や降雪量などの気象条件が異なる低地と高地では種構成が異なり、鳥類の住血原虫感染状況に影響していることが予想される。そこで本研究では、低地と亜高山帯の森林棲鳥類における住血原虫感染状況を比較することを目的とした。鳥類の捕獲調査は、2024 年および 2025 年の繁殖期に亜高山帯に位置する中山峠（北海道虻田郡喜茂別町）、2025 年の繁殖期に低地である森林総合研究所北海道支所羊ヶ丘実験林（札幌市豊平区）で実施した。住血原虫は捕獲個体から作製した血液塗抹を観察して検出を試みた。さらに宿主鳥類の種間や雌雄間で感染状況を比較し、感染リスクに影響する鳥類の行動習性についても考察した。

A30

国内の鳥類寄生性シラミバエにおける季節消長、吸血生態および原虫保有状況

○菅澤颯人(岩大、千葉中央博市民研究員)・尾崎煙雄(千葉中央博)・木村悟朗(イカリ消毒(株)、千葉中央博市民研究員)・関まどか(岩大)・佐藤雪太(岩大)

鳥類の住血原虫であるヘモプロテウス(*Haemoproteus*)属原虫は、ヌカカやシラミバエなど吸血性昆虫によって媒介され、国内では感染した飼育下鳥類の死亡例がある。しかし国内のシラミバエにおける原虫保有状況は全く不明で、季節消長や吸血対象鳥種などもごく一部の種類しか判っていない。そこで、鳥類寄生性シラミバエの発生が確認されている千葉県立中央博物館生態園で、シラミバエ類の捕集および PCR による住血原虫と吸血源動物の DNA 検出を試みた。2023 年 8 月から 2024 年 10 月末まで、園内で人に飛来してきた個体を捕集した。その結果、いずれもマツムラトリシラミバエ(*Ornithomya avicularia aobatonis*)の成虫 75 頭が捕集され、その季節消長は3峰性を示した。また、吸血個体 3 頭中 1 頭から、ヌカカ媒介性ヘモプロテウス原虫およびハシブトガラスの DNA が検出され、この個体は原虫感染陽性のハシブトガラスを吸血した可能性が示唆された。今回、関東のマツムラトリシラミバエの季節消長、原虫保有状況および吸血生態が初めて明らかになった。

A31

逃避行動の進化的トラップ:なぜ鳥は接近する車の前へ飛び出すのか？

○佐藤裕太(長大)・Takao Sasaki(Univ. of Rochester)・Travis L. DeVault(Univ. of Georgia)・河端雄毅(長大)

動物と車の衝突は世界的に深刻な問題となっている。一部の動物は車の接近に伴い、道路脇から飛び出す事例が報告されているが、その発生メカニズムや逃避経路はほとんど調べられてこなかった。

そこで本研究では、米国サウスカロライナ州の一般車の進入を制限した道路沿いに餌場 7 か所を設置し、調査を行った。20 日間、毎朝時速 45 km の車で走行し、餌に集まったハト(*Zenaidura macroura*)が逃げる様子を上方から撮影した。121 個体の逃避軌道の追跡を行ったところ、道路から遠い位置にいるハトは車と反対側へ、近い位置にいるハトは車の前へ飛び出すように逃げるということが明らかとなった。次に、この一見不可解な「飛び出し」行動についてハトの捕食者(タカ)の追跡を想定したエージェントベースモデルを作成し、説明を試みた。その結果、道路に近い場合は捕食者側つまりは車側へ逃避することで捕食者の旋回能力を上回ることができ、生存に有利となることが示唆された。これらの結果は、天敵に対し適応的な逃避戦略が車という新たな脅威には不適応となる「進化的トラップ」であることを示唆する。

～

A32

鳥類の河川橋梁の利用状況の把握に向けた現地調査

○金森泰都(早大)・佐藤靖彦(早大)

橋梁は文明社会に必要な人工構造物であり、日本には 70 万橋もの数が存在する。橋梁は、自然と文明社会の境界部分に存在するため鳥類とも密接な関係にある。しかし、橋梁を利用する人間と鳥類が干渉してしまう問題もあり、ネイチャーポジティブの観点からも、将来は、橋梁と鳥類の共生を考慮に入れた橋梁のデザインを指向すべきである。このような認識のもと、2024 年の 10 月から 2025 年の 1 月にかけて東京近郊の河川橋梁 111 橋の観察を実施し、橋梁にとまる鳥の数、鳥がとまっている橋梁の部位・部材を記録し橋梁の形式や使用材料にも着目して分析した。その結果、調査橋梁のうちの約 30%で鳥がとまっている様子が観察された。橋梁形式に着目すると、トラス形式の橋梁にとまっている鳥の数が最も多く、1 橋あたり 8.0 羽であった。このような調査結果をもとに、最も観察数が多かったハトを対象に、橋梁が架けられている環境や橋梁形式、用途、材料、形状などに分類し、ハトが橋梁をどのように利用しているかを理解するためのフローを試作した。

～

A33

大阪湾・阪南 2 区人工干潟で確認された鳥類・21 年の変遷

○風間美穂(きしわだ自然資料館)・中村進(きしわだ自然資料館)

阪南 2 区人工干潟は、大阪府岸和田市の沖合約 1km で行われている大阪湾阪南 2 区埋立事業の一環で造成された人工干潟(北干潟 1ha,南干潟 5.4ha)で、ここでは 2004 年 5 月から毎月 1 回、ラインセンサス法およびスポットセンサス法による鳥類調査を、大阪府都市整備推進センターの委託事業としてで継続して行っている。

本調査では 2004 年 5 月から 2025 年 3 月までの間に 30 科 93 種、2005 年 4 月から 2025 年 3 月までのべ 65,215 羽の鳥類を確認しているが、種数、羽数とも年ごとの変動が多い。直近にあたる 2024 年度(2024 年 4 月～2025 年 3 月)の調査では、2004 年度の調査開始以降、最大種数となる 52 種を確認した。このうち、干潟で確認したシギ科およびチドリ科は 14 種で、調査開始以降、2017 年度にならぶ種数となった。2017 年度における種数の増加は 2016 年に行われた覆砂事業が原因と考えられるが、今回の種数増加の原因について、周辺環境の変化や同地で同様に行っている海岸生物のモニタリングデータなどを用いて検討を行う。

～

B3

知床半島における海鳥の繁殖期の生息状況（1997年から2025年）

○福田佳弘(知床海鳥研究会・バードリサーチ)

これまでの調査では、ウミネコ・オオセグロカモメ・ウミウ・ケイマフリの4種の繁殖を確認している。ウミネコ・オオセグロカモメ・ウミウの3種類の営巣数は多少の上下はあるものの減少傾向にある。原因としてはヒグマとオジロワシの捕食圧が目撃例からも大きな原因として考えられる。

オオセグロカモメの営巣地は、羅臼町市街地や斜里町ウトロ市街地の堤防で営巣する数と岩礁や崖や斜面などの地形が多い知床国立公園内を比較すると圧倒的に市街地周辺で営巣する個体が多くなっている。また、ウミウも斜里町ウトロ漁港に隣接する崖で営巣する個体が出てきている。

ケイマフリは、知床半島の斜里側のみで繁殖する。個体数の増減はあるものの大まかには増加傾向にある。この種については雛に持ち帰る餌構成の調査も行った。80%以上がイカナゴであるが50%以下と少ない年もあった。イカナゴ以外では、ギンポ類やカレイ類も捕食していた。今回の発表では2025年の最新のデータも入れて考察する。

B4

北海道北部におけるウミネコの度重なる繁殖崩壊

○風間健太郎(早大)・小高歩(早大)・杉浦恭子(早大)・大槻正遼(早大)・稲本俊太(早大)・中込大河(日本気象協会、早大)・風間麻未(利尻自然史研)

近年、世界中でカモメ類の個体数が減少しており保全の必要性が高まっている。日本ではウミネコの個体数が近年急速に減少しているが、その原因ははっきりとわかっていない。本研究では、北海道利尻島のウミネコ繁殖地においては2017年以降、枝幸町においては2021年以降、それぞれ2025年まで、産卵時期、一腹卵数、巣立ち率、ヒナの成長速度などを調べた。利尻島では年々産卵時期が早まり、一腹卵数は減少する傾向があった。枝幸町では2021年と2025年にキタキツネとアライグマによる攪乱によって繁殖の放棄が生じた。利尻島では2017年、2021年、2025年に巣立ち率が著しく低下した(20%以下)。これらの年にはヒナの成長速度が繁殖期終盤に鈍化し、巣立ち間際のヒナが大量に死亡した。巣立ち率と出現した餌の種類には関連はなく、大量死は特定の餌種の不足が原因ではないようだった。本種は捕食者による攪乱や飢餓など場所ごとに異なる要因により幾度も繁殖が崩壊していた。気候変動にともなう繁殖時期の早まりにより、資源の要求と供給との不一致が生じている可能性もある。

B5

青森県蕪島におけるウミネコのプラスチック摂取

○新妻靖章, 芝佑果, 林千尋(名城大農環境動物)

青森県八戸市蕪島のウミネコ集団営巣地にて、ノネコあるいはキツネに捕殺されたウミネコ32個体(オス7羽, メス25羽)を回収し、消化管内容物よりプラスチックの摂取について調べた。消化管を前胃、後胃と腸に分け、前胃からは6.3%の個体から、後胃からは25.0%の個体から、腸からは12.5%の個体からプラスチックが検出された。消化管の3つの部位すべてからプラスチックが検出

された個体は1個体のみであった。1-5mmの大きさのマイクロプラスチックが80%以上、白あるいは透明のプラスチックが70%以上出現した。検出されたプラスチックの化学成分を調べると、ポリエチレン、ポリプロピレンなどであった。消化管に含まれていたプラスチックの重量は最大でも0.13gであった。プラスチックに比べて、多くの量の貝殻の破片や砂つぶなどが後胃に含まれていた。

B6

営巣位置がウミネコの採餌行動と生理応答に与える影響

○水谷友一(同志社)・後藤佑介(名古屋)・庄子晶子(名古屋)・依田憲(名古屋)

コロニー性海鳥において、繁殖成功や生存は営巣位置や物理環境、人為的撓乱の影響を受けるとされるが、それらが行動および生理状態に与える影響を統合的に検討した研究は限られる。本研究では、抱卵期のGPS移動データと、生理状態を示す酸化ストレス(酸化度および抗酸化能)に着目し、保護区域内の中央部と、撓乱が頻発し長期にわたり繁殖失敗が続く区域外のコロニー周辺部に営巣するウミネコ(*Larus crassirostris*)のグループを比較した。その結果、産卵日や一腹卵数に差はなかったが、周辺部の個体では孵化失敗または孵化後5日以内の繁殖失敗が多く、採餌トリップの時間・最遠到達距離・一日あたりの頻度はいずれも中央部より低かった。抗酸化能に群間差はなかった一方で、酸化度は周辺部で低く、これらの生理・行動特性と繁殖成績の低さが関連している可能性が示唆された。これらの結果は、繁殖の成功が見込めない環境において、生存を優先するエネルギー配分戦略の存在を示唆し、営巣位置と外的撓乱が個体の行動や生理状態に影響を及ぼす可能性があることが示唆された。

B7

オーストンウミツバメの繁殖期前後における尾腺分泌物のメタボローム変化

○寺嶋太輝(東京農工大)・山本裕(日本野鳥の会)・永岡謙太郎(東京農工大)

尾腺は鳥類に特有の分泌腺であり、その分泌物は羽づくろいによって全身に塗布される。多くの鳥類種で、この分泌物は性差・季節差・個体差など複雑な変化を示すことが報告されており、一部の種では嗅覚によってこれらの差異を識別できる可能性が示唆されている。このことから、尾腺分泌物が情報化学物質として機能する可能性がある。しかし、海鳥における尾腺分泌物の研究は乏しく、とくに季節変化に関する知見は限られている。そこで本研究では、伊豆諸島神津島の属島・祇苗島で繁殖するオーストンウミツバメを対象に、繁殖期を4段階に分けて雌雄それぞれの尾腺分泌物のメタボローム解析を実施した。定性解析の結果、200種以上の代謝物を同定し、うちメスで25種、オスで159種に有意な変化が認められた。特にオスでは、繁殖初期(産卵前)に変化を示す代謝物が最も多く、繁殖後期にはほとんど見られなかった。本発表では、本種の尾腺分泌物が情報化学物質として機能する可能性があるか考察を行う。

B8

天売島におけるウミガラス保護の現状および繁殖失敗要因

○岩原真利・市川惇史(北海道地方環境事務所)・佐藤信彦(水産研究教育機構)

天売島におけるウミガラスの飛来数は、1963年に8000羽と推定されたが、急激に減少し1987

年以降保護事業を開始した。その結果、飛来数は 130 羽程度まで回復したが、2023 年はつがい数が 7 つがい、巣立ち雛数が 3 羽と著しく低い値となった。その減少要因としては、捕食被害及び、餌資源の変化が考えられる。そのため 2023 年度の捕食被害及び餌資源による影響について過去のデータと比較した。餌資源は、繁殖成績が高水準であった 2019 年及び低水準であった 2023 年の育雛期において餌組成及び給餌頻度を比較した。その結果、2023 年の捕食被害は過年度と同程度であった。また、餌組成については 2019 年と 2023 年のいずれの年もギンポ類・ガジ類が高い割合を示しており、両年に明確な差は認められなかった。給餌頻度は、2023 年は 2019 年に比べ低い値を示した。このことから、2023 年はエネルギー価の低いギンポ類・ガジ類が主な採餌魚種であり、尚且つ給餌頻度が低かったことにより雛へのエネルギー供給量が下がり、繁殖成績に悪い影響を及ぼしたことが示唆された。

～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ .

B9

オオミズナギドリ瀬戸内海繁殖集団の採餌海域および繁殖率の比較

渡辺伸一(希少鳥類研究所/麻布大)

オオミズナギドリは、繁殖島のほとんどが太平洋や日本海などの外洋に面している外洋性の海鳥である。しかし、2010 年に閉鎖性海域である瀬戸内海西部に位置する山口県上関町宇和島において、さらに 2020 年には、瀬戸内海南縁に位置する大分市高島でも、本種の繁殖が確認されている。本講演では、過去 10 年間に渡る宇和島集団の繁殖数をネズミやイノシシ等の島外からの侵入種の生息状況と比較して報告する。また、演者らは宇和島で繁殖するオオミズナギドリに GPS ロガー付けて繁殖期の採餌海域の特定を行う調査を継続してきた。その結果、ほとんどの場合、1-2 日間の短期間の採餌トリップを行い採餌海域は瀬戸内海西部の狭い海域に留まることが明らかになった。近隣の繁殖地である高島および宮崎県枇榔島では 2023 年以降に繁殖状況の調査を行い、2024 年以降は GPS ロガーを用いた追跡調査を実施している。本講演では、各繁殖地で得られたデータから、繁殖集団間の採餌場所での交流や競合の有無について評価し、瀬戸内海全体の本種の繁殖状況について考察する。

～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ .

B10

日本周辺海域を利用するセンカクアホウドリ

○富田直樹(山階鳥研)・細谷淳(鳥類標識協会)・江田真毅(北大)・泉洋江(北大)・佐藤文男(山階鳥研)

アホウドリは、主に伊豆諸島鳥島と尖閣諸島で繁殖し、ひとつの単位として保全事業が進められてきた。しかし、鳥島と尖閣諸島の集団は、遺伝的・形態的・生態的に異なる隠蔽種であることが最近明らかとなり、それぞれの独自性を保つ保全策の検討が急務となっている。尖閣諸島の集団はセンカクアホウドリとして日本鳥類目録改訂第 8 版に付記されたものの、尖閣諸島での調査は 2002 年以来行われておらず、その生息数や生態はほとんど分かっていない。本研究は、センカクアホウドリの周年の利用海域を明らかにするため、本種が利用する東北地方太平洋沖で調査を行った。2023 年から 2025 年 5 月までに計 7 個体に GPS ロガーの装着に成功し、これまでに 3 個体で 1 年以上追跡できている。その結果、3 個体とも非繁殖期の夏季は千島列島からオホーツク海周辺の海域で過ごした。一方、それ以外のほとんどの時期は日本の周辺海域、特に排他的経済水域(EEZ)内を広く利用していた。

～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ .

位体比と比較し、食性の変化について検討する。

B14

羽標本の安定同位体分析から探る沖縄島の鳥類の食性

○武山智博(岡山理大)・岩見恭子・富田直樹(山階鳥研)・兵藤不二夫(岡山大院)・水田拓(山階鳥研)・関伸一(森林総研・関西)・小高信彦(森林総研・九州)

鳥類の標本の多くは、一部の骨格を除き主に皮と羽毛が保存された仮剥製として保管されている。我々のグループは、安定同位体分析に基づく餌利用や移動履歴の解明を通じ、標本に残されている羽試料の新たな活用方法の創出を目指している。先行研究において、我々はスズメの標本を対象とし、標本の損傷を最小限に留めつつ炭素および窒素の安定同位体を分析するための試料採取の方法を確立した。今回は、沖縄島内において事故等により収容・保管されている希少種を含む 10 種の鳥類標本を対象とし、その方法を応用した。各標本からは胸部の体羽を許可を得た上で数枚採取後、炭素および窒素の安定同位体を分析し、各種の食性を検討した。その結果、種ごとの分析数は限られているものの、それぞれの採餌生態に一致すると考えられる同位体データが得られた。また、ヤンバルクイナについては複数の個体の試料が得られ、齢間での同位体比の値の比較と換羽のタイミングの検討から、齢ごとの採餌環境に関しても考察を加えた。

B15

明治・大正期に東京麹町の山階宮邸で採集された鳥類標本の情報復元

小林さやか(山階鳥研)

年月が経過した標本は、ラベルの文字が読み取れなかったり、管理者の交代で詳細な情報が引き継がれなかったりなどで、採集当時の情報が不明確になっていることがある。山階鳥研には創設者の山階芳麿(やましな・よしまろ)コレクションの中に、東京麹町(現・千代田区)にあった山階宮邸で採集された鳥類標本 20 点ほどが所蔵されている。これらの標本群は採集年月日が明確でないものが多く、これまで学術的な利用はされてこなかった。標本ラベルと台帳を照合したところ、山階本人以外に、父や兄が採集しており、3 人の背景から採集年代の復元を試みた。その結果、本標本群は明治末期から大正期に採集され、さらに採集者ごとに年代を絞り込むことも可能であった。なかには、千代田区では記録が少ないミゾゴイの剥製標本も含まれ、本標本群は 100 年以上前の都心の有益な記録になり得た。

B16

骨の計測値による日本産ウ科 4 種の同定の試み：入江貝塚出土資料を対象とした事例研究

○江田真毅(北大)

日本列島にはヒメウ属のヒメウとチシマウガラス、ウ属のウミウとカワウの 2 属 4 種のウ科の鳥が生息する。これら 4 種は渡り習性や主な生息地が異なるため、遺跡から出土した骨を属や種単位で同定できれば、遺跡形成者の生業復元に有効と考えられる。そこで、本研究ではこれら 4 種の骨標本の計測値を比較して、属や種の識別が可能かを検討した。その結果、烏口骨、上腕骨、尺骨、橈骨、手根中手骨、足根中足骨ではウ属が大きく、両属の計測値が重複しない領域が広く認められた。またウミウ

では大腿骨と脛足根骨、ヒメウでは上腕骨と手根中手骨に他種の計測値が重複しない領域が認められた。これらの骨は属や種を単位とした同定に有効と考えられた。入江貝塚(北海道洞爺湖町・約5500～4000年前主体)出土資料の計測値を検討した結果、チシマウガラスとヒメウを含むヒメウ属とウミウを含むウ属が含まれることが明らかになった。ヒメウ属の2種はともに遺跡の所在する道南地域の海上や海岸に冬季に訪れることから、遺跡形成者の冬季の海上・海岸での活動と貝塚の形成時期に冬季が含まれることが推定された。

B17

日本で繁殖するシロチドリの遺伝的多様性・遺伝的構造の把握

○末石萌乃(信州大院・総合理工学)・峯光一(徳島県庁)・澤祐介(山階鳥研)・守屋年史(バードリサーチ)・佐藤達夫(行徳自然ほごくらぶ)・北村亘(東京都市大)・山下洋平(葛西海浜公園パートナーズ)・吉田祐一(生態教育センター)・西海功(科博)・笠原里恵(信州大)

シロチドリはユーラシア大陸に広く分布し、日本でも全国的に繁殖するが、分布域の多くで減少が懸念される希少種である。その保全には生態や遺伝的な基礎情報が求められるが、国外に対し、国内の繁殖集団の遺伝的情報は少ない。本研究では、2018-2025年に沖縄、関東、北海道の3地域で採取された羽根もしくは血液試料(n=25, 27, 12)から抽出したDNAを用いて、本種の国内集団の遺伝的多様性と遺伝的構造を分析した。このうち、ミトコンドリアDNAの制御領域およびATPase6/8領域の分析では、制御領域で決定できた505bpの配列から、3地域で計13のハプロタイプが検出され、多様度は0.61-0.82であった。集団間の遺伝的距離(Fst)から、沖縄と関東・北海道の集団間に有意な遺伝的差異が示唆されたが、関東と北海道の集団間には有意な差異は検出されなかった。ATPase6/8では944bpの配列を決定でき、3地域で計5つのハプロタイプが検出され、多様度は0.00-0.56であった。沖縄と関東の集団間に、制御領域と同様の有意な遺伝的差異が示唆された。

B18

2010年代に都心緑地で繁殖を始めた小鳥類2種の遺伝的特徴

○西海 功(国立科博)・黒田清子(山階鳥研)・樋口亜紀(国立科博)・望月みずき(我孫子市鳥博)・小林さやか(山階鳥研)・齋藤武馬(山階鳥研)

皇居を中心とする都心の緑地群では繁殖する陸鳥の種数がこの50年間徐々に増加してきた。2010年代に繁殖するようになったウグイスとエナガの繁殖集団の遺伝的多様性をマイクロサテライトDNAで解析した。いずれも埼玉等の関東圏の集団を比較対象に、皇居の繁殖期と非繁殖期の集団について、それぞれ8～12個体程度、10個余の遺伝子座を分析した。両種ともに皇居の繁殖集団は平均対立遺伝子数においても平均ヘテロ接合度においても遺伝的多様性の若干の低下がみられた。ウグイスについては逆に越冬集団の多様性は高く、複数の繁殖地由来の個体が越冬していることが示唆された。その一部の個体が皇居で繁殖を始めたと思われる、繁殖開始当初の2020年以前のウグイスの繁殖個体はヘテロ接合度が低かったが、2022年以降の近年の繁殖個体は遺伝的多様性が回復してきているようである。エナガの多様性も同様に回復してきているのか、さらに分析を進めて発表したい。

とみなした場合の繁殖成功率は 47% で、平均の巣立ち雛数は 3.8 羽であった。繁殖失敗の 71% は捕食と推測され、風雨等によるヨシの倒壊や人為的な刈り取りなどもあった。他地域の先行研究と本研究における平均卵数は類似していた一方、捕食圧は高い傾向にあったことから、諏訪湖のヨシ群落は、オオヨシキリにとって食物事情は悪くないものの、高い捕食圧に晒される、課題のある繁殖地だと考えられた。

B22

ニュウナイスズメの繁殖生態：一巣の価値に着目して

○佐々木 未悠(総研大)・高橋 雅雄(岩手県博)・蛭名 純一(おおせつか)・東 信行(弘大)・沓掛展之(総研大)

鳥類における巣の Aggressive defense は子の生存率を高める重要な行動であるが、その適応性や進化的背景は十分に解明されていない。本研究では、営巣場所が限られる樹洞二次利用者であり、強い防衛行動を示すニュウナイスズメと、同属で防衛行動が弱いスズメに着目した。スズメは留鳥で繁殖期が長いので年あたりの営巣回数が多く、親にとって一巣の相対的価値が低い一方で、ニュウナイスズメは渡り鳥なので繁殖期が短く、年あたりの営巣回数が少ないはずで、一巣の相対的価値が高くなって防衛行動が強い可能性が考えられた。よって本研究ではニュウナイスズメについて、2018～2021 年に青森県三沢市で巣箱を設置し、個体識別と巣のビデオ撮影により繁殖行動を調査した。その結果、標識個体 38 羽(雄 23 羽・雌 15 羽)中 30 羽は年に 1 度のみ繁殖し、再繁殖が 3 羽、二回繁殖が 5 羽だった。配偶システムは、雄 1 羽が一夫二妻であったが、他の 37 羽は社会的な一夫一妻であった。以上より、ニュウナイスズメの多くは雌雄ともに年に 1 度しか繁殖せず、防衛行動が強い理由と考えられた。

B23

岩手県南部におけるクマゲラ繁殖の可能性について

藤井忠志・○籠島恵介・阿部恵彦・金沢聡・佐藤和義・原勝雄・原由美(本州産クマゲラ研究会)

本州においてクマゲラ *Drycopus martius* の繁殖が確認されているのは白神山地、森吉山、田沢湖周辺及び八甲田山の 4 ヶ所のみである。岩手県のクマゲラはレッドデータブックでは A ランクで、日本鳥類目録第 8 版では AV となっており、3 例の撮影記録がある。岩手県南部にある須川栗駒岳から生出川流域にかけても目撃事例と巣穴等の痕跡記録はあるが、繁殖実態は不明である。本州産クマゲラは北海道の個体群と比べて脆弱性が高いにもかかわらず、近年この地では発電計画や観光開発計画があり将来が危惧されている。我々はこの地域において巣穴と食痕の現地調査及び、これまで発見された 8 ヶ所の巣穴の記録の精査を行った。7 月以降はコールバック調査及び、録音機で得た長時間録音データを Cornell 大学の人工知能システム Bird Net で分析する調査を行う予定。

B24

鳥は種子を何個ずつばら撒く？—鳥散布における種子配置パターン—

○大河原恭祐(金沢大)・木村一也(石川県森林組合)・佐藤文男(山階鳥研)

B27

文化は異所的種分化を加速する

○山崎剛史(山階鳥研・高知工科大)・小林豊(高知工科大)・荻原直道(東大)

文化は、遺伝的形質との共進化により、アナジェネシス(単一系統内の進化)を加速する。しかし、文化がクラドジェネシス(種を増やす進化、種分化)に与える影響はよくわかっていない。本研究では、文化を組み込んだ集団遺伝学のシミュレーションを用い、最も一般的なクラドジェネシスである異所的種分化における文化の役割を解析した。その結果、親から受け継がれる生誕地固有の知識(文化的局所適応)が分散を忌避する自然選択を生み出し、地理的バリアを強化することで、異所的種分化の急加速が起きることが判明した。この理論は、鳥類学だけでなく、動物学、人類学で得られてきた幅広い経験的知見を説明する。また、エピジェネティクスを「広義の文化」とみなすことで植物や菌類などにも適用できる。アナジェネシスとクラドジェネシスの両方を加速する文化を無視して、生物進化を理解することはもはや可能ではない。

B28

伊豆諸島のカラ類2種の分布は島の大きさを説明できる

○藤田薫(東邦大, バードリサーチ)・藤田剛(東大)

島嶼生物地理学は、生物学的プロセス(移入, 絶滅, 種分化)を?いて種の分布パターンを説明することを目指している。伊豆諸島に生息するシジュウカラ科2種(ヤマガラとシジュウカラ)の分布は安定的ではなく、約 70 年間の文献と現地調査の結果、局所絶滅や侵入により、変化する島のあることがわかっている。2種の各島における分布パターンは、1)2種ともに安定的に生息する島、2)ヤマガラが安定的に生息し時々シジュウカラが侵入する島、3)シジュウカラが安定的に生息し時々ヤマガラが侵入する島、4)どちらも生息しない島、の4つに分類できる。島の面積と孤立性の座標上に種の存在の分布境界を図示し、種間相互作用と種の特性の差異によって生み出される分布パターンの違いを表す「種ベース階層モデル(Lomolino 2000)」を改変し、これに各種の個体群安定性を組み込んだところ、4つの分布パターンは島の面積で良く説明された。先行研究で劣位と示唆されたシジュウカラは、ヤマガラが通常生息しない小面積の島と、島内にレフュージアのある大面積の島にのみ安定的に分布した。

B29

離島に生息するウチャマセンニューの生息条件について

○武田恵世(日本野鳥の会三重)

日本の小さな離島に生息する鳥類は、本州、四国、九州などより大きな島に生息する鳥類とは異なっている例が多いことが知られている。今回は三重県の7島と和歌山県の3島について、ウチャマセンニューが生息している島としていない島での自然環境の違いから生息条件を明らかにしようと試みたので発表する。

B30

大都市東京のオオタカ幼鳥の分散

○阿部 學(ラプタージャパン),樋口亜紀(科博),中島拓也(ラプタージャパン),橋本哉子(ラプタージャパン)

猛禽の都市侵入は世界的傾向で、日本は歓迎ムードだが巣立幼鳥の命運は誰も知らない。飛翔力の劣る幼鳥のビル群からの分散究明を目的に 2024 年東大小石川植物園で繁殖したつがいと幼鳥 4 羽を GPS 追跡。行動圏は親雌 3470,雄 2866(ha, KDE 95%)で、うち市街地利用は成鳥 85%,繁殖林を殆ど出ない幼鳥は 20%。成鳥の人間,ビル群への馴化が見て取れる。50 日ほどで独立し社寺林,公園等の孤立林伝いに四方に分散。速度は市街地では早く郊外では緩慢または休息。一羽は会津まで 160km 分散後,現在は他と共に神奈川と埼玉に在住。成鳥は越冬地に向けて直線的に移動するが,目的地のない幼鳥は縄張り主に追われるのかジグザグ移動が特徴。少数例だが郊外(2.6)よりも都市の卵数(4)が多いのは biomass の大きな餌が豊富な故か?都市部でスズメが絶滅危惧種並に激減したのは猛禽の侵入が一因。都市の鳥類群集攪乱の弊害を勘案すると猛禽類の都市への侵入は歓迎できない。調査に理解を示された川北篤園長並びに都市鳥研究会の各位に感謝申し上げる。

B31

タンチョウの Reverse mounting (逆マウント)について

正富宏之(タンチョウ研究所)

鳥類の配偶行動では、オスがメスにマウントするのが通例であるが、メスがオスの背後からの、いわゆる逆マウントが起きることもある。逆マウントが確実に記録された種は、今のところ 50 種程度で、タンチョウは含まれていない。

タンチョウの逆マウントは 1960 年代から知られていたが、飼育下の異常行動かと、あまり注目していなかった。ただ、野性個体でも稀に起きることをその後目撃したが、遠距離からの観察で、行動の明確な把握が行えず、注目度は低いままであった。しかし、タンチョウの人慣れが進み、近くで詳細な観察が可能となり、単なる一時的異常行動でないことが明確となってきた。

つまり、被マウント個体による相手への「背向け静止・開翼」と、マウント個体の「交尾発声・スロー接近・開翼体へ飛び乗り」、並びにマウント終了後の両者の「辞儀・背曲げ」(交尾後行動)は、両性でほぼ差はない。ただ、メスがマウントの場合の cloaca の接触無しと、各行動パターンの継続時間に両性で差があるに過ぎず、この行動の生態的、進化的意義解明等が今後の課題である。

B32

侵略的外来種ウシガエルのない水田景観でのため池と陸棲鳥類の関係を調べる

藤田剛(東大)

かつて水田景観ではため池が安定水系として機能し、淡水生物の主要な生息地だったと考えられる。近年、大規模な農業用水整備によってため池が不要になり、管理放棄されたり、防災のために埋め立てたりする地域が増えている。ため池には、カエル類のように生活史の一部をため池に依存しながら、発生にともなって水条件がより不安定な水田などへ移動する小動物が生息する。これらの小動

物の移動は、直接ため池を利用する水鳥だけでなく、ため池以外の水田などの景観要素を採食場所とする水鳥以外の鳥にも影響していると予想できる。演者は、東北東部に位置する北上盆地の水田景観に注目し、ため池と、農地を主な生息地とするサシバなどの猛禽や他の鳥との関係を調べている。本地域では田植え期の降水量が少ないため農業用水の水源として数 10m 四方のため池が明治以前から昭和初期にかけ多数つくられた。また、冬期の低温のため侵略的外来種ウシガエルが分布していない。本研究では、北上盆地中東部の 25×10km の水田地帯を対象に、サシバやノスリなど陸棲捕食者とため池の関係を調べた。その結果を報告する。

B33

近畿地方中部における土地利用形態と猛禽類の関係

○中津弘(温帯文化景観調査研究所)

平野部の農地や谷戸農地、樹林地など様々な景観の 26 ヶ所に半径 400m の調査プロットを設け、繁殖期および越冬期(いずれも 2 期)に毎月各プロットを訪問して 30 分ずつ観察し、出現する猛禽類を記録した。また、プロット中心から発生させた半径 600m および 1000m のバッファ内での土地利用比率(樹林地面積比率、農地・草地・伐採跡地面積比率)や林縁長(樹林地と農地・草地などとの接線長)などを調べ、出現に関わる土地利用要素を種ごとに検討した。繁殖期のサシバは谷戸農地あるいは伐採跡地がある場所で観察され、出現プロットは、各バッファ内での樹林地面積比率が高い、あるいは農地・草地・伐採跡地面積比率が低い、および 600m バッファ内での林縁長が大きいという傾向を示した。繁殖期および越冬期のチョウゲンボウの出現プロットは、各バッファ内での農地・草地・伐採跡地面積比率が高い、あるいは樹林地面積比率が低いという特徴を持っていた。越冬期のノスリとハイタカでは傾向を見出せなかった。トビは繁殖期・越冬期とも、生息環境ジェネラリスト的に、ほとんどのプロットに出現した。

B34

個体識別により判明したクマタカの換羽情報

○一瀬弘道 1,2、山崎亨 1(1 クマタカ生態研究グループ、2 いであ株式会社)

猛禽類の換羽については詳細に研究されている種がある一方で、森林性猛禽類の換羽に関する報告は限られている。クマタカについてはこれまでに目視観察による換羽状況の報告はあるが、クマタカ生態研究グループが捕獲により個体識別した個体について一定の期間における換羽情報が得られたことから報告する。本研究では風切羽と尾羽を対象とした。1歳 6 か月の時点では、すべて幼羽の個体と、一部の羽に換羽がはじまっている個体とが確認された。風切羽の換羽の部位と順序については既往の知見と同様であったが、尾羽では R1→R3、R6→R5 の順に進んだ。換羽率を算出したところ、1歳 6 か月で 0%と 11%、2歳 6 か月で 41%、2歳 8 か月で 54%、3歳 2 か月で 70%であった。幼羽の次に生えてくる羽は、調査対象とした個体の 20 年後の尾羽や、その個体の親鳥の尾羽の模様と明確な違いがみられなかったことから、クマタカの羽は幼羽の次に成羽となり、若鳥の段階の羽はないことが明らかとなった。目視観察における換羽状況の確認ポイントおよび換羽状況を基にした年齢段階の判断について提案する。

B35

渡り鳥調査におけるサーマルスコープの有効性について

○紀國聡(建設技術研究所)、岸野聡(建設技術研究所)、先崎啓究(道央鳥類調査グループ)、先崎愛子(道央鳥類調査グループ)、渡辺義昭、猪狩敦史、森田佑介

陸上風力発電事業では、渡り鳥の移動経路への影響が懸念されている。特に北日本の沿岸部は、海ツシ類やガン類、ハクチョウ類等の渡り鳥の主要なフライウェイと風力発電所に好適な風況の条件が重なることが多い。これまでは目視可能な時間帯に定点観察法により渡り鳥の移動経路や個体数を把握する調査が主であった。夜間は船舶レーダーやサーチライトなどが試行され、船舶レーダーは移動経路や高度を定量的に把握可能であるが、種の特特定が難しいことや地上近くのノイズ発生、高コストなどの課題がある。そこで、熱源を感知するセンサー解像度の性能向上により実用できる製品が市販されるようになってきたサーマルスコープを用いた夜間の渡り鳥調査の有効性について検証を試みた。本発表では、サーマルスコープの使用感や調査で取得できる情報を事例として報告する。調査の結果、ガン類やハクチョウ類の群れは、観察地点から 1km 以上先でも属レベルの種の特特定や概略の個体数は把握可能であった。夜間の飛翔経路、種類、個体数の把握により、環境アセスメントの影響予測・評価の精度が向上することが期待される。

～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・

B36

ガンカモ一斉調査を活用した水上太陽電池発電所設置によるカモ類渡来羽数変化の検討4

○尾原正敬(千代田 C)

太陽電池発電施設は、2014 年の FIT 法制定により急速に普及したものであり、様々な土地利用に設置可能な一方、周辺住民との合意形成、パネル配置方法、設置時の造成・森林伐採に伴う生活環境・自然環境への影響等といった点で、様々な問題・課題が生じている。太陽電池発電施設のうち、貯水池等に設置される水上太陽電池発電施設については、水域生態系への影響の他、水面へのフロート設置によるガンカモ類等の水鳥の生息場所減少の影響が懸念されている。

本検討では、水上太陽電池発電施設の存在するガンカモ一斉調査地点(湖沼)に対し、パネル設置前と設置後のカモ類の渡来羽数の増減傾向について調査データを更新し、新たに考察を加えたものである。

増減傾向については、全体的に設置直後に減少する傾向が見られたが、設置数年後では羽数が回復するケースと減少傾向が続くケースに分かれた。傾向の違いは、水域に対するパネルの配置(残存水域の面積・形状)が一要因として考えられる。

また、パネル設置湖沼と周辺湖沼全体の渡来羽数の変動を考慮し、設置後の個体群の挙動の傾向についても考察する。

ポスター発表要旨 Poster presentations

コアタイム

【番号に*あり】13 日(土)16:40~18:40

【番号に*なし】14 日(日)10:00~12:00

※はポスター賞応募の発表

P001*

形態観察と糞中 DNA から明らかになったオバシギとコオバシギの交雑事例

○田谷昌仁¹・黒田理生・安部琴音・新條正志²・小田谷嘉弥³・細谷 淳⁴・石井康人¹・千葉 聡¹
(¹ 東北大; ² 都立江北高校; ³ 千葉中央博; ⁴ 鳥類標識協会)

日本で旅鳥として観察されるオバシギとコオバシギは、極東ロシアに重複した繁殖分布をもつ。しかし、両種間の交雑の例はこれまで 1 例のみが報告されるにとどまっていた。発表者らは、2023 年と 2024 年の秋に千葉県で両種の交雑由来と思われる計 2 個体を発見し、形態を詳細に観察するとともに、観察中に排泄した糞を採取した。比較対象として両種の別個体から血液試料を採取し、これらの試料を用いて交雑の遺伝的な検証を行った。糞および血液試料より抽出した DNA について、MIG-seq とコオバシギの全ゲノムアセンブリへのマッピングを行い、最終的に 237 座からゲノムワイド SNPs を得た。ADMIXTURE と NewHybrids を用いた集団遺伝学的解析により、2023 年に観察された個体はオバシギとコオバシギの交雑個体と推定された一方、2024 年の個体は純粋なコオバシギと区別できなかった。

本研究は、これまで報告例のほとんどなかった両種間の交雑例を報告するとともに、非侵襲的に採取可能な糞中 DNA のゲノムワイド SNPs 解析への有用性を強調するものである。

P002

トキ飼育下個体群における孵化時および1歳時の生存性間の関連性の推定

小野寺尚美¹・石井森昭¹・山田宜永¹・杉山稔恵¹・谷口幸雄²・金子良則³・○祝前博明⁴ (¹新潟大院自然科学, ²京大院農, ³佐渡トキプラザ, ⁴新潟大佐渡自然セ)

動物集団の量的形質における自然選択や人為選抜での反応の大きさは、当該形質の遺伝的変異の大きさに左右される。我々は先に、トキの飼育下個体群を対象に、孵化時および 1 歳時での生存性の遺伝率の推定を行った。本研究では、これら 2 形質間の関連性の推定を試みた。トキの受精卵(個体)の記録および血統情報を用いた。孵化時と 1 歳時での生死を離散形質と見なし、2 変数線形モデルにより記述して分析した。相加的遺伝(共)分散および残差(共)分散をギブスサンプリングなどにより推定し、遺伝相関および表型相関などを求めた。2 変数閾値モデルによる推定も試みたが、今回は推定値は得られなかった。線形モデルによる表型相関は 0.6 程度であり、不連続性の効果について補正後の値は、概ね 0.9 であった。ギブスサンプリングによる 2 形質の推定相加的遺伝子型値の間の単相関は 0.94 であったが、遺伝相関の推定値は 0.83 ± 0.15 であった。以上より、孵化時および 1 歳時の生存性の間の表型的および遺伝的関連性は非常に高いと推測された。今後、より多数の記録を用いて分析を継続する。

P003*

天は二物を与えるか？—ホオジロの番い形成成功に与える要因—

○松浦志穂(金沢大)・大河原恭祐(金沢大)

多くの鳥種では雄に装飾形態と囀り行動が進化してきた。これら形質には主に雌を誘引、番い形成の機能があるが、その発達には前者は遺伝的要因、後者は後天的学習に依存しやすく進化速度も異なる。そのためこの2つの形質は独立に進化してきたと考えられ、近縁集団の系統間比較からも支持されている。しかし学習能力自体は遺伝的要因にも大きく依存するため、種レベルであれば装飾形態とさえずりの特徴は相互に関係する可能性がある。本研究ではホオジロを材料とし、雄の番い形成と囀り、色彩形態の特徴との関係性を調べた。2023年から2025年の4～8月に金沢市の金沢大学周辺と医王山の森林で調査を行い、テリトリーを形成した雄22個体以上について、番い形成と、テリトリーの特徴、頭部の色彩形態の特徴、さらにシラブル数やソングタイプ数等の囀りの特徴を調べその関係性を解析した。また、装飾形態と囀りの特徴との相関についても検証を行った。その結果、特に頭頂部の色彩の特徴が番い形成成功と関係しており、囀りの特徴とも相関することが示唆された。

～．

P004*

沖縄島のリュウキュウコノハズク個体群の羽色・模様に影響を与える要因について

○榛沢日菜子(北大・院理)・武居風香(北大・院理)・池上隆之(北大・院理)・細江隼平(北大・農学院)・江指万里(北大・院理)・高木昌興(北大・院理)

フクロウ類は地味で複雑な模様を持ち、スズメ目と比較すると羽色・模様を詳細に記載した研究は限定的である。南西諸島に生息するリュウキュウコノハズクも地味な羽色と複雑な模様を持つ。腹部は目立つ部位であり、天敵に対する隠蔽機能や、同種に対して個体の質を示す正直な信号としての機能を持つ。ゆえに特に腹部の羽色・模様の個体差が大きいと考えられる。本種の地味な羽色や複雑な模様は、生息環境である森林内に溶け込み天敵に見つからないための隠蔽機能を持つ可能性が高いと考えられる。

本研究では、沖縄島において2022年から2025年の繁殖期に捕獲したリュウキュウコノハズク154個体の腹部の画像から羽色・模様を数値化し、いくつかのクラスターに分かれるか、また羽色・模様が地理的なクラインを持つか、植生や形態計測値が羽色・模様に影響を与えているかを検証した。その結果、個体の羽色・模様の特徴から2つのクラスターに分かれた。また、オスについては島の東側の個体ほど羽色が暗い傾向にあり、森林被覆度が高い場所の個体ほど、複雑な模様を持ち隠蔽効果が強くなっている可能性が示唆された。

～．

P005

カワラヒワが持つ腸内細菌叢の殺鼠剤に対する反応

○小笠原浩平(北大)・小出将士(北大)・中尾亮(北大)・池中良徳(北大)・中山翔太(北大)・石塚真由美(北大)

【背景と目的】オガサワラカワラヒワ(*Chloris kittlizi*)の保全において、ネズミ類対策は喫緊の問題である。現在、殺鼠剤(ダイファシノン)を用いた駆除が進められているが、非ターゲット種であるオガサワラカワラヒワへの影響評価も重要である。腸内細菌は腸内環境の変化に敏感であり、宿主と様々な面で密接に関係しているため、腸内細菌がダイファシノンに対してどのような反応を示すか着目し

た。

【方法】近縁種であるカワラヒワ(*Chloris sinica monir*)にダイファシノン低濃度で単回経口投与した。投与前日から投与 7 日後まで糞便を採取し、細菌が持つ 16S rRNA の V3-4 領域をターゲットとして次世代シーケンサーを用いて解析した。

【結果と考察】投与3日後より α 多様性の増加と β 多様性の減少が認められた。また、投与前に比べて *Succinivibrio* や *Paeniclostridium* の割合が増加した。これらは解毒への関与や代謝活性が高いことで知られるため、ダイファシノンに対する腸内細菌叢の反応の可能性が高い。

P006

釧路湿原に生息するシマクイナから得られた寄生虫と胃内容物について

○吉野智生(釧路市動物園)・貞国利夫(釧路市立博物館)・本藤泰明(温根内ビジターセンター)・藤原伸也(温根内ビジターセンター)

希少種であるシマクイナは、国内では主に北海道で繁殖し、釧路湿原を含む道東はその重要な生息地である。希少種の保全のため、生態解明や病原体保有状況の把握は有意義である。筆者らは 2024 年に遺体収容された 3 個体の剖検および、環境省の許可を受けて実施した捕獲調査の際捕獲した 5 個体の体表の検査結果を報告する。検査個体から計 5 種の内外寄生虫を得た。内訳はマダニ類 2 種(ヤマトマダニおよびチマダニ属の 1 種)、ハジラミ類 1 種(*Incidifrons* sp.)、線虫 1 種(*Strongyloides* sp.)および条虫 1 種(Dilepididae 科の 1 種)で、いずれもシマクイナから初めて記録された。また *Incidifrons* sp.は国内初記録であった。最も多く採取されたのはチマダニ属で、捕獲個体のうち 3 個体から得られた。胃内容物は軟体動物(巻貝)、クモ類、小型節足動物、タデ科植物種子が得られた。上記のうち Dilepididae 科条虫はミズや甲虫類が中間宿主として必要であり、胃内容物として検出されなかったが、シマクイナはこれらを食べていた可能性が高い。

P007*

ミャンマーの複雑な地理・環境がもたらすヒヨドリ科鳥類の種分化

○檜橋真理環(九大)・吉川夏彦(国立科博)・長太伸章(国立科博)・蛭田眞平(昭和医大)・Win Win Nwe(FRI, Myanmar)・Salai Myo Myint Oo(FRI, Myanmar)・Mu Mu Aung(FRI, Myanmar)・西海功(国立科博)

ヒヨドリ科はアジア・アフリカの熱帯・亜熱帯地域を中心に多様化した。都市部から熱帯雨林、乾燥地帯まで幅広く生息し、進化研究のモデル群として注目される。ミャンマーはインド亜区とインドシナ亜区の接点に位置し、乾燥した中央平原とモンスーン林帯など複雑な環境をもつ地域であり生物地理上重要な地域である。本研究ではミャンマーのヒヨドリ科 3 属 7 種 111 個体を対象に mtDNA および核 SNPs に基づく比較系統地理解析を行った。その結果、シリアカヒヨドリとその姉妹種間、およびコウラウンとエボシヒヨドリの各種内において、ミャンマー中央平原を境界とした東西での遺伝的分化という共通した遺伝構造が明らかとなった。また、乾燥地域に生息するミミジロヒヨドリ種群ではテナセリム山地によって隔離されたことによるミャンマー固有種への種分化という先行研究の結果を支持した。これらの結果からミャンマー周辺における地理的および環境的要因が、ヒヨドリ科鳥類の種間および種内における遺伝的分化に重要な役割を果たしてきたことが示された。

○清水伸彦・姉崎智子(群馬自然史博)

中形であるヒヨドリサイズの鳥類の上腕骨と大腿骨に着目し、骨形態の観察を行った。当館収蔵標本114種601個体からヒヨドリサイズの標本(上腕骨長 2.4~3.4 cm、大腿骨長 2.1~2.9 cm)を抽出し観察した。上腕骨は18種95個体のうち、背顆上突起があり三頭筋気孔窩の数が1であったのは、ヒヨドリ、ヒバリ、ガビチョウの3種であった。ヒヨドリの上腕骨は 2.73~3.1 cmでヒバリ 2.5 cm、ガビチョウ 2.3~2.5 cmより大きかった。大腿骨は21種102個体のうち、(尾側面)対転子関節面直下にある含気窩があったのは、ヒヨドリ21個体だけだった。今後、中形のヒヨドリサイズの標本種数及び比較標本数を増やしていくことで、今回、上腕骨と大腿骨で観察できた骨形態的特徴が、ヒヨドリに特徴的であるかどうか検討を進めていくことができると考える。

P009*

○江指万里(北大)・外山雅大(根室市歴史と自然の資料館)・宮城国太郎(沖縄野鳥の会)・周戸大季(琉大)・富沢直浩(石川県)・Jasmine Elizabeth Black(新大)・高木昌興(北大)

アジアに広く分布するオオコノハズクとその近縁種の分類には、依然として検討の余地がある。先行研究により、日本国内の個体群が大陸の個体群と遺伝的に異なる可能性が示唆されているが、その系統的位置には未解明な点が多い。さらに、国内では 3 亜種が存在が報告されているものの、それらの遺伝構造や形態的差異の詳細は明らかにされていない。本研究では、日本全国の捕獲調査で得られた DNA サンプルおよび形態計測データをもとに、国内におけるオオコノハズクの分子系統、集団遺伝構造、および外部形態の多様性を明らかにすることを目的とした。ミトコンドリア DNA の塩基配列およびゲノムワイドな SNP 解析(MIG-seq)を行い、大陸集団の公開データも併用して解析を行った。その結果、現在亜種 *pryeri* に分類される沖縄の集団が独自のクレードを形成し、形態的にも亜種 *semitorques* と大きく異なることが示された。本発表では、これらの結果をもとに、日本国内の遺伝構造が生じた生態的・系統地理的背景について考察する。

P010*

小笹瑛一郎(京大)・〇川森日向(北大)・Jean Baptiste Thiebot(北大)

北太平洋に広く分布するウトウは地中で営巣し、夜に海から帰巣して、雛への餌を持ち帰る。ウトウの雛にとって、鳴音は重要な餌乞いのシグナルであり、雛の鳴音活動は親鳥の給餌頻度や雛自身の栄養状態を反映するかもしれない。本研究では、育雛期全体を通したウトウ雛の鳴音活動の経時変動を明らかにすること、その結果とウトウ雛の栄養状態との関係を明らかにすること、の2つを目的とした。天売島の人工巣内に設置したレコーダーから、53 日間、約 1200 時間分の録音データを得た。同時に、雛の体重を 5 日毎に測定した。鳴音の検出には教師あり学習による自動検出を試みた。育雛期を通して、ほとんど夜間に雛の鳴音が検出された。鳴音検出頻度は 12 日齢日ごろから上昇し、45 日齢日ごろに減少した。雛の体重は巣立ちまで増加した。特に鳴音検出頻度が減少した 37 日齢日のみ、夜間に親鳥の鳴音が確認されなかったことから、この日は親鳥が帰巣しなかったと考えられる。他の巣では巣立ち前に雛の体重が減少したことから、45 日齢日以降の鳴音検出頻度の減少傾向に

ついては、体重変動により説明できるかもしれない。

P011

フクロウ雄成長の繁殖期における鳴き声の継続調査結果

○北尾祐介(Albireo,生態計画研究所)・鹿島彩花(Albireo)

堺市南部の丘陵地帯に位置する堺自然ふれあいの森では、フクロウ保全のための巣箱を敷地内に2か所設置し、両巣箱ともフクロウの繁殖が確認されている。本種の効果的な保全を検討するため、繁殖期の鳴き声記録を継続調査し、録音データの解析による個体識別や生態行動の把握を試みた。2022年～2024年までの3年間の録音データを用いて、雄成鳥のフートコールを構成する各エレメントの周波数(Hz)と各エレメント間の間隔(秒)を数値化し、(1)個体別(2)年度別で主成分分析を実施し比較した。結果、全ての年度で各ペア別にプロットが近接した。また、複数年度を同時に分析した際、別年度のデータであっても各ペア別にプロットが近接した。このことから、繁殖期の雄成鳥のフートコールを用いて、繁殖期間中の各ペアの雄の個体識別ができる可能性の他、各年度で繁殖ペアの雄に入れ替わりがあるかの判定に利用できる可能性が示された。今後は、雄成鳥のフートコール以外の鳴き声でも個体識別が可能か検討し、非繁殖期の生態行動の解明にも着手していきたい。

P012*

Text-to-Audio AI を用いて生成する鳥類音声に基づく性選択モデル

○鈴木麗璽(名大)・Hao Zhao(名大)・有田隆也(名大)

生成 AI を用いたエージェントで人間の社会集団を理解する手法が急速に進展しているが、生態や生物進化の理解への活用はまだ少ない。本発表では、生成 AI を用いた豊かな形質表現に基づく進化現象の理解の取り組みとして、可聴の鳥類音声の進化モデルの構築について報告する。まず、文章から音声を生成する Stable Audio Open 1.0 を、名大稲武フィールドで収録したオオルリの歌で追加学習し、多様なオオルリ風の歌を生成するモデルを構築した。生成音声を鳥類音声識別ネットワークである BirdNET で分類したところ、鳴き声に類似の音響的特徴を持つ種に分類される傾向があった。次に、生成鳴き声に基づく性選択モデルを構築した。鳴き声の特徴を記述するプロンプトを遺伝子とし、各個体は鳴き声遺伝子と選好性遺伝子を持つ。メスは、自身の選好性遺伝子から生成されるスペクトログラムと類似した鳴き声を生成するオスを優先的に選択する。予備実験の結果、多様な鳴き声の進化と棲み分けが生じることが示された。関連フィールド観測等も報告する。

P013*

川崎市周辺におけるガビチョウのさえずりの多様性

○長谷川れい・北村亘(東京都市大)

ガビチョウはさえずりが複雑であり、生息環境によるさえずりの変化も報告されているが、外来種として定着した日本において本種のさえずりがどのように変化したかは明らかになっていない。本種は他種のさえずりを模倣することも知られ、また他種のさえずりに影響を与える可能性も考えられる。本研究では、ガビチョウのさえずりの音節(シラブル)のカタログ作成および、音節のパターン分析や在来鳥類のさえずりの周波数帯との一致度を明らかにすることを目的とした。調査地は川崎市周辺

の5地点とし、2025年5月から7月にかけて収集した約20個体のさえずりデータを解析した。最低でも1個体から47音節が確認され、中にはウグイスやコジュケイの模倣も含まれた。本発表では調査地に生息するガビチョウが使用する音節のパターン、流れ、多様さを可視化したものを紹介する。

P014

擬声語付き鳥鳴音声データセットの試作と RAG による検索精度検証

浅野 由衣(Swallow)、寺本 優香(同志社)

擬声語は鳥類の鳴き声を同定する際の有用な特徴量であることが報告されており、生物多様性モニタリングにおいて、擬声語から鳥類同定ができる AI システムは市民科学の観点から有用である。しかし大規模言語モデル(LLM)は、一般的な擬声語には対応できても、表記揺れや語形変化があると適切に類推できない。そこで本研究では、鳥鳴音声と日本語擬声語のペアをクラウドソーシングにより収集、このデータセットを利用した検索拡張生成(RAG)を実装し、擬声語による検索の精度が向上するかを評価した。本データセットを用いることで音声からの擬声語生成といった応用タスクの実現が期待される。

P015*

3音響管モデルに基づくハシブトガラスの声道模型の検討

○木原優太(工学院大)、高橋義典(工学院大)

本研究の目的は、カラスの音声生成が可能な声道模型の実現である。塚原らによってカラスの鳴き声の倍音構造の解析についても報告されているものの、声道形状に基づく音響モデルに関する報告は少ない。一方、人間の音声の研究では声道の3音響管モデルによって、フォルマント分布の推定と声道模型による音声生成が可能である。

本研究ではハシブトガラスのkaコールのケプストラム処理によって鳴管にある音源の基本周期と、声道(口腔、気管および鳴管を含んだ共鳴部)の共鳴周波数をフォルマントとして分析した。その上で、口腔、気管、鳴管による長さの異なる3種類の音響管が接続された3音響管モデルによって、フォルマント周波数を表現し、実測値と比較した。人間の音声の3音響モデルでは中央の管が十分に細く、ヘルムホルツ共鳴による第1フォルマントが計算される。一方、カラスの声道では、中央の管のくびれは見られず、複数の気柱共鳴で表されることが確認された。さらに本研究では、オスハシブトガラスの発声器官の計測データから付加製造での声道模型の試作を試みた。

P016

翼は砂浴び(dust toss)の道具になりうるのか? ~粉体物理から見る羽毛の効果~

○越智友都(阪大)・明田卓巳(名大)・藤原慎一(名大博物館)・桂木洋光(阪大)

一部の鳥は脚や翼を用いて地面から砂を飛ばす dust toss を行い砂浴びをするが、その戦略は多様である。スズメやニワトリの dust toss が脚の動きにより強く依存しているのに対して、ダチョウは翼の動きにより強く依存する。我々はこれらの砂浴び行動の違いが羽毛の硬さに起因しているのではないかと考え、砂を飛ばす動作を単純化した室内実験を行った。具体的には、先端に毛の硬さ

(毛径)が異なるブラシを取り付けた振り子を用いて砂層表面をスweepし、飛び散る砂の挙動(量・速さ・角度)を観察した。

その結果、柔らかい毛では少量の砂が低く速く飛び傾向が見られ、硬い毛では多くの砂が高く飛び傾向が確認された。さらに、これらの結果をスズメおよびダチョウの翼の羽軸の曲げ剛性および砂浴び時の動作速度の推定値と照らし合わせ、それぞれの砂飛ばし効率について考察した。その結果、スズメの柔らかい翼では砂層から十分に砂を飛ばすことができない可能性がある一方で、ダチョウは自らの翼の硬さに適した速度で砂浴びを行っている可能性が示唆された。

P017

モズが尾を回転させるのはいつ？

安田耕治(テクノ中部)

モズは尾をよく振ることが知られている。上下に振ることが多いが、回転させることも多い。鳥が尾を動かす行動の機能について、幾つかの研究がされており、獲物をあぶりだす行動とする仮説、捕食者に対するアピール仮説、配偶者に対するアピール仮説など、幾つかの仮説がある。仮に配偶者に対するアピールだとすると、観察される時期は繁殖期に限られるはずである。そこで、尾を回転させる行動(以下、尾回転)の機能を検討するに先立ち、まずはモズの尾回転が1年のうちいつ見られるかを把握するため、年間を通じて観察・記録を行った。

調査の結果、「尾回転は一年中見られる」、「雌雄ともに見られるが、時期により頻度は異なる」、「巣立ち雛でも尾回転は見られる」ことが明らかとなった。これらの結果を踏まえ、尾回転の機能に関する研究アプローチを検討する。

P018*

沖縄島に生息するリュウキュウコノハズクにおける広告声となわばり防衛の関係

○武居風香(北大)、榛沢日菜子(北大)、池上隆之(北大)、高木昌興(北大)

なわばりの確保は繁殖に必要な営巣場所や餌資源を保持するうえで極めて重要であり、繁殖成功と直結する行動といえる。リュウキュウコノハズクは広告声と呼ばれる鳴き声を用いてなわばりを他個体に伝えることで、なわばり防衛をおこなっている。広告声には周波数が低いほど体サイズが大きいなどの個体の生理的特徴が含まれており、他個体に対し自らのコンディションを伝える信号として機能していることが考えられる。これにより広告声は、単なる存在の通知にとどまらず、相手のなわばり侵入に対する抑止効果や競争の回避・制御といった交渉的な役割も果たすと推察される。

本研究では、2024年および2025年の4月から7月にかけて沖縄島に生息するリュウキュウコノハズクのなわばりを確保しているオスに対し、周波数の高い広告声と低い広告声を再生し、それに対する鳴き返しと行動を記録した。鳴き返しの音声からは周波数、持続時間、音節間隔を算出した。これらの音声成分や行動の変化を比較することで、広告声から相手の体サイズを認識し、それに応じて防衛行動を変化させている可能性について検討する。

P019*

速く鳴く個体ほど適応的か？～鳴き声の速さが表す情報の検討～

○堀内晴 1・澤田明 2・金杉尚紀 1・中村晴歌 3・坂井充 1・中田知伸 1・池上隆之 1・高木昌興 1 1
北大・2 早大・3 いであ(株)

多くのスズメ目鳥類やモリフクロウでは、鳴く頻度は発声者の体調や攻撃性と正の相関を持つことが知られている。鳴く速さは頻度に影響するため、鳴き声の速さも個体の質や攻撃性を表す信号として機能すると考えられる。南大東島のリュウキュウコノハズク個体群は他地域の個体群に比べて速く鳴く。本種は高密度でなわばりを構えているため、速く鳴く個体ほど攻撃性が高く、適応的である可能性がある。そこで本研究では、本種に速さの異なる声を聞かせ、反応性の違いを比較した。また、反応性の強さと個体自身の鳴き声の速さに関係があるかを調べた。さらに、鳴き声の速さと形態計測値、巣立ちビナ数との関係を調べた。その結果、速さの異なる声に対する反応性に有意な差はなかった。また、鳴き声の速さと反応性の強さには相関がなかった。よって、鳴き声の速さは攻撃性を表す信号ではないと考えられた。形態計測値と鳴き声の速さには有意な相関がなかったが、巣立ちビナ数が多い個体ほど速く鳴く傾向が見られた。このことから、鳴き声の速さは適応度の高さを示す信号であることが示唆された。

P020

巣箱で営巣したフクロウの餌内容について

松永聡美(日本鳥類保護連盟)○・藤井幹(日本鳥類保護連盟)・秋山幸也(相模原市立博物館)

フクロウは本来、大系木の樹洞を使って営巣することが知られているが、近年そのような樹洞が減少し、猛禽類の巣の上や地面に直接産卵するなどのケースが知られている。そのためフクロウの営巣環境を確保するために巣箱を架設する活動が全国で行われているが、今後さらにフクロウの保全を推進していくためには、給餌内容やその割合についても把握し、その餌動物が生息できる環境についても考えていく必要がある。そこで、日本鳥類保護連盟で架設した巣箱と、サントリーホールディングス(株)で架設した全国計 27 個の巣箱のうち、営巣した巣箱(2021 年に 8 個、2022 年に 3 個、2023 年に 8 個、2024 年に 8 個)に残された餌動物の残滓を調査し、分析を行った。その結果、ネズミ、モグラ、鳥、カエルを主に食べていることが分かってきたが、場所や年によりその割合に変化が見られた。割合に変化が生じた原因について、それぞれの巣箱の周辺環境についても照らし合わせながら、フクロウの餌選択の傾向について考察し、保全について検討する。

P021

環境調査におけるシマフクロウ録音調査法の適用について

竹中健(シマフクロウ環境研)

シマフクロウは日本では北海道にのみ分布しているが、保護対象の希少種であるため種々の開発事業において生息有無を調査する必要がある。本種は近年生息数が 100 つがい以上に回復し生息域が拡大しているため、既知生息地に加え未確認地域でも調査が必須となってきた。シマフクロウは夜行性で目視困難な鳥類であるが、定着性が強く、大音量の鳴き声で周年縄張り宣言を行うため、これまでのアセス等調査では人的資源の投入で生息確認を実施してきた。しかし近年、録音機材の価格低下と機能性の向上で長期間の環境録音が可能になったことから、今後生息有無の一次調査は録音調査主体に切り替えるべきである。録音調査は非侵襲的に長期間の情報収集が可能で、調査者の

能力や人工数に依存することが無く、録音データが残るなど数々の利点がある。その一方で機械の選定や効果的配置、解析方法など未だ調査方法が一定していない部分がある。本発表では録音調査の一般適用に向けて、ノウハウや適切な調査方法、またこれまでの直接調査や生態情報の知見から導き出される録音結果の解釈などについて報告する。

P022*

カラス口腔内における味を感知する構造の解析

○高橋このか(宇都宮大院・地域創成)・青山真人(宇都宮大・農)

カラスによる被害防止のための様々なグッズの中には、味覚や嗅覚への忌避刺激を狙ったものもあるが、そもそもカラスの味覚に関する研究はわずかしが行われていない。本研究では、カラスの口腔内において味を感知する構造の分布や種類を形態学的に明らかにすることで、カラスによる被害の軽減につなげることを目的とした。

今回、ハシブトガラス 2 羽と、対照としてすでに味覚受容体に関して報告のあるニワトリ 1 羽の舌と下顎を用いてハマトキシリン・エオジン染色及び免疫組織化学染色を行い、味覚受容体の分布を観察した。

その結果、ニワトリの下顎には味蕾と考えられる構造が存在しており、これはうま味受容体に反応することが報告されているビメンチンによって染色された。ハシブトガラスの下顎にも味蕾に類似した構造があり、同じくビメンチンによって染色されていた。よって、ハシブトガラスの下顎にも、味蕾と考えられる構造が存在した。また、神経細胞のマーカーである NSE と、ヒトの味蕾に対して反応する PGP9.5 にはニワトリとハシブトガラス、いずれも味蕾と考えられる構造は染色されなかった。

P023

鳥類の飛翔にかかわる筋肉と飛翔速度の関係の解明

栗原望(宇都宮大学)・○小田中楽斗(宇都宮大学)

鳥類の飛翔にかかわる研究は、多岐にわたり行われてきたが、飛翔筋と飛翔速度の関係性は明らかにされていない。そこで本研究では、飛翔に関わる 8 つの筋の筋長や PCSA を観測速度およびいくつかの計算によって求められる速度と比較することでこの関係性を明らかにした。

継続的な羽ばたきを行う種が大胸筋と小胸筋の筋長において観測速度と正の相関がみられた。つまり、大胸筋と小胸筋の速い収縮による翼の上下運動が飛翔速度上昇に重要であることが示唆された。同様に、継続的な羽ばたきを行う種では上腕骨三頭筋の筋長においても観測速度と正の相関がみられた。羽ばたきにおける翼の上下の移行は肘を屈曲させて行うため、肘の速い屈曲・伸展運動が飛翔速度の上昇に重要であると考えられる。また、2 本の撓側主根伸筋を持つ種では筋長の増加に伴った飛翔速度の低下がみられなかった。この2本の撓側手根伸筋は異なる種類の筋線維によって構成されており、そのため、空気の渦による負荷がかかりやすい翼端において、異なる筋タイプによる反応が筋長の増加による飛翔速度の低下を緩和している可能性がある。

察予定である。

P027*

ダイウコノハズクだって風に乗るのか？～気象条件と移動距離、利用植生の関係～

○金杉尚紀(北大・院理)、江指万里(北大・院理)、熊谷隼(北大・院理)、澤田明(早大・人科)、高木昌興(北大・院理)

空を飛ぶ鳥類は行動に風速や降水から大きく影響を受けている。特に広い行動圏を持つ海鳥では強風を利用して効率的に長距離を移動しているとされる。一方で、小さな行動圏の中で行われる繁殖期の行動に気象条件がどのように影響しているかはほとんど明らかになっていない。そこで、留鳥であるダイウコノハズクを用いて気象条件による行動の変化を検討した。2020、2021、2023年の繁殖期に本種にGPSロガーを装着した(55個体、28なわばり、109晩)。強風時に移動距離が長くなる傾向があった。また、風速が弱い時も移動距離が少し長くなる傾向があった。風が弱い時にオスは移動距離が長く、メスは移動距離が短かった。風が強まると、メスの移動距離も長くなり、その性差が小さくなった。また、オスでは風が強い時に林内の利用が増えた。その一方で、メスは風速が強くとも林外の利用が多かった。本種でも海鳥と同様に風速が強い時に移動距離が長くなる傾向が見られた。また、メスでは林外の利用が増えるため、風速からの影響もより強く受けると考えられた。

P028*

レーザー測距計 VECTOR を用いた鳥類飛翔軌跡の形状による分類の試み

○中込大河(日本気象協会)・島田泰夫(日本気象協会)・藤井直紀(日本気象協会)・板谷浩男(日本気象協会)・工藤嘉晃(日本気象協会)・鎌田和歌(日本気象協会)・桃谷辰也(日本気象協会)

近年、レーザー測距機器の普及に伴い、動物の行動記録への応用が検討されている。SAFRAN Vectronix 社製の VECTOR もその機器のひとつである。鳥類の行動追跡に用いる場合、指定した秒間隔でレーザーを連続発射し、その空間位置を飛翔軌跡として取得することが可能である。本研究では、飛翔軌跡の形状に基づく分類への応用可能性について検討した。本機を用いて複数種の飛翔軌跡データを取得し、軌跡を特徴づける変数を抽出し、これらの変数についてクラスター分析や線形混合モデルを用いた解析を行った。その結果、平面(2次元)上の軌跡からでも、分類群ごとに軌跡の特徴を抽出できる可能性が示唆された。一方で、平面から空間(3次元)にすることで、分類の精度向上が期待されるが、取得したデータについてはデータ処理の段階で不正確な情報が混じる可能性があり、補正の手法を検討している。また、データ取得時の環境要因や、観測個体の行動要因も解析結果に影響している可能性がある。今後は、これらの課題について検討を進め、より詳細な分類の実現可能性を探っていききたい。

P029

カラスの生活のありさま～愛知県農業総合試験場のカラスの生態～

○西村光由(愛知農総試)・伊藤真(愛知農総試)・林高弘(愛知農総試)

カラスによる農業被害を防止する観点から、①カラスが強く反応する色、②偽物と本物のエサを見分ける能力、③粘着物質の忌避効果についてカラスの行動と反応を観察した。

①では、トマトを用いた場合、緑色の未熟果を意識的に避け、赤色の完熟果を選択した。また、完熟果をラッカーで緑色に染色し、未熟果を赤色に染色した場合でも、全ての個体が赤色に染色されたサンプルを選択した。②については、カラスはトマトに似せたサンプルと本物のトマトをすぐに見分けることはできず、ブドウを用いた場合においても、ゴム製ブドウと本物のブドウをすぐに見分けることができなかった。③については、ねずみとりを用いられる粘着物質を塗布したトマトを摂食させたところ、粘着物質が嘴や羽に付着することを極度に嫌がり、その後 22 日間粘着物質を塗布していないトマトにも近づくことはなかった。

これらの結果を基にカラスの学習、記憶力の高さを逆手にとることで、効果的に果樹(黒系ブドウ)の色づきはじめてから収穫までの約 40 日間被害を防ぐことができないか、新たな試験を行っている。

P030*

ハシブトガラスとハシボソガラスにおける歩容の比較

○岡村早紀(宇都宮大院・地域創生)・菊地デイル万次郎(東農大・農)・青山真人(宇都宮大・農)

鳥類が地上を移動する方法(歩容)は、左右の脚で前方に短い跳躍を繰り返す「ホッピング」と、左右の脚を交互に出して移動する「ウォーキング」に大別される。一般的に鳥類は、いずれか一方の歩容しか用いず、生息環境や体重に関連して、最適な歩容を選択していると考えられている。ハシブトガラス(以下ブト)とハシボソガラス(以下ボソ)は両方の歩容が可能な鳥類であるが、その歩容選択に関する行動戦略や背景については未解明な点が多い。本研究は、この2種が使用する 2 つの歩容を比較し、歩容の選択に影響している要因の検討を目的とした。野生の個体を餌で誘引し、採餌のために飛来したカラスの移動の様子をステレオ撮影し、脚の運動を解析した。その結果、自由に採食している間、ブトはホッピング、ボソはウォーキングの使用割合が高い結果となった。また、両種のウォーキングにおいて、片脚1歩の速度と歩幅の係に正の相関が見られ、1歩あたりの速度の増加に伴い歩幅が増加する傾向にあった。そして、両種とも歩幅の大きさに関わらず、1 歩に要する時間に大きな変化はなく、ほぼ一定であった。

P031

ホンセイインコの住居事情

○阿部仁美(千葉科学大)

ホンセイインコ *Psittacula krameri manillensis* は、1969-1970 年にかけて動物卸売業者の荷下ろし時の事故により一度に大量の羽数が逃げ出し、1969 年に東京都で初記録された後、各地に広がった。現在は東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県、群馬県で観察されている。本種は生態系被害防止外来種リストにおいて「その他の総合対策外来種」としてリストアップされており、生息地拡大が懸念されている。本研究では、本種の営巣に関して基礎的な情報を得ることを目的とし、CCD カメラおよび肉眼による巣内・外部での行動観察の他、幼鳥に足環を装着し、一部巣立ち後の行動を追った。営巣が確認された木は、高さにはばらつきがあり、洞は比較的深く、入口は狭かった。繁殖期には洞内部を削り、内部を改装している様子が見られた。洞をミツバチに奪われる例もあったが、翌年は本種が営巣を行っていた。先行研究において孵化率が高いと報告されているが、巣立った幼鳥は捕食されるケースもあった。本種は繁殖に適した場所を選択しているが巣立ち後の捕食圧が高い傾向にあると考えられる。

P032*

ハシブトガラス剥製ロボットに対するハシブトガラスの反応

○相野谷叶乃(宇都宮大・院・地域創生)・青山真人(宇都宮大・農)・塚原直樹(株式会社 CrowLab)・安藤隆寛(中部電力株式会社)

カラスによる被害を軽減するため、カラスの剥製を利用してカラスの行動を操作する試みがある。特に頸部などが自動的に動く「ロボット剥製」は、通常の剥製よりも顕著な反応を引き出すことが報告されているが、まだ不明な点が多い。本研究では、頸部が自動的に動くハシブトガラス(*Corvus macrorhynchos*)の剥製ロボットに対する、飼育下のハシブトガラスの行動学的反応を検討した。作成したロボット剥製を、2羽で飼育されているハシブトガラスに提示した。対照としてロボット骨格のみの提示も行った。警戒行動(翼を羽ばたかせ激しく鳴く)の回数の結果から、カラスは剥製ロボットに対して強い警戒心を持つことが分かった。また、回数を重ねるごとに、剥製ロボットに接触する頻度が増加し、これを排除しようとする行動が増強していると考えられた。一方、今回の条件においては頸部の稼働の有無は、威嚇行動の程度に影響しないことが示唆された。今後はカラスの鳴き声等を組み合わせて、カラスのどのような要素がどのような行動学的反応を引き起こすのか明らかにしていきたい。

P033*

谷津干潟でみられるハシボソガラスによる貝落とし行動の季節性と個体差

○中辻百合子(東邦大)・秦陸歩・井上英治(東邦大)

殻に包まれた食物を高所から落として割る餌落とし行動は、落とす餌や場所、高さの選択が重要で、認知能力を要すると考えられる。行動頻度の季節差や個体差の解析は、その適応的意義や学習の解明において重要である。本研究では、ハシボソガラスが二枚貝を落とす行動が一年中観察できる谷津干潟で、痕跡数調査と付近に営巢している3ペアの行動観察を行い、行動頻度に影響する要因を検討した。2ペア以上が繁殖に成功している年では、痕跡数は3-7月(繁殖期)の方が8-2月(非繁殖期)より多く、観察ペアが繁殖に失敗した年では、繁殖行動が見られた時期の方が見られなかった時期よりも多かった。さらに、抱卵が確認され個体が区別できた1ペアでは、抱卵期は雄と考えられる個体のみ貝落とし行動が観察され、それ以外の時期は雌雄どちらも貝落とし行動が確認された。また、若い個体の中には、貝落とし行動が確認されない個体や、貝を割るのに時間を要する個体もいた。以上の結果は、ハシボソガラスの貝落とし行動は、頻度に個体差があり、学習が重要で、繁殖行動をしているときに多いことを示している。

P034

太陽光発電所におけるタカによるカラス追払いの効果検証

○小原愛美(株)オオヨドコーポレーション

カラス類はフン害・設備の破損等の被害を引き起こすことから、カラス類にとって脅威となるタカを用いた追払いが全国で行われているが、その効果を検証したものは少ない。本研究では太陽光発電所内でのタカ(ハリスホーク)によるカラスの追払いの効果を定量的に評価するため、自動撮影カメラによるカラスの撮影数と、追払い中のカラスの飛来数によって効果の検証を試みた。同時に、太陽光

発電所内でのカラスの行動を把握するために、撮影されたカラスの行動観察や、ソーラーパネル上の残置物の撮影・回収を行った。

追払いの開始前に比べ開始後はカラスの撮影数が減少した。追払い中のカラスの飛来数も追払いの回数を重ねるにつれて減少した。画像や目視による観察により、カラスがパネルの下にあった石などをパネル上まで持ち運んでつつく様子や、パネル下の水場で水浴びや休息を行っている様子が観察された。パネル上からは、カラスが持ち運んだと考えられる石(最大 116g)やエサの欠片などが回収された。カラスはソーラーパネル周辺を採餌・休息のための場所として利用していることが示唆された。

P035*

動物園におけるハシブトガラスとハシボソガラスの採食行動の種間差

○窪田智文(東邦大)・水田拓(山階鳥研)

日本の都市部ではハシブトガラスとハシボソガラスが見られ、食性や生息環境の選好性に差があることが知られている。動物園は来園者の食べこぼし、展示動物の餌などの採食行動が観察しやすく、都市環境における両種の採食行動の解明に適している。本研究では、2024 年 6 月から 2025 年 5 月に千葉市動物公園において、来園者の食べこぼしが得られる中央広場と 3 種の動物展示場で定点観察を行い、カラスの個体数への来園者数や時間帯の影響を解析した。その結果、中央広場での個体数は、ハシブトガラスでは来園者が多い時に、ハシボソガラスでは食事中の来園者数が少ない時に多いことがわかった。また、ハシブトガラスは地上よりも人工物上を利用する割合が高く、ハシボソガラスは人工物上よりも地上の利用割合が高かった。さらに、ハシブトガラスのみで展示動物の餌の採食が見られ、展示場に来る個体数は給餌後 30 分間に多かった。これらの結果は、動物園においてハシブトガラスは積極的に人為的な食物を利用しているのに対し、地上利用の多いハシボソガラスではその利用が限定的であることを示唆している。

P036*

クロツラヘラサギ(*Platalea minor*)の排泄行動の解明

○長田昇磨(都市大)

動物の排泄物は、栄養塩を供給し一次生産を支えるなど、生態系の栄養塩循環に重要な役割を果たす。特に水鳥の排泄物は水域の特性を大きく変化させるが、その排泄場所選択は主に無作為であると考えられてきた。しかし、クロツラヘラサギ(*Platalea minor*)は水域での採餌中、水域を避け排泄する行動を確認している。この行動は水域から陸域への選択的な栄養塩輸送という新たな側面が示唆された。先行研究では、感染リスク軽減仮説が立てられているが(Bayer 1980)、本行動の報告数は依然として少なく、未だになぜこのような行動を行うのか明らかにされていない。そこで本研究では、クロツラヘラサギを対象とし、近年飛来数が増加中の東京湾奥に位置する葛西海浜公園・葛西臨海公園で調査を行った。その結果、2024 年 11 月から 2025 年 6 月にかけて 9 羽のクロツラヘラサギを追跡し、主に採餌中の排泄行動を 87 回記録した。観察された排泄行動データに基づき、排泄場所の選好性と排泄行動の傾向を定量的に分析し、本行動の解明を目指す。

P037

餌量の季節変化と農法がアカモズの繁殖成功に与える影響

○寺田透真(人環大)、岡久雄二(人環大)、神谷頼杜(人環大)、近藤七海(人環大)、三宅悠太(人環大)、原星一(アカモズ保全 WG)、藤田知弥(信大)、赤松あかり(アカモズ保全 WG)、米山富和(アカモズ保全 WG)、松宮裕秋(アカモズ保全 WG)

アカモズは国内希少野生動植物種として保全が進められており、個体群の存続には繁殖期における餌資源の確保が重要である。アカモズの生息環境の一部はりんご果樹園であり、栽培方法の違いがアカモズの餌量に影響しうると考えた。そこで、農法がアカモズの餌資源動態および繁殖成績に与える影響を明らかにすることを目的とし、わい化および喬木栽培圃場を対象に、昆虫群集の季節変動とアカモズの繁殖活動を比較検討した。喬木圃場では繁殖期に昆虫量が多く、発生のも明瞭な時期が2回観察された。一方、わい化圃場では発生量が少なく時期が不明瞭であった。アカモズの繁殖期間は圃場間で有意差がなく、繁殖時期の農法依存性は認められなかったが早期繁殖個体ほど多く産卵した。また、繁殖を失敗した場合の再繁殖率はわい化圃場では7月中旬ごろにかけて低下したが、喬木栽培においては8月初旬まで比較的高かった。これらの結果より、アカモズは繁殖時期を局所的な餌量のほかに、様々な要因により制御している可能性が考えられる。また、繁殖期間を通じた餌資源の安定供給が繁殖成功に寄与する可能性を示唆する。

P038*

クマタカの満1歳および満2歳における換羽の地域差異

○猪狩敦史(クマ観)・伊関文隆(希少研)・先崎愛子(クマ観)・先崎啓究(クマ観)

クマタカは、北海道から九州までの山地に広く分布している。森林性の猛禽類であるため観察が難しく、生態や換羽については不明な点が多い種であったが、近年の調査・研究・観察により、それらは徐々に解明されつつある。

クマタカの幼鳥の多くは、巣立った翌年の3月までに独立し、残った個体も徐々に親鳥の行動圏から分散するが、8月(満1歳)以降も養育される個体がいるため、満1歳の換羽は観察可能である。しかし、満2歳になると、ごく稀に養育されている個体はいるが、ほとんどの個体は分散してしまうことから、養育個体のみによる満2歳の換羽状況の知見は乏しい。そのため、今回は各地から養育個体に限らず満2歳までの個体の写真を集め、換羽状況を整理することで、満2歳までの換羽について推定した。さらに、クマタカは繁殖行動や時期に地域差があることから、換羽の進行スピードについても着目して調べた。

その結果、換羽の進行は本州の個体群が北海道と九州よりも遅かった。また、尾羽の換羽進行は差異がある傾向がみられた。その地域環境や気候、生態的要因と換羽の関連について考察したい。

P039*

スズメ目鳥類における渡りの日周性:その進化的起源と夜間への移行

○田中涼太郎(弘前大学)・原星一(日本渡り鳥保全・研究グループ)・曾我部篤(弘大)・ムラノ千恵(弘大)・東信行(弘大)

多くのスズメ目鳥類は夜間に渡りを行う。この戦略は、日中の捕食者からの回避やエネルギーの節約に有利とされるが、その進化的起源については未解明な点が多かった。本研究では、津軽海峡で5年間実施した昼夜連続定点観測に基づき、この地域を渡るスズメ目鳥類75種の渡りの日周性を検

討した。系統樹と組み合わせ祖先形質の復元を行った結果、現在の夜間渡りの卓越が祖先から受け継がれたものではないことが示され、この地域におけるスズメ目の渡りの共通祖先は「日中渡り」であった可能性が極めて高いことが示唆された。

この結果は、現在の夜間渡りが祖先から受け継がれた形質ではなく、複数回独立に進化した派生的な戦略であることを示す。祖先の渡りが日中であったのは、鳥類が元来持つ昼行性の生理・感覚システムを流用することが、進化的に最も抵抗の少ない経路だったためと考えられる。その後、多くの系統で夜間への移行が起きたのは、捕食回避・採餌機会の増大・エネルギーの節約といった夜間渡りの利益が、新たな適応を促す強力な選択圧となったためと考えられる。

P040

葛西のクロツラヘラサギの休息行動のサンプリング分析

○濱川歩(葛西のクロツラ、都立大)・小久保守晃(葛西のクロツラ)・上原文弥(葛西のクロツラ)・北村亘(葛西のクロツラ、東京都市大)

クロツラヘラサギは冬季に西日本を中心に飛来するが、東京湾の葛西臨海公園・葛西海浜公園では近年定期的な飛来が確認されている。2022年から2シーズンにかけて越冬・通過個体を対象に個体数や行動範囲などの基礎調査、外見による個体識別などを行った。その結果3月下旬から渡去する5月上旬までの期間は、主に葛西臨海公園鳥類園上の池で日中に休息していることを確認した。野外鳥類を対象とした目視での全生起サンプリングは稀であるが、本調査地は個体識別の難易度が低く、行動パターンを推測できるため実現することができた。2024~2025年は3月下旬から5月上旬にかけて、上の池で休息した計7個体(成鳥・若鳥・幼鳥)を対象に、休息中の行動に対して連続記録による全生起サンプリングを実施した。その結果、計20日65時間以上のサンプリングデータを取得できた。本学会では成長段階や滞在期間の視点から個体間の行動頻度の差異について分析し、報告する。また、今後のサンプリングに活かすため、行動のカテゴリの細分化や追加についても検討し、更なるデータの蓄積を目指す予定である。

P041*

鳥類が主食になったハヤブサが都市適応をする？

○井上茉優(海城中高、日本野鳥の会東京)、北村亘(東京都市大学)

かつて岩壁に営巣を行っていたハヤブサ *Falco peregrinus* は、2000年以降、都市部の高層ビルでの繁殖が確認されるようになった。都市部に生息するハヤブサの食性を知ることは、都市に侵出した要因の理解につながる。本研究では、大阪府の関空泉大津ワシントンホテルにて2004年から繁殖をしているハヤブサの食性について、泉大津ハヤブサ・サポートクラブで撮影している見守りカメラのデータを使用し解析を行った。その結果、岩壁で繁殖したハヤブサと同様にヒヨドリを主に捕食している一方、他に15種の鳥類が確認されただけであった。これらは昆虫や齧歯類を捕食していたとする先行研究の知見とは大きく異なる。これらのことから、ハヤブサが都市部での営巣が可能になった要因には、岩壁に似たビルの構造を利用したことに加え、ほとんどの餌生物を都市部に生息する鳥類へとシフトしたことによることが示唆された。また、餌生物の大きさはさほど重要ではないことも示唆された。

P042*

ウミネコが選好する水田環境の特性とその利用パターン

○清稜太(新大院)・永田尚志(新大)・本間航介(新大)

カモメ類は餌の利用可能性の変動に応答し、利用する餌と採餌ハビタットを変える。日本に広く分布するウミネコは水田を利用することが知られている。水田は1筆ごとに営農活動によっても環境特性が変化するため、ウミネコは水田環境の変化に応答して水田を利用していると推測される。新潟県佐渡島において2024、2025年3月下旬から7月中旬にかけてウミネコの水田利用状況を記録するライン・定点センサスと水田環境調査を実施した。その結果、田植えが遅い水田ほどウミネコに利用されやすく、イネ丈の低い水田が選好された。また、トラクターによる耕起がおこなわれた水田もウミネコは多く利用した。さらに、トキの再導入促進のために導入された冬期湛水水田がウミネコに利用されやすい傾向があった。季節的にみると、繁殖期後半に海から離れた水田をウミネコは多く利用するようになった。これらの結果から、ウミネコが利用する水田の選択には圃場での農法と営農活動が影響しており、繁殖スケジュールとイネの生育状況が水田の季節的な利用パターンに影響を及ぼすと考えられた。

〜〜

P043

都市近郊のアオサギ繁殖地における他のサギ類の加入・定着とその要因:複数地点の比較から

白井剛(都留文科大／和光大)

アオサギだけで繁殖していた都市近郊の複数の集団繁殖地に、近年コサギ・ダイサギ・ゴイサギなどの他種が加わる例が見られるようになった。演者は東京・神奈川などの複数地点で長期的に調査を行っており、特に東京都江東区の横十間川の繁殖地ではコサギが急増し、ゴイサギ、カワウも定着するなど、コロニーの種構成に明確な変化が生じている。また練馬区の石神井公園の繁殖地ではコサギが加わったが、日野市の多摩動物公園では主にダイサギが増え、コサギは限定的である。今回は、こうした他種の加入・定着・消失の違いを、営巣木の種類や、周囲の植生構造、周辺の水辺環境といった、営巣場所や周囲の環境要素との関係から検討する。コサギやゴイサギは、低木やササなど下層植生の存在、密な枝ぶりを好んで営巣する傾向があり、それら加わりやすさを左右している可能性がある。これらの観察をもとに、都市部におけるサギ類の混合コロニー形成の成立条件について考察し、環境変化との関係を含めた繁殖地動態の理解に向けた知見を示したい。

〜〜

P044*

飼育下モズにおける単独育雛とグループ育雛の成長過程に伴う行動変化の比較

○渡邊竣介(生息域外保)

本研究では野生生物生息域外保全センターで人工孵化、育雛されたモズ (*Lanius bucephalus*) 3羽を用いて、単独育雛された個体と2羽で育雛した個体の巣立ち後の行動の変化と原因を明らかにする目的で比較研究を行った。行動比較については水浴び、はやにえ、餌乞、地上に降りる、羽繕い、自力摂食を観察項目として1日3回、6時から7時、12時から13時、17時から18時の間で、単独個体では2024年6月9日から7月28日の50日間、複数個体では6月10日から7月28日までの49日間、時間帯観察をビデオカメラで記録した。その結果、月・金曜日と土・日曜日の行動の差が認められ、外部刺激が行動に影響したと認められた。この外部刺激が単独で育雛した

個体及び複数で育雛した個体に対し行動回数の違いに現れるかどうかにも検討する。以上により、育雛形態の違いがモズの成長過程における社会行動に影響を与える可能性を示唆した。本研究は、将来的な人工育雛下での放鳥個体の適応評価や、保全放鳥事業における社会化プロセスの重要性を考慮する上で重要な知見となるであろう。

P045*

ウミネコの繁殖期と非繁殖期における採餌行動の変化

○山本弥景・但野一成・小澤光莉・仁部駿介・伊藤元裕(東洋大)

繁殖期の親鳥は、雛への給餌や巣の防衛のため繁殖地に頻繁に戻る必要があり、その行動は時空間的に制限を受ける。非繁殖期はこうした制約がなくなるが、繁殖で消耗したエネルギーの回復や越冬のためにエネルギー要求を満たす必要がある。沿岸性の海鳥であるカモメ科鳥類は、海洋資源と陸上資源の両方を柔軟に利用する能力を持ち、その利用ハビタットは多様である。本研究では、ウミネコ *Larus crassirostris* に GPS ロガーを年間を通じて装着し、繁殖期と非繁殖期の採餌場所や行動特性を比較・分析した。1 日の採餌時間は、繁殖期より非繁殖期に増加した。採餌域は、繁殖期には海域、非繁殖期には陸域(内陸、河川、漁港周辺等)の利用が増加し多様化した。特に漁港の利用の増加が顕著であった。越冬地は、個体毎に異なった。繁殖中は、雛に不可欠な海域由来の餌をどの個体も共通して利用するが、非繁殖期には、個体毎に多様な採餌場所を利用し、質や採餌効率は悪いものの、少ないエネルギーコストで得られる陸域の餌(漁港の投棄魚や内陸の人為由来の餌等)も多く利用すると考えられた。

P046

伊豆諸島祇苗島におけるオーストンウミツバメの人工巣利用

○山本裕(日本野鳥の会)・寺嶋太輝(東京農工大院・獣医)・手嶋洋子・田尻浩伸(日本野鳥の会)

オーストンウミツバメは 11 月から 5 月にかけて繁殖し、ヒゲスゲやハチジョウススキ等の自生する地面に穴を掘り、営巣する。繁殖地には夜間に戻り、日の出前に飛去するため観察が困難で、生活史や生態は不明な点が多い。

筆者らは、本種の繁殖生態の基礎的情報を収集するため、伊豆諸島神津島の属島・祇苗島において、2023 年 10 月に、木製の人工巣 12 個を 2 か所に分けて設置し、2023—2024 年、2024—2025 年の 2 繁殖シーズンにわたりその利用状況を調査した。

本報告では、人工巣の形状や設置環境、利用状況のほか、センサーカメラによる鳥の出入りの記録分析や繁殖地での捕食者の情報等を紹介する。なお、環境省のモニタリングサイト 1000 事業によると、同繁殖地での本種の推定巣穴数は 2011 年以降 4 期にわたって半分以下に減少していることが報告されている(環境省自然環境局 2024)。人工巣の設置とセンサーカメラの活用により、本種の基礎的な繁殖生態の把握が期待され、将来的には繁殖失敗の原因特定と本種の保全策の立案にもつながるものと考えられる。

P047*

カンムリウミスズメの生態的重要海域の特定

○廣木美帆(帝科大院)・森貴久(帝科大)・田尻浩伸(野鳥の会)・手嶋洋子(野鳥の会)・山本誉士(麻布大)

カンムリウミスズメ *Synthliboramphus wumizusume* は、日本近海の限られた島嶼を繁殖地とする絶滅危惧種であり、その生息環境の保全が喫緊の課題となっている。一方、近年進められている洋上風力発電の導入開発に伴い、海鳥類への影響が大きく懸念されており、とりわけ繁殖地周辺海域における行動実態の把握が重要視されている。本研究では、カンムリウミスズメのセンシティブティマップ作成を目的として、伊豆下田沖の神子元島で繁殖する個体を対象に、2018 年から 2025 年にかけて 4～5 月にバイオロギングを用いた行動調査を実施した。結果、GPS ロガーにより 13 個体から行動データを取得した。予備的な解析結果からは、記録された位置情報から、繁殖地周辺の特定海域において比較的利用頻度が高い傾向が示唆されている。今後、洋上風力発電の建設予定海域との重複状況を検討することで、感受性の高い海域の特定とセンシティブティマップ作成への応用を目指す。

P048*

オンラインフォームを用いたイソヒヨドリの分布調査—神奈川県相模原市の事例

○増田侑太朗(都立大)・立木佑弥(都立大)

イソヒヨドリは、日本では海岸部の岩場を主な生息地としている。しかし、1990 年代以降、近畿地方や関東地方を中心として本種の生息地は内陸部へと拡大していることが報告されている。また、近年では山間地域でも生息が確認されている。神奈川県相模原市でも高い頻度でみられるようになったことから、市内の広域での分布状況を調査した。相模原市では市内の自然の保全のための基礎資料の集積などを目的として、市民ボランティアによる「自然環境観察員制度」を実施している。自然環境観察員の協力のもと、2024 年 4 月から 2025 年 6 月までの期間、現地調査およびオンラインフォームにより観察記録を収集した。

相模原市内では 36 件の観察記録が得られ、本種が市内の広い範囲に分布していることが明らかになった。また、本種の確認地点を中心とする半径約 100 m の範囲の景観について JAXA 高解像度土地利用土地被覆図をもとに解析した結果、人工構造物の割合が約 90 %であったことから、本種は市内でも都市景観に適応していると考えられる。

P049

クロサギの越冬期における羽色と採餌行動及び利用環境の比較

植村慎吾(バードリサーチ)

クロサギには黒色型と白色型の二型があり、二型の割合は地理的に異なっている。羽色によって採餌方法に違いがあるという国外での先行研究がある。しかし、国内で繁殖期に得た記録からはそのような違いが見られなかったことを 2022 年の鳥学会で発表した。今回は、繁殖期の記録をとったのと同じ南西諸島の宮古島で、越冬期に同様の記録をとって比較を行った。越冬期に白色個体が少なく十分な記録を取ることができなかったが、採餌行動に羽色による明確な違いは見られなかった。バードリサーチのバードノートや eBird、iNaturalist などの記録を参照して越冬期の羽色分布を調べた結果も報告する。

P050

長野県北部におけるチョウゲンボウの営巣場所周辺における越冬

○本村健(中野市教育委員会)・中山茉奈美(十三崖チョウゲンボウ応援団)・久野真純(広島大・先進理工)

チョウゲンボウの日本での越冬と繁殖の分布は拡大している。両時期の分布拡大の同調要因として、繁殖に有利なため営巣場所周辺での越冬が推測される。そこで1950年代には積雪により採餌可能な餌動物が少なく、越冬期に本種の個体数が減少していた長野県北部で、2024年から2025年の越冬期(10月-2月)と繁殖期(3月-6月)の詳細な分布を、スマートフォンのマップで位置をクリックする観察地点報告システムを用いた市民調査により解明した。そして両時期に報告地点で餌動物のハタネズミと小鳥類の密度を調査し、営巣場所周辺での越冬について考察した。市民調査の結果、越冬期に38例、繁殖期に33例の報告があった。そのうち営巣場所周辺で記録されたのは、越冬期は13例6箇所、繁殖期は26例8箇所であった。越冬期に記録された営巣場所6箇所は、その後全てで繁殖が確認された。また各時期13地点の餌動物の生息密度には、有意な差は認められなかった。長野県北部では近年餌密度が越冬期と繁殖期で差がなく、営巣場所周辺での越冬が可能であり、その場所は繁殖に利用されると考えられた。

P051*

日本のライチョウ雄における秋季の行動圏とねぐら行動:GPS追跡による知見

○堀田昌伸(長野県長野市)・尾関雅章・黒江美紗子(長野県環境保全研究所)

北アルプス北部爺ヶ岳に生息する雄ライチョウ1個体を対象に、GPSロガーを用いて30日間連続で取得した位置情報をもとに、秋季の行動圏およびねぐら行動の空間的特徴について報告する。カーネル密度推定により、全期間および10日間ごとの行動圏を算出し、植生タイプとの関係を検討した結果、行動圏は期間によって変化し、特にハイマツ林や風衝草原との重なりが多かった。ねぐら地点は毎晩変化し、特定地点への集中は見られなかった。こうした柔軟なねぐら選択は、気象条件や環境構造に加え、捕食リスクの回避といった防衛的戦略の可能性も示唆される。発表では、これらの知見を通じて、秋季におけるライチョウの空間利用と環境適応の特性について考察する。

P052

始原生殖細胞の凍結保存によるニワトリ遺伝資源の保全

○奥寄雄也(名大)・西島謙一(名大)

ニワトリは世界中で飼育される代表的な家禽である。世界各地には様々な品種のニワトリが存在し、我が国も多数の固有国産鶏品種を有している。しかしこうした貴重な品種は、鳥インフルエンザの流行や農業人口の減少により危機にさらされている。一方で巨大な卵黄や卵殻を持つ鳥類は、哺乳類では一般的な受精卵の凍結保存による遺伝資源の保存が困難である。その代わりとして、鳥類では始原生殖細胞(PGCs)の凍結保存が注目を浴びている。PGCsは将来精子や卵子に分化する能力を持つ生殖幹細胞であり、さらに鳥類では発生期の胚にPGCsを移植することで生殖細胞キメラを介して移植PGCs由来の子孫を得ることが可能である。したがって、PGCsの凍結保存は鳥類遺伝

資源の保存に有用な手法であると考えられている。本発表では鳥類バイオサイエンス研究センターが維持する複数のニワトリ系統に対する in vitro 始生殖細胞培養および凍結保存の試みと、本技術を他種の鳥類へ拡張することを目指した、培養 PGCs の細胞生物学的解析について報告する。

P053*

繁殖は寿命を短縮するか—歌鳥飼育個体群を用いた検討

○谷村メイチンフィオナ(北大・生命院)・相馬雅代(北大・院理)

寿命と適応価の関連は単純ではない。性淘汰形質である鳥の歌は繁殖成功に直結する一方、その発現や維持には大きなコストが伴う。それゆえ、優良な形質を発現する個体は繁殖機会を得やすい反面、そこで要する繁殖努力によって寿命が短縮する可能性がある。反対に、多大な繁殖コストを支払ってもなお生存できる「質の高い」個体は、むしろ長命であるかもしれない。実際、性淘汰形質の発現と寿命との関係性は動物種や形質によって異なり、未解明な点が多い。本研究では、歌形質と寿命の関連を明らかにするにあたり、そこに介在する繁殖コストの影響に焦点を当てて検討した。飼育下のブンチョウは繁殖履歴が明らかであり、かつ繁殖機会の多寡が歌とは独立である。繁殖コストの指標として、生涯繁殖回数・産卵数・孵化数・巣立ち雛数などを用いた。卵数はメスにおいては産卵能力、オスにおいては繁殖成功を反映すると考えられる。孵化数や巣立ち数は、それぞれ受精能や親の育雛努力などの側面から繁殖コストの指標となる可能性がある。本発表では、これらの指標と寿命との関係を分析した結果を報告する。

P054*

ハシブトガラスにおけるミトコンドリア DNA の遺伝的多様性について

上野陽彩・青山真人・福井えみ子(宇都宮大院・地域創生)

カラスとその近縁種において、ミトコンドリア DNA の *D-loop* 領域の比較や *Cytochrome b* 遺伝子における種内変異についての研究はなされているが、種内の遺伝的多様性や地域間の変異についてはまだ十分に調べられていない。また、母系遺伝するミトコンドリア DNA における変異を解析することで、その動物種の移動範囲や群れの構成を推察することができる。本研究では、ミトコンドリア DNA のうち、種間の系統解析にも用いられている *Cytochrome b* 遺伝子に着目し、栃木県真岡市・埼玉県入間市で捕獲したハシブトガラスを対象に、開始コドンから 670 塩基以降の配列(474 塩基対)の比較、検討をした。

その結果、3 タイプが認められ、タイプ1(真岡3羽、入間5羽)、タイプ 2(入間 1 羽)、タイプ3(真岡 1 羽、入間1羽)であり、今回解析した領域では、地域間の変異は認められなかった。また、すでに公開されている東京のハシブトガラスの配列と相同性を比較すると、塩基配列では 99.36-99.57%、アミノ酸配列では 99.36-100%の相同性であった。

P055

鳥類における抗がん剤治療の検討:ウズラでの分子標的薬トセラニブの薬物動態

○石井千尋(農工大)・長嶋優子(農工大)・渡部健太郎(農工大)・Ting-Wei Yu(農工大)・山本晴(農工大)・臼井達哉(農工大)・佐々木一昭(農工大)

近年、鳥類において適切な飼育環境や医療についての知見が増え、以前よりも飼育下での平均寿命が延びている。高齢個体の増加に伴い、悪性腫瘍に罹患する個体も増えており、例えば、フンボルトペンギンの胃がんや、セキセイインコでの卵巣がん、精巣がんなどが多く報告されている。抗がん剤を治療で用いる機会も増加しており、小型の動物種では経口投与可能な分子標的薬であるトセラニブが使用されることが多いが、鳥類におけるトセラニブの適切な投与量についての情報はほとんどない。

そこで本研究では、鳥類のモデルとしてウズラにトセラニブを3週間経口投与し、血液中のトセラニブの濃度を測定することによって薬物動態学的な特徴を明らかにすることを目的とした。また、トセラニブの副作用の確認のため、投与前および3週間投与後に血液検査を行った。その結果、ウズラでは犬と比較してトセラニブの最高血中濃度が低く、半減期が短かった。また血液検査において副作用が懸念される個体が認められた。これらの結果から、鳥類における適切な抗がん剤治療について検討する。

P056*

鹿児島県飫島列島におけるリュウキュウキビタキの繁殖集団の発見

○加藤銀次(長大院・総合生産)、江寄真南(鹿大院・獣医)、山口典之(長大院・総合生産)

世界で南西諸島にのみ繁殖分布するリュウキュウキビタキは、形態、囀り、遺伝構造の違いから近年キビタキとは別種として扱われるようになり、南北での地理的変異に基づき複数の地域集団に分けられることがある。発表者らは南西諸島より北に位置する鹿児島県飫島列島で本種と考えられる鳥類の生息を確認し、この集団の分類学的検討と生息状況の調査を行なった。現地での捕獲調査や音声録音、DNA サンプルの採取の後、形態、囀り、mtDNA の CO1 領域を分析した結果、本集団はリュウキュウキビタキと同定された。特に屋久島などの南西諸島北部の集団と形態、囀りが類似し、CO1 領域の塩基配列は 99%以上一致した。生息状況は囀りの確認、観察、捕獲により調査し、2025 年 6 月に 129 羽の生息を確認した。これには囀る雄が 106 羽、抱卵斑のある雌が 1 羽、巣立ち雛が 2 羽含まれ、飫島列島で確認されたものは当地の繁殖集団であると判断された。本研究により、南西諸島より北に本種の繁殖地があることが明らかになり、繁殖集団は本種の北方の集団の一部である可能性が高いことが示された。

P057*

大阪府南部に生息するフクロウの繁殖期における鳴声の分類と発声頻度の時間変化

○池上隆之(大阪府大・生命、現所属:北大・院理)・村濱史郎(日本バードレスキュー協会)・梅崎澄人(大阪公大・院農)・平井規央(大阪公大・院農)・上田昇平(大阪公大・院農)

フクロウは複数の鳴声を使い分けることが知られているが、その詳細な分類や繁殖期を通じた発声活動の動態は十分に調査されていない。本研究では、鳴声から本種の繁殖生態を把握することを目的に、2023 年 3 月から 5 月に週 1 回、連続 3 日間の夜間 12 時間、2024 年 3 月から 7 月まで毎日夜間 12 時間、自動録音装置を営巣した巣箱周辺に設置し、繁殖期を通じて音声データを収集した。そして雌雄の鳴声を分類し、発声頻度や鳴き交わしの時間変化を解析した。繁殖に成功した 2023 年には計 372 時間、繁殖に失敗した 2024 年には計 1,512 時間の音声データが得られ、成鳥の鳴声は 17 種類に分類された。本種は 18 時から翌朝 6 時までの 12 時間を通して日没頃と日出頃に盛んに発声し、繁殖期を通して 3 月に雌雄が盛んに鳴き交わり、4 月に最も発声することが

確認された。分類された各鳴声の発声割合を同月間で比較すると、3月では差が見られず、4月と5月では有意な差が見られた。本研究の結果から、本種雌雄の鳴声の種類とその発声頻度は、繁殖の成否や雛の発育の経過に応じて変化することが明らかになった。

P058

センサーカメラを用いた北海道十勝平野におけるハイタカの繁殖生態

○平井克玄(十勝ハイタカ, 北クマ)・嘉藤慎譲(十勝ハイタカ, 北クマ, ちいかん)・太田こるり(十勝ハイタカ)・道川富美子(十勝ハイタカ, 北クマ)

北海道十勝平野では農耕地の防風林や孤立林でハイタカ *Accipiter nisus* が繁殖している。本研究はセンサーカメラで巣内を撮影し、ハイタカの繁殖生態の解明を目的とした。調査は2017-2019, 2022-2024年の6繁殖期に行なった。カメラは4月下旬-5月上旬に巣内が撮影できるように設置し、8月下旬-9月上旬に回収した。ハイタカの営巣林18ヶ所、のべ24巣を巣内撮影し、17回の繁殖を記録した。産卵期間は4月末-5月下旬、産卵は平均で1.5日おきに1卵を産み、10.1日かけて最終的に一腹卵数は4.9であった。孵化の期間は6月上旬-下旬にみられ、同日に複数の雛が孵ることもあり、平均で3.4日の間に孵化が終わり一腹雛数は4.5であった。抱卵日数は平均30.6日間であった。巣立ち(枝移り)は7月上旬-中旬にはじまり、巣内育雛期間は平均25.8日であった。巣立ち雛数は平均4.2であった。巣立ち後の幼鳥が最後に巣で撮影されたのは8月上旬-中旬であった。そのほかに巣内での雛の減少や消失、カラスによる繁殖失敗も特定することができた。

P059*

伊豆諸島における渡り性陸鳥の季節的な移動パターンを音響モニタリングで探る

○船橋美月(筑波大)・谷口司(筑波大)・飯島大智(筑波大)・上條隆志(筑波大)

群島で繁殖する渡り鳥は、本土に近い島を繁殖地のほかに中継地として利用する。特に、本土から離れた島に移動する際には、本土に近い島を「飛び石」として利用する。しかし、どのような鳥が、いつ、どのように本土に近い島を飛び石として利用するのかは、未解明な点が多い。そこで本研究では、渡り鳥の移動パターンを時空間的に明らかにすることを目的として、伊豆諸島で繁殖する鳥類を対象に受動音響モニタリングにより鳴き声を記録した。録音は、2025年3月から6月に7島(大島、新島、神津島、三宅島、八丈島、八丈小島、青ヶ島)の森林において、各島2~5地点で実施した。その結果、鳴き声の記録パターンには、島間で違いが見られた。一例として、イイジママシクイの鳴き声は主要な繁殖地である三宅島や青ヶ島では、3月下旬の初認以降継続的に記録された一方、神津島では初認日以降約1週間程度断続的であった。このパターンは、伊豆諸島南部で主に繁殖する渡り鳥の春の渡りにおいて、伊豆諸島北部が飛び石として機能していることを示唆している。

P060*

神奈川県葉山町のウミウ峙における出峙方向とタイミングの月別の変化

○田中雅宏(日大生物博)・笠谷幹朗(日大院)

名島と周辺岩礁のウミウの峙において2025年1月~5月の期間中、日の出40分前から約1時

間、出峙する個体数を南北方向別に 1 分毎にカウントした。各方向へ出峙する個体数は、1～2 月は同日に記録し、3 月以降は別日に記録した 2 日分を 1 日分とみなした。

出峙個体数は、南へ向かう個体数の方が多かった。南への出峙個体数の割合は、1～2 月に約 60%、3 月に約 70%、4 月に約 80%と増加傾向にあったが、5 月には約 50%に急減した。

各日の出峙タイミングに関して、累計出峙数が総出峙数の半数に達した時刻は、1、2 月は南が平均 7～9 分、3、4 月は平均 1～5 分早かった。しかし 5 月は逆転した。

これらの南北差が生じた理由として、各個体の餌場が常に同じではないこと、隣接する他の峙までの距離が南北で異なること、餌場までの距離が南北で異なることなどが影響したと考えられた。南は餌場の範囲が広く、多くの個体が遠い餌場に向かうと推測した。5 月に出峙個体数の比率が急減した理由は、繁殖地への渡りによる峙利用個体減少に伴い、南の遠い餌場を利用しなくなったためと推測した。

～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・

P061

ハクセキレイの集団ねぐらにおける就峙個体数の推移と夜間採食の記録

○本多里奈(埼玉県自然博)

カモメ類など、昼行性の鳥類の一部は人工光を利用して夜間採食を行う。昼行性の鳥類のうち、ハクセキレイは夜間も比較的明るい場所に集団ねぐらを形成することが知られている。このことに着目し、本研究では深夜営業のガソリンスタンドに形成されたハクセキレイの集団ねぐらで、①就峙個体数と②夜間採食の有無および採食個体の行動・形態的特徴を記録した。

就峙個体数は冬期に最大となり(889 羽)、繁殖最盛期の 5 月～6 月に最小となった(0 羽)。この傾向は、暗い環境で就峙する他地域のハクセキレイや他のスズメ目鳥類と同様である。

夜間採食は夏～秋に確認され、冬季には観察されなかった。夜間採食をおこなっていた個体の中には、足や趾、翼を損傷しているものが頻繁に見られ、7 月上旬には繁殖中と思われる個体の採餌も確認された。個体のほとんどは、照明に集まった、あるいは自動車に轢かれた昆虫類を捕食していた。これらのことから、就峙個体数の大小に関わらず、餌となる昆虫類が発生する時期に、日中に十分な量の餌を確保できなかった個体が夜間採食を行っている可能性が示唆された。

～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・

P062*

ハシブトガラスの飼育オス集団における優位個体の除去が社会的交渉に与える影響

○阿部響(慶大・早大)

集団性動物は、繰り返しの交渉を通じて個体間の社会的関係や優劣関係を構築する。野生下では資源の利用可能性に応じて集団の構成が絶えず変わる。このような離合集散型集団の構成個体は、関係性構築のために社会交渉を繰り返す必要がある。しかし、構成個体の変化、とくに優位な個体の移出入により下位個体同士の社会交渉がいかに変化するのかわからない。本研究は、野生下で離合集散型集団を形成するハシブトガラスの、飼育オス集団を用いてこれを調べた。順位が連続的である 6 個体からなる集団と、上位 1 個体のほかは 3 すくみ順位である 4 個体からなる集団それぞれから、最上位個体を除去する操作を行った。その際に下位個体間同士の羽繕いや近接などの親和交渉の持続時間がいかに変化するかを調べた。その結果、順位が連続である集団では変化は見られなかった一方、3 すくみ順位の群れでは上位個体の除去時に下位個体同士が近接した時間が長くなった。本結果は、順位が拮抗する集団では、上位個体の不在時に下位個体間で選択的に近接を維持する、柔軟かつ戦略的な社会交渉が生じることを示唆した。

P063

センサーカメラを用いた宮城県仙台湾(蒲生～岩沼間)におけるミサゴの繁殖生態

○嘉藤慎譲 1・太田吉厚 2・西谷理恵 3・田部田勉 4・齊藤賢治 (1(株)地域環境計画・2 宮城県森林インストラクター・3(株)宮城環境保全研究所・4(株)建設技術研究所)

宮城県仙台市の東側に位置する仙台湾の海岸林にはミサゴ(*Pandion haliaetus*)が繁殖している。本研究はセンサーカメラで巣内を撮影し、ミサゴの繁殖生態の解明を目的とした。調査は 2021-2024 年の 4 繁殖期に行なった。カメラは繁殖期を避け 8 月下旬-12 月上旬に巣内が撮影できるように設置し、巣立ち状況を確認しながら 8 月下旬-12 月上旬に回収した。ミサゴの営巣林 6 ヶ所、のべ 14 巣を巣内撮影し、10 回の繁殖を記録した。産卵期間は 4 月上旬-中旬にあり、産卵は平均で 3.5 日おきに 1 卵を産み、7.0 日かけて最終的に一腹卵数は 2.8 であった。孵化の期間は 5 月中旬-下旬にみられ、平均で 1.7 日の間に孵化が終わり一腹雛数は 2.0 であった。抱卵日数は平均 40.5 日間であった。巣立ち以降はセンサーカメラの不調が多く記録が取得できなかった。このほかにヘルパー個体の確認、カラスによる繁殖失敗、巣材に海洋ごみが多く含まれていることも確認することができた。

P064*

なぜ GPS 装着サンバにメスが多い？性比偏りに関する仮説立案と検証の試み

○内藤アンネグレート素(京都市動物園, ARRCN)・東淳樹(岩手大)・伊藤圭子(奄美いんまや動物病院)・井上剛彦(ARRCN)・遠藤孝一(オオタカ保護基金)・出島誠一(日本自然保護協会)・鳥飼久裕(奄美野鳥の会)・葉山政治(日本野鳥の会)・藤井幹(日本鳥類保護連盟)・松永聡美(日本鳥類保護連盟)・山崎敦子(ARRCN)・山崎匠(ARRCN)・和田のどか(ARRCN)・山崎亨(ARRCN)

奄美大島には 2000 羽以上のサンバが越冬しており、現在、渡りルート解明のために島内越冬個体の GPS 追跡プロジェクトが進められている。2024 年に 10 羽、2025 年に 11 羽が野外で捕獲され、これらの遺伝学的性判別を実施した結果、メスが多いことがわかった(各年とも 9 羽がメス)。今回、この性比の偏りについて 3 つの仮説を立てた：①奄美大島にはメスがが多く越冬している。②捕獲場所である道路沿いのなわばりにメスが多い。③メスは警戒心が薄く捕獲される確率が高い。仮説を検証する第一歩として、2013-2024 年に奄美大島で救護された越冬個体 57 羽の性別を、GPS 追跡個体の比較対象として調べた。その結果、救護個体全体の性比は偏っていなかった。また、救護個体のうち道路で交通事故に遭った個体についても、性比に偏りは認められなかった。本発表では、これらの情報を軸に前述の 3 つの仮説の検証に挑む。今後、奄美で越冬するサンバのなわばり環境や行動等の性差を詳しく調べ、仮説をより厳密に検証していく予定である。

P065*

樹洞や巣箱は冷凍庫・オオコノハズクの貯食行動

外山雅大(根室市資料館)

動物の貯食行動は、冬季に餌が不足する高緯度地域や、代謝が高く飢えに弱い小型の種で進化しやすい適応戦略である。フクロウ類においても、北欧に生息する小型種のスズメフクロウが晩秋から初

冬にかけ、樹洞にネズミなどを大量に蓄え、冬期に利用することが知られている。国内のフクロウ類では、これまで冬期に貯食を行う事例は確認されていなかったが、北海道根室において、オオコノハズクが冬の間、樹洞や巣箱にネズミ類を貯食し、数日から数週間後に利用する行動が確認された。そこで、2023～2025年の冬期に巣箱を用いオオコノハズクの貯食行動に関する調査を実施した。その結果、気温が0度前後まで低下する11月下旬から貯食行動が開始され、モモンガやネズミ類などの小型哺乳類が貯食されていた。本発表では、オオコノハズクが貯食した餌動物の詳細および気温との関係について分析し、同種における貯食行動の生態的意義について考察する。

P066

兵庫県朝来市和田山町における2025年積雪期のコウノトリの採食生態
栗山(武田)広子(コウノトリ市民レンジャー/コウノトリ市民研/兵庫県立大)

絶滅危惧種コウノトリの野生復帰を目的とした野外への放鳥が2005年に兵庫県豊岡市で開始されて以降、コウノトリは生息域を年々広げている。豊岡市と同じ但馬地域である、兵庫県朝来市和田山町においても、2011年頃からコウノトリの飛来が確認され、2020年からコウノトリ1ペアが同地域の人工巣塔で繁殖を行なっている。本ペアは同地域で繁殖期を終えると、秋期に他地域へ移動し、1月頃に再び同地域で繁殖活動を開始する。本発表では、2025年積雪期に観察された本ペアおよび同地域に度々飛来する他個体が利用した採食場所や採食した生物について発表する。

P067

札幌市中央区中島公園においてマガモが樹洞に営巣—オシドリのみね？
○新田啓子(日本オシダリの会)中村眞樹子(NPO 法人札幌カラス研究会)

海外ではマガモ *Anas platyrhynchos* が樹上に営巣することは知られているが日本国内ではその事例が少なく、一般に地面等で営巣する。ところが近年中島公園内において、樹洞に営巣したマガモを観察した。

マガモは札幌で1980年代から繁殖している(足立 1993)。また樹洞営巣性のオシドリ *Aix galericulata* は中島公園内で2013年以降継続的に繁殖し、園内の菖蒲池周辺ではマガモとオシドリが毎年繁殖している。オシドリは小型のカモ類で、足の爪は長く鋭く樹上での行動に適している。一方マガモの足の爪は長くない。樹上での行動にあまり適していないマガモが、なぜ樹上で巣探し行動をしたり樹洞に営巣したりするようになったか、考えたい。

P068*

ハシブトガラスによるキンギンボク有毒果実の採食記録
島田将吾(新潟大)・直江将司(森林総研)・柴田嶺(新潟大)

キンギンボク *Lonicera morrowii* は東アジアに分布し、国内では北海道南西部から中部地方の日本海側に分布する低木である。本種は初夏に赤い小型の果実をつける。一般に赤い小型の果実は鳥に採食され、種子散布されると考えられている。しかし本種の果実は有毒とされており、自生地で動物が採食することを示した研究事例はないと思われる。そこで本研究では本種の種子散布者の特定

を目的とした。

調査は 2025 年 6 月中旬から 7 月中旬にかけて新潟市西区の海岸林で実施した。結実したキンギンボク 9 本に各 1 台の自動撮影カメラを設置した(28 日間～36 日間稼働)。果実の採食を撮影できたのは 1 例で、ハシブトガラスが 70 秒の滞在で 28 個の果実を採食した。

本調査では、1 例ではあるが自生地においてキンギンボクの果実を鳥が実際に採食していることを初めて示した。一度に多くの果実を採食していたことから、ハシブトガラスは本種の毒に耐性を持つ可能性が考えられた。調査地周辺でカラス類のペリットを調べた先行研究では本種の種子がみられたことはなく、採食頻度は稀だと考えられた。

～ . ～ .

P069

スズメ目鳥類二種の卵殻表面構造

○松井晋(東海大)・佐藤敦(東海大)

鳥類の胚は、卵殻表面にある気孔と呼ばれる小さな穴でガス交換を行っている。本研究ではスズメ目鳥類二種(スズメ、シジュウカラ)の卵を対象として、卵膜を溶かし卵殻内部からメチレンブルーを染み込ませ、卵殻表面に染み出た点(穴)をカウントして、卵表面の 1 平方 mm あたりの気孔密度を算出した。スズメとシジュウカラの卵でともに鋭端、赤道面、鈍端の順に気孔密度が高くなった。走査型電子顕微鏡で撮影した画像から測定した気孔サイズ(短径×最大長径)は、両種で共に鋭端、赤道面、鈍端の順に大きくなる傾向がみられた。また、卵殻表面には気孔とは異なる卵殻を貫通しない非常に小さな穴が多数みられ、これらの微小な穴をマイクロホールと定義し、その大きさと密度を測定した。マイクロホールの平均サイズはスズメ卵では 0.89 μ m、シジュウカラ卵では 1.04 μ m であった。マイクロホール密度はスズメ卵よりシジュウカラ卵で約 1.7 倍高かった。

～ . ～ .

P070*

CJS モデルを用いたアカモズの生存率推定とその決定要因

○松崎秀哉(北大)・市川伸(日本渡り鳥保全・研究グループ)・古巻翔平(厚岸水鳥観察館)・熊谷隼(EnVision)・高木昌興(北大)

生存率は個体群動態や生活史特性を理解する上で最も重要な情報である。そこで本研究では、北海道石狩平野に生息する亜種アカモズを対象に、2019～2025 年にかけて色足環による標識と目視観察によって得られた記録から見かけの生存率および再確認率の推定を行った。解析には標識再捕獲法のデータに基づく Cormack-Jolly-Seber モデルを用いた。その結果、亜種アカモズの年平均生存率は 60%、年平均再確認率は 95%であった。年ごとの情報をもとに生存率に効果を与える要因を検討するために説明変数を性別、年齢区分(成鳥・幼鳥)、年(年変動)として、説明変数ごとに AIC によるモデル選択を行った。その結果、性別と年は生存率に影響せず、幼鳥の生存率が成鳥よりも有意に低いことがわかった。アカモズは著しい減少傾向にあるとされるものの、本個体群の年生存率は渡り性の他の小型鳥類と同程度であった。年変動の効果も検出されなかったことから本個体群は安定した状態にあると判断された。前年の繁殖成否が翌年の生存率に及ぼす効果についても検討を行う予定である。

～ . ～ .

P071*

石狩川河口地域で同所的に繁殖するセンニュウ類 2 種の帰還状況の解明

○ 岩崎美穂、白岩颯、安田直矢、高木昌興(北大)

ある地域で、前年に生まれた個体や繁殖した個体が再び繁殖をしに還ってくる割合である『帰還率』には、種間差が見られる。高い帰還率を持つ種は、繁殖に適している地に還ることで繁殖成功率が増大する一方、外部と個体や遺伝子の出入りは少ないと考えられる。そのため、帰還率は個体の繁殖成功率や、個体群間の遺伝的・地理的隔離の維持と深く関わっているとされる。また、性別や年齢、渡り性の有無、繁殖地の広さなどによって、帰還率に差が見られることもわかっている。

本研究では、北海道石狩川河口地域に夏季飛来するエゾセンニュウ *Helopsaltes amnicola* とシマセンニュウ *H. ochotensis* の、2020 年から 2025 年の捕獲調査の記録から帰還率を算出し、比較する。これら 2 種は、同属で、同所的に繁殖をする一方、渡りの時期や、嗜好する繁殖地の環境に明確な違いが見られる。特に、繁殖地として適する地域が制限され、繁殖地が分散する種では、帰還率が高い傾向がある。そこで、これらの生態学的要因が、各種の、同じ地域やなわばりへの帰還率に関係するか検討する。

～

P072

小笠原諸島沖の海鳥相-バードウォッチャーによる 5 年間の記録-

○ 田野井博之(Seabirding Japan)・田野井翔子(Seabirding Japan)

一度も大陸とつながったことのない海洋島である小笠原諸島では、海鳥の脅威となる捕食者が少なかったことから、固有種であるオガサワラヒメミズナギドリをはじめ、多くの海鳥が繁殖する。小笠原諸島では、陸上では海鳥の繁殖状況が調べられている一方で、海上での海鳥の分布についてはほとんど知られていない。小笠原諸島で繁殖する種に加え、渡り経路や採餌域として当該海域を利用する種を明らかにすることは、海鳥の保全を進めるうえで重要な基礎情報となる。本研究では、小笠原諸島沖の海鳥相の把握を目的として、2020 年および 2022 年から 2025 年までの 5 年間に、夏季に 3 回(17 日間)、冬季から早春季に 3 回(16 日間)、計 6 回(33 日間)の調査を実施した。31 種類の海鳥が確認され、そのうち 16 種は小笠原諸島で繁殖が確認されている種、15 種は当該海域では旅鳥や迷鳥とされる種であった。これらの種について、当該海域の利用状況や換羽状況などを写真とともに紹介する。

～

P073*

北海道トド島におけるウトウの餌種および採餌域選択と雛の成長

○ 小島達樹(東洋大)・大門純平(名古屋大)・風間健太郎(早稲田大)・綿貫豊(北大)・仁部駿介・伊藤元裕(東洋大)

海洋高次捕食者の海鳥は、海洋環境の変化に対し餌選択や採餌行動を柔軟に変化させる。北海道トド島において、2018 年、2019 年、2024 年にウトウの餌、採餌場所選択、雛の成長を調べた。トド島の南約 100 km にある天売島周辺では、カタクチイワシの利用可能性が 2014 年以降低下、2022 年以降回復したことが先行研究により示唆されている。ウトウは暖海性のカタクチイワシを愛好することから、①2018 年と 2019 年は冷水域で寒冷性魚類を利用し、2024 年には南方の暖水域でカタクチイワシを利用する、②カタクチイワシを利用した年は雛の成長が向上すると予測した。予測の通りウトウの餌には、2018 年と 2019 年は寒冷性のホッケ幼魚が優占し、2024 年はカタク

チイワシが優占した。雛の成長も 2024 年が最も良かった。一方で、採餌場所はすべての年で宗谷海峡周辺の冷水域であった。2022 年以降のカタクチイワシの分布拡大により、その好適水温より低い冷水域でも利用可能になったため、ウトウは一貫して冷水域を利用して高い繁殖成績を維持している可能性がある。

P074*

非繁殖期のクロアシアホウドリの利用海域の多様性と忠実性

○林はるか・西沢文吾(水研機構・水産資源研)・富田直樹(山階鳥研)・塩出大輔(東京海洋大)・越智大介(水研機構・水産資源研)

海鳥類は非繁殖期に個体群内で複数の異なる海域を利用する傾向がある。一方で個体ごとに見ると、同じ海域を毎年利用する忠実性を示す場合がある。利用海域の違いは、生存率や翌年の繁殖に影響する可能性がある。伊豆諸島鳥島で繁殖する 34 個体のクロアシアホウドリを衛星追跡し、非繁殖期の移動データから、3 度グリッドごとの相対的な利用頻度を個体別に算出し、クラスター解析した。個体ごとの主な利用海域は以下の 3 つのグループに分類された:①北海道南部から東部沖合、②東北沖合、③クリル列島以北。これらの分布パターンの違いには、集中利用した海域の緯度に加えて経度方向の分散の程度が関与していると考えられた。また複数年にわたって追跡した 8 体のうち 7 個体は同じ海域を利用し、個体ごとに高い忠実性を持つことが示唆された。

P075

北海道および東北地方におけるチゴハヤブサの営巣環境

○立石淑恵(オホーツクミュージアムえさし)・高橋雅雄(岩手県博)・東信行(弘大)

チゴハヤブサは主に北海道と東北地方で繁殖する夏鳥で、市街地・農耕地・水辺など開けた環境に生息し、隣接する林地にあるカラス類の古巣を利用して営巣する。本研究では、チゴハヤブサの日本での繁殖生態を解明する目的で、特に営巣環境について、青森県で 2017-2025 年に、秋田県で 2019-2025 年に、岩手県で 2020-2023、2025 年に、山形県で 2022 年に、北海道で 2021-2025 年に野外調査を実施した。繁殖つがいの巣を特定し、営巣環境(営巣木の樹種・樹高・胸高直径・巣の高さ)を計測し、営巣林地の面積を算出した。東北地方では主に針葉樹と人工物に営巣し、青森県・岩手県では主に針葉樹を利用し、秋田県・山形県では人工物を利用する割合が高かった。また、樹高が高い木の、より高い位置にある古巣に営巣する傾向があった。本発表では、東北地方の全体的な傾向と各地域の特徴、そして傾向が異なる北海道での営巣環境について紹介する。

P076*

渡るアオバズクの一年:長期間移動追跡の事例から分かること

○竹田山原 1, 2、田谷昌仁 1, 2、塩見こずえ 1、細谷淳 2 (1 東北大、2 鳥類標識協会)

アオバズクは森林・社寺林・公園などに生息するフクロウ類である。国内では北海道～九州で繁殖する亜種アオバズクが、3000 km以上隔てたスダ列島周辺で越冬すると考えられているが、その渡り経路や渡り時期、そして越冬地での行動はほとんど分かっていない。本研究では亜種アオバズクを対象に 2022 年からの 4 年間で GPS ロガーを用いた移動経路追跡を試み、繁殖地で装着したロガー

のべ 4 個体分のうち1個体分を装着 1 年後に再回収した。

当該個体は秋に中部・四国・九州地方を経て、フィリピン・ルソン島まで海上を南下した。その後パラワン島を南進してインドネシア・カリマンタン島で越冬した。春には南シナ海上を移動して海南島および広西チワン族自治区に到達し、中国南部を北東に移動し本州の同一繁殖地に帰還した。また、繁殖地では育雛終了後に行動圏が 0.2 km²程度から1km²程度に広がり、越冬地では1km²程度の行動圏で活動していた。この結果は、亜種アオバズクの越冬地・繁殖地での行動圏の維持・変化の記録に加え、本亜種が春と秋で異なる渡り経路を利用する可能性を示唆する初めての事例である。

P077*

鳥取県大山におけるジョウビタキの繁殖生態 ～分子遺伝学および行動生態学の観点から～
楠ゆずは(広大)

近年日本国内で繁殖の報告例があるジョウビタキ *Phoenicurus aureus* の繁殖生態を明らかにする為、2017 年～2025 年4月～8 月に、鳥取県西伯郡大山町大山寺(標高 740m)においてジョウビタキの繁殖調査およびそれらの生物試料の収集を行った。当該地域で繁殖するジョウビタキの巣を調査し、個体識別のために成鳥及び巣内雛または巣立ち直後の雛に標識を行い、なわばりから標識個体がいなくなるまで観察対象個体及び家系集団内個体の行動観察を続け、連続して記録をとった。個体識別、親子鑑定、巣内雛の雌雄判別等のため成鳥及び巣内雛の羽毛と血液を採取した。国内の他の繁殖集団との遺伝的関連を調べるため、岐阜県及び長野県においても同様に羽毛と血液を採取した。本種のゲノム配列は未解明であるが、遺伝的解析を進めるにあたって必要となる為、今回本種のロングリード DNA シーケンスを行なう為のゲノム DNA 抽出法を検討し報告する。さらに、各年の繁殖状況に柔軟に対応し繁殖戦略を変化させている当該地域での 2025 年の繁殖の様子を報告する。

P078

北海道北部におけるサンカノゴイの音声調査:生息実態と繁殖行動の予備的解析

○松林志保(関学大)、浦達也(野鳥の会)、中臺一博(東工大)、長谷部真(サロエコ)、鈴木麗璽(名大)

絶滅危惧 I B 類のサンカノゴイはヨシ原に生息する観測困難種でもあるが、その生息状況や生態、行動特性には未解明な点が多い。本発表では、国内最大規模の残存個体群が生息すると推定される北海道北部において繁殖期に実施した音声調査の予備的解析結果を紹介する。音声調査は非接触で観測個体に負荷をかけず、特に潜行性の高い種の行動把握に有効な手法である。2023 年と 2025 年に長期録音装置を設置し、繁殖期を通じた鳴き声パターンを記録した。加えて推定繁殖ピーク時には複数台の指向性マイクロフォンアレイを数日間設置し、位置情報付き音声データを収集し個体数の把握と縄張り内の行動観測を試みた。

P079*

ヒドリガモ・オナガガモの性比とペア形成率の季節変動

○浅井美紅(東邦大)・児島庸介(東邦大)・森本元(山階鳥類研究所・東邦大)

カモ類は越冬期にペア形成を行う。越冬地における集団内性比やペア形成率の季節変動といった配偶生態に関する研究は、欧州などでは複数種で行われているものの、国内ではほとんどない。昨年度、関東圏の複数地点でヒドリガモとオナガガモを調査した結果、種間で集団内性比に違いがあり、この性比の違いがペア形成率の季節変動に関わっていることが示唆された。そこで 2024 年秋から 2025 年春にかけて、ヒドリガモ 21 地点・オナガガモ 12 地点における個体数調査を行い、この調査で得られたデータを追加して性比とペア形成率の季節変動を解析した。その結果、ヒドリガモでは全地点を通じて性比はほぼ雌雄半々で安定していたが、オナガガモでは地点ごとに性比の偏りや季節変動が見られた。一方、ペア形成率は、ヒドリガモでは渡来初期から多くの地点で 25%以上と高く、冬季を通じて緩やかに増加した。オナガガモでは、渡来初期は多くの地点で 10%以下と低く、冬季を通じて上昇し、地点差も見られた。本発表では、集団内性比とペア形成率から明らかになった両種の配偶生態・戦略について議論を行う。

P080*

都会派スズメの子育て戦略～市街地における気温・緑地が営巣地の選好性に与える影響～

○岡村悠太郎(名城大)・橋本啓史(名城大)

近年、都市環境の変化によりスズメ(*Passer montanus*)の個体数が減少しているという研究結果が示されている。また、スズメは都市環境中の人工物に営巣することが分かっており、温暖化やヒートアイランド現象の影響で、従来よりも過酷な環境で育雛することになる。

本研究では、名古屋市におけるスズメの営巣箇所を調べ、巢内の熱環境や周辺の緑地環境を調査し、スズメの営巣地の選好性を明らかにする。

場所は名古屋市栄駅周辺及び白川公園周辺で行った。方法はルートセンサス法にて営巣場所を確認し、アクセス可能な巣については巢内の温度を計測し、アクセス不可能な巣については別途用意した巣を模した設備から温度の推定を行った。周辺の緑地環境は GIS を用いて巣近辺の緑被率などについて解析を行った。夏季にはルート上の気温と、成鳥と幼鳥の個体数について調査し、巣立ち後の営巣地周辺の利用状況を確認した。

スズメの巣は調査範囲内で詳細な場所の特定が不可能なものも合わせて 21 巣(ルート内約 8.5km 間)確認できた。詳細な結果については当日発表する。

P081

ドバトの空間行動と趾欠損の関係性

○海瀬慧・西田澄子・北村亘(東京都市大)

ドバトには趾の欠損が見られることがあり、先行研究において髪の毛などの環境汚染物質が原因の一つであると考えられてきた。ソーシャルメディアでも取り上げられることもあり、人間活動がドバトに与える影響の一つとして問題視されている。本研究では、静岡県沼津駅周辺に生息するドバトを対象に、利用する空間と趾の異常の関係性を調査した。その結果、環境への誘引と環境下での欠損要因物質への接触との複合的な関係性が捉えられた。本研究を通して、ドバトの趾の欠損を防止するためには、ドバトの空間選好性を理解することと、足場となる地面の衛生状態を保つことの重要性が確かめられた。

P082*

内陸都市部におけるイソヒヨドリ環境適応

○大久保亘・北村亘(東京都市大)

イソヒヨドリ(*Monticola solitarius*)は近年になり、海岸部から内陸都市へと生息域を拡大している。本研究では本種が都市環境にどのように適応しているか明らかにすることを目的とした。東京都八王子市の八王子駅周辺 1 平方キロメートルを対象に、2024 年 5 月 12 日から 2025 年 6 月 30 日まで、ラインセンサス法を用いた調査を行った。観察では、目視や鳴き声によってイソヒヨドリを特定し、性別や行動、時間などを記録した。分析には Plateau の GIS データを用い、特に建物の高さでイソヒヨドリの分布との関係に着目した。その結果、10~20 m の中層建物での確認頻度が最も高く、都市部で特定の高さの建物に適応している可能性が示唆された。今後は建物の密集度や緑被率、水域との距離など他の環境要因との関係性や、過去の記録との比較を通じて、生息環境の変化や適応の詳細を明らかにしていく予定である。

P083*

都市緑地における鳥類-植物相互作用ネットワークのコア鳥類種の同定

湯天禹(東大)・○平尾聡秀(東大)

都市化の進行に伴い、都市緑地は鳥類多様性の維持に重要な役割を果たす。鳥類と植物の多様な相互作用ネットワークはその基盤であるが、都市環境においてネットワーク構造を支える「コア種」の特定や、外来種の役割については未解明である。本研究は、2023 年から 2024 年まで東京都内 13 カ所の都市公園で鳥類の果実採食と種子散布調査を行い、糞便と種子の DNA により、16 種の鳥類と 147 属の植物を同定し、多層相互作用ネットワークを構築した。その結果、コア種は優占種のヒヨドリ、ガビチョウなどに集中していた。特に外来種のガビチョウは全ての調査区で検出され、ネットワーク内で最も高いノード多重次数を示した。また、嘴が長く、半開放的な環境を好み、地上/樹上生活を主とする鳥類が都市緑地でコア種となる傾向が見られ、自然林に比べて適応力の高い一般種への収束が顕著だった。本研究は都市化が相互作用ネットワークのコアを特定種に集中させ、外来種も大きな影響を及ぼす可能性を示した。都市生態系の保全には、コア種の特定に加え、外来種の生態的役割や在来種との相互作用の理解が不可欠である。

P084

コシアカツバメは本当はそれほど繁殖はしていない？

福井 亘(栃木・黒磯高校)

コシアカツバメは、一時期は繁殖分布域を拡張していたが、全国鳥類繁殖分布調査(2016-2021 年)では、繁殖確認メッシュ数、記録できた地点、記録個体数全てにおいて減少していることが明らかになった。全国レベルでは絶滅危惧等の指定には至っていないが、都道府県レベルでは絶滅危惧 IA 類(CR)(山形県)を始め、29 都道府県で何らかの指定がなされている。栃木県では絶滅危惧等の指定はされていないが、大田原市で、2018-2025 年繁殖期に詳細に繁殖活動を観察した結果、繁殖を試みるつがいの多くが造巢中あるいは産卵期にスズメにより巣を乗っ取られる事例が頻発していた。巣を取られたペアは再営巣を試み、繁殖期を通じて、造巢・産卵に費やす日数が有意に多かった。繁殖期間中の多くの期間を造巢に費やし、実態は繁殖成功度は低下しているにも関わらず、繁殖分布調査では、「成鳥が巣あるいは巣のあるらしい所にくり返し出入りしている」ので、最上位の「繁

殖を確認した」として記録され、実態と比べて過大評価されている可能性がある。

P085*

佐賀平野におけるカササギの営巣分布に影響を与える環境要因とカラスとの関係

○土屋佳央(佐大)・永淵拓歩(佐大)・佛坂安恵・池上真木彦(国環研)・徳田誠(佐大・鹿大)

都市化が鳥類の分布や個体群動態に与える影響は、都市生態学における重要な研究課題の一つである。九州北部に生息するカササギは、1960年代以降、増減を繰り返してきた。1990年代後半以降の減少は、都市化により建物用地率が高い地域で顕著であった。一方、近年は都市部以外での減少も指摘されているが、その原因は未解明である。本研究では、この減少要因を明らかにするため、営巣・採餌適地の重要性和、競合が指摘されるカラスの存在が営巣数に及ぼす影響に着目した。これまでの調査から最もカササギの生息密度が高いと想定された佐賀市南部(36 km²)において調査を実施した結果、営巣密度は 3.7 巣/km²であった。営巣分布は強い集積傾向を示し、同調査地におけるカラスの営巣分布よりもその傾向は顕著であった。さらに、両種は互いに近接して営巣する傾向が高く、営巣地のオーバーラップが示唆された。カササギの巣の半径 50m 以内には、住居や工場、学校などの建造物に加え、農地、家庭菜園、短い草地などが必ず含まれており、これらが営巣環境として重要であると考えられる。

P086*

営巣場所の密度の違いは樹洞営巣性鳥類の生息や繁殖にどう影響するか？

○深水彩(東大)

自ら樹洞を作り出せない樹洞営巣性鳥類にとって樹洞は繁殖を制限する重要な資源だが、営巣場所の密度変化に対する樹洞営巣性鳥類の応答に関する研究は十分でない。本研究は、巣箱の設置密度を変えて営巣場所の資源量を調整し、資源量や環境条件が樹洞営巣性動物の生息や繁殖に与える影響を検証した。

2025 年 4 月、東京大学北海道演習林内の針葉樹林と広葉樹林を通る林道沿いに、入口直径が 28 mm と 32 mm の巣箱 96 個を交互に配置し、設置間隔を段階的に変えて設置した。1 週間毎に巣箱内部に繁殖している生物を記録し、また、展葉前に林道から目視で林内樹洞を探索し、鳥類相の調査として月に一度定点調査を行った。巣箱利用に植生や巣箱密度、樹洞密度、入口直径、開空度等が及ぼす影響について多項ロジスティック回帰を行い、定点調査で得た鳥類群集構造を NMDS で解析した。カラ類は広葉樹林内の巣箱で繁殖し、クロスズメバチは入口が大きい巣箱をより選択的に利用する傾向があった。群集構造に場所による違いは見られなかった。カラ類の巣箱利用率の低さは林内の樹洞密度によるものかもしれない。

P087

熊本県菊池渓谷における森林性鳥類相の変遷

○佐藤重穂(森林総研)

熊本県北部の菊池渓谷は阿蘇の北外輪山の標高 400-900m に位置し、老齢天然林が保全されている。ここでは 1970 年代から繁殖期の森林性鳥類の調査が断続的に実施されてきており、1990

年代までに夏鳥の一部が減少したこと、外来種が侵入したことなどが報告されている。2024 年の繁殖期に過去と同じ方法で調査するとともに、森林植生の調査を行った。その結果、夏鳥の種構成は 1990 年代から大きな変化はみられなかった。一方、外来種であるソウシチョウの個体数は増加していた。過去にはみられなかったニホンジカは生息するようになってきているものの、森林植生に顕著な変化はみられず、鳥類の下層植生利用種に密度低下はみられなかった。2000 年代以前の植生のデータが不十分であるものの、減少した夏鳥が回復していないこと、外来種が増加していることが明らかになった。

P088*

インターネット上に発信された目撃情報を活用した日本の野生ウズラの分布調査

○宮地李果(麻布大)・戸張靖子(麻布大)

ウズラ(*Coturnix japonica*)は日本の野生下にも生息する渡り鳥で、絶滅危惧種に指定されるほど生息数が少ない。野生ウズラの分布や生息状況は、全国鳥類繁殖・越冬分布調査などの大規模調査によって報告されているが、これらの調査でも観察データ数は少ない。私たちは、インターネット上に発信された写真付きの野生ウズラの目撃情報を収集・整理して野生ウズラの分布を明らかにし、大規模調査の結果と比較した。(1) インターネット上に掲載された野生ウズラの目撃情報は 10 年ごとに有意に増加していること、(2) 繁殖期に静岡、神奈川、兵庫、宮崎県、(3) 越冬期では北海道と大阪府で野生ウズラが初めて観察されたことが明らかになった。さらに(4) 1974-78 年に実施された大規模調査の報告以来約 30 年ぶりに埼玉県で野生ウズラが繁殖した可能性が示された。本研究によって、都道府県単位で新規の野生ウズラの分布情報を得ることができた。得られた結果は大規模調査結果を補完するものとして、野生ウズラの生態学的研究および保全活動への貢献が期待される。

P089*

ウミネコ巣立ち雛はどこへ向かうのか? : 巣立ちから越冬までの移動と活動量の記録

○杉山響己(名大)・水谷友一(同志社大)・後藤佑介(名大)・依田憲(名大)

巣立ち後の幼鳥期は、生存率が低く個体群の動態や将来的な繁殖個体数に影響を与える重要な時期であるが、その移動や行動は依然として不明な点が多い。本研究では、2022 年および 2023 年に青森県蕪島で巣立ったウミネコ *Larus crassirostris* の雛 30 羽に行動記録計を装着し、GPS 位置情報および動的加速度(ODBA)を記録した。その結果、13 羽が 7 月中に蕪島から離れ、うち 5 羽から翌年 4 月までのデータが得られた。これらの個体はいずれも、繁殖地と越冬地を往復する典型的な渡り移動は示さず、翌年 4 月時点では蕪島から 800 km 以上離れた三重県以西にとどまっていた。このような翌年春に繁殖地へ戻らない行動は、幼鳥がまだ性成熟しておらず、繁殖地に戻る必要がないためと考えられる。また幼鳥の活動量は日の出の約 46 分前に増加し、日没の約 1 時間後に減少しており、日中に高い傾向が見られた。この昼行性の傾向は、夜間にも活動する繁殖期の成鳥とは異なっており、飛行能力や採餌技術の違い、あるいは繁殖の有無が影響している可能性がある。

P090

オガサワラノスリ ファクトシート
千葉夕佳

東京から南へ 1000 km、亜熱帯の小笠原諸島には、唯一の猛禽類で高次捕食者であるオガサワラノスリが生息している。生息地は父島列島と母島列島の 64.8 km² (世田谷区よりやや広い) のみである。当地では世界自然遺産の推薦前後から多数の自然回復事業が展開されており、本亜種に影響が見込まれる事業ではつがい分布や繁殖成果がモニタリングされている。環境省と東京都によるこれらのモニタリング結果に、学術調査、林野庁希少鳥類保護管理対策調査、発表者の自主調査の結果を加え、隣接島間での重複記録を除いて、本亜種の個体群状況をまとめた。また、個体群変動に影響を及ぼすと推定された要因のリストを作成した。

世界遺産登録前から比較して、オガサワラノスリの推定つがい数は 69 つがいから 50 つがいに減少し、父島の巣立ち雛数は極端に変動した。ネズミ類駆除のための殺鼠剤散布、人為的攪乱、気候の既知の影響に加え、近年見出されている鳥ボックス様の疾病、殺鼠剤散布地や攪乱地域の生態学的トラップ化などの組み合わせが、本亜種の減少をもたらした可能性がある。

P091*

オガサワラカワラヒワの飼育下での繁殖行動について～初の繁殖成功事例より～
○鈴木創・堀越宙・飴田洋祐・神門英夫(IBO)

オガサワラカワラヒワ (*Chloris kittlitzii*) は、小笠原諸島の母島列島および火山列島の南硫黄島に推定 200 羽しか生息していない。2024 年にカワラヒワ亜種から独立種に分類が変更されたが、急速な減少により絶滅の危機が深刻化している。

2020 年に、第 1 回 PHVA (Population and Habitat Viability Assessment: 個体群と生息地の存続可能性分析) プロセスによるワークショップが開催され、母島列島の生息環境の改善、繁殖地のネズミ対策、飛来地のノネコ管理とともに、域外保全の取り組み実施が早急に必要との提言がなされた。2021 年、東京都により初めての域外飼育が開始され、2025 年には動物園、NPO も飼育に参加し、初めて繁殖に成功した。本発表では、まだ数例ながら、飼育下で確認された本種の巣づくり、交尾、抱卵、育雛などの繁殖行動について報告する。なお、本発表は、環境省オガサワラカワラヒワ保護増殖事業計画に基づき、東京都、NPO 等により実施された域外保全事業の成果である。

P092*

全ゲノム解析で評価するタンチョウの遺伝的多様性と近親交配
○中村陽月(京大)・佐藤悠(京大)・大沼学(国環研)・村山美穂(京大)

タンチョウ (*Grus japonensis*) の北海道集団は約 100 年前に深刻な個体数の減少を経験した後、農耕地での給餌が奏功して個体数が回復した。しかし、過去の個体数激減の影響で遺伝的多様性を著しく喪失している可能性があり、将来的に再び絶滅に瀕するリスクが懸念される。そこで本研究では、北海道とユーラシア大陸極東アジア地域のタンチョウ各 3 検体を用いた全ゲノム解析によって遺伝的多様性と近親交配の進行状況を調べた。まず全ゲノム情報を用いた PCA や hPSMC による集団構造の解析の結果、両集団間の遺伝的な分化が支持された。この結果に基づき集団ごとの遺伝的多様性と近親交配をヘテロ接合度や近交係数により評価したところ、北海道の集団における遺伝的多様性の喪失や近親交配の進行 (近交係数 0.6) が示唆された。そのため、北海道のタンチョウは現

在の安定した個体数にも関わらず、絶滅リスクは依然として高いと考えられる。本種の保全のためには、血縁関係を考慮した飼育下繁殖や鳥インフルエンザ等の感染症対策を早急に実施することが重要だと考えられる。

P093

感染初期のマガモにおける高病原性鳥インフルエンザウイルスの体内動態と宿主免疫応答
○佐久間咲希(農研機構)、西浦颯(農研機構)、峯淳貴(農研機構)、熊谷飛鳥(農研機構)、内田裕子(農研機構)、宮澤光太郎(農研機構)

高病原性鳥インフルエンザウイルス(HPAIV)は感染した渡り鳥の移動により国内外に拡散されと考えられている。我々は、HPAIV に経鼻感染したマガモはウイルス株に依らず気管から多くのウイルスを排出する一方で、総排泄腔からのウイルス排出動態は株により異なることを明らかにした。本研究では、総排泄腔から排出されやすい株(岩手株)と排出されにくい株(愛知株)をマガモに経鼻接種し、総排泄腔からのウイルス排出動態の違いが感染初期のウイルス体内動態と宿主免疫応答の差異に起因する可能性を検討した。ウイルス遺伝子は、両群とも接種1日後以降に複数の組織から検出され、その検出率とコピー数の中央値は岩手株接種群が愛知株接種群より高かった。一方、接種0.5日後の肺や脾臓における抗ウイルス自然免疫応答関連遺伝子(RIG-I、MDA5、IRF7、Mx1)の発現量の中央値は愛知株接種群が岩手株接種群より高かった。以上のことから、岩手株は接種後すぐに誘導される自然免疫応答が弱いために全身に拡散しやすく、その結果、総排泄腔から多く排出されることが示唆された。

P094*

円山公園に生息するオシドリ(学名: *Aix galericulata*)の食性把握に向けた糞中 DNA 解析の試み
○木下佳也(北海学園大)・早矢仕有子(北海学園大)・新沼協(北海学園大)

オシドリ *Aix galericulata* は本来、山間部の溪流や湖沼を主な生息地とするが近年では札幌市内の都市緑地においてもその生息が確認されている。特に円山公園では定常的な観察記録があり、園内にはドングリなどの自然由来の餌資源に加えて、人による餌付けも見られるなど 多様な餌環境が存在する

こうした都市緑地に生息するオシドリが どのような餌資源を選択しているのか明らかにすることは都市近郊に生息する野生動物の行動理解や人との共生を考える上で重要である。従来、野生動物の食性調査には胃内容物の直接観察が用いられてきたが、この方法は個体の捕獲を伴い負担が大きい。さらに、消化の影響により餌種の判別が困難な場合もある。これに対し、糞中 DNA を用いた解析は 個体を捕獲することなく非侵襲的かつ高精度に食性を推定することが可能である
本研究では、円山公園に生息するオシドリを対象に、食性と環境への適応を明らかにすることを目的として、糞中 DNA を用いた食性解析の可能性を検討しているので報告する。

P095*

東京湾沿岸部におけるマイクロプラスチックの保有状況の 30 年後の変化
○植田晴貴(日獣大・獣医)・徳長ゆり香(北大・獣医)・清水智帆(日獣大・獣医)・橘敏雄(応用生物)・

西川和夫(応用生物)・加藤卓也(日獣大・獣医)・羽山伸一(日獣大・獣医)

プラスチック汚染は 1962 年に海鳥で初確認され、現在は陸域に生息する鳥類にまで広がっている。本研究では、1990 年代に鳥類のマイクロプラスチック(MPs)保有状況が報告された地域において、カワラバトとトビの MPs 保有状況を当時と比較し、環境中の汚染指標としての変化を明らかにすることを目的とした。両種の嗦嚢及び筋胃を回収し、内容物中の MPs の形態を記録した。カワラバトは 1990 年代では 63.6%の個体が MPs を保有していたが、本研究では 38.7%であった。これは環境中の汚染が陸域では改善傾向にある可能性が考えられた。また、ペレット状の MPs の割合は、1990 年代のカワラバトでは 78%であったが、本研究では 43%であった。これは環境中の MPs の形状が 1990 年代と変化した可能性があり、その一因にペレットの排出防止案の配布が考えられた。トビは 1990 年代では 3.7%の個体が MPs を保有していたが、本研究では 32.3%であった。本研究のトビの 59.4%が魚類を捕食していた。これは環境中の汚染が海域では深刻化している可能性が考えられた。

P096

国内で商業輸送される廃鶏の環境調査

○諸木裕子(日女)・深町昌司(日女)

目的:

産卵鶏(卵生産用に飼養)は、産卵数が減少すると廃鶏と呼ばれ、多くが食肉処理場に輸送される。輸送時に廃鶏に影響を与える因子に関する情報を収集することは、動物福祉の向上・経済活動発展の両面で重要である。このため本研究では、廃鶏の国内商業輸送の環境調査を行った。

方法:

廃鶏の HL 比(血球比:ストレス指標)・体重測定を輸送前後に行った。気温・湿度は、廃鶏輸送用の籠内に加え、籠外のトラック荷台、食肉処理場の環境も測定した。

結果・考察:

死亡率は 0.2%であった。籠内の気温は処理場よりも有意に高く、処理場の湿度は籠内よりも有意に高かった。体重の差はなかった。HL 比は輸送後有意に増加した。本研究結果から、鶏周辺の籠内と広い空間の処理場では気温・湿度の差があること、輸送による鶏のストレス上昇が示唆されること、廃鶏の死亡が発生していることなどが明らかになった。輸送環境の調査をさらにを行い、得られた情報を基に動物が快適に感じると予想される輸送環境を管理できれば、動物福祉の向上および経済面の好転も期待できるのではないかと考えられる。

P097*

ニュージーランドのミズナギドリ寄生性ハジラミの記録と iNaturalist の活用

前朝琉

本発表では、ニュージーランドで観察されたミズナギドリ目鳥類(モグリウミツバメ、ハイガシラミズナギドリ、オークランドハジロアホウドリ、ニュージーランドアホウドリを含む)に寄生していたハジラミ類について、フィールドにおける生態写真を含めて報告する。これらのハジラミ類は、顕微鏡写真の発表は多いものの、宿主上での寄生状況を記録した写真はあまり公開されてこなかった。海鳥調査の副産物として撮影されていたケースもあるが、同定・公開されないまま死蔵されている例が多いのが現状である。そこで、筆者は市民科学プラットフォーム「iNaturalist」を活用し、ミズナギドリ目鳥類に寄生するハジラミ類の画像データベースを作成・整理し、広く観察記録を収集する試みを行って

いる。本発表では、その手法と収集された記録の一部を紹介し、今後の展望とこの手法の応用可能性について考察する。

P098*

鳥類の夜間の渡り行動に及ぼす人工光の影響

○和賀大樹(北大)・長田幸子(いであ)・佐藤友徳(北大)・先崎理之(北大)

「渡り」は鳥類の特徴的な生態の一つであり、多くの鳥類は捕食圧が低く、大気の安定した夜間に渡りを行う。近年、夜間の渡り鳥が地上の人工光によって方向感覚を喪失し、光源の周囲を旋回する等の改変行動を示す場合があることが分かってきた。人工光による行動改変を生じやすい種や環境条件を理解することは、柔軟な保全策の実施に寄与するほか渡り鳥のナビゲーション機構の解明にも示唆を与える可能性がある。本研究では、2021～24年4～5月と8～11月に北海道と青森県の14地点で地上照明の有無と夜間の渡り鳥の飛翔行動の関係について調べた。各地点では、サーマルスコープを用いて改変行動の指標(旋回・降下など)の有無を個体ごとに記録し、4年間で計16,932回の観察記録を得た。解析の結果、行動改変の頻度は照明がない場所よりもある場所では有意に高く、また行動改変の頻度には大きな種間差が存在し、系統的な制約があることも明らかになった。本発表では、どのような形態的・行動的特性が行動改変頻度の種間差を生み出ているのかについて議論する。

P099

クロツラヘラサギの日の出日の入りスイッチについて

○小久保守晃(葛西のクロツラ)、北村亘(葛西のクロツラ、東京都市大)、木村成美(NPO birth)上原文弥(葛西のクロツラ)

昨期に続き2024年11月下旬から2025年6月初旬にかけて、東京都江戸川区の葛西海浜公園・葛西臨海公園で半年間クロツラヘラサギの目視による調査をおこなった。先行研究でクロツラヘラサギは薄明薄暮に多く活動するとされているが、昨期に引き続き本種は時間に関係なく、採食できる時に活動する昼夜行性であること確認した。その一方で、1日の行動の中で日の出日の入り前後に場所を移動することを突き止めた。この移動は主に休息場所を変えるためだけの行動が多くを占め、活動目的ではないことが判明した。この行動は日の周りに影響されていることを示し、クロツラヘラサギの行動原理に月の影響(潮汐)だけでなく太陽の動きも組み込まれている可能性がある。非繁殖地で長期滞在の選択条件は、場所を選んで排泄できる採食場所に加え、複数の休息拠点が必要であると考えられる。本学会では、クロツラヘラサギの「日の出日の入りにスイッチが入る行動」に注目し、日の出日の入り時の行動を捉えた55日間のデータを分析し、行動の詳細や移動に目的があるのか発表する。

P100*

夜間人工光による海鳥の行動変化

○永井彩実(北大)・富田直樹(山階鳥研)・西沢文吾(水研機構 水産資源研)・綿貫豊・Thiebot Jean-Baptiste(北大)

近年人間活動は沿岸から外洋へと拡大し、夜間人工光も増加が加速している。これらによる「光害」が注目されており、海鳥では巣立ち雛が都市照明に誘引されて落下・死亡する、船舶の照明により衝突・油汚染を受けるなどが報告されている。しかしながら、海上における海鳥への人工光の影響を個体の行動から評価した研究は少ない。本研究では、2014-2018年に伊豆諸島鳥島でアホウドリ12個体に装着された小型光記録装置(GLS)のデータを再解析し、7070夜の記録から人工光の発生イベントを特定し、また電気伝導度から鳥の行動(飛翔、休息、採餌)を推定した。光の有無で鳥の外洋における夜間行動を比較した結果、人工光が検出された夜は採餌と思われる行動の時間割合が高く、休息行動の割合が減少した。この結果は、人間活動による海上の人工光が外洋においても海洋生物の自然な行動に影響を与える可能性を示唆している。

P101*

GPSトラッキングによるタマシギの周年行動と環境利用の季節・昼夜変化

喜多村珠妃(人環大・環境)・根本宗一郎(西三河野鳥の会)・上田(人環大・人環)・岡久(人環大・環境)

タマシギ *Rostratula benghalensis* は農地環境に依存する留鳥であるが、その年間を通じた空間利用の実態は不明である。本研究では、タマシギの繁殖期および越冬期における空間利用と行動パターンを明らかにすることを目的として、愛知県の水田地帯において、体重の重いメスを対象にGPS発信機を用いた行動追跡調査を実施した。追跡の結果、本種は、繁殖期を通じて草丈10~20cm程度の低草丈水田を好んで利用し、越冬期には草丈の高い二番穂に長時間滞在する個体が多く見られた。また、一部の個体は水田だけでなく河川や池なども利用していた。さらに、調査期間中に渡りを行った個体は確認されず、一度定着した個体はその場にとどまる傾向があった。今後のタマシギ保全において、季節ごとの草丈管理や水管理、営農活動との連携による生息環境の整備が重要であり、また、越冬期の環境利用を踏まえた年間を通じた保全策の検討が求められることを示している。

P102

北海道オホーツク海沿岸に生息するカワウのGPSロガーを用いた広域移動調査

○羽根田貴行(WMO)・富田大陸(WMO)・加藤洋(WMO)

カワウは広域管理が必要な種であり、地域間での移動経路や移動時期は効果的な被害対策や管理計画を検討・実行するうえで重要な情報である。

近年、北海道で足環を装着されたカワウが本州以南で目撃されており、北海道と本州との間でカワウの季節的な往来があることが確認されている。しかし、現在得られている広域移動に関する情報は足環調査による標識個体の目撃情報のみで、データの質・量ともに乏しく、地域間の詳細な移動経路や移動時期は不明である。そこで、これまで本州以南への移動が確認されている北海道湧別川河口に生息するカワウにGPSロガーを装着し、北海道に生息するカワウの移動経路や移動時期を明らかにすることを目的として調査を行った。

北海道湧別川河口において、くくりわなを用いて2024年に1羽、2025年に1羽の計2羽のカワウを捕獲した。捕獲したカワウには太陽光パネル搭載型データロガーを装着し、放鳥した。これらのロガーから得られた位置情報を解析し、広域移動の経路や移動時期、日周活動を明らかにする。

けて、昼間には屋根の上、夜間にはゴルフ場や河川敷等の草地を利用しており、農地以外の利用も多く確認された。本研究は、サンプル数は少ないものの、日本国内で1年を過ごすシギ・チドリの非繁殖期の行動を詳細に明らかにした数少ない追跡事例であるため、その詳細の結果を報告する

P106

ケリ幼鳥の出生から1年間の追跡 ～GPS および足環装着個体の移動、帰還、越冬、繁殖

○脇坂啓子(関西ケリ研究会)脇坂英弥(関西ケリ研究会)

ケリ成鳥の移動や繁殖生態に関してはいくつかの知見があるが、幼鳥についてはほとんどない。局所的な繁殖分布を示すケリにおいて、幼鳥の分散過程の解明こそ重要である。そのため、2024～25年に、GPS 装着幼鳥1個体の追跡と行動観察を行い、自立前後の移動と、越冬から繁殖までの過程を明らかにした。加えて、他個体と同じ傾向を示すかを検証するため、GPS 個体と同郷(京都府巨椋干拓地)の幼鳥 49 個体に足環標識し追跡した。GPS 個体は飛翔後に行動圏を徐々に広げ、出生地を離れて以降、三川合流地帯を中心に京都府八幡市、長岡京市、大阪府高槻市など広く移動していた。12月に帰還後越冬し、成鳥より2か月程遅い4月に求愛行動を示したが繁殖に至らなかった。足環個体は、GPS 個体の移動地以外に大阪府泉佐野市と京都府京田辺市で発見された。帰還率は3割未満で、雛孵化に至ったのは1羽のみであった。以上より、我々は、幼鳥の分散過程を初めて明らかにするとともに、出生翌年の繁殖成功の難しさを提示した。今後、帰還しない幼鳥の生死を含む現状を把握するため、追跡の工夫が必要である。

P107*

換羽サイクルに基づく鳥類の年齢記録システムー日本における導入の意義

○細谷淳(鳥類標識協会)

日本における鳥類の羽衣の用語体系と年齢記録には課題がある。夏羽など季節に基づく用語や、生殖羽のようなライフイベントに基づく用語は矛盾や曖昧さを生じ、年齢記録に用いるとデータの整合性に問題が生じる。暦年システムも、1月1日を跨いで繁殖する種には適用できない。これらは正確な年齢記録、換羽研究、熱帯・赤道以南地域との共同研究の障害となっている。HP システムは、多くの種に共通する換羽様式を相同性の観点から体系化し、WRP システムは HP システムを年齢記録に応用したものである。WRP は問題を解決しつつ、失う情報が無くデータの解析も行いやすい。

P108

大和川下流部の水鳥の30年

和田 岳(大阪市立自然史博物館)

大和川は、大阪府南部を流れる大阪府で2番目に大きな河川であり、大阪湾に流入する河川としても、淀川について2番目に大きい。この大和川の下流部(大阪市域である新明治橋～河口部)において、1994年5月から2024年4月までの30年間、月1回のペースで水鳥のカウントを行った。

大和川河口部は大阪湾岸で有数のカモメ類が集まる場所であり、調査を始めた当初は、冬期のピーク時のユリカモメ個体数は4000羽を超えていた。しかし、2003年度以降、3000羽を超えなく

なり、近年はかろうじて 1000 羽を超える程度に減少している。個体数の減少とともに河川を遡上するユリカモメの個体数も減少し、近年の分布は河口部に限定されている。

一方、調査開始時には見られなかったオオバンは、2015 年度から定期的に渡来するようになり、近年の増加が著しい。カワアイサやカンムリカイツブリも近年になって記録されるようになった。

発表では、30 年の間の大和川下流部の水鳥各種の変化について報告する。とくにカモメ類については、大阪湾岸の他地域の傾向と比較を試みる。

P109*

市民科学と画像認識 AI をもちいた絶滅危惧種の識別

○福井智樹(東京都市大)、吉田祐一・工藤萌華(生態教育センター、葛西鳥類保全委員会)・菊地伸夫・堀直子・渡辺欣正(東京都公園協会、葛西鳥類保全委員会)・北村亘(東京都市大、葛西鳥類保全委員会)

鳥類の生息確認に自動撮影カメラで観測することがあるが、対象とした種が写っていない大量のデータを取得してしまうことがある。この問題を解決するために AI などによる自動識別も検討されているが AI 構築のために多くの学習用データが必要となる。そこで本研究では葛西臨海公園に生息するヒクイナを対象とし、市民科学的手法を用いた AI の開発を試みた。一般市民から SNS などを利用しヒクイナの画像を募集することで約 1000 枚の画像を得た。また、ワークショップ型のイベントにより一般市民に AI の学習に使う画像のラベリングしてもらうことで、AI に必要な学習データを集めた。データをもとに、ヒクイナを検知すると周りを四角で囲った画像を作成する AI を構築した。1000 枚の画像を 200 回学習した AI を使用した結果、テスト段階で正確に識別し、四角の中心距離はラベリング時に使用した四角と平均距離が約 25px しか離れていなかった。市民科学的手法を用いることで高精度な識別用 AI を構築することができた。制作した AI のモデルは今後ヒクイナの観測システムの制作に使用する予定だ。

P110*

都市公園における鳥類の空間利用：植栽樹木との関係に着目して

○酒井結(農工大院・農)・諸澤崇裕(農工大・野生動物センター)

都市化が進行する現代社会で都市緑地は生物多様性保全の重要な役割を担っている。都市公園内の植生構造や下層植生など緑地環境の違いが鳥類の多様性に影響を及ぼすことが知られている。本研究では都市公園において、鳥類が緑地面積や植栽木など異なる環境をどのように利用しているかを明らかにするため、多様性指数、および公園内部の空間利用と餌資源としての植栽木の関係を季節ごとに調べた。調査は 2024 年 5 月から 2025 年 2 月にかけて東京都府中市・小金井市周辺の都市公園 7 か所でラインセンサスを実施した。さらに、センサスルート付近の樹木を同定し、果実タイプを分類し解析に利用した。合計 41 種、5,093 個体の鳥類が確認され、面積の大きい公園ほど多様性指数は高く 1 年を通しての変動は少なかった。公園内の利用に関しては種ごと、季節ごとに集中分布する場所が植栽木と関連して異なった。以上より植栽環境の違いが鳥類の季節的利用や分布に影響している可能性が示唆された。また、採餌の観点から季節により結実樹種と関連して利用場所が変化することが要因の 1 つであると考えられた。

P111

日の出後の経過時間がスポットセンサスの記録率に与える影響: 季節・環境による比較

○久野真純(広島大)・大坂英樹(トリルラボ)・大橋正明(日本野鳥の会)・村上公輝(日本野鳥の会)・
本村健(中野市教育委員会)・Xike Xiao(広島大)・出口翔大(福井市自然史博)

国内の鳥類センサスでは、繁殖期には日の出後 3～4 時間以内、越冬期には午前中(日の出後 4～5 時間以内)までに調査を行うことが推奨されているが、これらの時間設定に対する定量的な根拠は乏しい。とくに、越冬期や環境タイプごとの違いに関する検証はほとんどされていない。本研究では、福井県嶺北地域・石川県加賀地域の 225 地点で、繁殖期および越冬期にスポットセンサスを実施し、日の出後経過時間が鳥類の種数および個体数に与える影響を、環境タイプ(農地・森林・市街地)ごとに検証した。一般化線形混合モデルによる解析の結果、越冬期では森林・市街地において日の出後時間の経過とともに種数・個体数が有意に減少する傾向がみられた。これは、寒冷な夜間を経た早朝に採餌活動が集中し、その後活動量が低下する日周リズムによるものと考えられる。市街地では、人間活動の増加とともに鳥類の活動も減少した可能性も考えられる。一方繁殖期では、ヒヨドリなどの非さえずり種が優占していたことが影響した可能性がある。越冬期においては日の出時間経過後早い時間帯に調査を実施することが提案される。

P112*

都市鳥からみたエコロジカル・ネットワーク形成に必要な条件の解明

○西亮憲(名城大院)・橋本啓史(名城大)

都市における多様な野鳥の生息は、都市住民の自然や環境への関心を高め、日常にうるおいをもたらす。しかし都市化の進行により、名古屋市では過去 30 年間で人口・世帯数が増加し、緑地面積は減少している。また、これにより緑地の孤立・断片化が生じている。これらの背景から、生態系の配置やつながりを活かすエコロジカル・ネットワークが注目されている。本研究では、生息地の連結性を担うコリドーとしての街路樹に着目し、名古屋市の名城公園(約 40ha)と名古屋城外堀(約 10ha)を南北に結ぶ 7 本の街路に沿って、合計約 5km の調査ルートを設定した(緑地間距離: 約 350m)。2025 年 5～7 月にルートセンサス法により、ルート両側 25m の範囲に出現した鳥類を記録し、樹木の樹種・分布・樹高等も調査した。5 月、6 月の調査ではそれぞれ 13 種 187 羽、13 種 163 羽の鳥類が確認され、街路樹が緑地間の移動経路と生息地(営巣地)としての役割を果たしていた。今後は、各種鳥類の出現位置と周辺の植生環境(樹種・樹高・常緑/落葉など)との関係性についても分析を行う予定である。

P113

環境が異なる FSC 認証林における鳥類の比較と評価

○高木憲太郎(バードリサーチ)・天野陽介(WWF ジャパン)

多様な環境を有する東白川村 FSC 認証林の鳥類にとっての価値を評価するために、村内の FSC 認証林を3つのカテゴリーA)低木のある針広混交林、B)ササのある針葉樹林、C)下草のない針葉樹林に分類した。各カテゴリーごとに 4 地点、計 12 地点でスポットセンサスを 2025 年 5-6 月に 4 回ずつ実施し、種ごとの生息個体数を得た。確認された種数は合計 37 種であり、環境選好性、営巣場所選択、食性をもとに分類し指標値を算出した。なお、環境選好性については、多くの森林環境で記録されるヒヨドリのようなジェネラリストと行動圏が広い種は除外した。合計個体数は A>B>C の

順で多くなることを想定したが、調査結果は想定と異なった。森林 A では藪や低木層を好む鳥が多く記録されたが、森林 B、C で広葉樹二次林や林縁を好む鳥が多く記録され、森林 C で沢や土崖を好む鳥が記録されたことで逆転が起きていた。このように森林の評価をする上では、単純に個体数や種数の豊富さでは評価できない場合も、環境選好性などに基づいて鳥種を分類することで、その森林の鳥類にとっての価値を評価することができる。

P114*

カメラ撮影を活用したカラスのねぐら調査法の試行

○加納彩海(岐阜大院・自然研)・酒井泰和(日本野鳥の会岐阜)・森部絢嗣(岐阜大院・自然研)

JR 岐阜駅周辺に形成されるカラスの冬季ねぐらに着目し、個体数の把握を目的とした調査を実施した。予備調査にてねぐらに帰還する際の飛翔経路がある程度定まっていることが明らかとなったため、当該ルートに向けてカメラを設置し、動画撮影による個体数の記録を試みた。本手法により少人数での調査が行えたほか、録画映像を後日再生しながら個体数を精査することで、一度では把握しきれない多数個体の正確なカウントが可能となった。また日没後の低照度環境下においても、映像の加工処理によりカラスの飛翔を視覚的に捉えることができた。以上の利点から、本手法は調査人員が限られる場合や視認性の低下する時間帯におけるねぐら個体数調査において、特に有効であると考えられた。一方で、カメラの画角外を飛翔する個体を記録できないこと、オートフォーカスのまま撮影を続行すると照度が低下した際にピントがずれてデータ取得が困難になること、適切な撮影場所や方向を決定するために綿密な予備調査が必要となること等、いくつかの課題点も明らかとなった。

P115*

日比谷公園における野鳥の鳴き声自動識別と位置検出

○吉田聖弥(東京都市大)・宮崎滉平(ハイラブル)・柳楽浩平(ハイラブル)・水本武志(ハイラブル)・北村亘(東京都市大)

近年、都市化の進展に伴い生物多様性の保全は世界的な課題となっている。日本では高度経済成長期以降人口の増加に伴い都市開発がされ、都市部に生息する生物の種類や個体数が減少する傾向にある。都市公園は、人間活動と生態的機能の両立を図るグリーン・インフラとしての役割を果たしており、都市公園の健全性を測る指標を作成することは都市生態系の評価において重要となる。本研究では、都市公園において生態系の有効な指標種である鳥類相を把握するにあたり、音環境分析技術の応用可能性を探ることを目的として、東京都日比谷公園において鳥類調査を実施した。ラインセンサスおよびポイントセンサスを併用し種の記録を行うと同時に、マイクアレイを用いて、鳥類の鳴き声のリアルタイム分類を試みた。本発表では、目視調査と音響データによる種の確認位置の比較を通じて得られた知見と、今後の都市生態系モニタリングへの応用可能性について報告する。

P116

市民参加による渡り鳥の夜間フライトコール(NFC)録音調査の運用と課題

○大坂英樹(トリルラボ)・田米希久代(加賀市鴨池観察館)・櫻井佳明(加賀市鴨池観察館)

夜間フライトコール(NFC)録音は、渡り鳥の時期やルート解明に有効な手法である。本調査では、市

民参加型で自宅に設置した録音機材により、3 シーズンで 18 サイト・計 6,470 時間の音源を収集した。最大の課題は継続的な参加意欲の維持であり、録音機材の電池交換や設定確認、音源取り出し、アップロード作業の煩雑さが負担となった。モチベーションの維持には、作業の簡略化と即時のフィードバックが不可欠であるとわかった。録音効率の向上に向けては、高高度を通過する個体群の NFC を捉えるべく一部でパラボマイクを導入し、効果を確認した。また、電池交換の手間を減らす目的でオーディオ用 USB 給電を試みたが、ハムノイズが混入しフィルタ処理が必要となった。将来的な森林や僻地での展開に向けて、動物干渉や日射・雨音への対策として布製ドームを試作した。今後は、自律分散的かつ低保守で運用可能な長期観測体制を目指す。

P117*

鳥類相の季節変化からみた人工干潟の再生状況の評価

○東直希(広島工大)・岡浩平(広島工大)

広島湾西部には、鳥類の保全のために造成された五日市人工干潟が存在し、鳥類のモニタリングが行われている。しかし、モニタリング結果だけでは、再生状況を評価するには不十分であり、周辺の自然干潟と比較した評価をすることが必要であると考えられる。そこで本研究では、五日市人工干潟とその周辺に存在する 2 地点の自然干潟で年間を通して鳥類相の比較を行い、五日市人工干潟の鳥類生息地としての機能を評価することを目的とした。2024 年の秋季、冬季、2025 年の春季に各地点 4 回ずつの鳥類調査を行った。調査方法は、1 時間の定点センサスを行い、水鳥の種別の個体数を記録した。調査の結果、水鳥の出現種数は計 37 種、出現個体数は計 4,712 羽であった。五日市人工干潟では、24 種、1,277 羽が確認され、同程度の面積の自然干潟 1 地点と同等の出現種数であった。他の干潟と比較して、コチドリ、トウネン、ミユビシギが独自の種として出現し、特徴としてカモ類の出現が多かった。今後は、夏季の調査結果も追加し、年間を通した人工干潟の鳥類の生息地としての機能を評価する予定である。

P118

東北地方に生息するコムクドリの気候変動による分布変化の予測

○大泉龍太郎(北大・院理)、池田小春(岩大・院)、高木昌興(北大・院理)、山内貴義(岩大・農)

東北地方におけるコムクドリの分布を Maxent モデルによって推定した。2022 年 5～6 月に岩手県盛岡市で行った踏査による生息分布調査結果と、2025 年 5 月に岩手県宮古市と秋田県大仙市、そして青森県八戸市で車両からの観察調査で得た位置情報を在データとした。環境要因のデータは 1km 四方グリッド毎の土地利用面積や平均傾斜、2020 年代の平均気温を用いた。作成されたモデルに全球気候モデルで予測された 1970 年代と 2030 年代、2050 年代そして 2070 年代の気温を用いて過去及び将来の分布を推定した。現在の生息分布は北東北の地方都市に集中していたが、1970 年代では南東北地域に分布が推定されたことから、約 50 年間で分布が北上した可能性が考えられた。また将来予測では気温上昇に伴って分布は北上を続け、50 年後には東北地方の平地がコムクドリの生息に適さなくなると考えられた。本研究は全球気候モデルを用いて気候変動が平地性の渡り鳥の分布に与える影響を地域スケールで示した国内初の試みであり、生物多様性研究の基盤的知見を提供できると思われる。

P119*

水田景観の捕食者サシバの主要生息地における餌生物カエル3種の分布決定機構を探る
○尾上愛実(東大)・藤田剛(東大)・宮下直(東大)

サシバは農地景観の生物多様性保全のシンボルとして有名な猛禽で、水田と森などがモザイク状に配置された谷津景観などで繁殖する。国土全域にわたって進む農地の減少や農地整備、耕作放棄によって、サシバに象徴される農地景観の生物多様性の消失が懸念されている。

サシバが利用する主な餌生物として水田で繁殖するカエル類が挙げられる。農地整備がカエル類に影響することが古くから指摘されているが、サシバが選好するような谷津景観で、森や水田、放棄地、そして土水路やコンクリート水路の配置がカエル類の分布にどう影響しているかは、まだ不明な点も多い。

演者らは、サシバが高密度で繁殖する北関東栃木県中東部の谷津景観を対象に、カエル類の分布と、森や水田、休耕地などの草地、土水路やコンクリート水路の配置との関係を調べた。調査は、田植え後でトウキョウダルマガエルなどの産卵期後期にあたると思われる5月下旬と、水田の中干しが始まって一週間程度でカエルの上陸期にあたる6月下旬に行なった。その結果を報告する。

P120*

山中湖のコブハクチョウ個体識別管理の取組み

○葉山久世(かながわ野生動物 SNW) 加藤ゆき(神奈川県博) 篠田授樹(地域自然財産研究所)
菊池博(横浜市金沢動物園)

山梨県山中湖村のコブハクチョウは、1968(昭和43)年、山口県宇部市常盤公園から導入した2つがいの子孫で、現在は70羽ほどが放し飼いされている。他地域への拡散防止などの観点から飼育管理の必要性を山中湖村と話し合ってきたところ理解が得られ、2024年度事業として村が足環を作成し装着することになった。寿命が長いことから、足環の材質は金属製とし、関係部署と調整の上、深緑色に白色で数字3桁と文字を印字した。

2025年3月以降、村から事業委託された発表者らが足環を順次取り付けたところ、コブハクチョウが頻繁に齧ることで、足環表面の数字が読めなくなるケースが続出した。そこで、文字を刻印し、足環内径を広げた改良版を取り付けて経過を観察しているところである。現在のところ、個体識別はやや困難ではあるが、特徴的な足環が着いたことで山中湖の飼育個体であることは容易に確認でき、他地域との出入りの把握が可能となった。今後、全羽を標識することで個体ごとの情報が記録可能となり、本種の適正管理(正確な個体数、移動の把握、傷病対応)に役立つことが期待される。

P121

モニ1000 陸生鳥類調査(一般サイト)からわかった北海道の鳥類の増減

○奴賀俊光・葉山政治((公財)日本野鳥の会)

モニタリングサイト1000は、日本の多様な生態系について環境省生物多様性センターが行っている全国規模のモニタリング調査である。その中で、森林・草原調査の一般サイトは約420サイトある。5年を1期とし、各サイトで概ね5年に1度、陸生鳥類調査(繁殖期および越冬期)および植生概況調査(繁殖期のみに実施)を行っている。2008年から2022年までの15年間、3期分(第2期~第4期)の一般サイトの鳥類調査のデータを用いて、今回は特に北海道に特有な鳥類の個体数の増減を

調べた。森林では、繁殖期のアオバト、越冬期のキバシリなどは全国の傾向と同様に増加、繁殖期のアオジやコルリなどは減少していた。草原では、繁殖期のノビタキ、シマセンニュウなどが減少していた。また、調査員の引退により、担当調査員不在のサイトが増えてきている。北海道でも調査員不在のサイトが増えており、今後のモニタリングの継続が危ぶまれることから、北海道の調査員不在のサイトを紹介し、調査員のリクルートにもつなげたい。

P122*

渡り性水鳥の生息地選好から導く普通種保全の希少種への波及効果

○清水孟彦(北大)・堀隼輔(ドーコン)・末田晃太(日本気象株式会社)・市原農太郎(ウエスコ)・和賀大樹(北大)・広部康太(北大)・先崎理之(北大)

世界的な自然生息地の消失や断片化による生物多様性の低下に伴い、生息地の効果的な復元や創出が求められている。従来の研究では、生物群集に対する様々な保全策の効果が評価されてきた。しかし、創出される生息地の量や質、その周辺の景観構造、群集内の相互作用によって保全の効果が異なるかを調べた研究は限られている。本研究では、北海道石狩平野で 2023～24 年の秋季に生じた短期農地湛水を対象に、種間の共起性を考慮した上で、圃場内の湛水割合や農地周辺の景観構造等の環境変数と水鳥群集の多様性の関係性を調査した。その結果、水鳥群集の多様性は、農地面積が大きく、湛水割合が 50～90%の場合に高くなることが明らかになった。また、これらの環境要因は個体数の多い水鳥種に強く影響する一方で、希少種への直接的な影響は小さく、希少種は普通種の存在によって生息地選択が促進されていることが示された。以上の結果より、異なる水深をもつ広域な湿地の創出は普通種の生息地利用を促し、結果として希少種の保全にも繋がる可能性が示唆された。

P123*

北関東の平野部における草原性鳥類の分布特性と農地の利用実態の把握

○並木大斗・上條隆志・飯島大智(筑波大)

日本の草原は減少傾向にあり、草原性鳥類は絶滅の危機にある。一方、農地は草原性鳥類の代替的な生息地として機能するとされている。よって、各種の分布の理解には、草原に加え農地を含む様々な土地利用の影響を考える必要がある。本研究では、農地景観における草原性鳥類の分布を決定する要因の検証を目的とした。2023 年から 2025 年の繁殖期に関東平野におけるオオセッカ、オオヨシキリ、コジュリン、セッカ、ヒバリ、ホオアカの分布を踏査した。各種の在情報、および他種の在地点を不在地点とみなし取得した在不在情報をそれぞれ目的変数とし種分布モデルを構築した。その結果、ヒバリは水田と畑の面積に対して、オオヨシキリとセッカは水田と湿生草原の面積に対してそれぞれ正の応答を示した。これらの種は、農地と草原の双方を利用すると考えられる。一方、希少種であるオオセッカ、コジュリン、ホオアカは湿生草原の面積に対して正の応答を示す傾向があった。これらの種は農地景観においても草原への依存度が高いと考えられ、草原性鳥類の保全には農地と草原を含む景観の包括的な管理が重要である。

P124

西日本におけるツル類の越冬期埒について
重永明生・○加藤ゆき(神奈川県博)

西日本におけるツル類の主な越冬地として、鹿児島県出水平野と山口県八代が知られる。飛来地はいずれも鳥獣保護区及び特別天然記念物に指定され、餌場や埒の環境が整備されている。出水平野では長年の保護活動により越冬数が急激に増加する一方で、近年は高病原性鳥インフルエンザによる多数の感染死が報告され、養鶏場でも発生が確認されるなど、以前から危惧されていた事態が生じている。ツル類への感染経路については未だ解明されていない部分も多いが、過密化した埒内での飛沫感染や排せつ物によって汚染された水を飲むことが原因の一つではないかと考えられる。出水平野への一極集中を解消するために、これまで関係省庁・自治体等により八代を含む他地域への越冬地分散施策が進められてきた。その中で重要視されているのは、『十分な広さを持つ餌場と安心して休める埒の整備』である。餌場はともかく、既存の越冬環境をベースにした埒整備が果たして保全手法として有効なのか。これまで発表者らが西日本各地で確認した観察例や過去の文献等から、自然下におけるツル類の埒環境を考察してみた。

P125

オホーツク地方でタンチョウの越冬個体群は成立するか？
○正富欣之(JTRI)

タンチョウは北海道による令和6年度第2回越冬分調査(2025年1月実施)において、約1,900羽の野生個体が確認され、釧路総合振興局管内で4分の3以上が越冬していた。2022年から昨年まで、3年連続して鳥インフルエンザに感染した個体が発見された。集団感染は確認されていないが、越冬地の分離・分散が緊急課題となっている。オホーツク地方では2015年に軽飛行機を使用した調査で6繁殖番いが発見されたが、それ以降同様の調査は行われなかった。そこで、2024年4月に軽飛行機による広域的な営巣状況調査を実施し、その後UAVを用いて局所的な育雛状況を調べた。さらに、越冬状況を把握するため、本種の利用が予想される場所に自動撮影カメラを設置した。また、自家用車で巡回し、個体を発見した際にデジタルカメラやビデオカメラで鳥体を撮影し、位置情報、羽数(成鳥・亜成鳥・幼鳥別)、環境や行動を記録した。越冬期にもUAVにより個体を搜索し、発見時に撮影することもあった。これらの繁殖および越冬状況調査結果を基に、分離した越冬個体群が成立するか検討した。

P126

北海道北部日本海側に生息するチュウヒの繁殖経過に伴う営巣位置の変化
○東谷和徳((株)セ・プラン)・土門優介((株)ドーコン)・先崎啓究・先崎愛子(道央鳥類調査グループ)・森田佑介・森田静

チュウヒは近年繁殖個体数が減少し、2024年の全国をつがい数は約120つがいと推測され保全の必要性が高まっている(浦2024)。事業における保全対策の検討には、繁殖ステージや巣位置が重視されるが、総括的な繁殖記録はあるが、詳細な繁殖経過や巣位置の変化に関する知見は少ない。

調査地は北海道北部日本海側(面積2,826ha)で、2024~2025年の4~8月に毎月行いのべ35日間実施した。調査中は車中観察によって自然な行動の記録に努め、個体識別を行ってつがいご

との巣位置、繁殖ステージを詳細に把握した。結果、のべ 15 つがいの記録が得られ、そのうち造巣期に複数箇所に巣材を搬入した例が 1 つがい、造巣期から抱卵期までの間に巣位置が変わった例が 3 つがい、抱卵期に繁殖失敗し、再営巣に伴い巣を移動した例が 2 つがい確認された。巣位置が変更された時期は 4～5 月に 5 つがい、5～6 月に 1 つがいで、変更前後の巣間距離は 70～2,770m (平均 $836 \pm 1,003$ m, $N=5$) であった。得られた結果は調査数量や時期の設定、保全計画の策定に重要と考えられた。

P127*

絶滅危惧種に対する地域住民の意識調査－コアジサシの保全に向けて－

○大塚育(千葉科学大)・阿部仁美(千葉科学大)

銚子市付近には水鳥にとって重要な登録基準を満たす湿地が存在し、コアジサシの飛来・繁殖も確認されている。本種は国内、国際間における希少鳥類であり、春先に海岸や砂礫地で繁殖を行うため、保全には地域住民の認知・理解が重要である。本研究では本種の飛来・繁殖の状況のモニタリング、生物に対する地域住民の意識調査、教育活動後に知識の定着および意識変化を調べるためアンケート調査を行った。本種の繁殖成功率は 1.9%と低く、捕食者が多く、変形しやすい土地の影響を受けたと考えられる。地域住民の意識調査から、野生動物に興味がある児童は少なく、希少動植物の知識は低いものの、興味・関心があることがわかった。教員は児童に希少動植物に関する学習をしてほしいと考える一方、知識を伝える場が少ないことがわかった。児童の約 90%は教育活動を通して野生動物に興味を持ったため、専門家が学習の機会を提供することで、本種の保全に役立つと考えられる。本研究における活動は環境教育に該当し、児童の教育、環境教育の推進のためにも重要であり、活動内容の構築・継続が重要だと考える。

P128

気候変動対策としての秋耕と鳥類の食物量のトレードオフを軽減するには

○田尻浩伸(日本野鳥の会、片野鴨池自然研)・田米希久代(加賀市鴨池観察館、片野鴨池自然研)・林俊夫(太田川土地改良区)・東 英治(大聖寺下福田町生産組合内 あちの郷米部会)・谷 和幸(大聖寺下福田町生産組合)・横山明男

生物多様性の保全と気候変動の緩和、適応など、今日的な環境課題に対応する際、ある課題の解決策が別の課題に負の影響を与えるトレードオフ(二律背反)となる場合がある。環境課題は相互に関連があるため、トレードオフの有無の把握とその解消、軽減が必要である。気候変動対策として日本でも温室効果ガスの排出削減が進められており、CO₂ 換算で総排出量の約 1% (農業分野の約 30%、農業分野は全体の約 4%) を占める稲作では、耕作期間中に排水し田面を乾かす中干しを通常より長くする「中干し延長」や収穫後の稲わら等を地中にすき込む「秋耕(秋起こし)」が奨励されている。しかし、中干しはカエル類やトンボ類など水生生物の生息環境を喪失させ、また秋耕は田面に残された落ちモミや二番穂を地中に埋没させるためガンカモ類やツル類などの食物量を低下させるので、結果的に生物多様性に影響を与えるトレードオフの存在が指摘されている。そこで、本研究では稲刈り以降の二番穂結実状況およびイネ植物体の再生状況の経時変化を把握することで、トレードオフを軽減できるような秋耕の時期を検討した。

P129*

捕食者除け構造を有する巣箱での外来種アライグマによるヤマガラ繁殖巣の攪乱

○小川華奈・松井晋(東海大・生物)

鳥類の繁殖失敗の主要因は卵やヒナの捕食で、北海道西部では巣箱を利用して繁殖する樹洞営巣性鳥類が、特定外来種のアライグマに襲撃されることが多い。そこで私たちが使用する巣箱は、前面左上に出入口となる4cm四方の角穴をあけて、巣箱内部には角穴の下ラインにあわせてテンの捕食回避に効果がある長方形の木片を取り付け、さらに捕食者となる哺乳類が出入口から巣材まで直線的に上腕が入らないように、巣箱内部の出入口の真正面になる位置に木を設置している。2023 年にはアライグマがこの捕食者除けの構造をもつ巣箱を襲撃しても、シジュウカラの巣捕食が回避され、雛が巣立った。一方で 2025 年5月に同様の捕食者除け構造を有する巣箱において、巣内育雛中のヤマガラが夜間にアライグマに襲撃され、メス親や巣内雛は捕食されなかったが、親鳥が攪乱された巣を放棄した。天板に設置した CCD カメラの動画から、アライグマは巣箱内に腕を入れていて、手首をまげて長い指先を伸ばして、抱雛中のメス親が産座に入ったままの状態、巣材をひっくり返していた。

P130

新潟県における傷病鳥の収容データから見たネコ被害の実態

○佐藤悠子(愛鳥センター)

ネコの捕食による在来種への影響については、島嶼部における報告は多いものの、内地での野鳥の被害状況についての報告は少なく、実態が明らかになっていない。本発表では、新潟県愛鳥センターにおいて 2008 年度～2024 年度に収容された傷病鳥のデータから、ネコの襲撃が原因で傷病を負った鳥の実態について報告する。対象期間に収容された 7,535 羽中、傷病原因が他動物の襲撃であるものが 659 羽、そのうち原因動物がネコと判明しているものは 217 羽であった。種類は 49 種が含まれ、特に多かったのはスズメ 40 羽、キジバト 23 羽、ヒヨドリ 20 羽であった。年齢は、成鳥 38.2%、幼鳥または若鳥 32.7%、ヒナ 17.5%、不明 11.5%であった。転帰は、死亡 72.4%、放鳥 26.7%、その他 0.9%であった。転帰までの日数は、死亡が 0～3 日(死亡個体の 82.2%)、放鳥が 0～2 日(放鳥個体の 72.4%)の間に集中していた。短期間での死亡率の高さからも、発見、保護に至る前に死亡している個体も多いことが推測され、収容個体が示すのは被害全体のごく一部と考えられる。

P131*

動力源の異なる自動車騒音が鳥類の捕食者検知感度へおよぼす影響

○坂元利駆(近畿大院・農)・石若直人(近畿大院・農)・早坂大亮(近畿大・農)

自動車の普及にともない、交通騒音がもたらす動物への影響が顕在化しつつある。鳥類は音を介した行動が多様であるため、影響は甚大である可能性が高い。たとえば、鳥類は捕食者の接近時に生じる羽音や足音を頼りに、その襲来を検知する。そのため、交通騒音が多い環境では、これらの聴覚情報がかき消されることで捕食者の襲来を検知できず、被食リスクが上昇し得る。とはいえ、これまでの鳥類に対する騒音の研究は音全体での影響を評価したに過ぎない。たとえば、自動車ごとに異なる動力源(エンジン、モーター)が搭載されており、それぞれで走行音に違いがみられる。その場合、動力源ごとに鳥類に与える影響は異なるだろう。そこで本研究では、鳥類による捕食者(猛禽類や爬虫

類, 陸生哺乳類)の非発声音(羽音・足音)に対する応答におよぼす自動車騒音の影響を, 動力源(ガソリン, ディーゼル, EV)間で比較する. これまで, スズメでは同一個体群に連続して音声を再生すると慣れが生じ, 捕食者検知感度が鈍ることが分かっている. 本発表では, 再生音声に対する慣れを回避した実験方法について議論したい.

P132

高速道路 IC 内で確認されたサギ類の多様な営巣様式

○芳賀大(野鳥の会愛知県支部)・西村祐輝(野鳥の会愛知県支部)・橋本啓史(名城大)・東実優(名城大)

2011 年から NEXCO 中日本管内の高速道路周辺のサギコロニー内の個体数や種類、営巣状況などの実態やその推移を把握する調査が行われている。

本発表では、長年継続してきた調査の中で確認された、サギ類 6 種の営巣様式について報告する。本サギコロニー形成において、樹冠部・樹上の高段・表面はアオサギ、ダイサギなどの大型サギ類が営巣を開始し、その後続くように樹木の中段、表面から内部などにゴイサギ、アマサギ、チュウサギ、コサギが営巣を開始する。2016 年に弥富 IC でコロニーが消失した後は、蟹江 IC での個体数が増加し、樹木その他、ススキ、セイタカアワダチソウ等の草本の上部にチュウサギ、コサギの営巣が確認され、2025 年の繁殖期には、コサギがフェンス上のツタ類越し、ツタ類に直接造巣する様子が確認された。サギ類は本来、樹上営巣が多いが、近年は草上や人工物上など低い位置での営巣も確認されており、過密化した際でも営巣場所の柔軟性が高いことが示唆された。

P133*

西表島および石垣島におけるカンムリワシのロードキル発生環境

○森嶋茜(帯広畜産大)・水谷晃(Island Ecosystem Research)・山本誉士(麻布大)・浅利裕伸(帯広畜産大)

道路建設は、野生動物の生息地の減少や分断化をもたらすほか、道路横断によるロードキルなどの負の影響を与える。カンムリワシ *Spilornis cheela perplexus* は日本において主に西表島と石垣島に留鳥として生息するが、環境省のレッドリストでは絶滅危惧 IA 類に指定されている。近年本種のロードキル件数が増加しており、ロードキルの対策が急務となっていることから、効果的なカンムリワシのロードキル対策に寄与する知見を得るために、環境要因を明らかにすることを目的とした。本研究では、環境省が保有する、西表島および石垣島におけるロードキルデータを用いて、対象道路に対してカンムリワシの行動圏を参考に1km×1km のグリッドを作成し、ロードキル件数を目的変数、バッファ内の各土地利用面積を説明変数として一般化線形モデルを構築した。その結果、西表島において有意差は見られたものの特に目立って関係しているものはなかったが、石垣島においては水田などの湿地が大きな要因として関わっていることが示唆された。

P134*

航空写真×レーザ計測：洋上の鳥類の三次元モニタリングに向けた試み

○倉部鈴美・板谷浩男・中込大河・工藤嘉晃・藤井直紀・島田泰夫・桃谷辰也(日本気象協会)、若松孝平・玉井翔・高野正範・佐橋優也(中日本航空)

愛知県伊良湖岬から三重県鳥羽市に至る海域を対象として、ヘリコプターによる航空写真撮影とレーザ計測を同時に実施し、洋上の鳥類のモニタリングに向けた解析手法を検討した。高度 300m 及び 600m の飛行により解像度の異なる航空写真を取得し、これらに対し目視による種判別を行った。また、航空写真による個体数のカウント結果と、レーザ計測の結果から推定された個体数を比較し、それぞれの計測手法の特性を評価した。その結果、Webb & Nehls(2019)で種判別が十分可能とされている解像度 2 cm/pix の航空写真では、解像度 4 cm/pix のものより詳細に種判別が可能であった。加えて、レーザ計測と組み合わせることで鳥類の利用高度を把握できる可能性があることが明らかとなった。一方で、航空写真は 3 秒間隔の撮影であるのに対し、レーザ計測は常時照射であるため、両者のデータ取得タイミングにずれがある。このタイミングのずれを活用し、今後は航空写真とレーザ計測のデータ特性を踏まえた統合的な解析手法の確立を目指す。

～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ .

P135

イギリスの自然保護団体による湿地環境創出の事例紹介 国内のチュウヒの保護を目指して
○稲葉一将(日本野鳥の会)・浦達也(日本野鳥の会)・山本裕(日本野鳥の会)・手嶋洋子(日本野鳥の会)
会)・田尻浩伸(日本野鳥の会)

チュウヒ *Circus spilonotus* は、2018 年から 2020 年の日本野鳥の会による調査で、日本で繁殖するつがい数が 135 ペアということが分かった。個体数の減少の主な要因として、湿地の開発や植生遷移によるヨシ原の衰退等による生息環境の減少等が考えられている。

英国鳥類保護協会(以下、RSPB)などのイギリスの自然保護団体は、管理する保護区において鳥類の生息環境の創出をしている。チュウヒの近縁種ヨーロッパチュウヒ *C. aeruginosus* は、1971 年に 1 つがいまで減少したが、RSPB がサフォーク州に創出した保護区 Minsmere に つがいが定着し個体数増加に貢献した。その後、各地の保護区でも繁殖が始まり、現在は 600 ペア近くまで回復した。

生息環境の創出は日本においても個体数増加の有効な手段となる可能性があり、イギリスの事例から管理などの特徴を明らかにすることは重要である。今回の発表では、イギリスの自然保護団体による湿地環境創出の事例を紹介し、さらに保護区間の維持・管理手法の共通点や違いを紹介する予定である。

～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ .

P136

北海道猛禽類研究会の活動紹介 -「北海道の猛禽類 2025 年版」の発行-

藤巻裕蔵(帯畜大名誉教授)、○工藤晃央・山田芳樹・山口珠輝・堀隼輔(ドーコン)、天野拓郎(日本工営)、一北民郎(北電総合設計)、大坪二郎(いであ)、紀國聡(建設技術研究所)、栗原絢子(長大)、小林功(パシフィックコンサルタンツ)、先崎啓究(道央鳥類調査グループ)、瀧本育克・徳永尚起(建設環境研究所)、玉田克己(道総研エネルギー・環境・地質研究所)、玉田祐介(道総研林業試験場)、土屋尚(ユリーカ北海道)、木村智紀(北海道技術コンサルタント)、平井克玄(北海道ラプター)、谷津繁芳(森林環境リアライズ)

環境省が猛禽類の保護指針として策定した「猛禽類保護の進め方」は、各種事業の計画・工事に際して活用されているが、本州のデータが中心で、北海道に生息する猛禽類とは地域的な差異があった。そこで北海道猛禽類研究会では、環境アセスメント等で得られた猛禽類調査の情報について、北海道開発局をはじめとする各事業者から、事業名や位置情報を伏せたアンケート形式で提供を受けた。これを基に、1999 年に「北海道のクマタカとオオタカ」を発行し、2005 年にはハイタカとハチクマを

加えて「北海道の猛禽類」を刊行、2007年にデータを追加して改訂した。さらに2009年にハヤブサ、2013年にオジロワシを加え、2020年版では内容の更新と情報の充実を図った。そして今年度、チュウヒ、ツミ、ミサゴを新たに対象とした「北海道の猛禽類 2025年版」を発行予定である。事業者の多大な協力により、北海道における猛禽類の分布、営巣環境、繁殖生態、食性などがより明らかとなり、これを踏まえた調査指針や保全対策の事例も紹介している。

P137*

アーカイブ資料参照の可否による標本データの精度検証の有効性

○染矢楓久(北大・農)、加藤克(北大・農/北セ)

近年のデータベースの発展により、標本情報は広く共有され活用されている。一方で、公開情報にはエラーが含まれていることも指摘されており、標本利用時のデータの信頼性検証が求められる中、標本に関係するアーカイブ資料を参照することは有用な手段とされている。しかし、どのような標本でその検証が可能なのか、また不可能な場合の問題点は何かについて、具体的に示した例はほとんどない。本研究では、折居彪二郎による標本のうち、アーカイブ資料を参照できる山階鳥類研究所所蔵標本と、参照できない北大所蔵標本を比較し、上記の課題を検討した。

両標本群のラベルとデータベースの情報を、アーカイブ資料が示す折居の足跡と照合した結果、採集データの不一致は同程度確認された。ただし、山階鳥研標本は依頼人・山階芳麿と折居の標本番号が付属しており、標本採集ノートと個々の標本情報を対応させ、エラーの適切な修正が可能であったが、北大標本は不可能であった。

同じ採集者の標本であっても、アーカイブ資料との関係性が示されていることが、データの信頼性検証には必要であることが示された。

P138

漆芸の鞘塗り技法「鶴足革包研出」についての検討:「鶴足革」はツルか否か

○久井貴世(北大)・酒田堇

日本には伝統的な鞘塗りの技法が多く存在し、なかには動物に由来するものも確認できる。1873年(明治6年)のウィーン万国博覧会にも出品された「髹漆見本軍配形衝立」(京都国立博物館所蔵)のなかには見慣れない技法があり、これを調べたところ、名古屋刀剣博物館所蔵の「鶴足革包研出葵紋散御召鎧打刀拵」に類似する可能性が明らかになった。これは鶴足革という技法を用いたもので、文字通り、鞘全体をツルの足革で包んだものと説明される。これとは別に、松江歴史館にも「鶴皮張鞘脇指拵」という刀があるが、本資料は藩主が鷹狩で捕獲したツルの脚の皮をそのまま鞘に貼りつけたものである。類似のもので「鶴足皮包」といわれる資料もいくつか確認できるが、これらは上記の鶴足革の技法とは明らかに異なっている。本研究は「髹漆見本軍配形衝立」にみられる技法が鶴足革であり、かつその素材がツルであるか否かを明らかにすることを目的とするものである。現在、鶴足革(皮)と呼ばれる資料の情報収集と整理、およびテストピースの制作を進めているところであり、本発表ではその中間成果を報告する。

川ダムで6巣が見つかった。現在、繁殖地は 4 箇所、ねぐらは 18 か所確認されている。そのような中、内水面漁連ではカワウの駆除を実施しており、2,500 羽／年を超す実績が報告されているが顕著な効果は見えていない。今年度から高知県では「高知県カワウ管理指針」を策定しカワウの個体数削減を目指している。今回、過去 10 年間の越冬個体数の動態と銃駆除による結果について考察し、今後の管理方針について検討する。

高校生・小中学生ポスター発表要旨 Youth poster presentations

会場:2号館2F 22号室

奇数番号 コアタイム:9月13日 16:30~18:30

偶数番号 コアタイム:9月14日 10:00~12:00

Y01

武蔵学園における鳥類の窓ガラスへの衝突死の傾向

浅井周(武蔵高等学校)

武蔵学園(東京都練馬区)の構内には、高校中学・大学の建物のほか、循環式の濯川が流れ、川や敷地を取り巻くように多くの樹木が生育している。この環境を利用するため、一年を通して多くの鳥類が生息・飛来する一方、鳥類の窓ガラスへの衝突もしばしば発生する。人工物への衝突死は鳥類の重大な人為的死亡要因とされているが、学園における包括的な調査例はない。

本研究では、2014年から2022年に構内で採集された鳥類の斃死体のうち、窓ガラス衝突が原因で死亡したと推定された70個体について、種・時期・場所などの傾向を調査した。その結果、科別ではヒヨドリ科とハト科が各13個体と最多で、アトリ科が9個体と続いた。また年間を通しては9月から11月にかけて増加し、1月から3月に減少する傾向が見られた。さらに構内の生息種と衝突種の比較するため、2024年7月~2025年6月に月1回のラインセンサスを実施し、個体数変化の調査も行った。その結果、ヒヨドリの秋の渡りに伴う個体数増加と秋以降の衝突数の増加の時期が一致しており、渡来したヒヨドリが構内で多く衝突している可能性が示唆された。

Y02

近江兄弟社中学校におけるコシアカツバメの生存の知恵と工夫

松本百花(近江兄弟社中学校)

滋賀県近江八幡市にある近江兄弟社中学校で、コシアカツバメの営巣とスズメとの攻防戦を巡る観察を行いました。実際、コシアカツバメがスズメに巣を奪われる現象が多数確認され、現在は1つの巣を残すのみとなりました。もともとほとんど全てのコシアカツバメの巣が1階に営巣されていたという特徴があるわが校で、飛来が遅いコシアカツバメは、巣の安全を確保するためにより高い場所に巣を作る進化を見せました。また、3~4羽の成鳥が交代で留守番して巣を守るほか、仲間同士で協力して巣の防衛に努める姿が観察されました。準絶滅危惧種のコシアカツバメの生存のための知恵と工夫を考察し、ポスター発表で報告します。

Y03

札幌市円山公園の野鳥と生き物たち

長内智幸(札幌市立北陽小学校)

北海道札幌市の西側にある円山公園は、円山動物園や北海道神宮があり、観光客だけでなく、春は多くの人がお花見に来たり、近くに住む人が気軽に散歩に来る自然豊かな公園で、一部にはうっそうとした森もあります。僕は小学1年生の時に円山公園での探鳥会に参加し、いろいろな鳥を見て、野鳥が大好きになりました。その後も毎月1回、円山公園へ家族で鳥を見に行ったり、野鳥の会の探鳥会に参加したりして、野鳥をはじめとする生き物たちをたくさん見てきました。その結果、5年間で70種類以上の野鳥を観察することができました。今回、円山公園の野鳥だけではなく、そのほかの生き

物についても気づいたことをまとめたので、発表します。

Y04

滋賀県草津市岡本町におけるツバメの営巣場所の選好に関する研究
シュルンツェ羽奈(滋賀県立膳所高等学校)

ツバメは民家などの建造物に営巣し、繁殖が成功した場所は繰り返し営巣に利用されやすいことが分かっている。しかし、営巣場所の選択に関する体系的な調査研究は多くない。本研究では、滋賀県草津市岡本町の210世帯、271の家屋等の建造物を対象に聞き取り調査と観察を行い、84箇所のツバメ営巣に関わる情報が得られた。古民家の多くは営巣の経験があり、40年以上毎年繁殖が確認されている建造物もあったが、建て替えや造巣の人為的な阻害、他種による卵や雛の補食などの経験があった場所では繁殖が途絶える傾向が見られた。また、現代住宅でも営巣が確認されたが、新築時には営巣の痕跡がなく、建築様式も古民家と異なるため、造巣時に何らかの選択基準があると考えられる。そこで、今回はツバメの営巣場所選択要因として考えられる建物の特徴や周辺環境、12項目を調査した。解析の結果、玄関の形と田からの距離が選択に関連している可能性が示唆された。日本でツバメの個体数が減少する中、営巣場所の選好に関する知見は保全のためにも重要であるため、他の要因についてもさらに検証したい。

Y05

生成 AI を用いた機械学習によるフクロウの個体識別
櫻井奏子(四日市高校)

三重県北部・鈴鹿山脈山麓を中心に、フクロウ *Strix uralensis* の繁殖生態を解明する目的で大型巣箱を設置し、繁殖期の行動や給餌内容を巣箱内カメラで記録してきた。しかし、本種は外見のみから雌雄や個体を判別することが極めて難しい。そこで本研究では、近年めざましい進展を遂げている生成 AI を応用し、フクロウの顔画像から個体を自動識別するシステムの構築を試みた。まず飼育下のチャコモリフクロウ *Strix chacoensis* を対象に複数個体を撮影し、顔領域を切り出して学習用データセットを作成した。得られた画像群を用いて、同一個体と異個体を識別できるかを評価するとともに、近縁種への応用可能性についても検討した。本発表では、初期モデルの識別精度および課題を報告し、野外での明度変化など多様な撮影条件下でも高精度に動作する識別システムの将来的展望を示したい。

Y06

奈良県生駒市におけるツバメの給餌行動の観察と給餌内容の解析
萩巣樹(奈良女子大学附属中等教育学校)

2018年度から2024年度までの7年間、奈良県生駒市の飲食店街「グリーンヒルいこま」で営巣するツバメ(*Hirundo rustica*)の繁殖行動を観察した。2025年度は8年目の観察となる。毎年、ヒナの孵化から巣立ちまで基本的に毎日観察し、親鳥の給餌頻度や巣内滞在時間を雌雄別に記録した。2022年度からは給餌内容の季節変化に着目し、2023年度からはヒナの糞のDNA解析を導

入して給餌する昆虫を特定した。

その結果、雄は主に給餌、雌は抱雛を担う役割分担が明確となった。繁殖時期後半には親鳥の給餌回数や巣内滞在時間が減少し、ヒナの巣立ちまでの日数が短縮する傾向が認められた。また、給餌された昆虫の種類は時期によって変化し、特に 6～7 月にはトンボ類やチョウ類の割合が増加したことから、これらがヒナの成長に影響している可能性が示唆された。2025 年度は継続的な観察のほかに、時間帯による給餌回数の変化や給餌する昆虫のより詳細な解析を行う。

Y07

飛行形態と鉤状突起の長さの関連性 ―化石鳥類の飛行推定への応用―

秋澤海良(日本大学藤沢高等学校)

博物館で鳥類標本を観察した際、肋骨の後縁から尾側へ突出する鉤状突起の形状に興味を持ち、運動様式との関連について調べることにした。先行研究では、歩行や潜水などの運動様式と鉤状突起の長さに関連があることが示されているが、飛翔との関係は十分に検討されていない。そこで本研究では、山階鳥類研究所の標本データベースを用い、261 種を対象に鉤状突起の長さや飛行形態との関連を調査した。飛行形態は図鑑に基づき 8 種類に分類し、鉤状突起の長さは隣接する骨との接触に基づき 6 段階で定量化した。その結果、飛行形態によって鉤状突起の長さに傾向が見られた。鉤状突起の突出位置にも着目して、その関連性を考察した。本研究は、化石鳥類の飛行様式推定への応用が期待できると考える。

Y08

植物由来の蛍光成分を利用したカラス忌避剤の開発

松倉佳奈(宮城県加美農業高等学校)

本校の果樹園ではカラスによるリンゴの食害に悩まされ問題視している。カラスは視覚能力が優れており、赤青緑以外に紫外線から色を認識していることがわかっている。ヒト由来の蛍光成分を利用した忌避剤が商品化されているが、植物由来の蛍光成分でも効果があるのではないかと考えた。そこで、植物から 18 種類の抽出液を抽出し、紫外線ライト(375nm)を照射するとターメリック(クルクミン)、藍(インジカン)、ヘデラ(クロロフィル)が強い蛍光を示した。蛍光しなかったマリーゴールド(ルテイン)は紫外線を吸収した。さらにろ紙に吸着、乾燥させ紫外線を照射するとターメリックのみが強い蛍光を示した。ターメリックとマリーゴールド液をろ紙に吸着させ、カラスの食害調査を行った結果、ターメリックの被害がなかった。また、マリーゴールドの被害は最小であった。したがって、金色に輝くターメリックの蛍光は、カラスに忌避効果があると考えられる。また、紫外線を吸収するマリーゴールドの色素は、赤いリンゴの波長を変化させ「美味しくないリンゴ」に見せたと考えられる。今後その可能性を探っていきたい。

Y09

人とカラスのあいだに生まれた関係性 ―一時保護したハシボソガラスの 27 日間の行動観察より―

高橋徳至(品川区立小山小学校)

交通事故で羽と足を負傷したハシボソガラスを一時的に保護する機会があり、その行動や反応について、27 日間にわたり観察を行った。

カラスは非常に知能が高い鳥であるとされており、本研究では「人の行動を見て学ぶのか」「物を道具のように使うのか」

「天候によって行動が変わるのか」「鳴き声で気持ちを伝えるのか」といった仮説を立て、毎日記録を取った。

観察の結果、普段から世話をする人の姿が見えないと鳴いて呼び、声かけに反応して移動するなど、他者への関心がうかがえた。

また、スプーンや鈴を隠す・遊ぶといった行動や、天候による活動量の違いも明瞭であった。

さらに「おはよう」の声かけに似た鳴き声を返す様子も記録され、音声模倣の可能性も示唆された。

以上より、ハシボソガラスは人の存在に敏感で、環境に応じて多様な行動を見せる社会性と柔軟性をもつ鳥であることが確認された。

Y10

所沢駅周辺におけるムクドリ就峙行動および就峙環境について

緒方蒼真(桐朋高校生物部)

都市に生息するムクドリ就峙行動(ねぐら入りする際の行動)および就峙環境について明らかにするため、所沢駅(埼玉県所沢市)周辺に形成されたムクドリの集団ねぐらにおいて、2021 年 7 月～2025 年 6 月の期間、約 340 回にわたり、ねぐら入りの様子を観察した。昨年度の発表においては、これらの記録のうち 2021 年～2023 年のものから、ムクドリがねぐらとして利用した樹木の種類、ムクドリの就峙開始時刻の変化にみられる傾向、ねぐらに関わる他種鳥類(オオタカおよびコムクドリ)の動態について報告した。

2024 年 6 月～2025 年 6 月の期間には、当地でねぐらの移動が 4 回確認され、半径約 1.5km 圏内に計 4 か所のねぐらが 1 年間の異なる時期に形成された。ねぐらが形成された場所は、2 か所が駅前ロータリーの街路樹、1 か所が公園の樹木、1 か所が河川近くの民家の竹林と、複数の環境に及んでいた。今回の報告では、ムクドリが 4 か所で順に形成したねぐらでの就峙行動の変化を示す。また、それぞれのねぐらが形成された時期や、ねぐらの周辺環境を比較し、当地における、本種の年間を通じた就峙行動および就峙環境の把握を試みる。

Y11

コアジサシの鳴き声とコミュニケーション

小野塚廉人(流通経済大学付属柏中学校)

近年、シジュウカラなどがもつ複雑な言語に関する研究が注目されている。一方、より単純な鳴き声しかもたない鳥の集団におけるコミュニケーションの研究は少ない。そこで本研究では、集団で行動するコアジサシを対象に、「言葉」について調査した。コアジサシの狩り場で 78 回の定点観察を行い、群れの個体数、鳴いていた個体数、鳴き声の特徴を記録した。その結果、単独個体による鳴き声は確認されなかった。このことは鳴き声が仲間とのコミュニケーションに用いられていることを示唆している。また、鳴き声に少なくとも 4 つのパターンがあることを確認した。鳴き声 A は主に複数個体で狩りを行っているとき、鳴き声 B は 2 羽が急接近したとき、鳴き声 C は水面すれすれを飛行するとき、鳴き声 D は求愛の最中にのみ観察された。求愛行動では、雄が鳴き声 A を発しながら雌に接近し、次に鳴き声 D を発しながら雌の周囲を飛び回る。最後に、鳴き声 B とともに雌のもとに降り立つ

という連続した動作が観察された。今回の調査は、複雑な言語を使わない鳥が場面に応じて鳴き声を使い分けていることを示している。

Y12

市街地のツミの繁殖行動 -周辺の種による繁殖への影響-
緒方晴(世田谷区立北沢中学校)

野鳥観察を始めたばかりの頃にツミを見て、「近所の公園にも猛禽類がいるのか」と興味を持ち、市街地で繁殖するツミの番の子育てを 2021～2025 年にわたり観察してきた。繁殖期間は4月～9月。繁殖をし直すのは3回まで観測した。巣材には近くの桜やケヤキの枝を運ぶ様子を観察した。オスが狩りで巣から離れている間はメスが巣の周辺を監視できそうな 50m 程離れた鉄塔などの見晴らしの良い場所から巣の方向を見守っている様子を観測した。子育てに失敗すると、前の巣から 500m 程の距離にあるアカマツなどを営巣木に営巣場所を変えた。ツミの巣の周辺でオナガの番を4ペア程確認した。昨年は、一昨年の営巣場所で1回目は巣作りに失敗し、営巣場所を移動した。2回目の営巣場所は 2 羽の雛がかえったが、巣が落ちてしまった。しかし、雛が 1 羽枝に掴まって生き延び、巣立つことができた。

今年は 2021～2025 年に観測してきたツミの番が、同じ個体だったのか、画像解析に挑戦した。また、ツミの周辺に生息する鳥類がツミの営巣にどのような影響を与えているかを特に注目して観察した。

Y13

宮島沼のマガンの群れの鳴き声と行動の関係
長田佳子(岩見沢市立北村中学校)

宮島沼はマガン(*Anser albifrons*)の渡りの中継地として、春に約4万羽のマガンが滞在する。マガンは早朝に宮島沼から埒立ちをし、夕方に埒入りする。マガンの鳴き声や行動は埒立ちと埒入り、宮島沼に来たばかりの頃と渡っていく頃で変化するのか疑問に思い調査した。調査は 4 月 7 日から5月 6 日までのマガンがいる埒立ちと埒入りの時間帯に行い、レコーダーで音声を録音、カメラで行動を録画した。そして、レコーダーで録音した音声を Raven Lite2で読み込んだ。その結果からわかったマガンの鳴き声、行動について報告する。

Y14

井の頭公園に生息するカイツブリの出入りについて～個体識別からわかったこと～
櫻庭蓮之介(むさしの学園小学校)

2022 年より井の頭公園(東京都)でカイツブリの調査を行っている。これまでの調査から、季節によって個体数に変動があることがわかっている。そこで、昨年実施した個体識別をもとに、2024 年 8 月から 2025 年 6 月までの間、誰が残り、誰がいなくなり、誰が戻ってくるのかを調査することにした。はじめに、繁殖羽の時と、非繁殖羽の時の嘴基部(黄白色部分)等の特徴を比べ、非繁殖羽の時も、繁殖羽と同じように識別可能なことを確認した。その上で、各個体の出入りを集計した結果、2024 年 8 月にいた 15 個体のうち、6個体は残り、3 個体はいなくなり、6個体はいなくなった期

間もあったが戻ってきたことを確認した。つまり、非繁殖時に池を離れた個体の約 67%が戻ってきており、昨年いた個体のうち 80%が今年もいることが明らかになった。また、戻ってきた個体は以前と同じ場所に帰還する傾向があることがわかった。これらのことから、カイツブリは高い帰巢性を持っている可能性が示唆された。これが今年だけの結果なのかは、今後も調査を続けていくことで明らかにしたい。

Y15

瀬戸内海にオオハム類は何羽?～漂着した羽根の収集による個体数推定～

木原涼帆(愛媛県立今治西高等学校)

瀬戸内海沿岸では春先にオオハム類(シロエリオオハム・オオハム)の羽根が大量に漂着する様子が観察される。私はこの現象に興味を持ち、漂着した羽根を用いて、オオハム類の個体数推定を行うことを考えついた。2025年2月下旬～6月上旬にかけて愛媛県や香川県の瀬戸内海沿岸の浜を歩いて、漂着したオオハム類の羽根を拾い、調査を行った距離を記録した。拾得したオオハム類の初列風切羽を左右別に数えた結果、144羽分の羽根となった。また、海岸線1mあたりの初列風切羽の漂着枚数や海岸延長距離などのデータを用い、瀬戸内海におけるオオハム類の個体数の推定を試みた。

Y16

40 年前と比較した北海道ウトナイ湖の繁殖期における鳥の変化

川崎慎一郎・川崎志帆・川崎真之・澤目一輝・澤目光輝・高沢理一・竹田 佳穂・豊田佑生・原田織寧・原田雛寧・ホール彪吾・森岡咲瑛((公財)日本野鳥の会 ウトナイ湖サルクチュアリ・ネイチャーセンターサポーター)

北海道苫小牧市のラムサール条約湿地・ウトナイ湖には、ヨシ原や湿地、森林など様々な環境がみられるため、渡り鳥が多く飛来する。ウトナイ湖では 1980 年代から鳥類が記録されており、これまでに 276 種類が確認されている。現在、ウトナイ湖ではスポットセンサス調査で鳥類に興味を持った学生を含むサポーターやレンジャーによって鳥の実態について調査が行われている。そこで 1980 年代と比較を行った。

ウトナイ湖では 2024 年 4 月から 2025 年 7 月の期間に月に 1 回、森林、草原、湿原の 3 か所で 10 分間×2 回のスポットセンサス調査を行っている。調査では鳥の種類、数、さえずり、地鳴きを記録している。

5 月の調査において、草原、湿原では草原性の鳥が減少して、森林性の鳥が増加したことが分かった。一方で森林では森林性の鳥の種類の半分が見られなくなっていた。

ハンノキとヨシは水辺を好む植物であり、コナラとミズナラはそうではないことから、ウトナイ湖ではヨシ原とハンノキが後退し、コナラ、ミズナラに置き換わった湿原・草原の森林化により、上記のような結果が得られたと考えられる。

Y17

私たちの総合的探究活動 天然記念物八戸蕪島ウミネコ繁殖地の観察を通して

○村田晃大・木下恵利・高橋晴夏・保土澤輝望(八戸工業大学第二高等学校)

八戸工業大学第二高等学校では、総合的探究活動として天然記念物八戸蕪島ウミネコ繁殖地のウミネコ観察を令和4年から継続している。この活動で得られたデータから、今回は次のことを発表する。

1. ウミネコ繁殖地として保護活動をしている蕪嶋神社で用いられているネットの繁殖への影響

R7 年から、蕪嶋神社境内の玉砂利の上にネットが敷設された。これにより、令和 5、6 年平均と比較すると、営巣数は 85% となり、有意な減少が見られている。つまり、玉砂利をネット被覆するとウミネコの営巣を妨げる結果となることが明確になった。

2. ウミネコ巣立ち数から推定する八戸蕪島のウミネコ飛来数

令和 5、6 年の境内のウミネコ巣立ち数は平均 950 羽である。この 3 倍が島からの巣立ち数と仮定し、年間 2850 羽の巣立ちとしたとき、飛び立った鳥の 8 割が蕪島に回帰するとして試算すると、最高齢は 31 歳、蕪島への飛来総数は 11,000 羽と試算された。

回帰数の式は 前年の羽数×回帰率 の積算で行った。

～ . ～ .

Y18

ヒヨドリと日没の関係性

沼野遥(早稲田実業学校)

ヒヨドリ(学名: *Hypsipetes amaurotis*、英名: Brown-eared Bulbul)を 2024 年 12 月 9 日から 2025 年にかけて観察した。鳥の研究は早朝に行われることが一般的であるが、ヒヨドリが何時頃に鳴き終わるのかを、約 9 ヶ月にわたって録音した結果についての報告が本探求である。声を録音した鳥は主にヒヨドリであり、ヒヨドリの鳴き終わる時刻は日の入り時刻と相関があることが分かった。天候状況により鳴き終わる時刻が前後することが多い。主に雨天であると早くなるが多かった。また、録音から判明したヒヨドリの一度に鳴く回数は全体的に奇数が多く特に 3 回鳴く回数が多かった。

～ . ～ .

Y19

見えざる飛翔の軌跡:春夏秋冬朝昼晩、カラスバトのルーティーンを暴け!

○大津洸太郎・丸山雅人(都立国分寺高校生物部カラスバト GPS 班)

カラスバト(*Columba janthina*)は国の天然記念物、準絶滅危惧種に指定されており保全が必要である一方、目視の観察が難しい。そこで、本研究は GPS を用いたカラスバトの生態解明を目的に以下の調査を行った。まず、八丈島の雄個体を用いて季節間の活動量を比較したところ、夏と冬で明確な違いが見られた。次に、伊豆諸島の各島の野生個体を用いて活動量を比較したところ、どの島でも雌雄を問わず上記の八丈島の雄個体と同様の活動パターンが見られた。これらのことから、野生のカラスバトは地域によらない種としての行動パターンを持っていると予想される。また、月齢とカラスバトの島間移動の関係を調べた結果、新月から満月になるまでの期間に島間移動を行うことが多いと分かった。

今夏、大島動物公園で飼育個体の行動観察を行うと同時に、GPS からその時の ODBA(活動量を表す活動係数)の値を入手し、行動と ODBA の相関を比較する。そのデータをもとに過去の野生のカラスバトの行動についても考察する。

～ . ～ .

Y20

生物部から考える鳥類研究の可能性―教室の外にある学びと成長

○小西行亮・石川慧文・飯間悠貴・井上智紗子・四軒家瑠哉・室田章良・末吉侑(大手前高松中学・高等学校)

本研究は、生物部という部活動の枠組みにおいて、鳥類研究がどのような教育的価値と探究的学びをもたらすかについて理論的に考察したものである。中学校および高等学校では、観察機材の不足や時間的制約、指導者の不在など、研究活動の継続や発展に対する課題が多く存在する。特に鳥類の生態を扱うには長期間の観察や専門的知識が求められ、実践的な調査や実験の実施が難しいこともある。しかし、部活動という比較的自由な学習空間を活かすことで、生徒自身が関心を深めながら柔軟に学べる機会を創出することができる。たとえば、既存の文献や公開データを用いた仮説構築や調査計画の立案、鳥類と人間の関係を文化・歴史的観点から考察することなどにより、観察や実験に依存しない学びが可能となる。また、地域の自然環境や大学・研究機関との連携、ICTの積極的な活用により、探究の幅を広げることができる。鳥類という身近で多様な生物を題材に、生徒が主体的に取り組める持続可能な探究活動の在り方とその支援体制について提言を行う。

Y21

あかぼっぼってどんな子育て？あかぼっぼのコミュニケーションの姿を見た～デコイ作戦と親の呼びかけに走り寄るヒナ～

○佐渡志穂里 幸松浩然 鈴木匠(国分寺高校生物部音声班)

アカガシラカラスバト(*Columba janthina nitenis*)は小笠原諸島に生息している、カラスバト(*Columba janthina*)の亜種であり、絶滅危惧種に指定されており個体数が少ない。

そのため観察が難しく、生態はいまだに明確でないため行動や鳴き声についての研究も十分でない。そこで野外での観察、鳴き声の分析を通してその生態を明らかにすることを目的として調査を行い、記録からその意味について考察した。

アカガシラカラスバトの観察から子育ての際の親子間での鳴き交わしや、給餌の際に見られた子が親に駆け寄る行動などの観察からコミュニケーションや行動について考察を行った。調査は、デコイと音声を用いた実験、その反応について観察を行った。本校ではカラスバトの音声を用いたコミュニケーションについての研究を行っており、亜種であるアカガシラカラスバトとの相違点や類似点について今夏に実施する大島でアカガシラカラスバトと同様の実験を行い比較をしたいと考えている。

自由集会要旨 Workshops

W01～W05: 9月12日 15:30～17:30

W06～W10: 9月13日 18:40～20:40

W01 (会場:D20)

洋上風力発電の環境影響評価における鳥類調査の手法に関する意見交流会

板谷浩男(日本気象協会)

2050 年カーボンニュートラルの実現を目指し、日本の沿岸域および EEZ(排他的経済水域)では洋上風力発電の導入に向けた取組が進められている。洋上風力発電の導入にあたっては、海域における鳥類に対する影響評価と軽減策が不可欠である。影響評価を行うにあたっては、適切な手法により時空間スケールに応じた鳥類の海域利用の特徴を把握することが求められる。鳥類の海域利用状況の把握により軽減策の具体化の検討も進むことが期待される。沿岸域であれば漁船などによる調査が可能であるが、外洋では安全管理上の課題が多く漁船などによる調査が困難であることから、航空機を用いたセンサス調査やトラッキング機器を用いた調査の活用が期待が寄せられている。

本自由集会では、はじめに環境省から我が国における洋上風力発電導入政策とそれに関連する鳥類データ整備の取り組みについて紹介する。続いて、海鳥の専門家を交え、鳥類の分布状況や洋上風力発電事業による影響を科学的に予測・評価するために必要となる鳥類の情報について確認する。洋上風力発電と鳥類の共存に向け必要となる調査手法の現状、課題と展望について議論したい。

<自由集会の内容・構成>

- 1, 趣旨説明 (藤井直紀)
- 2, 海域における鳥類の生息状況の把握に向けた取組 (環境省)
- 3, 洋上における航空機を用いた調査手法の紹介 (萩原陽二郎)
- 4, 鳥類飛翔高度把握に向けた取り組み (倉部鈴美)
- 5, 日本周辺海域における海鳥の分布・移動や環境利用の特徴 (西澤文吾)
- 6, 洋上風力発電事業における鳥類への影響評価手法の有効性と展望 (風間健太郎)
- 7, 総合討論 (板谷浩男)

W02 (会場:D30)

モニタリングサイト 1000 の 20 年の調査結果から見てきた日本の鳥の変化

植村慎吾(バードリサーチ)

モニタリングサイト 1000 は、日本列島の多様な生態系を高山帯、森林・草原、里地、陸水域、砂浜、沿岸域、サンゴ礁、小島嶼に分け、あわせて 1000 か所程度のモニタリングサイトを設置し、100 年以上モニタリングを継続することを目標として環境省生物多様性センターが行っている調査である。モニタリング調査を長期にわたって継続することで、日本の自然環境の質的・量的な変化を早期に把握し、得られた成果を保全施策や学術研究に活用することを目的としている。2003 年度に調査を開始し、これまでの調査結果は JBO3 の評価項目を始めとしてさまざまな行政施策や学術研究に活用されている。2030 年ネイチャーポジティブの国際評価に我が国の情報をインプットするための「生物多様性及び生態系サービスの総合評価 2028(JBO4)」では、モニタリングサイト 1000 の調査成果が、我が国の生物多様性の変化傾向の主要な評価根拠として活用されると見込まれる。さらに、GBIF など国際的なデータベースにも調査結果が提供されており、国際的なネットワークとも連携している。

調査結果は毎年まとめるとともに、解析を加えた総合的なとりまとめを 5 年に 1 回実施している。

2024 年度には第 4 期のとりまとめを行った。この自由集会では、モニタリングサイト 1000 の 8 つの生態系のうち、鳥類を対象としている 5 つについて、第 4 期とりまとめの成果について情報提供する。モニタリングサイト 1000 の鳥類を対象とした調査では、研究者や全国のバードウォッチャーなど、多様な主体の参加により調査が継続されており、第 5 期以降の調査継続のための周知の機会としたい。

- ・モニタリングサイト 1000 調査の目的と意義 雨宮俊 環境省生物多様性センター
- ・森林・草原(陸生鳥類)の成果報告 植村慎吾 バードリサーチ・奴賀俊光 (公財)日本野鳥の会
- ・里地の成果報告 藤田卓・福田真由子・小林彩 (公財)日本自然保護協会、片山直樹 農業・食品産業技術総合研究機構、赤坂宗光 東京農工大学、内田圭 東京都市大学
- ・陸水域(ガンカモ類)の成果報告 姜雅琺 バードリサーチ
- ・沿岸域(シギ・チドリ類)の成果報告 守屋年史 バードリサーチ
- ・小島嶼(海鳥)の成果報告 富田直樹 山階鳥類研究所

～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ .

W03 (会場:D40)

鳥類学若手の会 Presents「遺伝学・ゲノム科学で拓く鳥類学のフロンティア」

田谷昌仁(東北大)、飯島大智(筑波大)、犬丸瑞枝(JIHS)、江指万里(北大)、小島達樹(東洋大)、清水孟彦(北大)、姜雅琺(バードリサーチ)、内藤アンネグレート素(京都市動物園)、水村春香(富士山研)、望月みずき(鳥の博物館)、安田和真(農工大)、山崎優佑(バードリサーチ)

分子遺伝学解析の技術発展に伴い、野生生物の系統関係や集団遺伝構造、進化史といった目に見えない情報を高解像度で明らかにすることができるようになってきた。さらに、配列解読技術の進歩によって様々な生物の全ゲノム配列が解読されるようになり、野生生物におけるゲノム科学も急速に発展しつつある。鳥類は他の脊椎動物と比較してゲノムサイズが小さく、反復配列や非コード領域の占める割合も小さいことから、全ゲノム配列の解読が比較的容易と考えられる。実際、中国発の鳥類ゲノム解読の国際プロジェクト「B10K project」では、世界の鳥類約 10000 種のうち 3000 種以上の全ゲノム配列の解読が完了している(2025 年 7 月現在)。

一方で、上記のような遺伝解析を扱う鳥類学研究に着手するためには、データを取得するまでに研究者個人が経験する障壁は大きいことが予想される。例えば、試料が十分に得られない、実験環境が整っていない、鳥類の野外調査と遺伝解析という 2 つの技術を同時に持ち合わせる研究室が多くない、といった障壁が考えられる。

そこで、本集会では野外調査と様々な技術の遺伝解析を組み合わせた研究を進めている 5 名の研究者が研究の進め方について講演し、鳥類学における遺伝学・ゲノム科学の応用可能性について議論する。さらに、事前に鳥類学若手の会の会員を対象にとったアンケートの結果をもとに、鳥類学研究に遺伝解析を取り入れる際にどのような点が障壁になるかを議論し、どのような協力体制を築き上げることが今後の鳥類学における遺伝学・ゲノム科学の発展に重要かを模索する。

講演者(敬称略)

- ・田谷昌仁(東北大)「概論:鳥類学と遺伝学・ゲノム科学の接点」
- ・望月みずき(鳥の博物館)「DNA から読み解く鳥の進化の歴史」
- ・江指万里(北大)「一塩基多型を用いた集団遺伝解析」
- ・飯島大智(筑波大)「DNA メタバーコーディングによる高山鳥の餌の定量評価」
- ・内藤アンネグレート素(京都市動物園)「全ゲノムと長鎖配列解析から猛禽類保全を考える」

～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ . ～ .

W04 (会場:D41)

カワウと人との共存を考える(その 26) カワウ管理、やってみたら意外と〇〇だった件。

高木憲太郎(バードリサーチ)

カワウ管理を仕事にするってどんな感じなのか? 1980 年以降の個体数の急激な回復とそれに伴う様々な軋轢の解消のために、鳥類の中でいちはやく管理が進められてきたカワウ。2004 年に作られた特定鳥獣保護管理計画技術マニュアル(カワウ編)を皮切りに、全国的な生息数調査や追い払い技術の改良、擬卵やドライアイスによる孵化抑制、シャープシューティングなど多様な技術が発展し、その成果は特定鳥獣保護管理計画作成のためのガイドライン及び保護管理の手引き(カワウ編)として 2013 年にまとめられています。

それらを活用し、管理の現場を担う新たな世代達は、どんな思いでこの仕事につき、カワウ管理を行っているのでしょうか。この集会では、これまでの経緯を振り返りつつ、カワウの現場に関わる会社に身をおき、次世代を牽引していこうとする 3 名の若手の研究者に、普段行っている調査・管理について、また、鳥獣の管理に対する思いや日々の取り組み方についてお話しいただきます。若手の目からみたカワウの管理はどんな世界か、これからの鳥類研究者がその管理にどう向き合っていくべきか議論ができればと思います。

今村舟(株式会社ういるこ)

元文系学部出身。縁あって 2016 年から野生動物の生態調査・捕獲・普及啓発の業務をする団体へ就職。鳥獣被害対策の業務に就くさなかで、ねぐらコロニー調査や胃内容物分析の仕事でカワウ界隈へ入門。近年は GIS 技術を使ったカワウ追跡調査・データ分析の業務にも携わっています。今年は市民に向けたカワウ普及啓発に挑戦中です。

吉田智幸(株式会社イーグレット・オフィス)

カワウの胃内容物分析から野生動物管理の世界に足を踏み入れ、捕獲現場でポンパーとして心身共に鍛える。世界一カワウを捕獲している会社で、カワウの被害対策や生息状況調査などをやりつつ、大型哺乳類の生息状況調査、猛禽類などの希少種保全や普及啓発にも携わり、保護と管理の両面から生き物に向き合っています。

羽根田貴行(株式会社野生動物保護管理事務所)

学生時代はゼニガタアザラシの研究をしていました。職場は陸上哺乳類を対象にした仕事ですが、アザラシと同じく漁業者との軋轢のある種としてカワウに携わることに。現在は主にカワウに係る行政担当者や漁業者の方と足並みを揃え、モニタリングや管理・被害対策の実施と提案、広域協議会の運営等に関わっています。

〜〜

W05 (会場:D42)

第7回標本集会「博物館施設の生き残り戦略ーひいては標本を後世に残すために」

岩見恭子・小林さやか(山階鳥研)・加藤ゆき(神奈川県博)

博物館が収集する標本や資料はその地域に根差したかけがえのないコレクションである。戦後に各市町村に設立された地方の博物館施設は現在、財政難や入館者数の減少、施設の老朽化などで閉館や存続の危機にある。多くは設立以来、その地域の特色ある標本を収集し保存してきたが、人員削減による担当者の不在、収蔵庫の閉鎖や施設そのものの閉館によってコレクションが散逸したり、失われたりする恐れがある。

これまでの自由集会では博物館の人材不足やコレクションの保存環境について意見を出し合い、国内の標本、資料をいかに保存し、後世に残していくか、といった点に注目してきた。しかし博物館という入れ物そのものが危機に瀕している状況で、各施設がどのような生き残り作戦を立てていくのか、地域の特色を取り入れた施設運営や人材育成といったテーマを主軸に皆さんと一緒に考えていきたい。

本自由集会は、2023 年および 2024 年の大会で開催した自由集会「野鳥をとりまく現状と課題」（企画者：板谷浩男）を発展的に継承するものである。

バードウォッチングは、観察や撮影を通じた天然資源の非消費的な商業利用であるため、対象種や地域生態系への負の影響は相対的に小さく、地域経済への貢献を通じた保全資金の獲得、観光客への教育効果など、複数の便益が期待されている。一方、繁殖や生存への影響、行動変容のリスクといった生態学的問題が指摘されている。バードウォッチングを持続可能な取り組みにするためには、利用が保全につながり、保全が利用価値を高めるという「利用と保全」の循環を形成することが重要である。さらに、科学的価値を重視する保全関係者、地域生活を重視する住民、観察・撮影をしたい観光客など、利害対立や関心の相違によるコミュニケーション不全といった社会学的問題が存在する。加えて、観光による利益の地域外流出という経済学的問題、法律や条例、自主ルールの未整備という制度論的問題など、課題は多岐に及んでいる。

本自由集会では、「利用と保全」の循環という視点から、国内外のバードウォッチングの事例を報告し、現状と課題を共有する。バードウォッチャー、ツアーガイド・業者、鳥類学者、行政、地域住民など、利用と保全の多様な関係者が、それぞれの利害と関心を尊重しながら、どのような関係を構築していけばいいのだろうか。報告者に加え、参加者の経験や見解を共有しつつ、それぞれの立場でどのような対応ができるのかを探りたい。

■ 主旨説明 菊地直樹

■ 事例報告

- ✓ バードウォッチングツアーが地域に与える恩恵ーパプアニューギニアでの事例など(松井淳)
- ✓ 伊豆沼・内沼におけるエコツアーの現状(嶋田哲郎)
- ✓ 伊吹山のイヌワシに学ぶ「利用と保全」ーカメラマン問題 33 年の経験(須藤明子)
- ✓ コメント：資源管理としての野鳥観察・撮影への対応(高橋満彦)

■ 対話

コンビーナ：菊地直樹

W08 (会場:D40)

石狩におけるアカモズの研究と保全活動

熊谷隼・長谷川理(EnVision 環境保全事務所)

亜種アカモズ *Lanius cristatus superciliosus* (以下、アカモズ)は、かつて里山の鳥として日本国内に広く飛来・繁殖していたが、近年分布域および個体数が激減し、環境省レッドリストで絶滅危惧 I B 類に指定されている。2022 年の推計では、アカモズの個体数は 200 個体を下回るとされ、本州および北海道のごくわずかな地域個体群が局所的に残されるのみで、危機的な状況にある。

北海道石狩市には、現在もアカモズが一定数飛来・繁殖しており、研究者による調査研究、市民や行政によるモニタリング活動や保全活動が継続して進められている。

本集会では、石狩のアカモズ個体群を対象とした調査研究について紹介いただく。また、同地域での保全活動の現状と諸問題について話題提供する。鳥類研究者のみならず、行政、NPO、市民等の様々な主体が連携して進める希少鳥類保全のあり方や、保全を進めていく上での課題を共有し、石狩の個体群、ひいては国内全体におけるアカモズの保全について広く議論したい。

W09 (会場:D41)

オガサワラカワラヒワ絶滅阻止限界点への挑戦

川口大朗(Islands care)、南波興之(日林協)、鈴木創(I-BO)、川上和人(森林総研)

オガサワラカワラヒワ(*Chloris kittlitzii*, オガヒワ)は、小笠原諸島の母島列島および火山列島の南硫黄島に推定 200 羽しか生息していない。2024 年にカワラヒワ亜種から独立種に分類が変更されるも、近年の急速な減少により絶滅の危機が深刻化している。

2020 年には、第 1 回 PHVA(Population and Habitat Viability Assessment: 個体群と生息地の存続可能性分析)プロセスによるワークショップ(WS)を開催し、母島列島では人工的な水場や餌場の設置による生息環境の改善、繁殖地での外来ネズミ駆除、飛来地でのノネコ管理、飼育下繁殖による域外保全といった複数の保全対策が本格的に開始された。これらの対策が奏功し減少傾向が抑制され、2023 年には多数の若鳥が見られるようになったが、2024 年春の干ばつの影響で再び個体数が大きく減少に転じた。コントロール不能、予測不能な気象害の発生による個体群消滅の危機を目の当たりにし、2025 年 1 月に第2回 WS を開催した。この WS ではオガヒワの最新の生態情報を反映した存続可能性分析をもとに、集団を回復させるために必要な保全策を検討した。

本集会では、オガヒワの現状と保全に関する情報を共有し、学術的・実務的両面から議論を深めることを目的とする。オガヒワの現状、最新の存続可能性分析のほか、第2回 WS 以降に大きな進展が見られた域外保全のための飼育下繁殖についても報告する。また、研究者、行政、NPO・NGO、動物園、島民など島内外の多くの関係者が参加した WS についても、保全に関わる多くの方々とともに考える機会としたい。

1. オガヒワの現状 川口大朗(Islands care)
2. オガサワラカワラヒワの存続可能性再分析 南波興之(日本森林技術協会)
3. 域内保全の成功事例(平島のモデルケース) 後藤雅文(Islands care)
4. 域外保全の取り組み 鈴木創(小笠原自然文化研究所)・高橋幸裕(上野動物園)
5. 総合討論 川上和人(森林総合研究所)

W10 (会場:D42)

危機対応自由集会(対動物編)

黒沢令子(バードリサーチ)

野外で安全に活動するための注意点は多々あるが、危険な動物に遭遇することもその一つである。調査研究者としては、それらに対応できる能力が必携と言えるだろう。企画者は 2024 年度に危機対応自由集会として対人編を行なったところ、対動物編を行なって欲しいという希望も多かったので、2025 年度に続編として行なうことにした。

取り上げた動物は、人体に危険を及ぼす可能性が高く、日本のような温帯地域の陸上で遭遇することが多い種類を選んだ。そして、演者にはその動物そのもの、もしくはその対応に詳しい人を招いて話題提供をお願いした。その結果、哺乳類(ヒグマ)、昆虫(スズメバチ)、節足動物(マダニ)、鳥類(カラス)についての話題提供が実現した。さらに、島国で動物相が比較的少ない日本とは異なり、より多様な動物がみられる大陸の状況について、中国の状況も紹介していただく。なお、演者には鳥学会会員以外の方も多く、ふだんは直接交流する機会の少ない方々との意見交換の場となることが期待される。

話題提供

哺乳類(ヒグマ):大石智美(北海道大学大学院)

昆虫(スズメバチ):丹羽真一(さっぽろ自然調査館)

節足動物(マダニ):大杉祐生(北海道大学国際感染症学院)

鳥類(カラス):中村眞樹子 (NPO 法人札幌カラス研究会)

大陸における状況紹介:姜雅琚・盛雄杰 (NPO 法人バードリサーチ・雲南大学生物多様性研究院)

各演者には、画像などを交えてできるだけわかりやすい発表を心がけていただく。内容は、その動物の概要(外見、生息場所、生態、行動)、野外調査研究者が知っておくべきこと(その動物の威嚇行動や、人間側が避けるべき行動や場所など)、そして人間がその動物と共存するために、特に注意すべきこと(事前準備、心構え、服装、食物等々)についてとした。

当日は、参加者からの経験談や質問などを受け付ける機会も設けたいと考えている。前回のアンケートから、この他にも毒ヘビについてよく知りたいという希望もあったが、今回、時間の縛りなどもあり、内容に含めることができなかった。しかし、野外における動物への対応を総合してみれば、今回取り上げなかった動物への心構えを考える糸口になるだろうと思われる。これから、野外の調査研究に携わる機会のある方にはまたとない機会になると期待される。

～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・

ダイバーシティランチョンセミナー Diversity luncheon

ダイバーシティランチョンセミナー

日本鳥学会ダイバーシティ推進ワーキンググループでは、「研究の多様性はヒトの多様性が作ります」をコンセプトに、さまざまな属性の学会員すべてが能力を発揮できる学会環境の整備を目指して活動を行っています。今年度大会でも、以下の通り、研究とダイバーシティに関するランチョンセミナーを開催します。セミナー中に会場で食事が可能ですので、昼食を食べながら、ぜひご参加ください。先着 60 名様に無料でお弁当を配布します。

日時:9 月 13 日(土)12:05–13:05

会場:口頭発表 A 会場(D30)

講師:今井桂子氏(中央大学理工学部情報工学科教授)

プログラム

挨拶:綿貫豊(日本鳥学会会長)

講演1:日本鳥学会ダイバーシティ推進宣言の発出を目指して

堀江明香(日本鳥学会ダイバーシティ推進ワーキンググループ長)

講演2:学会におけるダイバーシティ推進に関する取り組みの紹介

今井桂子氏(中央大学理工学部情報工学科教授)

100 以上の学協会が加盟する男女共同参画学協会連絡会では、毎年シンポジウムを行って、ライフワークバランス、女性の活躍促進、ポストク問題など、ダイバーシティ推進に関わる情報共有と討論を行っている。2023 年は、幹事学会の日本生態学会によって「フィールドワーク分野のダイバーシティとインクルージョン～誰もが能力を発揮し輝くために～」と題してシンポジウムが開催され、その午前の部で、加盟学協会に対して行った活動の好事例に関するアンケート結果の報告と、3 つの加盟学会(日本植物学会、日本技術司会、日本生理学会)から取り組みの紹介が行われた。自身が属していない組織におけるダイバーシティ推進活動の実情はなかなか知ることができないため、好事例の紹介には多くの反響をいただいた。本講演では、上記の講演をもとに、ダイバーシティ推進に関して学会でどのような取り組みが行われているかを紹介させていただきたい。学会の特徴に即した取り組みのアイデアを参加していただいた皆様と一緒に考えたいと思っている。

質疑応答

今井桂子氏プロフィール:

「日本野鳥大鑑」を著した蒲谷鶴彦氏を父に持つ。中央大学理工学部情報工学科教授、理学博士。中央大学高等学校前校長。一般社団法人男女共同参画学協会連絡会 第22期運営委員長。2011 年～2023 年日本学術会議連携会員。専門は理論計算機科学、特にアルゴリズム理論の分野で研究を行っている。

企画集会 PA

古くさい研究なんかじゃない！？インフラとして発展した鳥類標識調査の可能性を探る

企画代表者：澤 祐介(山階鳥類研究所)

鳥類標識調査は日本では 1924 年に始まり、日本の鳥学の発展に寄与してきた歴史のある調査のうちの一つである。「鳥類標識調査」と聞くとどのようなイメージが思い浮かぶだろうか？

- ・鳥に足環をつけて、移動を調べる
- ・個体識別して行動や個体群動態などを調べる
- ・長期モニタリングのひとつの手段

標識調査を単に「足環をつける調査」と捉えた場合、上記のようなイメージがまずは思い浮かぶであろう。もちろん、これは標識調査の核となる主要内容であり、長年にわたり鳥の渡り・分散や行動生態研究、個体群動態の解明など様々な研究で成果があげられてきた。また、蓄積された膨大なデータは、過去と現在の比較研究などにも活用されてきた。しかし、標識調査でできることはこれだけだろうか？今回の企画集会では、さらなる深みを求めて標識調査を掘り下げていく。

標識調査の核となる技術のひとつに、「生きた鳥を安全に捕獲し、取り扱う技術」があげられる。近年、鳥学会の研究発表でもよく見かける発信器やロガーを用いた研究も、標識調査員(バンダー)との共同研究や、バンダーに捕獲、鳥の扱いの支援を得ているものが多く見受けられる。さらに捕獲することで、血液や羽毛、外部寄生虫、糞など様々なサンプリングが可能となり、多岐にわたる研究と組み合わせることができる。そのため標識調査はまさに、様々な研究の”インフラ”となる調査だと言えるのである。また、標識調査に携わる中で、捕獲・鳥の扱い方の技術の習得や、鳥の識別、換羽様式など鳥学の基礎的な知識を学べる他、標識調査に関わる多様な人と交流できることも大きな魅力で、自身の研究の幅を広げるきっかけを与えてくれる。この点も人材育成のインフラといえるであろう。

本企画集会では、こうした標識調査の魅力や裾野の広さを感じていただくため、5 名の研究者、学生が講演を行う。最初に、標識調査の伝統的な成果である移動や長期モニタリングの活用の利点と課題について概説し、次に、標識調査を調査インフラとして活用した研究例について講演する。さらに学生の立場から、自身の研究へ標識調査をどのように活用してきたか、語っていただく。最後に、標識調査への参加方法を紹介し、標識調査に参加するメリットや今後の調査の可能性を会場と議論を交えながら考える。少しでも自身の研究と関連がありそう、標識調査に関ってみたいという方々は、ぜひ本企画集会にお越しいただきたい。

【プログラム】

- 13:45-14:05 インフラとしての鳥類標識調査 ～伝統的な移動データ活用からサンプリングを介した研究、人材育成まで～(澤 祐介:山階鳥類研究所)
- 14:05-14:30 標識調査で見てきたマガニの経年変化 ～長期に渡る定点・定期調査の最大の強み～(高野 愛:山口大学)
- 14:30-14:55 標識調査手法を用いた鳥類研究:蟻浴行動の進化的意義の解明につい

て(大河原恭祐:金沢大学)

14:55-15:05 休憩

15:05-15:30 オーストンウミツバメの研究と標識調査 ～すべてはバンディングから始まった～(寺嶋太輝:東京農工大学)

15:30-15:55 遺伝サンプリングと標識調査:鳥を扱えるからこそ取れるサンプルがある(田谷昌仁:東北大学)

15:55-16:05 標識調査への誘い:研究者、学生、アマチュアそれぞれのメリットと新たな研究インフラとしての可能性を探る(澤 祐介:山階鳥類研究所)

16:05-16:40 会場とのディスカッション

16:40 閉会の挨拶(水田 拓:山階鳥類研究所)

インフラとしての鳥類標識調査 ～伝統的な移動データ活用からサンプリングを介した研究、人材育成まで～

澤 祐介(山階鳥類研究所)

鳥類標識調査は、移動や行動生態、個体群動態に関する研究に加え、安全な捕獲・保定技術で発信器・ロガーの装着や様々なサンプリングを介した研究の基礎を支える、鳥学の“インフラ”的な存在と言える。本発表では、企画趣旨として鳥類標識調査の概要を解説し、伝統的な標識調査の成果と、標識調査をインフラとして活用した事例を紹介する。伝統的な標識調査の成果であっても、近年は、移動に関するデータを多様なデータと組み合わせることで、分布域や個体群構造の推定などに活用されている。また、特定個体群の長期モニタリングにより、年齢、性別が既知となることで個体群動態に加え、行動、生態、進化などの研究にまで応用されているなど活用の幅は広い。標識調査をインフラとして活用した研究では、標識調査の核となる「生きた鳥を安全に捕獲し、取り扱う技術」が大きく寄与している。これらの研究への活用事例を紹介する。

標識調査で見えてきたマダニの経年変化 ～長期に渡る定点・定期調査の最大の強み～

高野 愛(山口大学・共同獣医学部)

マダニ媒介性感染症はマダニの吸血によって伝播される疾患で、その多くは人獣共通感染症である。演者らは北海道根室市と浜頓別市で実施されている秋の鳥類標識調査に2016年から参加させて頂き、鳥類標識調査員の方が一時捕獲した鳥類からマダニを採取し、野鳥におけるマダニ寄生率、マダニの種構成、マダニが保有する病原体の有無を調査してきた。その結果、2020年前後よりマダニ寄生を受けている鳥の割合が増加している傾向が見られた。さらに、2022年以降はマダニの種構成にも変化が見られ、より暖かい地域を好むマダニ種の割合が増加していることが明らかとなった。さらに、同じ場所で1990年と91年に実施された同様の調査結果が論文として公開されていたため、これと比較した所、当時のマダニ寄生率は10%前後であり、2020年以降の30%を超える高いマダニ寄生率とは明らかに異なっており、環境中のマダニの数が明らかに増加していることが強く示唆された。

鳥類標識調査は特定の場所で毎年同じ時期に行われる調査であり、本研究のように過去の記録と比較が可能である点が大きな魅力だと言える。本発表では、上記の内容に加えマダニが

保有する病原体の解析についても概説を行い、野鳥の調査を介して見えてきた病原体の生態系の中での生存戦略についても検討したい。

標識調査手法を用いた鳥類研究: 蟻浴行動の進化的意義の解明について

大河原恭祐(金沢大学・生命理工学類)

標識調査では多くの鳥を捕獲、直接手にする作業過程がある。そのため形態的特徴や生理状況などのデータを個体レベルで得ることが可能であり、演者は福井県越前町の織田山一級ステーションでそうした研究アプローチを試みてきた。本集会ではその1つ蟻浴行動の解明について紹介する。蟻浴は鳥がアリの巣上で羽を広げアリを浴びる奇妙な行動で、その進化的意義はアリの分泌する化学成分で寄生虫や病原菌を除去することが仮説として挙げられている。北陸の森林では高頻度でクロツグミがクサアリ亜属の種で蟻浴を行う。標識調査の手法をもとにその効果の検証を行ったところ、蟻浴によってクロツグミにはアリの化学成分デンドロラシン $C_{15}H_{22}O$ が付着し、それはシラミバエやブユなど吸血性の双翅目昆虫に対する除去、忌避効果があることが示された。これら昆虫は鳥マラリア原虫の媒介者であり、蟻浴の効果の1つはそれら感染症の予防であることが示唆された。

オーストンウミツバメの研究と標識調査 ～すべてはバンディングから始まった～

寺嶋太輝(東京農工大学)

鳥類標識調査は、演者の研究における基盤である。本研究を始めたきっかけも、学部生の時に参加した標識調査であった。演者はオーストンウミツバメを対象に、生態、尾腺の機能、海洋汚染など多角的な研究を行っている。本種は一生の大半を海上で過ごし、繁殖期の夜間しか島に戻らないため、生態情報が乏しい。そこでジオロケータを用いて年間の移動パターンを調査した結果、繁殖期と非繁殖期で異なる海域を利用することがわかった。並行して尾腺分泌物の化学分析を行い、残留性有機汚染物質の曝露を繁殖初期と後期で比較したところ、初期に比べ後期に濃度が高くなることが示された。繁殖地周辺海域において汚染物質に暴露されたことが示唆されるが、今後、調査個体を増やすとともに季節変化や調査海域の汚染状況など統合的な検討が求められる。本発表では、研究成果の一部とともに、研究の着想や実施に至る経緯を紹介する。

遺伝サンプリングと標識調査: 鳥を扱えるからこそ取れるサンプルがある

田谷昌仁(東北大学)

進化と生態は不可分な生命現象であり、片方の理解にはもう一方の理解が必須である。これは鳥類研究も例外ではなく、遺伝情報による様々な現象の裏付けは、鳥類の理解のためには

避けては通れない。発表者は、これまで標識調査中に様々な鳥種から血液や糞、付着生物のサンプリングを行い、種間の餌ニッチ分化の実態や外来鳥類の系統間交雑、鳥類による淡水貝類の長距離移動といった進化・生態的現象を明らかにしてきた。これには捕獲や保定といった標識調査特有の技術が不可欠であり、発表者自身のバンダー認定を得るための練習が研究の進展に大きく寄与したといえる。また、発表者の身近には鳥類研究者がほとんどいなかったが、バンダー認定のための勉強を通じて換羽や渡りといった鳥類特有の性質に関する基礎的な理解を得ることができた。バンダー認定という制度は、技術的な習熟だけでなく、鳥類研究に携わるための基礎知識の習得という側面も果たしている。

標識調査への誘い：研究者、学生、アマチュアそれぞれのメリットと新たな研究インフラとしての可能性を探る

澤 祐介(山階鳥類研究所)

企画集会のまとめとして、バンダーになるまでの道筋を紹介し、研究者、学生、アマチュア研究者がそれぞれバンダーになるメリットについて考える。自身がバンダーとなり標識調査を行うためには、現役バンダーのもとで捕獲方法や鳥の扱い方、種・年齢・性別の識別等を学んだ後、山階鳥研が実施する講習に合格する必要がある。鳥の安全や調査の品質を保つための措置である。希望や技量に応じて、各種鳥類対象や種限定のライセンスがある。

バンダーになるメリットについては、今回の講演内容をまとめるほか、発表者が民間企業勤めの社会人バンダーとしてアマチュア研究者の立場で活動していた時期の研究についても紹介する。その後、会場とのディスカッションを通して、様々な立場での標識調査への関わり方やメリットを考え、標識調査の新たな研究インフラとしての可能性を議論する機会としたい。

企画集会 PB

移動データを使った海鳥研究の新展開と応用

企画者：依田憲(名古屋大学)、渡辺伸一(リトルレオナルド・麻布大学)、佐藤克文(東京大学)、綿貫豊(北海道大学)

日本鳥学会2009年度大会において、函館国際ホテルを会場に開催されたシンポジウム「バイオリギングによる鳥類研究」(企画：高橋晃周・依田憲)から、すでに15年という歳月が流れた。この間、バイオリギングに用いられる各種センサは多様化と小型化を遂げ、搭載可能な計測項目が飛躍的に増えたことで、研究対象となる鳥類種やテーマも拡張された。さらに、AIをはじめとした計測・解析手法の革新が加速し、収集される行動データは今やビッグデータの規模に達しつつある。また、バイオリギング研究は周辺分野との連携を急速に深化させており、新たな研究領域の開拓や、保全計画への具体的応用など、社会的要請への貢献も着実に進んでいる。本企画集会では、これまでの発展の歩みを振り返りつつ、バイオリギング研究が現在どのような段階にあるのかを俯瞰し、今後いかなる課題に取り組むべきか、そしてどのような進

路を辿るべきかを多角的に再考する場としたい。

【プログラム】

- 13:45-14:15 海鳥バイオリギングの最先端(依田)
- 14:15-14:45 海鳥の渡り経路はどこまで予測できるか?(後藤&依田)
- 14:45-15:15 地域スケールでの洋上風発鳥感受性マップ作製におけるバイオリギングの利用(綿貫)
- 15:15-15:30 休憩
- 15:30-16:00 オオミズナギドリを指標とした水銀汚染マップ(小田桐ほか)
- 16:00-16:30 BiP を用いた海鳥の移動情報の解析とデータの二次利用(渡辺&佐藤)
- 16:30-16:45 総合討論

海鳥バイオリギングの最先端

依田憲(名古屋大学大学院環境学研究科)

エンペラーペンギンに最初の水圧ロガーが装着されてから半世紀が経つ。この間、「バイオリギング」という名称は広く認知され、センサは飛躍的な多様化と小型化を遂げ、行動・生態研究の基盤技術として不可欠の地位を築いた。鳥類学分野では、ペンギンだけでなく小型種にも装着可能な軽量デバイスが開発され、とりわけ海鳥研究が分野全体の技術革新を牽引している。バイオリギングの真価は「多視点計測」にあり、例えば、一人称視点の映像ロガーは動物の主観世界を捉え、三人称視点の GPS ロガーは広域移動を可視化する。近年では、統計モデルを用いた複数視点の統合や、AI がリアルタイムに多視点連携を制御するシステムも実用段階に入り、日本の研究者がその先陣を切っている。こうした技術融合は、生態・進化・保全から工学・情報科学まで多分野をつなぎ、ミクロからマクロまでのスケール統合を可能にするハブとして、バイオリギングの役割を一層拡張している。

海鳥の渡り経路はどこまで予測できるか？

後藤佑介、依田憲(名古屋大学大学院環境学研究科)

動物は環境の時空間変動に応答して移動する。しかし、環境はさまざまな時空間スケールで変動し、かつ、動物がどのスケールに応答するかは自明ではないため、動物移動のルールの特定制と経路予測は容易ではない。本研究ではミクロスケールで特定した移動ルールがマクロスケールの移動特徴を再現できるかを検証するパターン指向モデリングを適用し、新潟県粟島で孵化したオオミズナギドリ(*Calonectris leucomelas*)幼鳥の初回秋季渡りに見られる年次変動の原因を特定した。まず、3 時間ごとの移動に確率モデルを適用し、幼鳥は生得的なコンパスに従い南下しつつ、風と地理的障壁の影響を受けることを示した。次に、この移動モデルに基づき渡りの全行程をシミュレーションした結果、観察された渡り経路をよく再現した。本研究は、ミクロ-マクロを架橋する数少ない実証研究であり、動物の移動ルールの同定および移動パターンの予測に有望なアプローチを提供すると期待される。

地域スケールでの洋上風発鳥感受性マップ作製におけるバイオリギングの利用

綿貫豊(北海道大学)

地球温暖化対策のため洋上風発の開発が急ピッチで進められているが、海鳥に対しタービンへの衝突と施設建設によるハビタット消失の影響が懸念される。そのため影響が大きい場所を示す洋上風発海鳥感受性マップが沿岸域 10km スケールで作成された。しかし、風発建設予定地の環境アセスメントのためにはより緻密な～1km の地域感受性マップが必要である。海鳥に GPS データロガーを装着し、移動軌跡と飛行高度から衝突およびハビタット消失リスクの高い場所を <1km スケールで求め、モデリングにより地形から衝突リスクを高い精度で予測することができる。ただし、これを他の海域に外挿する際には予測精度が低い場合があること、近年の不規則な気候変化のもとでは精度が悪いたらうこと、国外あるいは国内の域外で繁殖し非繁殖期に沿岸の特定の海域を集中利用する海鳥がいること、などの課題もある。GPS データの蓄積と公開により、これらの課題を解決し、より高精度の感受性マップ作製を進めることができるだろう。

オオミズナギドリを指標とした水銀汚染マップ

小田桐光李 1、安積沙羅々 1、池中良徳 2、石塚真由美 2、岩崎真由 1、越智大介 3、高田秀重 4、力石嘉人 5、山本誉士 6、依田憲 7、J-B Thiebot 1、綿貫豊 1 (1 北海道大学水産科学研究院、2 北海道大学大学院獣医学研究院、3 国立研究開発法人水産研究・教育機構、4 東京農工大学、5 北海道大学低温科学研究所、6 麻布大学獣医学部動物応用科学科、7 名古屋大学大学院環境科学研究科)

近年アジア地域を中心に水銀排出量が増加し、周辺海域における水銀汚染の実態把握が急務となっている。本研究では、オオミズナギドリ (*Calonectris leucomelas*) の越冬場所をバイオロギング手法により個体ごとに特定し、羽根の水銀濃度を性や栄養段階の影響を補正したうえで越冬場所に紐づけた。これにより、西部太平洋熱帯・亜熱帯域において 2007–2010 年および 2019–2023 年の 2 期間にわたる水銀汚染マップを作成した。その結果、従来より高い空間分解能で、南シナ海での経時的な汚染の変化やニューギニア島西部沿岸の潜在的ホットスポットを可視化した。本研究では、海鳥を指標とする広域モニタリング手法の有効性と、その制約が明らかになった。

BiP を用いた海鳥の移動情報の解析とデータの二次利用

渡辺伸一 (リトルレオナルド・麻布大学)・佐藤克文 (東京大学大気海洋研究所)

バイオロギングによって取得された海鳥の移動データは、行動や生態のみならず、海洋環境の把握にも応用可能である。演者らは、バイオロギングデータの保存・共有を目的とした無料のプラットフォーム BiP (Biologging intelligent Platform) を開発・運用しており、鳥類に限らず、魚類や哺乳類など多様な動物種のデータを対象としている。BiP では、異なる機器由来のデータ形式を標準化し、体サイズや捕獲履歴といったメタ情報とともに一元管理している。特に、海鳥の移動経路から海流・海上風・波浪といった海洋物理情報を自動抽出できる機能は、大きな特徴である。また、繁殖期の採餌トリップの距離や時間を自動計測する解析ツールの開発も進めており、今後、学生や環境調査現場でも利用可能なたちでの公開を目指して準備を進めている。本講演では、こうした BiP の構造や機能を紹介するとともに、本企画を通じて、蓄積された公開データを用いた感受性評価、水銀リスク予測、渡り経路推定などの応用的研究の可能性について議論したい。

参加者名簿 Attendees

一般・学生(早期申込、及び後期申込8/24 まで) 450 名 Regular & students

(A-Z 順)

	Family name	First name	氏名	所属	発表番号・集会主催	共同発表・集会コメント等	懇親会
A	Abe	Hibiki	阿部 響	早稲田大学 大学院人間科学研究科	P062		○
	Abe	Hitomi	阿部 仁美	千葉科学大学	P031	P127	
	Abe	Kotone	安部 琴音			P001	○
	Abe	Manabu	阿部 學	ラプタージャパン(日本猛禽類研究機構)	B30	A6	○
	Abe	Ryosuke	安部 亮佑				○
	Adati	Yuuto	安達 悠登	弘前大学			
	Aida	Yoshiaki	會田 義明	環境省大臣官房環境影響評価課		W01	
	Ainoya	Kino	相野谷 叶乃	宇都宮大学大学院	P032		
	Akamatsu	Akari	赤松 あかり	長野アカモズ保全研究グループ		A14, P037	
	Akiyama	Koya	秋山 幸也	相模原市立博物館		P020	
	Amano	Hitoha	天野 一葉	滋賀県立琵琶湖博物館	A20		○
	Amemiya	Shun	雨宮 俊	環境省生物多様性センター		W02	
	Ando	Haruko	安藤 温子	国立環境研究所	A12		○
	Ando	Takahiro	安藤 隆寛	中部電力株式会社	A34	P032	○
	Aoyama	Saho	青山 佐穂	人間環境大学野鳥研究サークル			
	Ara	Teppe	荒 哲平				
	Asai	Miku	浅井 美紅	東邦大学動物生態学研究室	P079		○
	Asano	Yui	浅野 由衣	株式会社 Swallow Design Studio	P014		○
	Awamura	Hanana	粟村 花菜	静岡大学			
	Azuma	Naoki	東 直希	広島工業大学大学院	P117		
	Azuma	Nobuyuki	東 信行	弘前大学		B22, P039, P075	○
	Azumaya	Kazunori	東谷 和徳	株式会社セ・プラン	P126		○
C	Chiba	Yuka	千葉 夕佳	ノスリ・ウォッチ	P090		
	Chigita	Koki	千北 紘暉	早稲田大学人間科学部野生動物生態学研究室			○
	Chin	Yu	陳 有	株式会社テクノ中部			○
D	Deguchi	Shota	出口 翔大	福井市自然史博物館	A21	P111, W05	
	Deguchi	Tomohiro	出口 智広	兵庫県立大学	A17	A16	○

Family name	First name	氏名	所属	発表番号・集会主催	共同発表・集会コメント等	懇親会
Doi	Takafumi	土井 貴文	株式会社ピーピー キューシー・大阪公立 大学博士課程	A28		
Domon	Yusuke	土門 優介	株式会社ドーコン		P126	○
E Ebina	Junichi	蛭名 純一	NPO おおせっからん ど		B22	○
Eda	Masaki	江田 真毅	北海道大学総合博物 館	B16	B10	○
Endo	Tamako	遠藤 碧子	帯広畜産大学			
Enokida	Misa	榎田 光紗	鹿児島大学			
Esaki	Mana	江寄 真南	鹿児島大学大学院共 同獣医学研究科	A27	P056	○
Esashi	Mari	江指 万里	北海道大学大学院 理 学院	P009, W03	P004, P027	○
F Fujii	Kaori	藤井 香織	生物群集研究所			
Fujii	Rina	藤井 梨奈	東京農工大学			
Fujii	Youto	藤井 陽人	東京農工大学農学部 地域生態システム学科			
Fujimaki	Yuzo	藤巻 裕蔵			P136	
Fujioka	Daichi	藤岡 大地	北海道大学農学部			
Fujita	Go	藤田 剛	東大	B32	B28, P119	○
Fujita	Kaoru	藤田 薫	東邦大学理学部生物 学科行動生態学研究 室	B28		
Fujita	Taku	藤田 卓	(公財)日本自然保護 協会		W02	
Fujita	Tomoya	藤田 知弥	信州大学大学院		A14, P037	○
Fukami	Aya	深水 彩	東京大学農学部森林 生物科学専修	P086		○
Fukuda	Mako	福田 真子	たま-ゆめ崖線ネット ワーク			
Fukuda	Yoshihiro	福田 佳弘	知床海鳥研究会・バー ドリサーチ	B3		○
Fukui	Kosuke	福井 香介				
Fukui	Tomoki	福井 智樹	東京都市大	P109		○
Fukui	Wataru	福井 亘	栃木・黒磯高校	P084		○
Funahashi	Mitsuki	船橋 美月	筑波大学	P059		○
Furumaki	Shohei	古巻 翔平	厚岸水鳥観察館		P070	○
G Goto	Yusuke	後藤 佑介	名古屋大学	PB	B1, B6, P089	
H Haga	Masaru	芳賀 大	日本野鳥の会愛知県 支部	P132		
Hagiwara	Yojiro	萩原 陽二郎	いであ(株)		W01	○
Hall	Nika	ホール 新香	(公財)日本野鳥の会			

参加者名簿 Attendees

Family name	First name	氏名	所属	発表番号・集会主催	共同発表・集会コメント等	懇親会
Hall	Patrick Stephen	Patrick Hall	Stephen	(公財)日本野鳥の会		
Hamada	Tetsuaki	濱田 哲暁	認定 NPO 法人四国自然史科学研究センター	P141		○
Hamakawa	Ayumi	濱川 歩	東京都立大学	P040		○
Hamao	Shoji	濱尾 章二	国立科学博物館	公開シンポ		
Haneda	Takayuki	羽根田 貴行	株式会社野生動物保護管理事務所	P102	W04	○
Hanzawa	Hinako	榛沢日 菜子	北海道大学理学院	P004	P018	○
Hara	Eriko	原 英里子	帯広畜産大学	A24		
Harada	Kazuki	原田 和輝	東京大学大気海洋研究所	B1		○
Harada	Toshihisa	原田 敏久	(公財)日本野鳥の会			
Harada	Yumiko	原田 由美子	(公財)日本野鳥の会			
Harayama	Norihiro	原山 法大	東海大学大学院生物学研究科生物学専攻	A29		
Hasegawa	Osamu	長谷川 理	NPO 法人 EnVision 環境保全事務所	W08		○
Hasegawa	Rei	長谷川 れい	東京都市大学	P013		○
Hashimoto	Hiroshi	橋本 啓史	名城大学農学部		P080, P112, P132	○
Hayama	Hisayo	葉山 久世	かながわ野生動物サポートネットワーク	P120		○
Hayashi	Haruka	林 はるか	水研機構・水産資源研	P074		○
Hayashi	Yoshiko	林 仁子	酪農学園大学環境共生学類			
Hayashi	Yuko	早矢仕 有子	北海学園大学工学部		P094	○
Hayashina ka	Kikuko	林中 喜久子	アジア航測株式会社			
Hibino	Masahiko	日比野 政彦	日本鳥類標識協会			○
Higuchi	Aki	樋口 亜紀	国立科学博物館動物研究部		B18, B30	○
Higuchi	Hiroyoshi	樋口 広芳	慶應義塾大学自然科学研究教育センター	A1	A7	○
Higuchi	Karin	樋口 かりん	武庫川女子大学			
Higuchi	Kuromitsu	樋口 黒光				
Hino	Teruaki	日野 輝明	名城大学	公開シンポ		
Hirabayashi	Kiichiro	平林 毅一郎	公益財団法人日本生態系協会			
Hirai	Katsui	平井 克亥		P058	P136	○
Hirano	Misaki	平野 岬	日本データサービス株式会社			
Hiraoka	Takashi	平岡 考	(公財)山階鳥類研究所	B19		○
Hiroki	Miho	廣木 美帆	帝京科学大学大学院	P047		

Family name	First name	氏名	所属	発表番号・集会主催	共同発表・集会コメント等	懇親会
Hisai	Atsuyo	久井 貴世	北海道大学大学院文学研究院	P138		○
Hisano	Masumi	久野 真純	広島大学・先進理工	P111	P050	
Honda	Rina	本多 里奈	埼玉県立自然の博物館	P061		○
Honda	Yuriko	本田 百合子				
Hori	Shunsuke	堀 隼輔	株式会社ドーコン		P122, P136	○
Horie	Sayaka	堀江 明香	大阪市立自然史博物館	A10		○
Horio	Saya	堀尾 咲弥	人間環境大学野鳥研究部			
Horiuchi	Sei	堀内 晴	北海道大学理学院	P019		
Hosoya	Jun	細谷 淳	鳥類標識協会	P107	B10, P001, P076	○
Hotta	Masanobu	堀田 昌伸		P051		○
Hsu	Kai-hsuan	許 開軒	北海道大学埋蔵文化財調査センター	P140		○
I Ichinose	Hiromichi	一瀬 弘道	クマタカ生態研究グループ、いであ株式会社	B34		○
Igari	Atsushi	猪狩 敦史	クマタカ観察隊	P038	B35	
Iguchi	Mebuki	井口 芽吹	早稲田大学人間科学部野生動物生態学ゼミ			
IIDA	Tomohiko	飯田 知彦	一般社団法人 日本希少鳥類研究所			○
Ikeda	Keigo	池田 圭吾	北海道大学文学院	P139		○
Ikegami	Kenji	池上 研二	(株)京都市花き総合流通センター			
Ikegami	Nobue	池上 伸重				
Ikegami	Takayuki	池上 隆之	北海道大学理学院	P057	P004, P018, P019	○
Ikejrii	Kosei	池尻 晁晟	北海道大学理学部生物科学科			
Ikemoto	Yoshikazu	池本 吉一	篠路整形外科			
Imamura	Shu	今村 舟	株式会社ういるこ		W04	
Imanishi	Sadao	今西 貞夫		B20		○
Inaba	Aoi	稲葉 蒼				
Inaba	Kazumasa	稲葉 一将	(公財)日本野鳥の会	P135		○
Inahara	Yuna	稲原 夕渚	京都府立大学			○
Inoue	Kazuki	井上 和樹	株式会社テクノ中部			○
Inoue	Mayu	井上 茉優	海城中高, 日本野鳥の会東京	P041		○

参加者名簿 Attendees

Family name	First name	氏名	所属	発表番号・集会主催	共同発表・集会コメント等	懇親会
Inoue	Natsumi	井上 奈津美	一般財団法人自然環境研究センター			○
Ishida	Risa	石田 莉咲	東京農業大学			
Ishii	Chihiro	石井 千尋	東京農工大学獣医薬理学研究室	P055		
Ishikawa	Tomohiro	石川 智大	(公財)日本野鳥の会			
Itaya	HIROO	板谷 浩男	一般財団法人日本気象協会	W01	P028, P134, W07	○
Iuchi	Takeshi	井内 岳志	北海道エコ・動物自然専門学校			
Iwahara	Mari	岩原 真利	環境省羽幌自然保護官事務所	B8		○
Iwaisaki	Hiroaki	祝前 博明	新潟大学佐渡自然共生科学センター	P002	A19	○
Iwami	Yasuko	岩見 恭子	公益財団法人 山階鳥類研究所	B13, W05	B14	
Iwasaki	Miho	岩崎 美穂	北海道大学大学院理学院	P071		○
Iwasaki	Yume	岩崎 結芽				○
Izumi	Hiroe	泉 洋江	北大総合博物館		B10	○
J JIANG	YAJUN	JIANG YAJUN(姜雅琄)	バードリサーチ	W03	W02, W10	
K Kagoshima	Keisuke	籠島 恵介	本州産クマガラ研究会	B23		
Kaise	Kei	海瀬 慧	東京都市大学 大学院 環境情報学研究科	P081		
Kajimoto	Yamato	梶本 和	東京大学農学部			
Kakuno	Ayuka	角野 歩夏	新潟大学大学院自然科学研究科	A19		○
Kameda	Kayoko	亀田 佳代子	滋賀県立琵琶湖博物館		W05	○
Kamiya	Yorito	神谷 頼杜	人間環境大学 環境科学部 フィールド生態学科	A14	P037	
Kan	Tomohito	韓 智仁	大阪大学人間科学研究科	P104		○
Kanamori	Taito	金森 泰都	早稲田大学	A32		○
Kanasugi	Naoki	金杉 尚紀	北海道大学理学院	P027	P019	○
Kano	Sayaka	加納 彩海	岐阜大学大学院自然科学技術研究科生物生産環境科学専攻	P114		
Kasahara	Satoe	笠原 里恵	信州大・理・諏訪臨湖	B21	B17	○
Katayama	Naoki	片山 直樹	農研機構		W02	
Katayama	Yuki	片山 雄貴	十三崖チョウゲンボウ応援団			
Kato	Ginji	加藤 銀次	長大院・総合生産	P056		○
Kato	Haruhiro	加藤 晴弘				

Family name	First name	氏名	所属	発表番号・集会主催	共同発表・集会コメント等	懇親会
Kato	Masaru	加藤 克	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター		P137	○
Kato	Mitsuyoshi	嘉藤 慎譲	株式会社地域環境計画	P063	P058	
Kato	Yuki	加藤 ゆき	神奈川県立生命の星・地球博物館	P124, W05	P120	
Kawaguchi	Dairo	川口 大朗	一般社団法人 Islands care	W09		
Kawaji	Noritomo	川路 則友				○
Kawakami	Kazuto	川上 和人	森林総合研究所	B2, W09	A36	○
Kawamori	Hinata	川森 日向	北大水産		P010	
Kawarada	Shiharu	川原田 史治				○
Kawasaki	Yoshiko	川崎 佳子	(公財)日本野鳥の会			
Kazama	Kentaro	風間 健太郎	早稲田大	B4	P073, W01	○
Kazama	Miho	風間 美穂	きしわだ自然資料館	A33		○
Kazama	Toka Mami	風間 麻未	利尻自然史研究室		B4	○
Kegoya	Genki	家古谷 元輝	京都大学農学部森林科学科3回			
Kihara	Yuta	木原 優太	工学院大学	P015		
Kikuchi	Mayu	菊池 真結	宇都宮大学			
Kikuchi	Naoki	菊地 直樹	金沢大学	W07		
Kim	Yoonsu	金 潤秀	北海道大学水産科学 院	P103		
Kimura	Narumi	木村 成美	葛西海浜公園パートナーズ/NPO birth	A8	P099	○
Kimura	Tomoki	木村 智紀	北海道技術コンサルタント		P136	
Kinokuni	Satoru	紀國 聡	株式会社 建設技術研究所	B35	P136	○
Kinomura	Ryo	木野 村亮				
Kinoshita	Yoshiya	木下 佳也	北海学園大学工学部	P094		
Kitagawa	Tatsuro	北川 達朗	総合研究大学院大学	B11		
Kitamura	Tamaki	喜多村 珠妃	人間環境大学	P101		○
Kitao	Yusuke	北尾 祐介	株式会社生態計画研究所	P011		
Kobayashi	Atsushi	小林 篤	長野県環境保全研究所	B26		
Kobayashi	Megumi	小林 めぐみ				
Kobayashi	Sayaka	小林 さやか	山階鳥類研究所	B15, W05	B18	
Kojima	Tatsuki	小島 達樹	東洋大学大学院 生命科学 科学研究科	P073, W03		
Kokubo	Moriaki	小久保 守晃	葛西のクロツラ	P099	A8, P040	○

参加者名簿 Attendees

Family name	First name	氏名	所属	発表番号・集会主催	共同発表・集会コメント等	懇親会
Komaru	Kanade	小丸 奏	(株)興栄コンサルタン ト、岐阜大学	P105		○
Kosugi	Ibuki	小杉 歩己	北海道大学水産学部			
Kotaka	Nobuhiko	小高 信彦	森林総合研究所九州 支所	A26	B14	○
Kouno	Daiki	河野 太軌	弘前大学			
Kubokami	Soziru	久保上 宗次郎	日本野鳥の会会員			
Kubota	Tomofumi	窪田 智文	東邦大学大学院 理学 研究科 生物学専攻 行 動生態学研究室	P035		○
Kudo	Manaka	工藤 愛加				
Kudo	Rui	工藤 琉生	北海道室蘭栄高等学 校			
Kudou	Akio	工藤 晃央	株式会社ドーコン	P136		○
Kumada	Nao	熊田 那央	国環研・バードリサー チ			
Kumagai	Shun	熊谷 隼	EnVision 環境保全 事務所	W08	P027, P070	○
Kurabe	Suzumi	倉部 鈴美	一般財団法人日本気 象協会	P134	W01	
Kuribayas hi	Morine	栗林 森音	(株)福田水文センター			
Kuriyama(Takeda)	Hiroko	栗山(武田) 広子	コウノトリ市民レン ジャー/コウノトリ市民 研/兵庫県立大学大学 院	P066		○
Kuroda	Haruo	黒田 治男				○
Kurosawa	Reiko	黒沢 令子	NPO バードリサーチ	W10		○
Kusunoki	Yuzuha	楠 ゆずは	日本野鳥の会、広島大 学生物生産学部生物 生産学科分子農学生 命科学プログラム、 Good Life on Earth	P077		○
L LI	GUOZHE NG	LI GUOZHENG	Druid Technology Co., Ltd.	A9	A7	
M Ma	Shiho	松林 志保	関西学院大学	P078		
Mae	Saryu	前 朝琉		P097		
Maeda	Sumika	前田 純果	公益財団法人日本野 鳥の会			
Maehara	Keita	前原 恵太	東京農業大学			
Maekawa	Takuya	前川 卓也	大阪大学			
MAMIYA	FUKA	間宮 ふうか	人間環境大学	A15	A13, A14	○
Masaki	Kaho	真崎 香帆				
Masaki	Yasuko	正木 康子	秋田県立大学/日本野 鳥の会秋田			

Family name	First name	氏名	所属	発表番号・ 集会主催	共同発表・ 集会コメント 等	懇親会
Masatomi	Hiroyuki	正富 宏之	タンチョウ研究所	B31		○
Masatomi	Yoshiyuki	正富 欣之	一般社団法人タンチョウ研究所	P125		○
Masuda	Yutaro	増田 侑太郎	東京都立大学大学院理学研究科	P048		
Matsui	Shin	松井 晋	東海大・生物	P069	A29, P129	○
Matsumoto	Fumio	松本 文雄	日本ツル・コウノトリネットワーク			
Matsumoto	Junkei	松本 潤慶	公益財団法人日本野鳥の会			○
Matsumoto	Nagisa	松本 渚	早稲田大学人間科学部			
Matsumoto	Natsuko	松本 奈津子				
Matsunaga	Satomi	松永 聡美	公益財団法人日本鳥類保護連盟	P020	A2, P064	
Matsuura	Shiho	松浦 志穂	金沢大学大学院自然科学研究科	P003		
Matsuura	Shota	松浦 翔大	東京農業大学			○
Matsuzaki	Shuya	松崎 秀哉	北海道大学理学部	P070		
Mihara	Nami	三原 菜美	米子水鳥公園			
Mikami	Katsura	三上 かつら	バードリサーチ	P026		○
Miura	Masayuki	三浦 正之	山梨県水産技術センター			
Miyagi	Kunitaro	宮城 国太郎	沖縄県獣医師会		P009	○
Miyaji	Momoka	宮地 李果	麻布大学大学院 獣医学部研究科 動物応用専攻	P088		○
Mizumura	Haruka	水村 春香	山梨県富士山科学研究所	B25, W03		
Mizuta	Taku	水田 拓	山階鳥研		B14, P035, PA	○
Mizutani	Yuichi	水谷 友一	同志社大学	B6	P089	○
Mochiduki	Ami	望月 アミ	京都精華大学大学院			○
Mochizuki	Mizuki	望月 みずき	我孫子市鳥の博物館	W03	B18	
Moriguchi	Sachiko	森口 紗千子	鳥取大・グローバルヘルス／日獣大・獣医	W06		○
Morimoto	Gen	森本 元	山階鳥類研究所	A11	A23, P079	○
Morioka	Maki	森岡 麻貴	(公財)日本野鳥の会			
Morishima	Akane	森嶋 茜	帯広畜産大学	P133		○
Moritake	Tasuku	森竹 祐	公益財団法人日本野鳥の会			
Moriya	Toshifumi	守屋 年史	バードリサーチ		B17, W02	
Moriyama	Saya	森山 沙耶	兵庫県立大学			
Moroki	Yuko	諸木 裕子	日本女子大学	P096		

参加者名簿 Attendees

Family name	First name	氏名	所属	発表番号・集会主催	共同発表・集会コメント等	懇親会
Motomura	Ken	本村 健	中野市教育委員会	P050	P111	○
Murakami	Makoto	村上 真琴	国立大学法人長岡技術科学大学工学部			
N Nagai	Ayami	永井 彩実	北海道大学水産学部	P100		○
Nagata	Hisashi	永田 尚志	新潟大学	A18	P042	○
Naito	Annegret Moto	内藤 アンネグレート素	京都市動物園	P064, W03	A2	
Nakada	Tatsuya	中田 達哉	株式会社野生生物総合研究所			○
Nakadai	Kazuhiro	中臺 一博	東京科学大学		P078	
Nakagomi	Taiga	中込 大河	一般財団法人 日本気象協会	P028	B4, P134	
Nakahara	Toru	中原 亨	北九州市立自然史・歴史博物館	A5		○
Nakajima	Keiya	中島 京也	日本ワシタカ研究センター			○
Nakajima	Takuya	中島 卓也	株式会社構研エンジニアリング			
Nakajima	Yuko	中島 裕子	信州大学理学部理学科生物学コース			
Nakamura	Hizuki	中村 陽月	京都大学野生動物研究センター	P092		○
Nakamura	Makiko	中村 眞樹子	NPO 法人札幌カラス研究会	A35	P067, W10	○
Nakamura	Masahiko	中村 雅彦	上越教育大学	公開シンポ		
Nakamura	Satoshi	中村 聡	日本野鳥の会(会員)・日本自然保護協会(会員)			○
Nakamura	Yutaka	中村 豊	枇杷島調査研究会			○
Nakashima	Takuya	中島 拓也	ラプタージャパン	A6	B30	○
Nakata	Tomoki	中田 智貴	長岡技術科学大学			
Nakatsu	Hiromu	中津 弘	温帯文化景観調査研究所	B33		
Nakatsuji	Yuriko	中辻 百合子	東邦大学行動生態学研究室	P033		
Nakayama	Manami	中山 茉奈美	十三崖チョウゲンボウ応援団		P050	
Nakayama	Nao	中山 奈穂	弘前大学			○
Namba	Tomoyuki	南波 興之	(一社)日本森林技術協会	W09		○
Namiki	Hiroto	並木 大斗	筑波大学理工情報生命学術院	P123		○
Narahashi	Maria	檜橋 真理環	九州大学	P007		○
Niinuma	Kanae	新沼 協	北海学園大学工学部		P094	
Niizuma	Yasuaki	新妻 靖章	名城大学農学部環境動物学研究室	B5		○
Nishi	Akinori	西 亮憲	名城大学大学院	P112		○

Family name	First name	氏名	所属	発表番号・集会主催	共同発表・集会コメント等	懇親会
nishida	koh	西田 洸	(株)環境テクニカルサービス			
Nishimura	Mitsuyoshi	西村 光由	愛知県農業総合試験場 環境基盤研究部 病虫害研究室	P029		
Nishioka	Yusuke	西岡 裕介				
Nishiumi	Isao	西海 功	国立科学博物館	B18	B17, P007	○
Nishizawa	Bungo	西澤 文吾	国立研究開発法人 水産研究・教育機構		W01	
Nitta	Keiko	新田 啓子	日本オシドリ研究会	P067		○
Niwa	Shin-ichi	丹羽 真一	さっぽろ自然調査館		W10	
Nuka	Toshimitsu	奴賀 俊光	(公財)日本野鳥の会・バードリサーチ	P121	W02	○
O Obara	Amy	小原 愛美	(株)オオヨドコーポレーション P テックス社 研究開発室	P034		○
Ochi	Yuto	越智 友都	大阪大学大学院理学研究科宇宙地球科学専攻	P016		
Odagiri	Hikari	小田桐 光李	北海道大学水産科学院		PB	
Odanaka	Gakuto	小田中 楽斗	宇都宮大学	P023		
Ogasawara	Kohei	小笠原 浩平	北海道大学大学院獣医学研究院毒性学教室	P005		○
Ogata	Kumi	緒方 久美				
Ogawa	Hana	小川 華奈	東海大学生物学部生物学科	P129		
Ohara	Masataka	尾原 正敬	株式会社千代田コンサルタント	B36		○
Ohkawara	Kyohsuke	大河原 恭祐	金沢大学生命理工学類	B24	P003, PA	○
Ohsugi	Yuki	大杉 祐生	北海道大学		W10	○
Oikawa	Mikiya	及川 樹也	北大環境科学院修士1年			
Oishi	Tomomi	大石 智美	北海道大学文学院		W10	
Oizumi	Ryutaro	大泉 龍太郎	北海道大学 大学院理学院	P118		○
Okahisa	Yuji	岡久 雄二	人間環境大学	黒田賞	A13, A14, A15, P037, P101	○
Okamura	Saki	岡村 早紀	宇都宮大学院 地域創生科学研究科	P030		
Okamura	Yutaro	岡村 悠太郎	名城大学農学研究科	P080		○
Okawa	Mayo	大川 万葉	宇都宮大学			
Okaya	Saku	岡谷 咲	東京農業大学			
Okazaki	Rin	岡崎 凜	京都大学理学部			○

参加者名簿 Attendees

Family name	First name	氏名	所属	発表番号・集会主催	共同発表・集会コメント等	懇親会
Okimashi	Masaki	起橋 正樹	北海道大学			
Okiyama	Megumi	沖山 めぐみ	猛禽類医学研究所			
Okiyama	Motoki	沖山 幹				
Okubo	Wataru	大久保 亘	東京都市大学	P082		○
Okuzaki	Yuya	奥寄 雄也	名古屋大学大学院生命農学研究科鳥類バイオサイエンス研究室	P052		
Omote	Keita	表 溪太	北海道博物館			○
Onoue	Manami	尾上 愛実	東京大学農学部	P119		○
Oodo	Toshiyuki	大戸 聡之				
Ooka	Chisa	大岡 千紗	静岡大学			
Osada	Shoma	長田 昇磨	東京都市大	P036		○
Osaka	Hideki	大坂 英樹	トリルラボ	P116	P111	
Oshima	Haruka	大島 遥香				
Otsubo	Sayo	大坪 咲葉	北海道大学			
Otsuka	Iku	大塚 育	千葉科学大学	P127		
Ozaki	Kiyoaki	尾崎 清明	山階鳥類研究所	A23		○
Ozasa	Eiichiro	小笹 瑛一郎	京都大学大学院理学研究科	P010		
S Sadakuni	Maho	貞國 真穂	釧路市子ども遊学館			
Sadakuni	Toshio	貞國 利夫	釧路市立博物館		P006	
Saito	Hina	齊藤 日奈	早稲田大学大学院人間科学研究科			○
Saito	Rin	齊藤 凜	一般財団法人 自然環境研究センター			○
Sakai	Yasukazu	酒井 泰和	日本野鳥の会岐阜		P114	
Sakai	Yui	酒井 結	東京農工大学農学府 自然環境保全学プログラム	P110		○
Sakamoto	Haruna	坂本 遥南	東京農業大学 大学院修士1年			
Sakamoto	Riku	坂元 利駆	近畿大学大学院農学研究科環境管理学専攻生態系管理学研究室	P131		○
Sakanashi	Masahiko	坂梨 仁彦				○
sakata	yoko	坂田 洋子	(公財) 日本野鳥の会			
Sakuma	Saki	佐久間 咲希	農研機構 動物衛生研究部門 人獣共通感染症研究領域 新興ウイルスグループ	P093		
Sakuraba	Shuta	櫻庭 周太				

Family name	First name	氏名	所属	発表番号・集会主催	共同発表・集会コメント等	懇親会
Sano	Ayane	佐野 綾音				
Sasaki	Miyu	佐々木 未悠	総合研究大学院大学	B22		○
Sato	Hatsumi	佐藤 初海	東洋大学大学院生命科学研究科	P024		○
Sato	Hiroshi	佐藤 ひろみ				○
Sato	Kanon	佐藤 華音	滋賀県立琵琶湖博物館			
Sato	Shigeho	佐藤 重穂	森林総合研究所	P087	A3	
Sato	Yuko	佐藤 悠子	新潟県愛鳥センター紫雲寺さえずりの里	P130		
Sato	Yuta	佐藤 裕太	長崎大学	A31		○
Sawa	Yusuke	澤 祐介	山階鳥類研究所	A22, PA	A21, B17	○
Sawame	Ayako	澤目 綾子	(公財)日本野鳥の会			
Sawame	Chihiro	澤目 千尋	(公財)日本野鳥の会			
Sei	Ryota	清 稜太	新潟大学大学院自然科学研究科環境科学専攻フィールド科学コース	P042		○
Seki	Hinata	関日 向	東京農業大学院	P025		○
SENZAKI	AIKO	先崎 愛子	道央鳥類調査グループ		B35, P038, P126	○
Senzaki	Hiraku	先崎 啓究	道央鳥類調査グループ		B35, P038, P126, P136	○
Senzaki	Masayuki	先崎 理之	北海道大学大学院地球環境科学研究院		A3, P098, P122	
SHI	GUODONG	SHI GUODONG	Druid Technology Co., Ltd.		A7	
Shibata	Yoshihide	柴田 佳秀	都市鳥研究会			○
Shibuya	Tatsuo	澁谷 辰生	厚岸水鳥観察館(厚岸町環境林務課)			○
Shigehara	Michiko	重原 美智子				○
Shigenaga	Akio	重永 明生			P124	
Shigeoka	Masako	重岡 昌子	鳥類調査員			
Shimada	Mayu	島田 真優	京都大学 理学研究科			○
Shimada	Shogo	島田 将吾	新潟大学	P068		
Shimada	Tetsuo	嶋田 哲郎	(公財)宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団	A7	W07	○
Shimano	Saho	島野 紗帆				
Shimazaki	Yasuhiro	島崎 康広	(公財)日本野鳥の会			
Shimizu	Nobuhiko	清水 伸彦	群馬県立自然史博物館	P008		
Shimizu	Shunpei	清水 駿平	弘前大学			○

参加者名簿 Attendees

Family name	First name	氏名	所属	発表番号・集会主催	共同発表・集会コメント等	懇親会
Shimizu	Takehiko	清水 孟彦	北海道大学大学院環境科学院	P122, W03		○
Shimozaki	Kazuma	下崎 一馬	八戸工業大学第二高等学校			
Shinada	Wataru	品田 済				
Shiomi	Koji	塩見 浩二	北海道小樽潮陵高等学校			
Shioya	Yusuke	塩谷 勇介	(株)環境テクニカルサービス			○
Shirai	Ayaka	白井 あやか	兵庫県立大学大学院	A16		○
Shirai	Takeshi	白井 剛	都留文科大／和光大	P043		○
Shiraki	Saiko	白木 彩子	東京農業大学生物産業学部			○
Shoji	Akiko	庄子 晶子	名古屋大学		B6	○
Someya	Fuku	染矢 楓久	北海道大学農学院	P137		○
Sudo	Akiko	須藤 明子	株式会社イーグレット・オフィス		W07	○
Sueishi	Moeno	末石 萌乃	信州大院・総合理工学	B17		○
Sugasawa	Hayato	菅澤 颯人	岩手大学	A30		○
Sugimoto	Moemi	杉本 萌美	(株)ウエスコ 関東支社 環境計画課			
Sugimoto	Takaomi	杉本 嵩臣	いであ株式会社	A25		○
Sugiyama	Hibiki	杉山 響己	名古屋大学大学院環境学研究科	P089		○
Suzuki	Akira	鈴木 晶	新潟大学農学部農学科			○
Suzuki	Hajime	鈴木 創	(特非)小笠原自然文化研究所	P091, W09		○
Suzuki	Kayoh	鈴木 夏葉	東京農業大学国際食料情報学部国際農業開発学科熱帯作物保護学研究室			○
Suzuki	Reiji	鈴木 麗壘	名古屋大学大学院情報学研究科	P012	P078	○
T Tabeta	Tsutomu	田部田 勉	株式会社建設技術研究所		P063	
tachibana	yuki	橘 由貴	(公財)日本野鳥の会			
Tajiri	Hironobu	田尻 浩伸	(公財)日本野鳥の会	P128	P046, P047, P135	○
Takagi	Kentaro	高木 憲太郎	バードリサーチ	P113, W04		
Takagi	Masaoki	高木 昌興	北海道大学	公開シンポ	P004, P009, P018, P019, P027, P070, P071, P118	○

Family name	First name	氏名	所属	発表番号・ 集会主催	共同発表・ 集会コメント 等	懇親会
TAKAHASHI	HINA	高橋 ひな	旭川市旭山動物園			○
Takahashi	Konoka	高橋 このか	宇都宮大院・地域創成	P022		○
Takahashi	Yoshinori	高橋 義典	工学院大学		P015	
Takano	Ai	高野 愛	山口大学共同獣医学部	A36	PA	○
Takasaki	Koichi	高崎 浩一	JAXA			
Takayama	Hinako	高山 日奈子	東京農業大学			
Takazawa	Junko	高沢 淳子	(公財)日本野鳥の会			
Takeda	Keise	武田 恵世	日本野鳥の会三重	B29		○
Takeda	Shouko	竹田 祥子	(公財)日本野鳥の会			
Takeda	Tadayoshi	武田 忠義	環境省北海道地方環境事務所			○
Takeda	Yawara	竹田 山原楽	東北大学大学院生命科学科学研究科	P076		○
Takei	Fuka	武居 風香	北海道大学理学院	P018	P004	
Takenaka	Takeshi	竹中 健	シマフクロウ環境研究会	P021		○
Takeyama	Tomohiro	武山 智博	岡山理科大学生物地球学部生物地球学科	B14	A10, B13	○
Tamada	Katsumi	玉田 克巳	道エネ環地研			○
Tanaka	Masahiro	田中 雅宏	日本大学生物資源科学部博物館	P060		○
Tanaka	Ryotaro	田中 涼太郎	弘前大学 農学生命科学研究科 生物学コース	P039		
Tanaka	Satoshi	田中 智	日本野鳥の会滋賀支部(幹事)		P105	○
Tang	Tianyu	湯 天禹	東京大学農学部生命科学科学研究科森林圏生物機能生態学研究室	P083		
Tange	Kazuko	丹下 和子				
Tani	Yuki	谷 祐樹	北陸鳥類調査研究所			
Taniguchi	Tsukasa	谷 口司	筑波大学大学院		P059	○
Tanimura Machin	Fiona	谷村 メイチンフィオナ	北海道大学生命科学院生命科学専攻生命システム科学コース相馬研究室	P053		
Tanoi	Hiroyuki	田野井 博之	Seabirding Japan	P072		○
Tanoi	Shoko	田野井 翔子	Seabirding Japan		P072	○
Tatani	Masanori	田谷 昌仁	東北大学大学院生命科学科学研究科	P001, W03	P076, PA	○
Tateishi	Yoshie	立石 淑恵	オホーツクミュージアムえさし	P075		○
terada	touma	寺田 透真	人間環境大学	P037		

参加者名簿 Attendees

Family name	First name	氏名	所属	発表番号・集会主催	共同発表・集会コメント等	懇親会
Terajima	Taiki	寺嶋 太輝	東京農工大学共同獣医学専攻	B7	P046, PA	○
Teramoto	Yuka	寺本 優香	同志社大学		P014	○
Tobari	Yasuko	戸張 靖子	麻布大学獣医学部		P088	○
Tomikawa	Toru	富川 徹	北海道野鳥愛護会			○
Tomisawa	Naohiro	富沢 直浩			P009	○
Tomita	Naoki	富田 直樹	公益財団法人山階鳥類研究所	B10	B13, B14, P074, P100, P103, W02	
Tomita	Riku	富田 大陸	株式会社野生動物保護管理事務所		P102	○
Tonooka	Hayato	外岡 隼	北海道大学農学部			
Torikai	Hisahiro	鳥飼 久裕	NPO 法人奄美野鳥の会	A2	P064	○
Toyama	Masahiro	外山 雅大	根室市歴史と自然の資料館	P065, W06	P009	○
Toyota	Tomohiro	豊田 知宏	(公財)日本野鳥の会			
TSUCHIYA	Hisashi	土屋 尚	Eureka 北海道		P136	
Tsuchiya	Kao	土屋 佳央	佐賀大学農学研究科	P085		
U	Uchida	kiyoshi	内田 聖	里山自然史研究会 日本標識協会		○
UEDA	HARUKI	植田 晴貴	日本獣医生命科学大学 獣医学科 野生動物学研究室	P095		○
Ueda	Keisuke	上田 恵介	立教大学	B12	B25	
Ueda	Kirika	植田 樹莉叶	日本獣医生命科学大学獣医学部獣医学科4年			
Uematsu	Eishi	植松 永至	信州タカ渡り研			○
Uemura	Shingo	植村 慎吾	バードリサーチ	P049, W02		○
Ueno	Hiiro	上野 陽彩	宇都宮大学大学院地域創生科学研究科	P054		
Ueta	Mutsuyuki	植田 睦之				
Ugajin	Miki	宇賀神 美紀	わんぱくこうちアニマルランド			
Umehara	Mizuho	梅原 瑞穂	(株)KANSO テクノス			
Unno	Akira	雲野 明	北海道立総合研究機構林業試験場		A3	
Ushiyama	Katsumi	牛山 克巳	宮島沼水鳥・湿地センター			○
W	Wada	Takeshi	和田 岳	大阪市立自然史博物館	P108	○
Waga	Daiki	和賀 大樹	北海道大学大学院環境科学院	P098	P122	○
wakasa	kohta	若狭 公太	合同会社 NP-Link			

Family name	First name	氏名	所属	発表番号・ 集会主催	共同発表・ 集会コメント 等	懇親会
wakasa	naoko	若狭 那穂子	合同会社 NP-Link			
Wakatsuki	Rika	和歌月 里佳	(公財)日本野鳥の会			
Wakisaka	Hideya	脇坂 英弥	関西ケリ研究会	A4	P106	
Wakisaka	Keiko	脇坂 啓子	関西ケリ研究会	P106	A4	
Watanabe	Hideyo	渡辺 英世	日本野鳥の会			○
Watanabe	Shinichi	渡辺 伸一	日本希少鳥類研究所	B9, PB		
Watanabe	Shunsuke	渡邊 竣介	野生生物生息域外保 全センター	P044		
Watanabe	Yukiko	渡辺 有希子	猛禽類医学研究所		W06	○
Watanuki	Yutaka	綿貫 豊	北海道大学	PB, 公開シンポ	B1, P073, P100	○
Watari	Juro	互 重郎				
Y Yamada	Ryota	山田 峻太	宇都宮大学 農学部			
Yamada	Yoshiki	山田 芳樹	株式会社ドーコン		P136	
Yamaguchi	Noriyuki	山口 典之	長崎大学総合生産科 学域		A5, P056	
Yamaguchi	Yasuhiro	山口 恭弘	農研機構畜産研動物 行動管理研究領域			○
Yamamoto	Mikage	山本 弥景	東洋大学	P045		
Yamamoto	Yutaka	山本 裕	(公財)日本野鳥の会	P046	B7, P135	○
Yamasaki	Takeshi	山崎 剛史	山階鳥類研究所	B27		○
Yamaura	Yuichi	山浦 悠一	森林総研	A3		○
Yasuda	Koji	安田 耕治	テクノ中部	P017		○
Yasuda	Naoya	安田 直矢	北海道大学理学部野 外鳥類学研究室		P071	
Yasunaga	Toyomu	安永 響	東北大学理学部生物 学科			
Yatsushiro	Azusa	八代 梓	豊橋総合動植物公園		A13, A14, A15	○
Yoda	Ken	依田 憲	名古屋大学大学院環 境学研究科	PB	B1, B6, P089	○
Yokoyama	Yukina	横山 幸奈	東京芸術大学大学院			○
Yoshida	Seiya	吉田 聖弥	東京都市大	P115		○
Yoshida	Tomoyuki	吉田 智幸	Eaglet Office Inc.		W04	○
Yoshino	Tomoo	吉野 智生	釧路市動物園	P006		○
Yukimoto	Honoka	行本 帆花	人間環境大学	A13	A14	○

参加者名簿 Attendees

高校生・小中学生と引率者 83 名 Youths & chaperones

(所属・発表番号 > 発表者→引率者 > 五十音順)

発表 番号	参加者名	ふりがな	所属
Y01	浅井 周	あさい しゅう	武蔵高等学校
	白井 亮久		武蔵高等学校中学校(引率)
Y02	佐渡 志穂里	さど しほり	東京都立国分寺高等学校
Y02	幸松 浩然	ゆきまつ ほよん	東京都立国分寺高等学校
	市石 博		東京都立国分寺高等学校(引率)
Y03	長内 智幸	おさない ともゆき	札幌市立北陽小学校
	長内 研		(引率)
Y04	松本 百花	まつもと ももか	近江兄弟社中学校
	松本 幸代		(引率)
Y05	櫻井 奏子	さくらい かなこ	四日市高校
	櫻井 秀樹		(引率)
Y06	シュルンツェ 羽 奈	しゅるんつえ はんな	滋賀県立膳所高等学校
	シュルンツェ 千 夏		(引率)
Y07	秋澤 海良	あきさわ みお	日本大学藤沢高等学校
	秋澤 良		(引率)
Y08	荻巣 樹	おぎす いつき	奈良女子大学附属中等教育学校
Y09	高橋 徳至	たかはし あきと	品川区立小山小学校
	高橋 香織		(引率)
Y10	松倉 佳奈	まつくら かな	宮城県加美農業高等学校
	齋藤 太郎		宮城県加美農業高等学校(引率)
Y11	小野塚 廉人	おのづか れんと	流通経済大学附属柏中学校
	小野塚 拓造		(引率)
Y12	緒方 蒼真	おがた そうま	桐朋高校
	宮下 彰久		桐朋高校(引率)
Y13	長田 佳子	ながた かこ	岩見沢市立北村中学校
	長田 麻衣		(引率)
Y14	緒方 晴	おがた はる	世田谷区立北沢中学校
	緒方 夏来		(引率)
Y15	木原 涼帆	きはら すずほ	愛媛県立今治西高等学校
	木原 悦子		(引率)
Y16	櫻庭 蓮之介	さくらば れんのすけ	むさしの学園小学校
	櫻庭 優理子		(引率)

発表 番号	参加者名	ふりがな	所属
Y17	木下 恵利	きのした えり	八戸工業大学第二高等学校
Y17	高橋 晴夏	たかはし はるか	八戸工業大学第二高等学校
Y17	保土澤 輝望	ほどさわ るもな	八戸工業大学第二高等学校
Y17	村田 晃大	むらた こうだい	八戸工業大学第二高等学校
	藤澤 諒		八戸工業大学第二高等学校(引率)
Y18	川崎 慎一郎	かわさき しんいちろう	(公財)日本野鳥の会 ウトナイ湖サンクチュアリ・ネイチャーセンターサポーター
Y18	川崎 眞之	かわさき まさゆき	(公財)日本野鳥の会 ウトナイ湖サンクチュアリ・ネイチャーセンターサポーター
Y18	川崎 志帆	かわさき しほ	(公財)日本野鳥の会 ウトナイ湖サンクチュアリ・ネイチャーセンターサポーター
Y18	澤目 光輝	さわめ こうき	(公財)日本野鳥の会 ウトナイ湖サンクチュアリ・ネイチャーセンターサポーター
Y18	澤目 一輝	さわめ かずき	(公財)日本野鳥の会 ウトナイ湖サンクチュアリ・ネイチャーセンターサポーター
Y18	高沢 理一	たかざわ りち	(公財)日本野鳥の会 ウトナイ湖サンクチュアリ・ネイチャーセンターサポーター
Y18	竹田 佳穂	たけだ かほ	(公財)日本野鳥の会 ウトナイ湖サンクチュアリ・ネイチャーセンターサポーター
Y18	豊田 侑生	とよた ゆき	(公財)日本野鳥の会 ウトナイ湖サンクチュアリ・ネイチャーセンターサポーター
Y18	原田 雛寧	はらだ ひなね	(公財)日本野鳥の会 ウトナイ湖サンクチュアリ・ネイチャーセンターサポーター
Y18	原田 織寧	はらだ おりね	(公財)日本野鳥の会 ウトナイ湖サンクチュアリ・ネイチャーセンターサポーター
Y18	ホール 彪吾	ほーる ひゅうご	(公財)日本野鳥の会 ウトナイ湖サンクチュアリ・ネイチャーセンターサポーター
Y18	森岡 咲瑛	もりおか さえ	(公財)日本野鳥の会 ウトナイ湖サンクチュアリ・ネイチャーセンターサポーター
Y19	大津 洸太郎	おおつ こたろう	東京都立国分寺高等学校
Y19	丸山 雅人	まるやま まさと	東京都立国分寺高等学校
Y20	沼野 遥	ぬまの はるか	早稲田実業学校
	沼野 良子		(引率)
Y21	飯間 悠貴	いいま ゆうき	大手前高松高等学校
Y21	石川 慧文	いしかわ けいや	大手前高松高等学校
Y21	井上 智紗子	いのうえ ちさこ	大手前高松高等学校
Y21	小西 行亮	こにし こうすけ	大手前高松高等学校
Y21	四軒家 瑠哉	しけんや るか	大手前高松高等学校
Y21	末吉 侑	すえよし ゆう	大手前高松中学校
Y21	室田 章良	むろた あきら	大手前高松中学校
	青木 千紗		大手前高松中学高等学校(引率)
	長田 衣代	ながた いよ	岩見沢市立北村中学校
	ホール 新菜	ほーる にな	苫小牧市緑小学校
	森岡 大法		(引率)

参加者名簿 Attendees

発表 番号	参加者名	ふりがな	所属
	丹下 翠	たんげ みどり	三重県立四日市南高等学校
	丹下 浩		三重県立桑名西高等学校(引率)
	小笠原 昂	おがさわら すばる	市立札幌開成中等教育学校
	小笠原 いづみ		(引率)
	渋谷 直大	しぶや なお	自由の森学園高等学校
	渋谷 暁子		(引率)
	利根川 快斗	とねがわ かいと	東京都立大泉高等学校附属中学校
	利根川 早苗		(引率)
	速水 瑚幸	はやみず こゆき	帯広柏葉高校
	速水 一枝		(引率)
	石川 仁菜	いしかわ にいな	成蹊中学校
	石川純子		(引率)
	井上 緑	いのうえ みどり	品川区立御殿山小学校
	井上愛美		(引率)
	飯田 健生	いいだ けんせい	広尾学園小石川高等学校
	岡田 全	おかだ ぜん	市立札幌旭丘高等学校
	根岸 光	ねぎし ひかり	市立札幌旭丘高等学校
	村岡 楓香	むらおか ふうか	N 高等学校
	村岡 次郎		(引率)

50mm口径の明るさを 42mmクラスのボディで

ZEISS SFL 50 Binoculars.

NEW



Seeing beyond



Victory SF 10×42
高さ：173mm 重さ：790g

SFL 10×50
高さ：160mm 重さ：872g

Conquest HDX 10×56
高さ：210mm 重さ：1,250g



コンパクトなデザインで光学的卓越性を実現
大口径双眼鏡の新基軸 ZEISS SFL 50

SFL 8×50 / 10×50 / 12×50



<https://www.zeiss.co.jp/consumer-products/nature-observation/binoculars/sfl/sfl-12x50.html>



[instagram.com/zeissnaturejapan/](https://www.instagram.com/zeissnaturejapan/)



カールツァイス 株式会社

フォトニクス&オプティクス

<https://www.zeiss.co.jp/>
ナビダイヤル 0570-021310

最新光学機器活用セミナー

『HIKMICRO サーマルスコープと SIGHTRON 双眼鏡のご紹介』

9/14 (日) 12:20-12:50

メイン会場(7号館) サイトロンジャパンブース

※ブースでは、常時実機のタッチ&トライが可能です。

●昼夜を問わず、動物の発見、生態観察に最適

サーマル・可視光バイスペクトル双眼タイプスコープ HIKMICRO HABROK Pro シリーズ

- ・高解像サーマルカメラと高感度 4K CMOS カメラを搭載。
- ・高い温度分解能で対象のディテールまで描写。
- ・静止画、動画撮影が可能。



●長時間の観察でも疲れず、大切な一瞬を逃さない

防振双眼鏡

SIGHTRON SIII 1450/1850ED STABILIZER

- ・2軸ジンバル式光学手振れ補正機構搭載。船上の揺れも補正。
- ・ED レンズ、マルチコート、位相差補正コート採用で明るくクリアな視界。
- ・IPX7 の完全防水仕様。



●覗いた瞬間に分かる、極上の見え味

日本製ハイエンド双眼鏡

SIGHTRON SV 842/1042ED

- ・アッペ・ケーニッヒプリズムと位相差コートにより明るく高いコントラストを実現。
- ・ED レンズ採用で色収差のないクリアでシャープな高解像。
- ・全てのレンズ面への多層膜コートで高い透過率と磯再現性。
- ・完全防水設計、乾燥窒素充填で内部の曇りを防止。



サイトロンジャパン直販サイト


双眼鏡ドットコム
by SIGHTRON JAPAN

www.sougankyo.com/

株式会社サイトロンジャパン

東京都新宿区西落合 3-9-19

Tel: 03-6908-3327 (代表)

<https://www.sightron.co.jp/>



百万のデータ、オマナの渡りの詩

お久しぶりです、
オマナと申します。



Photo by Jan Lontkowski

収集したデータ

GNSS 1,350,000+

ENV 1,350,000+

ODBA 295,000+

2019年、DEBUT LEGOはニシセグロカモメ
(*Larus fuscus heuglini*) のオマナに装着されました。
六年間の六度の渡り、百万のデータ。



オマナの渡りの物語を読むには、QRコードをスキャンしてください。



GLOBAL
MESSENGER

Photo : Keenan Yokola

Global Messenger

Professional Wildlife-Tracking
Device Manufacturer



Since 2014, we have

Tracked over **300** species

Monitored more than **23,000** individual animals

Collaborated with over **300** partners



HQBV0601

HQBG1203



HQNG4625M-P



HQVID-4G



HQLG4037S

Bird-Tracking Solutions

- Global positioning and data transmission
- Ultra-lightweight design, starting at **0.35 g**
- Aerodynamic design
- Behavior monitoring (ACC/ODBA)
- Audio, image and video recording
- Smart data collection
- Fully customizable configurations
- Internet of Biology (IoB) system

 @HQXSCN

 sales@hqxs.net

 +86-0731-85568037

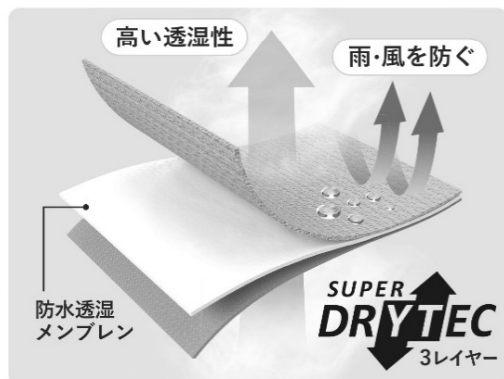
 www.gm-tracking.com



優れた透湿性と しなやかな着心地

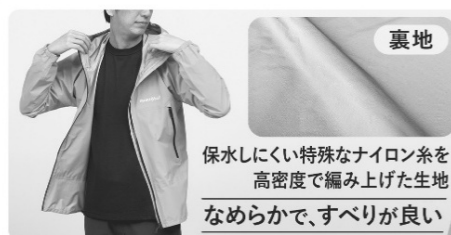
ストームクルーザー[®] ジャケット

汗の蒸れを逃がし、ウェア内をドライに保つ



独自の防水透湿性素材「スーパードライテック[®]」

しなやかで動きやすく、快適な着心地



Men's #1128733 ¥22,000(税込)

カラーバリエーション 5色



コンパクト
収納

詳細はこちら >>>



GPSタグ

Lotek

- ・国内合法周波数利用可能
- ・データ送信:衛星通信・VHF通信・4G通信
- ・最小サイズ:1グラム(GPSデータロギングのみ)
- ・ソーラーバッテリー搭載可能



撮影:本田 雅昭

Druid



- ・小型で軽量のデバイス
- ・WEBまたは専用アプリでデータ確認可能
- ・4GやBluetoothを使用したデータ通信
- ・マイクロソーラーパネルを全タグに搭載

株式会社ティンバーテック



<https://timber.co.jp>

TEL:0166-49-2035

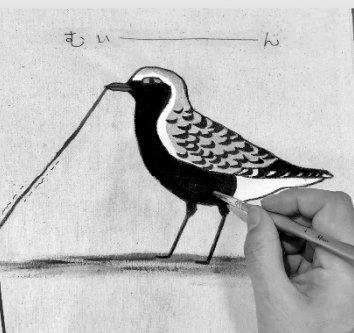
Observation and Drawing



▲ おにぎり片手に漁船からケイマフリを観察。知床にて。

観て描く

鳥を「写真のように」ではなく「生きているように」描くことを目指しています。そのためにフィールドでの観察には時間を惜しみません。



▲ 野鳥をユーモラスに漫画タッチで描くシリーズ。

色鉛筆で描いたカワウ。



「野鳥生活」は、
野鳥の調査にたずさわる田川と
画家ひるねの2人で運営しています。
山でアカゲラを見たのがきっかけで
バードウォッチングにはまり、
鳥類学の面白さに目覚めました。

鳥を観察するうちに、
鳥たちが数を減らしていること、
彼らの暮らせる場所が減っていること、
鳥を助けたり守ったりしている人や
環境の保護や保全をしている人が
あまり待遇のよくないことなどに
気づきました。

.....



野鳥生活では、調査のお手伝いをしたり、
鳥類学に親しむ企画をしたり
品物を作って販売したり、
売り上げの一部を寄付したりしています。
鳥を観る人が増えれば、
鳥のために時間やお金を使う人も増えると
そんな風に考えています。

Outreach

ひろめて しらべて 報せる



▲ 全国の鳥にまつわる施設を紹介したとりマップ（わくわく野鳥博にて）

◀ 野鳥に特化した百貨店催事「わくわく野鳥博」*を横浜と大阪で開催

*「わくわく野鳥博」はモノを売るだけでなく、野鳥について自然について知って学べる催事です。春は大阪あべのハルカス、夏は横浜京急百貨店で開催しています。



たがわ

ひるね

facebook

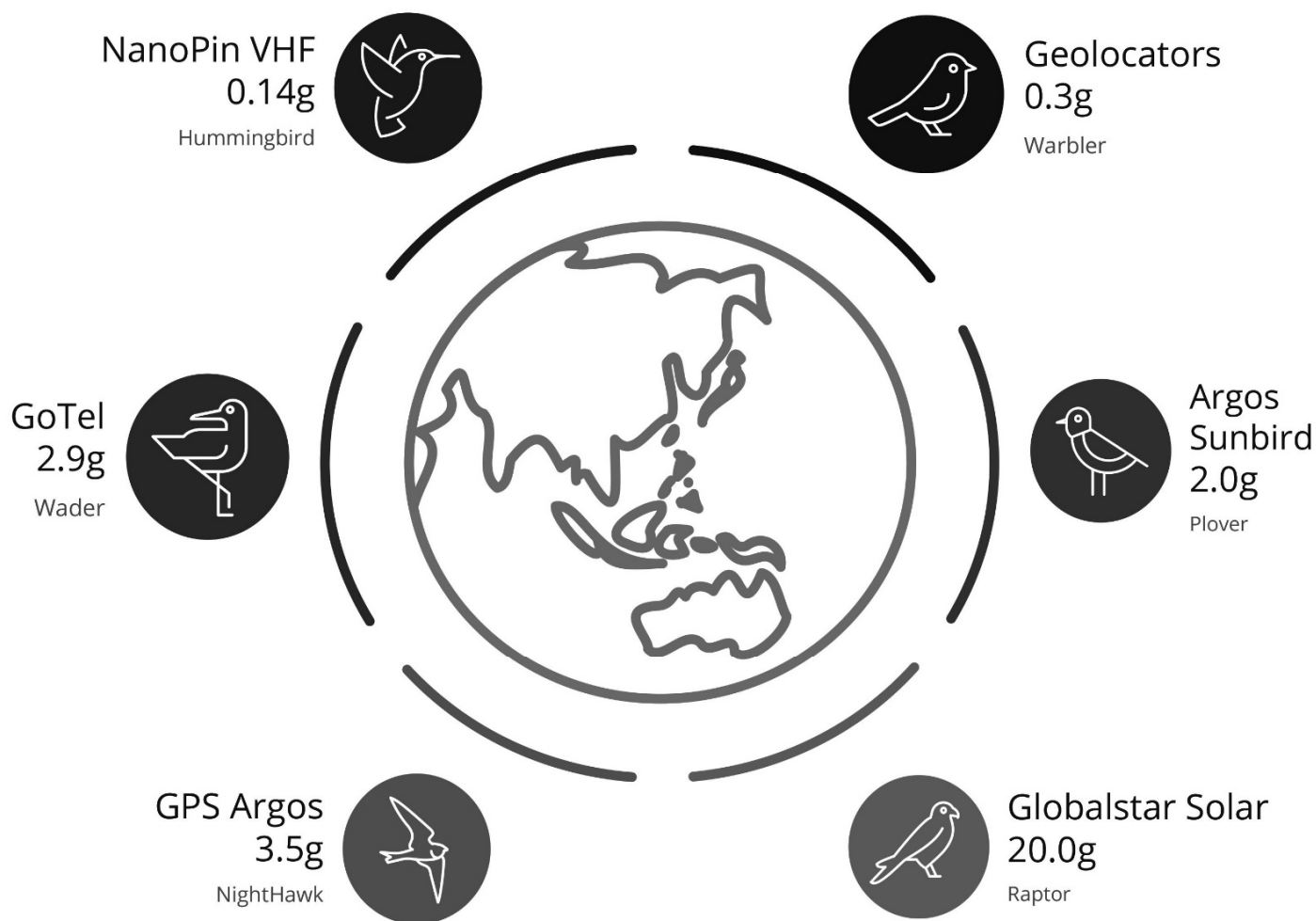


twitter(現 X)



フェイスブックは田川が、
ツイッターはひるねが更新しています

小さなタグで - 大きな成果



何を勉強していますか？お手伝いさせていただきます！

ロテックは、魚類および野生生物モニタリングシステムの設計・製造における世界的リーダーです。ロテックのブースでマイクにご相談ください。当社のソリューションの詳細や、製品がお客様の研究に適しているかどうかについてご説明いたします。

Lotek

野生生物科学の進歩



+1 905 836 2912

info@lotek.com

www.lotek.com

TASCAM®

野鳥録音のすすめ
特設ページ公開中

野鳥録音

検索

タイマー録音は、なきごえで生息を確認できる手軽な調査手段です。

野鳥録音はTASCAMのレコーダーで

DR-05XP

ステレオ ポータブルレコーダー



野鳥録音に適した無指向性ステレオマイク

⚡ アルカリ電池 2本で 最長 7.5H 連続録音※

⌚ 時刻を指定して録れるタイマー録音機能

実験レポート

タイマー録音解説



野鳥録音向け機材

📺 ティアックストア



※ 内蔵マイク、16-bit / 44.1kHz WAV 録音時



ICレコーダー「VR-04」タイマー録音機能テストモニター募集

タイマー録音機能を使用して調査目的の野鳥録音をされるお客様のモニターを募集しております。詳しくはWEBへ。



詳細WEB



ティアック株式会社

タスカムカスタマーサポート

携帯/IP 電話からは042-356-9137

一般電話からは 0570-000-809

日本初上陸

台湾猛禽研究会

Raptor Research Group of Taiwan

台湾で唯一、猛禽類研究を専門とする非営利団体です（略称RRGT）

私たちの活動：

研究・調査：都市型カンムリオオタカの繁殖生態

台湾におけるクマタカの個体群の長期モニタリング

台湾・墾丁における渡り猛禽類のモニタリング

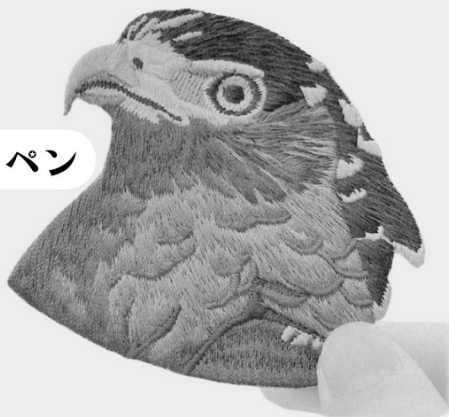
教育・普及：Open Wings賞鷹趣（市民向けの定期探鳥会）

鷹仔会（猛禽類に関する講座）

鷹仔舗（オリジナルグッズの販売）

今回の鷹仔舗での販売商品

刺繍ワッペン



スマホスタンド



カンムリオオタカの
ブランケット



カンムリオオタカの
マウスパッド



<https://raptor.org.tw/>

主 催 : 一般社団法人日本鳥学会
 特別協賛 : カールツァイス株式会社
 株式会社サイトロンジャパン
 Druid Technology Co., Ltd.
 Hunan Global Messenger Technology Co., Ltd.
 協 賛 : 株式会社モンベル
 サントリーホールディングス株式会社
 協 力 : 北海学園大学

日本鳥学会 2025 年度大会 講演要旨集 2025 年 9 月発行	
編集・発行 大会会長 大会実行委員長 大会事務局長 実行委員	日本鳥学会2025 年度大会実行委員会 早矢仕有子(北海学園大学)・高木昌興(北海道大学) 江田真毅(北海道大学) 長谷川理(EnVision 環境保全事務所) 久井貴世(北海道大学) 泉洋江(北海道大学) 川上和人(森林総合研究所) 三上かつら(バードリサーチ) 表溪太(北海道博物館) 先崎啓究(道央鳥類調査グループ) 相馬雅代(北海道大学) 牛山克巳(宮島沼水鳥・湿地センター) 藤田剛(東京大学) 植松永至(信州タカ渡り研) 岩間翠(岩間創作室) 赤谷加奈(いきものパレット) 越宗菜保美(北海道海鳥センター)
大会支援委員	許開軒(北海道大学) 加藤克(北海道大学) 正富欣之(タンチョウ研究所) 三上修(北海道教育大学) 先崎愛子(道央鳥類調査グループ) 先崎理之(北海道大学) 玉田克巳(北海道立総合研究機構) 北沢宗大(国立環境研究所)
表紙&T シャツデザイン 大会シンポジウムリーフ レットデザイン ウェブサイトイラスト (P35-36にも使用)	
一般社団法人日本鳥学会 会長・代表理事 綿貫 豊 https://ornithology.jp/ (学会に関するお問い合わせ) 〒169-0072 東京都新宿区大久保 2 丁目 4 番 12 新宿ラムダックスビル (株)春恒社 日本鳥学会係 TEL: 03-5291-6231, FAX: 03-5291-2176, E-mail: osj@shunkosha.com	